

# 忘れ残りの記

——四半自叙伝——

吉川英治

青空文庫



## 五石十人扶持

おもいがけない未知の人から、ぼくらは常々たくさんな手紙をうける。作家とか何とか虚名をもった種類の人々はたぶんみなそうではないかとおもう。つい先頃もその中の一通に中野敬次郎とした封書があった。小田原市教育委員会事務局の封筒である。読者かナ、とおもいながら披ひらいた。想像はちがっていた。次のような用向きだった。

あるいはもうお忘れかもしれませんが、戦前、市長の益田信世氏の発唱で、当地の公民館で「吉川英治氏を郷土に迎える会」を開催したことがあります。小生も小田原図書館長、郷土史研究会の一員として、そのせつ演壇から御挨拶をかねて「吉川氏の先代について」といったような話をいたしました。甚だ古い事でそれだけの御縁でしかありませんが、じつは、来る十一月三日の文化の日に、おなじ会館において恒例の文化祭を催します。当地出身の文化人の方々にも何かとお世話になっておりますが、こんどはひとつ、もいちど郷土の人々へ何か御講演ねがえないでしょうか。御都合よろしくば重ねて詳細お打合せ申しますが、まずは：

右は文意で中野氏の原文ではない。この稿の書出しにあたって、手紙ぼこ篋を掻き探してみたのだが、見つからないので、記憶に依ったわけである。ぼくは元来、信書は一切保存しない習慣だし、日記などもつけたことがない。旅行先へも手帳や写真機などは持つて出たことがなく、どうかして気紛れに持つて出ても、使つて歸つたためしはない。

自分が不精者なので、ひとの克明な記憶には、一も二もなく感心する。徳川夢声氏の随想などには、事々に何年何月とはつきり出てくる。おそらく日記の功德であろう。他日、予期しない資料ともなつて、後世を益するかもしれない。

頼山陽らいさんようの母梅颯ばいし女史の日記などは、山陽がお腹にやどる前から山陽の死後十数年にまで及んでいる。世界に例のない「母の日記」といえるか。現在のでは永井荷風氏の「断腸亭日乗」など文明批評や風俗史料としても多大な文化価値をふくんでいる。かりにもし荷風氏の作品と日記とを二分していずれを採るかといえ、ぼくはためらいなく日記を採る。

日記をつける風習はずいぶん古くからあったのであろう。ぼくの書いた新平家物語の参考書などにしても、肝腎かなめの所は、おおむね当時の公卿くぎよう日記を参照とした。表面の史料よりも真に近い機微がうかがわれ、人間そのものにもじかに触れうるからである。

ところが往々その公卿日記にもどつちを取っていいかわからない各人各様な記述に遭遇したりする。一つ事件も見方により当人の実感には相違をもってしまうものか。媒体が人間だからこれは避け難いことというほかはあるまい。また他人には示さぬものでも、つい偽飾や欺瞞の自意識にも片寄るのではあるまいか。

日記は新年からがいい。来年から始めてみようと、ぼくも折には年暮の書店で新しい日記帳を買ってみたりする。けれど、不精や健忘よりも、何か正直が書けない気がしてすぐ厭になっってしまう。都合のわるい所は××だの△△にしておいても、自瞞の不快さは蔽いえない。結局、書かないのもごまかしたが、その方が気がらくなので止めてしまい、晩生いよいよあいまい模糊と自分で

自分をぼかして生きているようなものである。

そのぼくに難題がふりかかった。半自叙伝風なものを書けという。とんでもない事とおもった。そのくせ、ひとの自叙伝的なものはおもしろく読む。長谷川如是によぜかん閑氏の「心の自叙伝」。立派である。優れた自画像であり時代像だ。菊池寛氏の「半自叙伝」。あのような自己の割りきりかたも、ぼくのなしうる所でない。長谷川伸氏の「ハンコ伝」。とても、あんなにまでは苦労人らしい苦労をしたぼくでもない。だいいち、ぼくの経路などは人に語っておもしろいものではないのだ。語るべからざるものとすら思っている。家族にさえ身の上ばなしめいた話は余りしたことがない。



弟妹たちはうすうす知る所もあろうが、まだ二十歳前の息子たちも、父については眼の前に見る父のほか何も知るところはないであらう。

ところが稀 《たまたま》、角川書店版の昭和文学全集の「親鸞」の巻末に、ぼくも自分の著者年譜を付けなければならなくなり、初めて自分の六十年を一歳から誌しるしてみた。それは何の学歴もなし順当な生い立ちもないぼくなので、自然一風異なった年譜になった。口のわるい友人たちは「本文は読まないが巻末の年譜だけはおもしろかった」と云ったりした。しかし、そうかなあ、と思っただけで、かくべつな理由を自分の経歴に振向けてみる気にもならなかった。

半自叙伝を書けと望まれたのはそれ以前からの事である。もちろんあやま謝りつづけてきた。だが、たびかさなると自然両者の間げに言質んちみたいなのが生じたり自己の中にも書く気はないのに描くばかりな構想などをつい持ってしまうものである。あいては文春のSさんだ。牛はくたびれていて坐つてもしまいたい程なのに、も一つ荷を乗ツけて牧童みたいに棒切れを振る。牛はばかだからつい歩き出すというわけである。業ごうというのか根性というのかわれながらこんなものを書く気になつた気がしれない。

なぜならば、ぼくは日記すらつけ得ずに来たほど自分で自分に触れられない臆病者で自瞞にみちている男だ。とても自己を裸にして人に示すなどは出来そうもない。のみならず過去を語ることに

は両親を語ることになり、明治、大正の世代に小さく灯ともして  
いた両親の家庭とて、当然な事ながら、まったく封建そのものの  
一軒だった。いわばぼくなどは「封建の遺子」である。今日の子  
弟に何を語る資格がある者ではない。また一個の文学者としては  
正直未完成であり、多少、虚名があるにすぎないものと、自分の  
事は誰より自分がいちばんよく知っている。

それやこれやは、今日までS氏に謝って来た理由であった。し  
かしそんな愚痴をいちいち聞いていたら文芸春秋の編集長などは  
出来るものじゃないそうである。「なにも御自分でいやだと思っ  
て書く必要はないでしょう。作家だからそんな義務があるな  
んてわけのものじゃありませんからね。書けるとこ、書きたいと

ころだけお書きになつたらいいじやありませんか。半自叙伝でい  
けなければ、四半自叙伝でもいいですよ、とにかくお待ちします  
から」と、つまりはこつちの根負けである。

いったい何を読ませられるのか、読者は見当がつかないであ  
う。筆者のぼくにも何から書いていいのかはつきり掴めていない  
のだから。——ただ父の郷地は小田原なので、最近手にした同地  
の中野敬次郎氏からの書翰を、これ幸いと書出しの手懸りにさせ  
てもらつた次第だつた。

前述、中野氏の手紙にも見えるように、ぼくは小田原市から招  
かれた事がある。公民館はいっぱいの入りで、ふつうの講演会と

ちがい何かとても面映ゆかった。開会のへき頭に益田市長は「吉川さんはどうも怪しからん、小田原は父祖の出身地であるのに、当地にはめったにお顔も見せず文章にも見えないから、市民はそんな関係をいっこう知っていない。そこで私が強引に引っぱり出して、今夕、皆様に御紹介申しあげた次第であります」といったような挨拶をされたと覚えている。

ところが、拍手のあらしの中からぼくの方を見ておかしがっている顔が幾つもあった。ぼくは小田原に素気ないどころか、その頃、自分でカン詰執筆に出かければ、たいがい塔ノ沢か小田原界<sup>か</sup>限<sup>いわい</sup>であった。福住の主人だの春日の女将だの、あちこちの人とは、のべつお目にかかっている、益田市長には御不沙汰していた

ものの、そう小田原を忘れていたわけではない。

そこらはまだよかつたが、やがて郷土史研究会を代表して、中野敬次郎氏が登壇された。そして高山樗<sup>ちよぎゆう</sup>牛<sup>うし</sup>からの小田原出身の文士をかぞえ、ぼくの事に及んで「じつは、この会に先だつて、郷土史家たちの間で、吉川氏のご先祖に就て調べてみたのですが、どうも詳しい事がわかりません。ただ吉川氏の曾祖父、祖父ぐらゐまで、お住いであつたらしい土地とか、武鑑ではありませんが、大久保藩の藩士の職禄を書いたものには、お名前が見える程度であります。で、それに依りますと、吉川氏の祖父にあたられる吉川銀左衛門氏は、藩の徒<sup>かちざむらい</sup>士<sup>し</sup>のひとりで、市内から早川の方へ寄つた下河原にお住いで、一時、根府川<sup>ねぶかわ</sup>関所番を勤められたこと

もあつたようであります。そして、その禄高はですね」と、ここのでちよつと中野氏は声に抑揚をつけ微笑したようにぼくの印象には残っている。「——つまりその記録によりますとですね、吉川銀左衛門氏は、当時、五石<sup>こく</sup>十人扶持<sup>ぶち</sup>をいただいておつたという事でありまして……」まで来ると、聴衆がどつと爆笑してしまつた。中野氏は壇上で絶句し、会館は笑いやまぬ笑いにいつまでも揺れた。というのは、とたんに聴衆の眼がぼくにそそがれ、ぼくも赤くなつてテレ隠しにニヤニヤしていたので、おかしさが二重三重になり、市長以下の別席の椅子でもみな腹をかかえてしまつたのであつた。

五石十人扶持は、ぼくにとつても初耳だった。少年時代から何かにつけ小田原藩とは聞かされていたが、父の口ぐせは「さむらいの子は」であつた。士族ということばがまだかすかに余命をひいていた頃である。だからぼくは、藩士というからには、百石や二百石取りぐらいではあつたのだろうと、成人の後まで独りぎめに思いこんでいたものである。おそらく当日の聴衆たちもそうだったのではあるまいか。いくら小藩でも五石十人扶持は最下士だ、いわば足輕に毛がはえたようなものだったろう。それにしてもテレる理由はなにもないが「吉川英治氏を郷土に迎える会」が余り派手で盛会過ぎたからいけないかつた。根府川関所で六尺棒を持つて案山かかし子みたいに立っていた先祖とぼくとを見くらべたら、何か、



おかしくなつてしまつたのもむりはない。あとでぼくが壇に立つと聴衆はまた笑い直した。けれど笑われたあとは一ぺんに気らくになり、それだけ親しみぶかく話もでき、ひどく愉快な会となつて終つた。

祖父の銀左衛門という人をぼくは憶えていない。ぼくが赤ん坊のころ亡くなつたということだ。母のはなしには、まっ白なあご鬚ひげをたくわえ、嫁にはやさしいもの静かな老人で、小柄ではあるが若いときは美男だつたらうと思われるような人柄だつたそうである。

しかしこの祖父についての幾つかの挿話を、ぼくは父の口から

聞いていて、いまも忘れていない。じつは、よほどきびしい恐い人だったようである。五石十人扶持とはいえ典型的な封建戸主の一武士であつたらしい。

ぼくは吉川よしかわだが、ぼくが育つた横浜では、吉川きつかわと呼ぶ人の方が多かつた。だから子供の頃は、吉川きつかわだと思つていた。どっちが本当かを父にただしたらやはり吉川きつかわが昔からの姓だといつた。ついでに、先祖きつかわばなしをぼくに聞かせた。

吉川は橘きつこう香という地方名が起りで、何でも富士の裾野にそんな所があつたという。戦国の吉川元春もその他の吉川もここから分れたものであり、自分の家も、関ヶ原役の前後、敵方から大久保藩を頼つて身を寄せた沢山な浪人の一人だつた。だから小田原

でもそれらの人間は、そともの外者といわれて下士待遇以上には出られなかつた。そして、大久保家へ身をよせた当初の人はほつたい法体であつたが、中頃には医者も出、やがて平侍になつて銀左衛門の代まで来たのだということだつた。

いずれにせよ輕輩中の輕輩だつたらうが、父はぼくにはそうと云わなかつた。だから父の父、銀左衛門の逸話にしても、父の都合のわるい事はぼくに聞かしていないのかもしれない。従つてどの程度信じていいかも分らないが、父の言を疑うこともなかつた。白紙の幼時に聞かされたことのみである。しかしそれが後々のぼくに影響が無かつたとは云いきれない。もし、あつたとすればぼくには重大だつたわけである。現代の中では理解しがたいような

ものだが、ぼくを語るためにぼくの一髪をまず手にとつてみるというつもりで思い出してみる。

父の兄に、秋山という人がいた。どういいうわけか、養子に出た人らしい。維新のさい、藩主の若殿について京都守護の一兵卒となつて中央へ行つた。やがて解任後、小田原へ歸つて来たが、見事な花柳病にかかつていた。小田原藩士ばかりでなく、京都へ勤務に上つた藩では、どこにもそんな若侍がたくさんあつて、かみが上方たうたの唄える侍というと、眉をひそめられたものだそうだ。

父の兄秋山氏も御多分にもれない名譽の若侍だったわけである。その花柳病もよほど悪質だったとみえ、よく落語にあるような、鼻の障子がとツ外はばれて、足腰も立てない重さであつたらしい。そ

のくせ楽天家でまた小粋こいきな人で、髪はいつも艶々と撫で、帯や着物  
物は凝った物を着て、よく南縁に坐つては、徒然になると、柄の  
短い座敷箒を膝に抱えた。そして口三味線で上方唄をくちずさん  
でいたりした。また唯一の医薬には、軒ばに干してある馬の男根  
を小刀で削つては、それを煎じて飲んでいたという。そういう物  
が効くという迷信が行われていたのであろうか。

ところが、この秋山氏が機嫌よく病苦を忘れて上方唄など口ず  
さんでいる、とそこへしばしば、銀左衛門がやって来て、「この  
面つらよごし」と罵つたり、時によると、「貴様のような恥さらしは  
ない、恥を知れ、自分で身の処置ができないなら、親のわしが成  
敗してやる」と、ほんとに刀を抜いたこともあったそうだ。

足腰も立てない秋山氏は、そんな時、銀左衛門のまなじりに向つて、ただ両手を合せて拝んでいたという事である。いずれは、家族総がかりで銀左衛門をなだめた事にちがいあるまい。そして又、何か世間で耳づらいことでも聞くと、居ても立ってもいられなくなり「斬ッてしまふ」と秋山家の南縁に突つ立っては、秋山氏から拝まれて、拝まれ負けして帰つた事にちがいない。

明治に入つて、廢藩になると、この秋山氏も士分だけの一時金を政府から貰つた。その金で当時の小田原の遊所に通つては「一步だからいい。一步だから」と、ほかの事には一錢も費<sup>つか</sup>わず、ちびちびとみんな運んでしまつたそうである。

子供心に、ぼくはこの伯父のうらぶれた晩年のまろい背中を憶

えている。弟にあたるぼくの父の所へ、度々、無心に来ていたものである。余りにしばしばなので、父と烈しいいい合いをして帰って行く日の淋しい姿や、父の留守にやって来て、ねうちりと長居しているこの人に、母が何かと気をつかつて密ひそやかな苦勞をしぬいていた日のことなど、おぼろに思い出されもする。「秋山の家内です」という小母さんも時々見た。髪へ横櫛でも挿しそうな小さいできれいな人だった。父のこの兄は、父より早く亡くなった。

銀左衛門についてののも一つの話は、父がまだ年少の頃にもある。父は、直広というが、少年時代は、丈之助とよばれていた。あ

る冬、風邪が流行<sup>はや</sup>った。母も下男も寝こんでしまい、小さい姉が夕方の台所をやっていた。

まだ十歳そこそこの丈之助は、戸外で遊びに夢中になっている。姉が呼びぬくので、ふくれながら勝手口に立つと「丈さん、良い子だから、町へ行ってお豆腐を買って来てくれない」と云う。

「いやだい」と一言のもとにかぶりを振った。「そんなこと云わないで」と、姉は泣かないばかりに頼む。そして姉がすこし理くつをならべたので「さむらいの子が、豆腐なんか買いに行けるかい。そんなに執こく云うなら腹を切つちまうぞ」と、小脇差か何かひねくつて、ほんとにやりそうな真似をしたので、姉は青くなつて謝った。



夕食後、銀左衛門の部屋から「丈之助、ちよつと来い」とよばれたので、彼が入つてゆくと、三宝の上に、少し刃を見せた白しらさき鞆やの短刀が載せてある。その向うに銀左衛門が四角な膝をして坐つていた。どきつとしたそうである。「丈之助、おまえ、腹を切るといつて、姉を脅おどかしたそうだな。さむらいの子は嘘をいうものじゃないと常々云つてある。わしが見ているからそこで腹を切れ。おまえ、さむらいの子が豆腐など買いに行けるか、といつて威張つたそうじゃないか。なぜ、青くなるか。切れ」と云つて、銀左衛門がねめつけた。いくら謝つても、ベソを搔いても、断じて「切れ」と云うのみでゆるさない。

家じゆうの騒ぎになつた。姉はもちろん風邪ひきの母も下男も

みな一室に寄つて来て、丈之助の代りに泣いて詫びるやら宥める<sup>なだ</sup>やらを尽したが、銀左衛門はゆるすとはいわない、そのうちに、深夜になった。堪らなくなつて、姉や下男たちは、戸外へ走つて行つた。親類の者を呼び集めに行つたのだつた。後から後からいろんな顔が加わつた。けれど、銀左衛門は、それらの人々のとりなしにも「うん」とはいわない。そのうちに、とうとう夜が明けてきた。やつと銀左衛門も折れた様子で「では……」と云つたのが朝陽を見た頃だつた。「ゆるすわけにゆかないが、親類の衆にあずけておく」それが、銀左衛門のさいごの云い渡しだつたという。

その場から丈之助は叔母か誰かに手をひかれて親類の家へ連れ

て行かれた。よくある親類預けになったわけである。親類も貧乏だったろうし、しつけとか、こらしめの意味もふくめて、それからすぐ丈之助は、小田原から数里奥の道了さまと俗にいう山の寺房へ寺小姓にやられてしまった。——ぼくの父は以後十四歳まで、道了権現の山の中におかれ、おかげで修学もできたが酷使されていたのだそうだ。こういう祖父と父とからつながっているぼくであつた。と、時には自省してみる必要がぼくにはある。忽然と社会の木の股またから生れて来た者みたいに、ぼくは自分を取澄まして安易にうぬ惚れてもいられない。

## 塾の明治娘

文芸家協会の会員カードを初め、よくいろんな問合せや申込書などに、略歴、本名、生年月日などの記入欄があるが、いったい、生れた月日などを、他人が何の便利につかうのだろう。ヘンな習慣である。自分自身にさえ、間違いのない生れ月や日を確かめる必要などは一生の間でもめつたにありはしない。

だが、何だかここではそれが必要事みたいになって来たので、明記すると、ぼくのは「明治二十五年八月十三日生」が戸籍面である。

ほんとは、十一日生れだが、届け出が二日遅れたのだそうだ。どうでもいいようなものの、母の亡い今日、そんな事もまた聞いておいてよかったと思っている。自分だけにとつては、地球の実存以上、重大であつた自分の誕生日が、あいまいもこであるよりは、やはりはつきり分つていた方が気もちがいい。

といつても単に生れたんだという漠とした観念のほか、もの心がつくまでの何年かは、誰でも例外なしの空白である。ただ脈搏だけをしている何キロかの肉塊にすぎない。多少、記憶めいた覚えも、父母か周囲の移植であり、もし人間が、完全なる自己の出現を、自己の官能で知りたいと希<sup>ねが</sup>つたら、これは煩悶に値するところである。そんな煩悶はくだらないと諦めていられる人間だから

いいが、よく考えてみると、癩しやくにさわることででもあるのだ。なぜなら社会は無知を恥じるようにできているが、人間の口ぐせに云う「おれが」でも、「われわれ」でも、その生命の出発点から、てんで自分でも分っていない「おれ」なのだ。

発車駅の東京駅も知らず、横浜駅も覚えがない、丹那たんなトンネルを過ぎた頃に薄目をあき、静岡辺でとつぜん「乗っていることに気づく、そして名古屋の五分間停車ぐらいからガラス越しの社会へきよろきよろし初め「この列車はどこへ行くのか」と慌あわて出す。もしそういうお客さんが一人居たとしたら、辺りあたの乗客は吹き出すに極っている。無知を憐れむにちがいない。ところが人生列車は、全部の乗客がそれなのだ。人間が生れ、また、自分も生

れているということは、じつに滑稽なしくみである。

人権がある以前に、人間には、当人の諾否なく、その人権を附与するという人権無視がある。むかし直木三十五が苦楽かオールに書いた半自叙伝的な物の書き出しには「———いったい、おれがこれからオギヤーと生れ出る所は、どんな暮しの家かと、恐々こわこわ、おふくろのへソの穴から外を覗いてみると、家は大阪のゴミゴミした横丁で、おやじは古着屋らしく、無精ひげを生やして、ボロの山の中でゼニ勘定か何かしているし、おふくろはパイパイ泣く餓鬼どもを台所でどなっている。こいつあ、たいへんな貧乏長屋だ、しまつたと思つたが、もう追いつかない……」というような

自嘲の人生擲揄やゆを書いていた。

間に合わなくては仕方もないが、出来ることなら誰でも直木のように一応へソの穴から外をたしかめてから出て来たいだろう。ぼくの場合は、直木家のごとく、ほかにパイパイいつている者はなかった。ぼくの生れる前の一女子国子は生後まもなく亡くなっていた。ぼくは父二十九、母二十六という若夫婦の間に生れ、前に一女を失っている。「こんどは失くさないように」と哺育は大事にされたらしい。

といつても、母は多産の方で、ぼくをかしらに七人も生んでいるので、大事にされたといつても、あとのヒヨコが続々出て来ないまでの間であつたらう。老いての後の母のくりごとといえば



「おまえ達の小さいうちは、乳にも背中にも膝にも、たかられていて、一ぺんでも落着いて御飯を喰べたことはなかったよ」という育児の苦労ばなしが大半で、またそれをぼくらが聞いてやるのが母には何よりの慰めのようであつた。

ぼくの生れた当時の両親は、横浜の根岸に住んでいた。その頃はまだ横浜市ではなく、神奈川県久良岐郡中村根岸という田舎だつた。家の前から競馬場の芝生が見えたということである。

根岸競馬場は、横浜に外人居留地地区ができ、通商条約などが結ばれた後、外人ばかりの発起ほつきで創立されたというから、おそらく明治維新前からのものであろう。字根岸あざ、字相沢などという部

落が、急激に異国色に富む郊外として開けて来たのは、この競馬場が置かれ、また海を望む高台に、外人住宅が多く建ち並んだからだろうと思われる。

この辺の地主で、亀田某という人の借家に住み、それが縁で、亀田氏のすすめから、ぼくの両親は、一つの生活にありついていたらしい。

寺小屋、幼稚園まがいの、小さい学校を自宅で作っていたのである。元よりたくさん子供を預かったわけではなく、相沢の貧民街の子供らが対象だった。ところが、近所に住む外国人の子供たちも来るようになり、思いがけないそれは成功であつたらしい。

相沢の貧民窟から奥の丘には、日本人墓地やナンキン墓なども

あつて、不当に社会からへだてられている人々が低地に部落をなしていた。地主の亀田氏は、その子たちに、深い同情をもつていた。ぼくの両親に、寺小屋をすすめたのも、その為だったろう。そのこの貧しい子に限って、小学校へ行つても、ほかの子と差別されたり、いじめられたりするからである。

だからぼくの両親は、それらの子たちには、親のごとく慕われたいらしい。また、より以上に、感激してくれたのは、その子供らの肉親たちであつたという。大げさに云えば、神さまか何ぞのように、有難がられ、月謝よりも、朝晩のように、子の親たちが、畑の物や魚などを台所へ置いてゆくので、生活は楽だったし、よろこばれる張合いで、毎日の疲れなども、その数年は忘れていた

程だったと、母は後々まで述懐していた。

それとおもしろい事に、日本人の觀念のあいだには、古い部落的な差別があつても、外人たちは、無頓着だから、そういう中に、ジョージだのフランクだのという眼の青い子も、一しよになつて、日本の小学読本を読んだり、歌つたりして、けっこう仲よく飛び<sup>は</sup>刎ねていた事だった。もつとも、これは明治二、三十年頃の横浜そのものの縮図でもあつたのだ。

多くを聞かされていないが、ぼくの父吉川直広が、横浜の端ツこで、そんな國際的寺小屋の先生にたどりつくまでには、小田原の郷里を出てから後、もう相当、いろんな人生経路をふんでいた

ように思われる。

妻帯も、ぼくの母が初婚ではなく、その前に小田原で一しよになつた先妻があり、ぼくには異母兄にあたる政広とよぶ一子もあつた。

父の先妻は、小田原の花街でも評判な美人だつたということである。親類中の反対も世間の悪評も押切つて、一しよになつたものらしい。これが土地でやかましく云われたのは、父の職業が、いわゆる当時の“官員さん”なるもので、県庁の酒税官であつたせいだろう。

この酒税官時代、各地の醸造家の酒蔵を視てあるく間に、父は後年の大酒になる素地と、道楽者の味境をそろそろ培<sup>つちか</sup>つていたに

ちがない。

けれど父その者は、祖父の銀左衛門仕込みの「さむらいの子は」という薫陶くんとうを、そのまま無自覚にうけついで自身を、自身の眞骨頂としていたらしく、一徹で、頑固で、明治時代の人間に共通な覇気と、立志の夢に燃え、小田原の花街で、女出入りの評判を立てなどしたくせに、ちつとも、垢あか抜けのした青年ではなかつたようだ。

よく自慢そうに、子のぼく達へ話した事のうちでも、その酒税官時代に、何でも天竜川の岸で、寒中だったそうだが——対岸の造り酒屋まで行くわけだが、よほど下流へ迂回しなければ渡船がない。それに日も暮れかかっていたので、ままよと、眞ツ裸にな

つて、天竜川を泳ぎ渡って行つたが、寒中の冷たさと、流れの急に、川の中ほどで溺れ損ね、「死ぬかと思つた」という事など、何度聞かされたかわからない。

要するに、若い日の父は、こんな風な単純さを、誇つてさえいたようである。その後、花柳界の婦人と同棲したという件なども、官員さん社会には、定めし指弾されたことだろう。まもなく、長野県庁へ転任を命ぜられ、長野市に下宿住居している間に、小田原に残しておいた妻が、留守の間に、男に殺されたのであった。情痴沙汰で、これは新聞にも書かれたりした為、父は面目無さに、辞表を出し、それきり官途もやめ、数年は小田原に帰らず、放浪していたらしい。

父は南画をよく描いた。ちよツとした山水や蘭菊などを黄大こうたい癡ち風に画いて、牛石、逸民、石声などと雅号を入れていた。漢詩も得意で、ちよつとした葉書や手紙ぐらいは、筆がなくても、マツチの棒とか小楊枝の先をちよつと噛んで、竹筆のような味の文字をすらすら書いた。

少年時代を道了権現の寺房で送ったお蔭だよとよく云っていた。しかし、大胆なものである。それツぱしの余技をもとでに、長野県庁をやめた後は、一年余りを画家と称して遊歴したのだといっていた。父の描いた余り上手でない墨蘭や四君子などを、ぼくも子供の頃、よく見たものだし、柱掛けだの額面などを人から依頼



されると、これは大得意で、誰にでも描いてやった。出入りの大工が「旦那の御きげんの悪いときには絵をお願いするに限ります」と、母に云ったそうである。

二年余りの放浪後、小田原へ帰った後は、箱根山麓の附近で、父は牧畜を始めたのだった。横浜という黎明期の開港地に接して来て、刺戟されたにちがいない。「これからは、外人相手の仕事でなければ」というその頃の士族の頭脳としては、飛躍的な思いつきから、それをやった。そして、それも見事、親類や土地の人々から、士族が、けものいじりするとか、土地を穢けがすとか云われて、徹底的に嫌われ、とうとう又、小田原を追ン出て、牧場を横浜市外の太田新田という所へ引移したものである。

父の横浜移住はそれからで、その頃でもまだ、食肉を屠殺するとぎつには、屠殺場の四方に笹竹を立て、シメ縄を張って、神主かみぬしにのりとを上げて貰ったりしたそうである。けれど、これも長つづきはしなかつた。俗に「牛ペスト」といわれた悪性な伝染病が流行し、その猛烈な蔓延から牧場の牛をあらかた失ってしまったのだ。毎日のように、空井戸を掘っては、病牛の屍かばねを埋めるのが仕事だったほど辛い時代はなかつたと、父はよく後々まで述懐つらしていた。多少、そのあいだに、もちまえの一徹や野望の角も撓ためられ、一思案の時期に入ったのではあるまいか。

その頃、横浜初音町の辺で開業していた漢方医の吉益某よしますの媒な人こうどで、新たに妻として迎えたひとが、ぼくの母、山上いく子で

あつた。牧畜経営に一攫千金の夢もさめ、大小の開港場成金は横浜に簇生ぞくせいしていたが、父には失意の時代であつたようだ。

後年、父と母とが、夫婦喧嘩などやり初めると、母が咽びながら「わたしは、吉益にだまされて来たんです」と口走り、父はすぐ「いつ、だました、吉益を呼んで来い」と威猛高いたけだかに云つたのが、いまだに耳に残っている。

漢方医学の上では、江戸中期に、吉益東洞とうどうという名手が出、吉益派といえ、落ちぶれても名家の末のわけで、媒人の吉益氏もその系流とは聞いていたが、じつさいの血をひいていたか否かはわからない。けれど、いかにも言語風采からして昔の漢方医者

らしい小父さんであつた。ぼくら子供は、どこからか歸つて来て、わが家の玄関に、白い鼻緒はなおで畳附のぽっくりみたいな男下駄が揃えてあると、また父母が喧嘩してるナと直感して、家に入らず外へ舞い戻つてしまつたものだった。

父とのいさかいはよくやつたが、母は明治の庭訓ていきんに培われただけの典型的な古い平凡な日本の女の一人でしかなかつた。

そのひとが、世間も何も知らずに、吉益老の仲人口を信じて、素寒貧すかんびんの父へ嫁いできた事情には、どうも母の云い分の方が本当らしいものがある。母の「わたしは騙だまされて吉川家へ来た」という口走りにも、そのときの感情で、多少、母にも云い過ぎがあるかもしれないが、しかしそのつど、ヤブ井チク庵の吉益老

夫婦は、母をなだめたり、母に詫びたり、ただもう平謝りが常だった。

だからどう公平に考えても、このチク庵夫婦が、世間知らずの明治娘を、ある程度、仲人口に乗せて、東京から横浜のような烈しい開港地の、しかもこれという勤めもなく、ただ甚だ特異質的なきかん気だけを持っていた一青年の所へ、嫁入り道具万端ばんたん持たせて、一しよにさせたという事には、むりがあつたにちがいない。母が生涯を通じての、悔いであつたろうと思われる。

じつさい、子供心にも、おぼろに、そう考えて、母に同情し、母と一しよにわけもなく泣いたものだった。けれど、母の悔いにもかかわらず、この仲人口のムリな結合から、ぼくらは両親の仲

に生れた。しかもぼくらは、母が生きるに疲れ果てて、燃え絶える最期まで、母からはただの一言でも、愛の伴わない言は、聞かされたことはない。

母の郷里は、千葉県の佐倉で、古くは堀田相模守さがみのかみの領である。

生家は代々その堀田藩士であった。ぼくらの童心の印象に深い  
“おじいさん”つまり母の父は、山上弁三郎といった。

戦争中であつたが、千葉刑務所長で名物男の根田兼治氏に誘われて母の生家のあつた印旛沼いんぼぬまの上に佇みたたず、小学校で講演したり、縁家の佐藤氏の案内で、菩提寺へ詣つたりして、一日を過したことがある。

菩提寺の山上家の墓碑は代々一基ずつ並んでいて、その古さや型からも、ほぼ家格の想像もつくのであるが、そのときも、これは母がよく愚痴をこぼしていた悔いは本当だろうと思ひ合せた事であり、小田原藩で五石十人扶持の小身だった父の里方とは、だいぶ趣がちがうのである。

母の父弁三郎は、廃藩後も、臼井町うすいの町長に推されて、酒席や平常の上でも、すこぶる豪放磊落らいらくな人で、郷党たちにはひどく敬愛されていたらしい。佐倉でぼくの為に招宴を設けてくれた当夜の人々の間でも、ずいぶんいろんな逸話や思ひ出が語られた。酒を愛し、郷人を愛し、いつも春風駘蕩たいとうといったような大人風たいじんな好々爺であつたらしい。ぼくの母は子沢山の中の四女で、

名は、いく子であった。

土地の女学校を出た後、母は、その頃芝の新銭座しんせんざにいた国学者でまた南洋学の先覚、近藤真琴の家庭へしばらくやられていた。

近藤家との縁は、母の姉山上豊子が、鳥羽出身の齋藤恒太郎

(当時、近藤塾の外語教授)に嫁いでいたので、おなじ鳥羽藩士の近藤真琴と齋藤家の縁故からと考えられる。豊子は、ぼくの母をまたなく可愛がっていたので、妹をそばへおきたい気もちから東京へ連れて来て、近藤家へ見習いに頼んだものようである。

航海測量練習所と称した芝新銭座の攻玉舎は、勝海舟などの育成していた幕府海軍操練所の遺産といつていいようなもので、初めは近藤塾と共に、鳥羽藩の邸内にあつたのを、後に、芝新銭座



に移し、やがてこれが海軍兵学校の嚆矢こうしをなしたものである。ほくの母は、いずれその小間使か、塾の手伝いみたいなことで預けられたのではあるまいか。母はよくその頃の愉たのしかったことを、さも懐かしげに、ぼくらへ聞かせた。

母の容姿は、ちつとも、きりよう美よしの方ではないが、小づくりで俗にいう抜けるほど色の白いひとだった。攻玉舎にいた時分も、海軍志望の若い塾生たちにからかわれ、おいくさんと呼ばれないで、お雪さんお雪さんと愛称されていたというようなことを、もう何人も子を産んでから後も、恥かしげにぼくらへ語ることがままあつた。

そんな母が、どうして、横浜へ嫁いで来たのか、その間の事情は、理解がつかない。父の云い方を想像すれば、仲人口などではない、見合のとき、おれの男前がよかったから、一も二もなく、おれを未来の良人と、たのもしく思つて来たのだらうと、云うかもしれない。

ぼくは母似か、人いちばい、体も小さく背も低い。しかし父は背丈けもすぐれ、骨格のいい人だった。壮年の時は、部屋のかもいに頭がつかえそうなので、ふすまを開けると、ちよつと頭を低めて入る癖があつた。ぼくが父に似ている肉体上の個所は、下唇の左下がりにあるほくろだけで、父のは、もつと大きかつた。

とにかく、こうしたぼくの両親であり、その仲の二番目に生れ

たぼくは、根岸競馬場附近の、奇異なる国際的寺小屋を営んで生計とする家で、眼玉の青い外人の子や、日本の子等と、魚交じりととまに交じって、四つ頃まで育つたのだった。

いま考えると、わが家が、こんな雀の学校をやり初めたのは、家主の亀田氏の懇望でもあつたらうが、もうひとつ、母が近藤真琴の家庭にいたことも思いつきとなる一因ではなかつたらうか。多少なり、娘時代の母は、攻玉舎の塾風とか教育の愉しきみたいなものに感化されていたらうし、そして、それなら自分にも手伝えるという自信から良人にすすめ、そこで夫婦共稼ぎの気もちで初めた仕事ではないかと思われる。

けれど、父が横浜へ出て来たのは、もともと、そんな志ではな

かったから、ぼくが四歳の末頃にはもう家もモンキの坂とよぶ横浜石川町辺に移り、父は港町の魚市場の書記に通っていた。

## 童戯変遷

“始めに言葉あり”だが、個人にとっては、記憶の最初が、自分の歴史の肇<sup>はじ</sup>めと考えるほかはない。記憶以前は、すべて個人の太古で、いわば赤ン坊の神代<sup>かみよ</sup>である。

オタマ杓子の脱皮のごとく、その神々が人間の児に化けて生涯

に入る旅券を持ち、第一の記憶なるものの作用がぼつんと起る。それから神の眼でいう罪の映像がかさねられてゆき、自己と周囲の実存をおぼろな構成で脳細胞に移植してくるものらしい。

よく座談のはずみで「いつたい、生れて初めての記憶といったら何だろう。幾ツぐらいから、どんな事を覚えているか」などと他愛ない話題にふけることがあるが、誰の云い出すことも必ずみなまちまちである。人間は何歳にして記憶を持つ、という定義はないようだ。トルストイの自叙伝をはじめ幼時を書いた人々のものを見てもすべてそうだ。これは、雑誌か何かで一度ひろくアンケートをとって見たらなお立証できるとおもう。

だから、非凡であろうとする思想家や文学者などは、この中途

半端な起点記憶から幼時を語るのは、つまらない気がするのである。オタマ杓子やボウフラと何ら異なることのない自己の起源に對し、その空白を空白のまま無知でいるにも耐えないのであろう。そこで必然に、記憶前の記憶へまでさかのぼって、自己を描こうとすることにもなる。

ヨハネ伝の「始めに言葉あり」も、仏教の「父母未生以前」も、神道や儒教の説明も、みな人間の記憶以前の記憶にその発想を一つにしている。同時にそれが宗教の誕生といってもいいようだ。その前提を意識界に据えた上でなくては愛も罪も説きえないからではあるまいか。とにかく人間は各、ボウフラではなく、永劫

の時と生命のクサリの一つに自分もつながっている一環だということ、しつかり、知りたがっているのである。それを自己確認しないではいられない者なのだ。というよりは生れた意味もこの生命の真を味わうことができない。また不安でならないというのが、人間あらましの本音ではあるまいか。

歴史はそんな本能をもつ前人たちの累積であり、それを継承する歴史家や作家の仕事にもそういう要素はもっている。だから往々、作家の書くものには、前にもいったような、記憶以前の自画像が現われて来たりして、読者をして奇異な感じに面喰らわせるばあいがなくもない。

三島由紀夫氏の「仮面の告白」だったかに、自分が生れたとき

産湯うぶゆを使わせられた盥たらひの木肌を透して、まばゆい湯の揺れや金輪の光が金色に見えた、というような描写があつた。また長谷川如是閑氏の「心の自叙伝」の序説には、自分が胎内にいるときの感覺をもつと精細に書いている。産婆の手でつかみ出されて、産湯の上で縦横無尽に振り廻されて眼が廻ったとき、その硬い手の残酷さに対する憤りと、無性な恐ろしさに襲われて、思わず初めて絶叫を発したという風にある。

もちろん、こういった例は、記憶ではない。文学である。が、その底流にはやはり想像を借りた人間共通の意欲が見られる。モームの「人間の絆きずな」にしてもそうで、たとえば「人生に意味などは何もない。ただ環境への物理的作用として現われたものに過ぎ



ない。生も無意味、死も無意味、ひつきよう人生は一つの模様意匠だ。行動も感情も好みの意匠で、織りなしてゆけばいい」という。しかし、その割切った考え方に到達するまでには、彼もおなじ空白への想像や郷愁をつい書いているのである。そしてモームがやつと見つけたという虚無の安住なる居場所で云っている哲学的科白せりふが、どうかすると東洋の禅坊主の喝破や隠棲者のつぶやきと一致したりしているのは思想上の奇観でもある。つまりこんな問題は、各人各種にどう考えようと自由だし、また考え得られるし、といって誰にも極め手はないということだろうと思われる。

ぼくは自分をそれ程とは思っていないが、本質のぼくはよほど

女好きなのだろうか。ぼくのこの世における最初の記憶といえば、女の映像なのだ。きれいな女の人である。

幾歳の時だったなどというわけにはゆかない。何しろぼくはまだ、ねえやか婆やかの背中に負ぶさっていた。母の乳を離れていなかった頃でもある。

その頃うけた記憶として、こういう事象が、後々まで、脳の深部にありありこびりついている。

ぼくは誰かに負ンぶされていた。そばに石だんがある。その石垣の上に、緑色の窓があつて、その塗料の色だけがほかのどの映像よりもくつきり濃い。

そこへ向うから女のひとが歩いて来た。きれいな女のひとだつ

た。負ンぶさされているぼくの頬へ頬ずりした。そして、

「子供の乳の匂いって、いいもんだわねえ」

と、誰かに云った。

——ぼくの最初の記憶というのはこれだけのものだ。奇妙に思えてならないのは、まだ自分が乳ちのみ児だったのにといい疑いである。錯覚であろうかと、母の存命中、母にただしてみたこともある。すると母はこう云った。

「それは、うちがモンキの坂に住んでいた頃なんだろうね。石垣の上に玄関があつて、以前、異人の牧師さんが住んでいたから、ふつうの日本家屋なんだけれど、窓なんか洋風に青ペンキが塗つてあつたりしたからね」

こう聞くと、錯覚でもないらしい。かぞえ年四ツ頃まで、乳もしやぶツていたし、小粒でひよわい子だったぼくは、まだ負ンぶされていたらしい。

それにしても、女のひとがきれいであつたという事やら、その女の会話があとさきなく、ぽつんと耳に残っているのはどういふものだろう。その理解が出来なくても、単語として、あるいはただの音として、音感の記憶には残るものなのかどうか。自分では解釈のつけようもないくせに、心のどこかでは、これがさぐりえた自分の最古の神話のように、事実であつたと信じていたい気もちが妙に手伝うものであることも否みがたい。

最初の記憶につぐ第二の記憶では、ぼくはもう歩いている。

五ツ前後であろうか。

後に、父の会社で息子を使っていた出入りの大工の家が近くにあった。ぼくは母の膝に戯れながら、母と大工のおかみさんの話をそばで聞いている。

ここの家は子沢山だった。おかみさんは、自分の子供の一人が描いた絵を持ち出して来て、母の前へ自慢そうに見せる。ぼくも一しよになつて絵をのぞきこむ。

鉛筆描きの船の絵だった。煙筒えんととうから煙が出ている。マストだ

のタラップだの、それはぼくら横浜の子供は朝夕に見つけている港内の汽船みたいだが、船首と船尾に大砲を附けることを忘れて

いない。大砲の口からは火が発しているのだ。火だけは赤い色がつかってあった。それとマストの日の丸も太陽みたいに塗ってあった。

その時ののは、母が云った言葉である。画学紙の絵を手にとって眺めながら母が、

「うちのものはやくこんな描けるようになるかといいですけれど」

単にこれだけの事にすぎないが、妙にはつきり覚えていたのだ。  
日清戦争は終っていたが、にっしんなお童心の世界にまで、世間の色や物音が尾を曳いていたものにちがいない。

やがてぼくも自由画らしきものを描き初めたが、船を描けば日

の丸と大砲を付けなければ気がすまなかつたし、板塀や地べたへ白墨で落書きするにも、何か大人の影響を現わしていたようにおもう。たとえばチャンコロといったような言葉をよく投げ合つたものだし、童歌の世界では、その頃までなお「日清談判破裂シテ……」などという今から思えば滑稽なほど粗朴な軍国調が歌われていた。それが「雪やこんこん」だの「オオさむ、小寒、山から小僧が降ッて来た——」などというものと、何らの差別もなくただ叫ばれていたのだった。

童心への影響で、いちばん直接的だったのは、たこ 凧の絵、メンコの絵などであつたと思う。児童雑誌というものはなかつたし、活動写真は明治二十八年の八月かに、大阪南地の浜座で公開したの

が日本で最初といわれている。だからぼくらの前にはまだ来ていなかったし、幻灯を見せられてびっくりしたのさえ、よほど後であるような気がする。

童戲の変遷は、社会相の変遷といってもよい。ある時は、一般がまだ気づかない先に、大人の世相を童戲に教えられたりするばあいもある。けれど又、童心の世界には根づよい自然の伝統も流れている。大人の生活とか治乱には関知せず、独自の別天地を劃然と持っていた。それからいえば、童戲不変と云えなくもない。

かりにそれを伝統児戯とよぶなら、ぼくらが幼少にやった遊戯の種類はみなその系統であつたらう。メンコ、根ツ木、ブラン



コ、縄飛び、ラムネの玉遊び、コマ、凧、石蹴り、石鉄砲、竹馬、金輪廻し、吹矢、当て物、隠れンぼ、かるた、十六ムサシ、といったような類である。種目は思い出せないほど多い。しかしすべては、野放しの童心と、子供相手の駄菓子屋やオモチャ屋との合作に依るもので、社会人の文化的考慮などは、影も映していなかった。道路はどんな大通りでも舗装はなかったし、電灯はまだ家々のものではなかった。馬車道とか海岸通りなどに、青い瓦斯<sup>ガスとう</sup>灯の光が見られた頃にすぎない。

遊びの中で、もつとも熱中したのは、メンコ、根ツ木、石鉄砲などだった。ぼくらはメンコの絵によって、源義経だの福島中佐などを知り、また見てもいない団十郎や菊五郎を知っていた。家

の近くに法華寺の清正公せいしようこうさま様のお堂があり、そこのお堂の縁をメンコの道場として夢中になった。紙メンコと鉛メンコとがあつたが、紙メンコの裏表に、ロウソクの蠟をこすりつけて磨くと、すばらしい光沢と重厚感が出て来るので、よくお堂の祭壇からロウソクの燃え残りを持って来ては板の間でこすつたりした。

メンコの遊び相手に、名は忘れたが、近所の医者の子があつた。日が暮れると、このお医者さんは、門の外に立って、山伏みたいに大きな法螺貝ほらがいを吹き鳴らすのである。この法螺貝の音を聞くと、ぼくのメンコ相手は、すぐ顔色を失つて飛んで帰って行つた。あゝ、ぼくが見ていたら赤い紐で法螺貝を首に掛けたそのお医者、舞い戻つて来た息子の襟がみをつかんで、お尻をぴしゃぴし

やなぐつていた。ぼくは自分が打たれているような罪悪感に襲われた。

どこの家庭でも、メンコや根ツ木みたいな博奕的遊戯は、決していいとはしていなかった。ぼくなども隠れてやっていたのである。社会そのものに児童への指導も関心もなかったのも、家庭の責任はその全部であった。自然、児童にたいして、家庭はきびしい所でないわけにゆかなかつた。

月の晩である。小高い住宅地の一面に、一つ一つ生け垣につつまれた低い屋根が見え、黄色がかつた鈍いランプの灯火があちこちに洩れている。

この界限では、どの家でも職業として、日当りのいい出窓に机をおき、種々な輸出物の地紙に胡粉ごふん絵を画いていた。何に使用されるのか、いずれ皆、弁天通りの輸出商か居留地などへ行くものである。チリメン紙だの、扇子せんすの地紙だの、日傘や岐阜提灯などに、花鳥や富士山や鳥居などが、職人的手法で、おもしろく描かれてゆくのを、ぼくらはよく、窓の外から背のびしながら見惚みとれていたものだった。

この近所での遊び仲間、そうした職人絵描きの子だの、牧師の子だの、医者や勤め人といったような家庭の子供達だったが、その晩は、どうして夜まで遊んでいたのか、ぼくらは、野良犬のひとつかたまりみたい、まだ遊びほ呆うけていた。

そのあげくだったと思う。ぼくらより年上で、章魚たことアダ名していた子の周りへ、みんなが円くなって集まった。

何か秘密めいた興味がぼくらを燃やしていた。タコは杉垣根をうしろに腰かけ、衣服の前をあけはだけて、土瓶の口ほどな小さな性器をぴんと立ててみんなに誇示していた。

どういうものか誰も笑いもしなかった。まじまじと、見まもりあっていた。そのうちにタコは腰をにじらせて少し位置を更えた。月の光がうまい工合いに彼の股間へ青白く射しこみ、奇妙な物が一そう鮮らかに見えたので、そのとき初めてみんながクンクン鼻を鳴らして笑った。するとタコが誰かに「舐なめろ」と命令した。

「舐めないとブンなぐるぞ」と脅した。云われた者が犬ころみた

いに四つン這いになって、タコのそれを口に入れた。タコはまた次の者に命令した。順々に四ツ足じみた背中が引つ込んで、また次の背中がタコの前に出た。

正確にいえないが、ぼくは五ツか六ツだった。でもこの晩の印象は、ひどく鮮明なのである。ぼく自身にはタコの前に匍匐ほふくした覚えは残ってない。おそらく逃げ帰っていたのであろう。しかし、性器について何か意識を灼やきつけられた最初の経験であつたことはまちがいない。

野放しな児童のあいだでは、遊戯以外、どうかすると、こんな気まぐれも行われていたのである。タコの心理や環境などにも、学問的にはいろいろ云えるだろうが、大人の頭脳では分析のつか

ない点もある。電灯がなくランプ時代の暗さというものをもう今日のぼくらは思い出せなくなっている。原因のひとつは、世間の暗さにあつたように思う。それに適合して、どんな暗闇でも、蹴つまずかずに飛んだり匆<sup>は</sup>ねたりしていた、いわば野性の子達であつた。

ぼくの家はよく引越した。青い窓の家から、もつと坂の上の、そして前より広い家へ移つた。

門を並べて、すぐ隣りは、郵船会社の小沼さんだつた。勤め人が立派なものに見えたのは、小沼さんの出勤ぶりを見てからである。毎朝、お迎えの人力車が来る。美しい鼻下の髭と金ぶちの眼鏡に、葉巻のにおいが流れ、小間使が、膝まで手を下げて見送つ

ていた。

まもなく、また、その後から、ふつくらと色白で、ぼくを見る  
といつもほほ笑みかけてくれる奥さんが、どこかの女学校へ出勤  
してゆく。奥さんは髪を流行のイギリス巻にしていた。和服のと  
きは袴に靴をはいて出かけ、洋装にはネットで顔をつつんでいた。  
自分に子が無かったせいか、ぼくはこの小沼さん夫婦にたいへん  
愛された。日曜日というとききま極つて「大将サン、遊びにいらつしや  
い」と、呼んでくれる。どういいうわけか大将サンとぼくを呼び、  
御馳走してくれたり、汽船の模型やら、豪華な背皮の本を見せた  
りしてくれた。

よその違った家庭様式にたいして、児童の嗅覚は、大人の考え



ている以上、敏感である、色の白い奥さんの頬の黒子ほくろから絨じゆうた緞んの模様までを、思い出すことが出来るし、ある折、ぼくを独り遊ばせておいて、奥さんと主人の小沼さんが、ピアノかオルガンの前で接吻した姿がいつまでも幼い眸ひとみに残った。今でも、外国映画などでおなじシインにぶつかると、それが小沼さん夫妻に見えるような錯覚がふとのぼつてくる。

この小沼夫妻の隣家にも、長くは居なかつたようである。こんどは少し遠くへ越して行つた。山手の植木会社の裏門前で、何万坪もある植木畑や花畑に垣ひとえ一重なので、広い庭園の中にあるようだった。

引越すたびに、家はだんだん大きな家に変つていた。何も知

るぼくではないが、この期間に、父は魚市場の書記をやめた。そして、いずれ今でいうブローカーであろうか、羽はぶたえ二重の輸出とか生糸の売買などに首をつっこみ、開港場成金を夢みてか、さかんに居留地の商館や税関あるきなどしていたらしい。ほどなく、それが縁となって、その頃、横浜の実業界では有力な一人物だった高瀬理三郎氏に知られた。高瀬氏や二、三の実業家と、横浜棧橋合資会社というのをもくろみ、創業に熱中していたのである。棧橋に繋留する外国船の荷揚げとか、石炭食料の補給、貿易品の商社幹あっせん旋、何でもといったような建てまえの事業らしかった。

これが当たったものであろう。父の生活は小沼さんの家庭より派手になった。母の身なりも美しくなり、婆やも女中も何人かにふ

えた。けれど、それによる幸不幸の感じは季節の変りほども子供  
のぼくにはわからなかった。遊びざかりの腕わんぼく白になっただけで  
ある。ある日の夕方、相沢の町通りで、市中からぞくぞく帰って  
くる汚穢屋おわいやの馬力車の後ろにブラ下がって、ガラガラ揺られてゆ  
く快感に興じていたことがある。このわるさは、どこの子もよく  
やる事なので、かねて汚穢屋も心がけていたのにちがいない。次  
第に馬力車を走らせておいて、そして突然、馬を止めた。その震  
動で、汚穢桶の物が溢れ飛んで、ぼくは頭から全身にそれを被かぶつ  
てしまった。どう帰ったか覚えもないが、井戸端へ連れて行かれ  
て、母や女中たちに、何十杯もの水をかぶせられた事だけは忘れ  
がたい。物質的に父母の家庭はよくなつて来ても、ぼくの野性に

まではこのように何の変化も及ぼしていなかった。

## 白緋

ぼくは七ツ。やがて千歳町の『横浜市私立山内尋常高等小学校』  
という長い校名の懸っている小学校へ通学し出した。

戦後の横浜は、まったく旧容を失ったが、その頃、植木会社の裏門から千歳町へ通うには、文字どおり山坂越えての半里はあった、植木会社の園内だけでも、幾カ所となく上り下りの屈折があ

り、その表門を出て、桜並木とよぶ山手通りへ出、遊行坂を降つて車橋を渡る。そして町中の水天宮さまと隣りあつている私立小学校のペンキ塗りの校門をやつと見るわけだった。

横浜市誌の類にも、横浜植木会社のことは、とんと見当らない。けれど、当時の居留外人にとつては、最も印象の深い一名所ではなかつたらうか。日本中の花卉花木かきかほくを集めた植物園といったような広さである。いま憶うと、おも社屋のある表の鉄門のわきに、赤煉瓦の倉庫が幾棟か見え、いつも倉庫の口から百合根ゆりねを荷馬車に山と積みこんでいた。当時海外へ、日本の百合根がさかんに輸出されていたため、あんな大きな花屋の経営が成り立っていたのかも

しれない。

それにせよ、花卉かきの高い香いと花樹けんの妍けんを主としたあんな広大な花園を、ぼくは日本の中では他に見たことがない。それと横浜生れの通有性で、外人の男女へ物珍しい眼をする子供ではなかったが、ここの園内を拾い歩きながら、園丁に牡丹きを剪きらせたり藤の花の大きな鉢を抱えさせて、なお去りがてに、躑躅つじや燕子花かきつばたのあいだを逍遙せうやうしている金髪美人や同伴の老紳士といったような外人達には、何か高貴めいた感をおぼえたものである。あたりを舞うアブや蝶々までが、翼に香気を放ち、からだに光をおびているかのように見えたりした。

園内の道は、もとより一般の通路ではなかったが、ぼくは下町

への学校通いに、裏門から表門へ抜け、毎日そこを往復の近道と  
していた。母は毎朝、躑躅や石蘭や雪柳が崖をなしている坂道を  
駆けまろんでゆくぼくを家の門から見送つて「……まるで鉄砲玉  
みたい」と、ほほ笑んでいた。ぼくはその頃から、よくよく小ッ  
ぼけな子であつたとみえる。

そして当時、日々の往復に、ぼくは四季の花々から無自覚に後  
年の何かを教化されていたのではないかと思つている。成人して  
からも、特に花好きだの園芸好きなどという嗜好しこうはないが、どう  
いう場所に限らず、たとえば会合の食卓などでも、ふと卓上の花  
の香を嗅ぐと、一応すぐその頃の追憶へ連想をもつて行かれてし  
まう習性がある。毎日を、花の香に染められて通つた頃の童心の

幸福感が、老いたる今もどこかに潜んでいるものだろうか。以後、長じて人生の辛酸な道へ出てゆくほど、そのなつかしきは深くなっていた。

根岸競馬の帰り途であつた。戦争の初期である。ふと洩もらしたぼくの回想に、連れの菊池寛氏が「じゃ、廻まわつてみようか」というので、心当りの辺をうろついてみたことがある。しかし、その頃すでに、植木会社の花園はあとかたもない。ゴミゴミした狭い横丁へ車を入れて行き惑い、菊池氏にさんざんぼやかれた事がある。

それからまた、終戦後、小石川のおおまがり大曲で、はからずも横浜



植木会社と看板のある埃ッぽい花卉店のウインドを見かけた事があつた。これがぼくのなつかしい記憶にあるあの花園の後身だろ  
うかと疑いながらも、しばしその前を立ち去りかねた。考えてみ  
ると、世相の騒音も、日本のありかたも、明治から大正、昭和と  
ガタ落ちな変り方をしているわけで、時流の縮図を、半世紀後の  
路傍に見たまでの事で、それを不審がる自分の老いには気のつか  
ぬおろかさ、われながら自嘲を覚えたことだつた。

まあ、こんな風に、植木会社の裏門時代は、ぼくにとって、故  
郷のうちの故郷といったようなものだつた。キザな云い方だが、  
人生への初恋頃といつていい。

そこでの友だちは、園丁の子の市ちゃん、と洋傘直しの家の徳ち

やんだつた。この三人は、余り花園では遊ばなかつた。程近い相沢の町通りへ出るウラに、有名な貧民窟の一郭がある。〴〵いろは亭〴〵という汚い寄席の看板の下から狭い横丁のドブ板とそこの屋根全部であつた。通称〴〵いろは長屋〴〵と呼ばれていた。そこには、どん底生活の百態が軒をならべている。住民はカンカン虫、お茶場女、ナンキン墓の墓番、大道芸人、チーハーの運送屋（シナ風の富籤）、屠殺場のアンチヤン、夜蕎麦売り、といったような有職無職の人々である。とても戦後のハマの風太郎やニコヨンとよばれる人達みたいでな清潔なものではない。その不潔さにも貧乏ぶりにも、やはり隔世的な差があつたように思われる。

ところが、ぼくら子供は、いろは長屋の極貧の密林帯に、花園

にはない禁断の実を嗅ぎ出していた。メンコ以上に博奕的でスリルのあるアテ物とか玉ツブシなどもその中の駄菓子屋で覚え、モンジャキとか、犬だか豚の臍物だか知れない怪しげな串焼の味も知った。もうそろそろ通用価値を失いかけて家庭でも粗末にしていた穴アキ銭とよぶ文久銭やら寛永通宝の古い貨幣も、そこへ持つてゆけば立派にテツポ玉（飴）一個と交易された。

すべて、いろは長屋の人々は、始終、生き争う物音の中に暮らして、夏は男女とも真ツ裸同様だし、平気で猥雑な行為は見せるし、どこかの軒では必ず夫婦喧嘩をやっているし、それでいてぼくらには危害を加えないばかりか、みな親切なのである。すべてにカーテンのない自由でそして原始の儘な解放地区そのものままのみ

たいに、子供の眼には見えた。

もちろん、ぼくらの親は、口を酸ツぱくして、ぼくらがそこへ立ち入ることを固く戒め、見つかるはずぐ家へ連れ戻されたが、なお、いろは長屋の魅力はしばしば子供に親の眼を偷ぬすませ、茶の間の小銭を手品のごとく掻き消えさせた。一体、それ程なその吸引力は何だったかを、今考えてみると、じつは、いろは長屋そのものに特殊な誘惑があったのではなく、本当は、子供にとって、当時の家庭は、余りに清潔すぎただけの事である。家庭では禁断にされている未知の実をぼくらは猿の木渡りみたいに探り歩いたのだった。

ぼくの旧作に“かんかん虫は唄う”という中編物がある。あの  
“いろは長屋”とか、カンカン虫のトム公などは、つまりぼくの  
逍遙した所の幼時の記憶が生ませた幻想で、多少のモデルは有  
つて書いたものだが、トム公は、ぼくではない。

その極貧窟のいろは長屋から、すぐ一側表の通りには、山手の  
異人街から根岸競馬場やナンキン墓方面へ通じる一すじの町があ  
る。その相沢と呼ぶ町通りにも、ぼくは当時の風俗詩的な思い出  
を幾つか新たにすることができる。わけて鮮やかに思い出せるの  
は、在留シナ人の葬式と、明治天皇行幸の鹵簿ろぼであつた。

もうあんな中華の古典的葬列の色彩は、現在では中共の奥地で  
も見られまい。ひつぎこし 柩の輿は、金箔と五色の泥彩で塗られ、大勢のシ

十人が舁かついで行つた。刺繡ほうの袍ほうみたいな衣服を着た道士だの祭司がそれを繞めぐり、前後には、竜たつがしら頭のはんの弔旗はんや旛はんが林立してゆく。また、供物くもつとする豚の丸揚げを担になつてゆく者だの、親族縁者らしき人々が、えんえんと人力車をつらねてつづくのだ。中でも一つの車上には、髪をふりみだした“泣き女”と称する女性が、それこそ誇張でなく、白昼の下に、声をかぎり号泣をしつづけに行くのである。

行列の中では、銅鑼が鳴り、鉦かねが叩かれ、泣き女の異様な啼泣と相和して、それは何とも不思議な音階を町に流しつつ練り歩くものだった。居留地の南京街ナンキンまちでも、豪商とか何とかいわれる著名人の葬式でもあると、泣き女も一人や二人ではなく、彩旗はへ

んぽんと相沢の町に続き、五色紙の散蓮華ちりれんげやら餅菓へいかが路傍の見物人へ撒かれたりして、ぼくら子供は、その演出と天来の奇観にはしやぎ立ツて、そろそろ葬列の後について駈け歩いたものだった。

その日の子供とは、全くべつな児童みたいに、行儀よく整列して見たのは、しばしば、この狭い貧民街を通られた明治天皇の鹵簿である。

明治天皇の競馬好きは内外に著名であつた。春秋の根岸競馬へは、前後十数回も行幸があつたことかと思う。祭日か日曜日なので、ぼくらは学校の先生に引率されていたわけではないが、みんな日の丸の小旗を持っていた。いろは長屋の住民から町の男女の

立ち並ぶ中に交じつて、四頭立てオープンの菊花紋の輝く御馬車へ、歓呼と共に紙旗を振りぬいた。

道幅がせまい上に、両側の厚い人垣が押し合うので、陛下の鹵簿と群集とは、ほとんどストレスな間隔しかない。どうかすると、後ろから揉み出された人波の凸出とっしゅつに、先駆の儀仗兵の馬が刎ねたりして、御馬車が行き淀よどんだりするのである。それはまた、ぼくら子供たちの歓ぶ事であり、その間、なお紙旗を打振つて叫ぶのだが、手を伸ばすと、両側の紙旗は、陛下のお体にも触りそうなくらいであった。御馬車はオープンなので、陛下はお顔のそばに拳手の白い手袋をおかれ、時々、左右へ向つて微笑されたりした。——そして競馬場のグラウンドの空には、打上げ花火がさか



んに鳴る。——といったような風景が、遠い明治の一日として思  
い出される。

そうしたぼくら明治の人間の先入観では、大正、昭和にわたる  
あの物々しい、超警戒ぶりは、何ともわけが分らなかつた。街頭  
の群集をみな敵と視るみような、あの冷やツこい鹵簿の列と、幼時  
の印象とは、隔世の感があつた。

戦後は天皇も民主風になられたとはいつても、なお相沢の貧し  
い民衆と陛下との間に見られたような風景はどこにもないと思う。  
たとえば各種のスポーツや競馬などに、天皇杯や天皇賞は贈られ  
ているが、賞と共にグラウンドに臨まれることはないし、その民

衆と一しよになつて共に一日を遊ぶという時間もお持ちになつていないようだ。

ちよつと一例までに、明治編年史の中から同三十二年五月に明治天皇が根岸へ行かれたときの国民新聞記事を抽出してみると、こんな風に掲載されている。

——かくて午前十時を過ぐる頃、根岸競馬場に御着あらせられ、暫時御休憩の後、天覧場へ入御、下賜せられたる銀製の花瓶と、青木外務大臣夫人の賞品七しつぽう宝花瓶とは、馬見所の玄関に飾られ、誰人がこの名誉の賞品をうべきかは、当場所第一の談だんぺい柄なりき。

なほ陛下の御下賜賞以外に、「北京賞盃」もありて、勝利馬二百二十五円、二着馬五十円を付したる第六回競馬は、かくて午後三時発馬と注せられたり。

アールファイルド氏の トルトイス

同 テラビン

ヒヨゴ氏の イクブチ

ラシヤ氏の チンギス

ニシムラ氏の アヅマ

スターライト氏の マース

六頭は今日を晴れと、一哩半を競ひ、さしも広き芝生も数万の内外人に充され、英国軍艦バアフロア号乗組員が奏す

る勇壮なる楽隊と万雷の如き喝采の中に、勝は西村氏のアツマに帰したり。

ぼくの父は馬は持たなかったが、経営している横浜棧橋合資会社は、外国人との折衝が半ば商売みたいなものだから、根岸倶楽部にはよく出入りしていたらしい。ぼくも競馬はたびたび見せられ、家庭でも競馬の話に賑わった。まだ横浜競馬も初期だったせいか、一般にも競馬を汚れたものと見るふうはなかった。特に、天覧競馬のレース当日などは、横浜中の祭典といつてもよかった。市中もその話題で持ちきつて、スペインの牛祭か何かのような騒ぎだった。

ついでに云うが、その頃の名騎手カンザキの名は、ぼくら幼童の耳にも、英雄の如きひびきと憧憬をもたせたものである。その神崎騎手の名を、もう遠い過去だからと思つて、実名のままぼくの「かんかん虫は唄う」の中に登場人物としてつい書いた。ところがその後、神戸市在住の神崎氏の系縁の人から、「神崎は決して貴著のなかにあるような女たらしの道楽者ではなかった。家庭人としても厳正だったし、ジョッキーとしては、内外人の称讃をうけて、裏切ったことはない」と、たいへん恨みがましく抗議されて来た。私は早速でいねいに謝り手紙を出してはおいたが、しかし公に釈明すべき機会が今日までなかった。もう戦前のことで神崎氏の遺族すらお忘れだろうが、ここにその事はぼくの作為で

あり誤りであつたことを明らかにしておきたい。

小学一年生のその当時、やがてぼくにとつて、忘れえない或る一日があつた。

何でも、それはカンカン照りの暑い夏の昼だつた。例のように植木会社の蟬時雨せみしぐれの道を通つて家へ歸つて来た。誰か、奥へお客が来ているらしく、玄関や庭に打水などしてあつて、家の中はしんかん森閑と涼やかだつた。

母は、いつものように、ぼくの足やら顔の汗を拭いてくれた。それからやがて茶の間で、新しく入れた茶を女中に奥へ運ばせてから、「あなたもお座敷へ行って、御あいさつしていらつしやい」

と、ぼくへ云つた。ぼくは廊下境へ行つて、そつと奥の方を窺つた。半分捲いた廂の簾の目が、午後の日影を斜めに客間へ落していた。お客は一人だった。いかにも独りぼつちといった感じで、きちんと、広い座敷の中を余して坐つていた。

その人は、若かつた。ぼくより十ぐらい年上に見えた。白ガスの単衣ひとえに、小倉縞の袴をはき、少し俯向き加減に、そしてぼくの方へ姿を斜めに見せて端坐している。ぼくの眼にさえ、上品なおとなしい青年の感じがした。

「あの人、たれ？」

そつと母へたずねると、母はぼくの肩をそばへ引寄せて、囁いた。

「知らなかった？ 英<sup>ひで</sup>ちゃんのお兄さんですよ。ほら、小田原にいらつしやる、あなたのお兄さんのこと、いつか聞いたでしょう」  
ぼくは、びつくりした。ぼくに兄と呼ぶ人があつた事がどうしても実感にもてなかつた。へんなそらぞらしさと羞恥がぼくを固くしてしまい、母から「奥へ行つてお辞儀をしていらつしやい」と再度云われても、かぶりを振つて動かなかつた。

まもなく人力車のベルが外で聞えると、ヘルメツト帽に白い夏服の父が、その背の高い姿を玄関に見せ、母と何か話しているまに、すぐ奥の座敷へかくれた。それきり、しんとした感じだった。すると、ぼくの耳に、奥の方から誰かの泣くような咽び声が聞えてきた。ぼくは、それに異様な衝撃をうけたとみえる。こつそり



独りで客間の様子を覗いていた。

父は、兄の手を膝の上を取って握りしめていた。片方の手は、兄の白ガスリの肩へ懸けて、父も泣き、兄も泣いている様子であった。

この光景は、ぼくの眸をつよく烙やいたとみえ、いつまでも忘れ難いものとなった。そのとき母の姿も、そこに居たのか、茶の間だったかは、よく覚えていない。ズツと後になって、ぼくに理解力が出来たと母から見られるようになる、母はぼつぼつ兄に就てのぼくの疑問を、何くれとなく解いて話してくれた。

兄は、吉川姓でなく、綾部政広といった。ぼくとは母ちがいな

のである。ぼくはそれまで、何も知らなかったが、兄は小田原で生れ、小田原十字町の「ふじ本」という料理屋で育てられ、中学もそこで卒業した。横浜にあると聞く父を尋ねて初めて会いに来た時は、十八歳になっていた。

小田原では志望の勉強もできないから、出京して、医科へ入学したい、そして将来は医者になりたいという希望を、その折、父へ訴えたそうである。

兄の医学志願は、兄の戸籍の入っている養子先が、井細田村いさいだの医者の家だったので、それを継ぐ意志だったものであろう。兄は、その綾部家へ、入籍はされていたが、綾部家の当主は死に絶えていた為、藤本林太郎という縁家先の、前述「ふじ本」に養われて

きたのである。

どういう理由か、そのさい父は、政広の医学志望には不賛成であつたらしい。そのため、好學の青年は志を得ず、父の意見に負けて、翌日、小田原へ歸つて行つた。

ぼくの印象にある兄は、女性みたくに優しい感じの青年だつた。俗に「瘦せ型、中背」というあの通りなタイプで、左の眉の中に大きな黒子があり、頑固な士族あがりの父親とも、このぼくとも似ている風はどこにもない。

政広は、小田原の花柳界で成人したので、自然、環境からうけた感化が多かつたのであろう。後に、ぼくの父母も一驚を喫したそうだが、酒席となると、たいへんな芸能の才で、何をやっても

素人ばなれがしていたそうである。けれど平常の兄は、ちつともそんな軽佻の風は言葉の端にも見せず、つつましい好青年であり、又、やたらに人好きされた。ついに医学校には入らなかつたが、どこかに薬の匂いがするような医学生に見えた。

母には、腹ちがいの子だが、母はこの兄を後々まで、どれほど、親身になつて世話したかしのれない。やかましい父へは常によく庇<sup>かば</sup>つてやり、ぼく以上にもと、ひがまれた程、可愛がつた。また母は、ぼくは子供なので、ひそかに政広を、力ともしたのであろう。ところで、次の事だけは、母も、ぼくには決して語つていなかつた。それは、兄のほんとの母は、誰だつたかという疑問である。前にぼくは、父が二十歳代の頃、遊蕩の果て、小田原に居られ

なくなつて、長野県庁へ転勤を命ぜられ、その期間に、かつて父と小田原で問題を起した美しい留守の内縁の妻が、痴情が原因で男に殺されたという事をちよつと書いた。——で、これはぼくの想像にすぎないのだが、ぼくは、その孤閨こけいにあつた美しい婦人こそ、兄の母だつたのではないかという気がしてならないのである。

もちろん、その婦人については、父も触れるのを好まなかつたろうし、母も子のぼくに聞かせもしない。けれどやや理解力や嗅覚に長たけて来ると、自然ぼくの疑問にもなつていた。その後、小田原へも母と遊びに行つたし、特に父と兄との、もつれ方だの、父の放つ激語の端などで、だんだん察しられていたのである。そうだとすれば、この義兄は、じつに薄命な人だったというほかは

ない。やがてぼくを待っていた少青年期の世間的な苦勞に似たような経歴も、この義兄の生まれながらの薄命に比すれば、たいした事はなかつた。

家はまた引越した。山手通りの俗に桜並木とよばれる植木会社の表門通りから、遊行坂の降りへかかる坂の降り口で、座敷にいても庭越しに、横浜市街が一望に見えた。

こんどは千歳町の小学校へも、三分ノ一以上近くなった。

学校を嫌だと思ったことはない。校舎は木造二階建てで、ぼくらの組は下だった。二階の足踏みもオルガンの音も頭からつつ抜けで、蜂の巣そのままな私立小学校なのである。

校長先生は、山内茂三郎先生といい、九十一歳で、つい昨年亡くなられた。

晩年は、さすが病床に親しまれがちだったが、一昨々年、ぼくが菊池寛賞をもらい、その受賞祝賀会を友人たちが東京会館で開いてくれたとき、わざわざ横浜から来て下さった。——その折は、義兄政広の昔の恋人であつた混血美人のオテイちゃんも一しよであつたが——やがて先生が立つて、よろこびの辞を述べられた時、その赤ら顔には老涙をうかべておられた。

山内先生の赤ら顔は、ぼくらが、一、二年生の時からだつた。大酒家とは覚えていないが、特に鼻が赤かつた。横浜の児童教育史上、この先生の名は逸することのできないものである。幾多、

表彰はされているが、教え子のひとりのぼくの胸にも、先生の子供好きな細い眼と、あの笑い顔は、消えうせることはない。

先生は前の奥さんを、お若いうちに失われた。ぼくらは、その奥さんからも教えをうけた。当時では、中流の夫人を奥さんとは呼ばない、御新造<sup>ごしんぞ</sup>さまと呼ぶのである。ぼくら生徒も「——御新造先生、ごしんぞ先生」と呼んだものだ。わが校長先生夫妻は、勿論、ほかの教員も幾人といたが、夫婦共稼ぎで、教鞭を取っておられたのである。

ぼくらは、どっちかと云うと、御新造先生が教壇に立つことを、もっぱら歓迎した。先生は子供の眼にも美人として映った。ぼくは自分のお母さんと、どっちが色白だろうかなどと思いつながら先



生の襟元や頬の匂いを遠くから嗅いでいた。先生は常に髪を夜会巻にし、袂たもとの長い着物に、紫の袴をはいていた。そのモスリンの匂いすら、ぼくらは感じのこすことはなかった。

ただいつも例外なく、御新造先生が困るらしいのは、ぼくら生徒が、やたらに騒ぐことであつた。ふざけ散らすのは、意識的であつた。目に余ると、紫の袴が教壇を下りて来て——「こツちへ、いらつしやい」と席から立たせ、教壇のわきへ手を引つ張つて行って、罰として立たせるのである。ところが、ぼくらの密ひそかな願いは、先生の明眸に睨まれて、そうして貰いたかつたのだ。御新造先生の楚々そそたる歩みと、白い手が、自分の方へ近づいてくると、胸がドキドキしたものである。その手が、他の生徒を引つ張つて

行くと、ぼくはがっかりしてしまった。

賑やかな町中だし、校庭も広くはない。古い板囲いの壊れ目から覗くと、すぐ隣地の水天宮さまの境内が見える。賽さい日にちなどは、昼から出ている露店の呼び声や物の匂いがやたらにする。

男女共学などという言葉はなかったが、自然に男女混合だった。もう好きな女の子と、嫌いな女の子があった。好きな女の子と一つ机になった者を、ぼくは羨うらやましく思うことがよくあった。

雨の日、ぼくらはよく「墨取り」という遊びを机の上でやった。

習字は必修科目であったから、硯すずりと墨は、第一の文房具だった。

習字の草紙は墨の膠にかわでピカピカに光るほど、その上から上へ、毛

筆を重ねて習う。菅原伝授手習鑑の寺小屋の段、あれに近いもの  
と思えば間違いない。

墨のカケラをおいて、交りばんこに、墨で墨を起し競くらするので  
ある。これは見つかるかと叱られた。

もひとつ、ぼくらのよくやった雨の日の遊びは、誰の発案だつ  
たろうか、雑記帳に、自分の空想するテーマを、映画のヒルムの  
ように、一コマ一コマと絵に描きつづけて行き、描きながら、口  
から出まかせに、テーマを喋しゃべっていく遊びがあった。

たとえば、こんな風である――。

柳の木らしいものを描く、川みたいな物を描く。立小便してい  
る子供みたいな人物を描く。

「木村がネ、お使いに行つたんだとサ。そしたらね、小便が出たくなつちやつて、車橋のそばで、川ン中へ、じゃアじゃア、おシッコしていたんだとさ」

ここで、次の絵を手早に描く。

こんどは、橋を描き、お下げ髪の少女みみたいな点景人物。

「するとネ、向うから宮崎千代子さんが来たんだよ、ほら、こつちを見たら」

さらに、次の絵。

「木村は、まッ赤になつちやつて、小便を半分して、逃げ出したのサ」

こんどは、木村君の家になって、お母さんみみたいな人物に、木

村君がお尻を打たれている絵。

「家へ帰ったら、お母さんに、なぜおシッコを洩らしたかって、大叱られに叱られたとき」——というような絵とテーマとの、いわば近頃の紙芝居を、即席にやって見せるのだった。

もちろん、絵も説明も、満足には表現できっこないが、子供仲間では通用するのだ。それに、テーマはすべて児童の身の辺の事で、またかならず、仲間の誰かをモデルにした。鉛筆と紙のときは、ヒルム式な連鎖描きとし、石盤せきばん石筆せきひつのばあいには、一場面一場面、描いては消し、描いては消し、かつ思いつきの筋を喋っているのだから、いぶん忙しい。

この遊戯は、雨の日の教室に限っていたが、何遊戯とも名称が

なかった。あるいは、ぼくらの仲間だけが思いつきでやり出していた事かもしれない。そしていちばんその遊戯を好んでしたのはぼくであった。みんなから「やれよ、やれよ」と、せがまれるのが自分も得意で、仲間の誰彼をモデルにしては憑つかれたように空想を喋り空想を自由画にした。いちど、ぼくが好きな女の子をよくいじめる高木というアバタの少年をモデルにして、そいつが落第したり家が火事になって小僧にやられたりするような事を、出まかせに喋っていたら、高木が怒って、ぼくの頭から、硯に残っていた墨汁を浴びせた。振向きながら、手で髪の毛を掻き廻したので、手も顔じゅうも真っ黒になった。それから何度風呂へ入っても、頭を洗うと湯が黒くなった。

——とここで、今になって思うと、そんなかりそめの遊び事も、一個の未来には、無意味というものはない。空想を遊戯する——という無自覚な方式に依って、ぼくは何の考えもなく、後年、自分の職業となった小説作法の極く初歩の手習いを偶然やっていたわけであるかもしれない。

## 牛乳と英語

最近、母の旧知やら、横浜出身の方たちから、頻りにいろんなしき

手紙をうけた。大仏次郎氏の兄さんの野尻抱影ほうえい氏も、氏の小学  
生時代には今の紙芝居風な雨の日の遊戯を各 《めいめい》の自  
由画でやった覚えがあるとのことである。また島村収三氏や佐々  
木美子さんからも、モンキの坂や植木会社附近のことについて、  
前回までの「忘れ残り」をいろいろ補足した御書面をいただいた。  
また先頃、直木賞をうけた戸川幸夫氏の会でも、長谷川伸氏と  
の間ですぐ「横浜ばなし」が出た。記憶力のよい長谷川老にただ  
せば、健忘なぼくの忘れ残りもずいぶん補足されそうな気がした  
事だった。いちど、それらの横浜先輩に獅子文六氏なども加えて、  
みんなの忘れ残りを話しあってみたら、意外な話題も出てくるか  
もしれないと思つた。



前述、野尻抱影氏からのお手紙の端にも「——小生は英町はなぶさの生れで、本名は正英ふさ、小学校は初め太田小学校でした。おテイちゃんとは同窓です」とあつた。おテイちゃんについては、後にもつと触れるつもりであるが、彼女と抱影氏とが同窓であつたなどは、意外な初耳だつた。だいぶ年下で年代はちがうが、ぶどうの会の山本安英やすえさんなども、この近所にいた一少女だつたことを、これは山本さんに会つたときに聞かされた。

朝日クオータリー・ゴルフという会ができた。そして過日、その第一回が相模さがみで催された。賞品授与は、横浜南京町の某亭との事である。ぼくの組はトップに出て、午後二時頃にすんでいた。

ほかの仲間はおおハーフ・コースを廻るが、ぼくはその日の小半日を利用して近くの横浜へ先に行く予定をしていた。

山内先生がまだ亡くならぬ前で、先頃から病床と聞いていたので、その見舞を考えていたのである。山手町の横浜女子学院の小さい一室が先生の住居であった。夫人は老先生の看病をしたり、その教鞭を取ったりしておられるらしい。先生の事については前号でも書いたが、九十歳にもなると、やはり子供に返るものか、病室で話していると、ぼくの方が校長先生で、先生の方が小学生みたいであった。それにぼくを見るとすぐ老眼から涙を垂れるので、何だかぼくも自分を持ち扱ってしまい、いつも早々辞去してしまうのだった。

南京町の会にはまだ時間が早過ぎていた。——こんな時でもなければと思い、その日、二時間ばかりで横浜中を車で走り巡つてみた。おそらく、あとかたもあるまいと予想された所にさえ、何かしら、ぼくの遠い記憶とむすびつく物が残っていた。わずか三、四十年の間に大震災と戦災にあい、特に米軍の進駐で極端に切りキザまれた横浜だけに、案外な気がして、とても生きてはいまいと思われた古い知己と、行く先々で、ひよっこり、出会ったのと同じような感にうたれた。また、大地の執拗なまでの保守性と時への抵抗にもいささか呆れた。

そしてぼくはさいごに、山手の遊行坂の上へやって来た。——そこに家のあつた七歳から九歳頃までの記憶を伴って少し歩いて

みた。桜並木の桜は今一本も無くなっていたが、植木会社はまだ面影だけをわずかに保っており、昔の地域の所に横文字のわびしい看板だけは見せている。

また、坂を降りかけて左側の、ちょうど、ぼくが幼時の家のあった辺は、今そっくり小学校の校庭になっていた。

その遊行坂は、今でも、かなりの急坂である。ぼくの八、九歳頃は、もつと道も悪かった。雨の日の通学などには、やたらにすべにったり転んだりしたものである。鼻緒の切れた足駄の片ツ方を番傘の柄と一しよに持って、ベソを搔き搔き、登り降りした坂道だった。

片側は道に迫った高い崖で、片側だけが麓の遊行寺の門前まで、近頃の分譲地みたいなヒナ壇式の住宅地になっていた。

日本人の家といつては、桜並木の角のある小さな雑貨店と、おなじ通りの西にある神崎騎手の邸宅ぐらいなもので、この近所はほとんどが外人の家だった。ぼくらはそれを古風な意味でも何でもなく、日常語として「異人館」とよんでいた。

自然、ぼくらの遊び仲間にはジョージだのフランクなどという純粹な、紅毛兎とも一シヨクタであった。ぼくらに国境感はなく、めつたに畦<sup>い</sup>み合いはしなかつた。けれど、小うるさいからかい方をしたり、小国的な悪<sup>いた</sup>戯<sup>ずら</sup>をよろこぶ風は、どうもぼくらの方にあつたらしい。何かで喧嘩になると、あツちはあツち組、こつち

はこつち組、自然、さつと国境ができた。

外人の子を泣かせると、かならずその子の親父かおふくろが、えらいけんまくで異人館の中からぼくらを目がけて呶鳴り出して来る。もちろんがなるのも英語である。日本語で怒られるよりも遙かにそれは恐かった。そらツとばかりぼくらは逃げ出す。——しかし、逆にぼくらが彼らに泣かされて帰った場合はどうかという、ぼくらの母が眼をつり上げて子供喧嘩の干渉に呶鳴って行った例などは一ぺんもない、反対にぼくらは親から叱られて家庭の隅で小さくなっているのがオチであった。

この界限では、すこし綺麗な女のひとだと思つと、たいがい

洋妾らしやめん

と呼ばれる婦人か、異人館に雇われているアマさん（家政婦）だった。家からすぐ上の桜並木の端れに、上品な老人夫婦の営んでいる小雑貨店があつて、ぼくはよく買物のお使いに行つたが、時々その店番をしていたきれいな娘も洋妾であつた。そしてその美しい娘のためにああして安樂に暮している老夫婦なのだといつたような事まで、誰に教えられるでもなく知つていた。

らしやめん、という語は子供仲間の会話にもよく使われたように覚えている。しかし当時の横浜世相の中では、差別や蔑視のトゲをふくんだ言葉ではなかつた。ただ日本人同士の間では嗅ぎ馴れないローズやヴァイオレットの強烈な香水の香りと結びつけて或る特殊生活を連想してみるだけのものにすぎない。けれどそれ

も南京<sup>ナンキン</sup>らしやめんと云うと何か違つた意味をもつて聞えた。下級ということがはつきりしていた。白人のらしやめんにも、ぴんからキリまであつたらうが、通いらしやめんにしても、家持ちの洋妾にしても、概して相当にいい生活保証を得ていたらしく思われる。それと、日本に居留していた外人の質その物も良かったせいであろう、関係した日本婦人にたいしては或る程度の責任感をみな持っていたようだ。だから彼らが帰国した後も、生活費だけは幾年も送金してくれているとか、生れた子供には成人までの教育費が保証されているとか云う例は、珍しくも何ともなかつた。従つて、その頃の横浜には、混血児も多かつたが、しかしぼくらの子供心では、そう大して異質を感じなかつた。ただ、らしやめ



んの子と、云ったりする事はあつた。

らしやめんの贅美な体臭には、敬遠の風を見せる近所の人も、アマさんには、親しみを示して、アマさんの口から異人館の主人の生活振りなどを探ることを、何か秘密めいた興味のような顔して聞くのだった。

そのアマさんは、外出にも白いエプロンを胸に掛け、買物籠を腕に、乳母車など押していた。ぼくの母は、アマさん風俗を真似して、ぼくだの、下の妹たちにも、エプロンを造つて胸にかけさせた。泥遊びしても、着物が汚れないでいいという単純な考えからであつたろう。——だからそれを前垂れまえだともエプロンとも云わないで、単にアマサンと称していた。

ぼくも小学生になると、もうアマサンは掛けていなくなつたが、それは横浜中の子供に流行つて、いつのまにか日本の児童風俗になつていた。——これはずつと後年の事だが、横浜短詩社をやつていた弁護士の安齋一安氏から「横浜で子供にアマサンを掛けさせた一番初めの人は、あなたのお母さんでしたよ」と聞かされたことがある。何でも、ぼくの母が一安氏を地方裁判所へ訪ねた時、母に手を引かれていた幼いぼくのエプロン姿がふと眼につき、珍しく思つたので、その着想を褒めたことがあるとの事であつた。ぼくには全然記憶にないが、云われてみれば、ぼくはアマサンの元祖であつたかもしれない。

成人したら騎手になりたいと空想したのも、この遊行坂時代だ

った。名ジヨツキーとして人気の絶頂にあつた神崎騎手の邸宅が  
 すぐ近くにあつた。袖垣そでがきにバラをからませた鉄柵の門から内を  
 覗くと、中央に広い草花のガーデンが見え、両側が長い厩舎きゆうしや  
 となつていて、奥に宏壯な洋館があつた。東京の羽左衛門うざえもんといふ  
 千両役者であるとか、新橋の洗い髪のお妻とか、ぼん太とかいふ  
 名妓であるとか、やれ大臣だとか何だとかいふ種類の人々の傳や  
 馬車がよくその門に着いていた。そしてその花形の人、神崎の  
 苦ミ走つた容貌と外出の騎馬姿は、お伽話とぎの中の騎士ナイトのようによ  
 くら子供こどもの眼には映じて、ひどく印象的だつた。

巖谷小波いわやなぎなみの“世界お伽噺”を知つて、それに読み耽ふけつたのも

この頃からである。ぼくの読書の初めといつていい。博文館の少

年世界は、まだ少し難しい感があつた。そこへゆくと、小波の世界お伽噺は菊判四号活字で読み易くもあつたせいか、すでに何十種も出版されていたが、出ている限りの物はあらまし読んだ。

たしか定価は一部七銭だつたと思う。家庭では、そうそう七銭の本は買つてくれないのである。牛島坂の上に、格子作りのしもたやがあつて、その小母さんが玄関の上がり三畳に書棚をすえ、その世界お伽噺から、金港堂のお伽文庫だの、日本偉人伝だの、イソツプ物語だの、子供向きのものばかりをおいて貸本屋をしていた。

貸本のお伽噺は、すべて一冊一銭だつた。だが、馴れて来ると、一銭持つて一冊借りにゆき、格子の外から歩き歩き読み初める。

そして読み終つてしまうと、途中から又、大急ぎで引返して「小母さん、これはもういつか読んだ本だからほかのと取り換えてくれない？」とべつな本を借りて帰つたりした。

この手をなんべんとなくやっているうちに、ある時、針箱の前から立ちもせず振向いた小母さんから「英ちゃん、これからはあんたにだけは一銭で二冊ずつ貸して上げるから、いちいち私を二度ずつ立たせないでおくれね」と云われて、顔じゆう熱くなつた気持はいまも忘れえない。

そろそろ悪智が芽生え出していたのである。一度こんな事があつた。どういふ勢はずみか、母の眼を偷ぬすんで二十銭銀貨を一枚ゴマ化した。そして、その隠し場所に窮したあげく、着物の上ゲの縫

目に捻じこんで澄ましていた。ところが裕あわせなので、いつのまにか二十銭玉は、裾の方へ沁り落ちてゆき、歩きたびに、コツコツ足へ触れるのだった。

どうかして費つかいたいのだが、費う手段を知らないのである。寝るにも起きるにも、着物が心配でならなかった。そして硬貨が足に触るたび、人知れない苛責にひとりいじけていた。いつそ謝ろうかと何度も思うのだが、日がたつ程、母にも云えなくなっていた。唯、罪の負担と、銀貨の処置に、当惑していた。

ある時、ぼくはその事を、年上の一人の友達にそつと喋った。近所のアブ公という背のヒョロ長い子だった。アブ公は子供のくせに口のまわりに黒っぽいヒゲが生えていた。眉と眼がくツ附い

ているような顔だった。よく腰巻一つで波止場を裸足はだしで歩いているアラビア人と似ていた。やはり混血だったのだろうが、どんな家庭の、どんな職業の人の子だったかは、覚えていない。

とにかく、アブ公に、秘密を打明けたのは確かである。すると彼は、ぼくの着物の裾をめくり上げて、裾の縫目を歯で噛み切った。そして角にギザギザのある二十銭銀貨を手品のように揉み出した。彼はそれを握ったまま、ぼくの手には渡さなかった。ぼくも又、自分で持つ勇氣はなかった。アブ公は突然、こう叫んだ。

「伊勢佐木町へ行こうや、伊勢佐木町へ連れてツてやる」  
ぼくは唯々いとして彼について歩いた。

しかとした記憶は今、思い出しきれないが、その頃の二十銭を

消費することが、二人の児童の買食いでは、いかに骨が折れた事かは、腹にこたえて覚えている。

まず汁粉屋へ入った。およそハガキ大の餅が入っていて、たしか一銭か一銭五厘だった。南京豆やアンパンをふところに、賑座の立見を見た。出てからまた、犬コロのように買食いして歩いた。しかし二十銭はどうしても費い切れなかったものとみえる。まだ二銭銅貨を一枚あましていた。

アブ公とは、どこで別れたのか、日の暮れ方、ぼくは狸みみたいな腹をかかえて、車橋の上を帰ってきた。ぼくの手には二銭銅貨が残っていた。銀貨よりも遥かに大きな二銭銅貨を持つてしまつて、ぼくは途方に暮れた感じだった。もちろん、持つて帰る勇氣



はない。

ぼくは石でも抛ほうるような振りをしながら、往来の隙をみて、その大きな銅貨を、車橋の上から河へ投げ捨てた。そして逃げるように、わが家へ駆けて帰った。その後は、覚えていない。だが、日頃の石投げの手なみで、銅貨を河へ投げたときの快感だけが、今でもかすかに手に残っている。

その後、ぼくはアブ公と遊ばなかった。道ではよく会うが、向うでも澄ましていた。買食い事件だけでなく、もう一つ子供同士でも、へんてこな後味を持った事があった。

ぼくの家のおすぐ庭先から、眼の下の低地には三、四軒の屋根が

覗き下ろされる。日曜の朝になると、その一番奥の屋根の下から、讚美歌のオルガンが愉<sup>たの</sup>しげに聞え出し、近所の子がみな集まった。帰りには、美しいカードをくれたり、その主人と奥さんが、面白い話をしてくれたりする。ぼくも日曜日の朝になると、大勢の子等と一しよに、畳の上で讚美歌を合唱した。アブ公とはそこで友達になつたのである。

家は、ふつうの借家で、八畳と四畳半ぐらいな部屋ふすまの襖を外し、オルガンだけが、日曜学校と云えば云える風景だった。その主人夫妻は、元よりクリスマスチャンだろうが、べつに宣教師ではなかつたようだ。ただ子供集めが好きで日曜行事としていたのである。横浜にはそんな家庭がいくらかもあつたものである。そしてこ

こには、お下げ髪お下げの美しい娘がいた。ぼくよりも年上だが、ぼくはその少女が好きであつた。讚美歌の合唱の時、少女の唇くちもと二元を見ながら共に歌っていると何ともいえない愉しさにくるまれた。

家は近いので、日曜でない日でも、ぼくは彼女に近づくことが出来た。ところが、ある日の午後、彼女を誘うため、その家の裏庭の縁側から、少女の名を呼びかけた。家の中には、誰も見えない。留守なのか、と帰りかけた。すると奥でくすぐ撥はられたようにクツクツ笑う声がするので、もう一度戻つてみると、オルガンの蔭で、少女とアブ公が、絡からみ合つて寝ていた。少女は顔を埋めていたが、お下げ髪お下げの頭越あしにアブ公の顔がこつちを見た。

ぼくは奇妙な気もちに行き迷はぐれて歸つた。シヨックというほ

ど強い嫉妬でもなかったし、少女とアブ公の戯れも、大人の行為のそれとは違うものであつたろう。けれど当座は、堪らない少年の孤愁にとらわれ、それから、アブ公とも口をきかなくなり、日曜日の讚美歌も歌いに行かなくなつてしまつた。

母は、ぼくを、よく口ぐせに「医者にしたい」と云つていた。

父は「ばかをいえ、これからは貿易だ、事業家にする」と云つていた。母の考え方は、母が娘時代を近藤塾で過していた影響であつたろうし、父は自分のやっている輸出入業や棧橋会社の事業が好調のさかりだつたので「わが子も、将来は横浜で」という考えだつたにちがいない。

ぼくは八ツの尋常二年頃から、学課が終つても、毎日、ただ一人だけ、二時間ずつ、学校に残された。そして、一人の英語教師から、英語の単独教授をうけた。

これからは貿易だ、英語だ、という考えと子供への方針から、父が特に山内先生に依頼して、ぼくに早くから外語を身につけさせようとしたものだった。

もひとつの理由は、ぼくの素質と素行を見て、親の眼から「これはいかん」と、何か父の頭に、教育方針の一変を思わせるものがあつたのかもわからない。

何しろ、ぼくは遊べなくなっていた。この頃から急に、父のあり方が、前にもまして厳格な存在に映ってきた。父は、かつて自

分が受けた通りな子弟教育の範を、封建そのものの薰陶を、子のぼくへ、課し初めて来たのである。

毎日の学科がすむのは、午後二時か三時頃である。もう級友はみな帰ってしまい、ガランとした教室の中には、ぼくと英語の先生だけが残っている。ナシヨナルのリーダーの一を前に *It is a dog* だの *It is a hat* なぐづを繰返しているうちに窓外は薄暗くなつてゆき、帰りたさ、遊びたさに、堪らなくなってくる。

自分も知らないうちに、リーダーの上へ、涙をぼろぼろこぼしたりした。これを半年ほどやってゆくうちに又、九歳の一月からは、もう一つ夜学の励みが加えられた。

夕方、家に帰ると、すぐ晩飯を食べてから、今度は、前に書い

た少女の家のスジ向いに住んでいる漢学の先生の所へ、毎夜夜学に通うのだった。

この先生は、お母さんらしい老婆と学生の弟さんと三人暮らしで、奥さんはなかつたようだ。水戸の人で、岡鴻東と覚えている。まだ三十がらみの小づくりで温容な人だった。いつも黒木綿の紋附の羽織を着、袴をはき、ぼくのお辞儀に対してさえ、礼儀正す風だった。桑の木か何かの小机において、先生と向いあうのである。

いちばん最初に先生から示された教科書は、“中学漢林”で、外史や十八史略の抜抄であつた。それで多少興味づけられてから論語や小学の素読<sup>そどく</sup>へ移つた。和書のページの難解な辞句の所には、

朱唐紙しゆとうしを小さくちぎり、ちよつと舐めて、疑問の印に、辞句の部分へ貼りつけておいたりする。あの和書の中へ点々と貼った紅梅みたいな朱唐紙の色だけには、子供心にも優雅なものを感じたりした。

だが、いくら家の近所にしろ夜学が終つて帰ると、もう八時か九時近かつた。その頃、父も会社から帰っている。そして時にはまた、父の前で、英語と漢学の復習をさせられた。わずかな時間だつたらうが、これが何より辛くて、いちばん長い時間に思われた。冬の夜などは、室内の暖かさに、どう気をひきしめても、つい居眠りが出てしまう。

そんな時、父から一喝を喰うのは、のべつだったが、ある夜の



如きは、いきなり父が立上がって、縁側の障子を明けたと思うと、ぼくは外の庭へ突き飛ばされていたことがある。忘れもしない、その晩は雪が降っていた。母の姿が廊下に見えると「ばかつ、誰がゆるした。上げてはいけない。雨戸を閉めてしまえ」と、障子の内でなお父の云うのが聞えた。

ぼくは、わんわん泣き喚わめきながら二、三十分間も外から障子の内へ謝った。その辺、夢中だったので、よく覚えていないが、やがて、裸足で台所口の方へ廻ってゆき、氷のような足を母の手で拭いてもらった。そして、母と一しよに泣きじやくりながら、もう一ぺん父の前に坐らせられた。

父がぼくに課したことは、もちろん父の愛情と信じてしていたことであろう。なし易い小愛を超えた父性の大愛とも考えていたにちがいない。今の父親や教育者には理解しがたいものだろうし、現在のぼく自身にも、到底できない。

けれど間違いなく、こういう父性と家庭環境につちか培われたぼくではある。だから現在のぼくの子供らから、ぼくを見れば、ぼくと  
いう父にも多少どこかに祖父的な煙たさがあるかもしれない。ぼく自身は充分、今日という時代反省を経ているつもりではいても、どこかに何かは遺伝しているだろう。しかし、今日の親たちがわが子への、余りな放任ぶりや甘やかしにまかせている風潮にも、いささか疑いがないではない。時には、かつてのきびしい父性に

郷愁を感じる事が正直否みなく、ぼくにはある。

暴風雨の日曜日だった。

日曜日ではあったが、父はなにかのため、その朝も会社に出かけた。当時は、お弁当の配達屋さんというのがあって、毎朝、箱車を曳いて勤め人の家々から、お昼の弁当箱を集めて歩く。そして正午までに、それぞれの主人の出勤先へ弁当を配達してくれるのだった。

その配達屋も日曜日は休みである。ところが、父はその朝出がけに「英と、きの（妹）に弁当を届けさせろ」と母へいつけて出たらしい。ぼくは、ぼくより二ツ年下のきのと一しよに一本の番傘を斜めに持ちあい、大あらしの中を二人とも裸足で、海岸通

りの栈橋会社まで、父のお弁当を届けに行つた。——その時は父も上機嫌で、会社の小使部屋で、兄妹に一品洋食を取つてくれたり褒めたりしてくれた。そんな時は、父の姿が又なく温かな大きな父に見えた。

ぼくは子供の頃から、何が嫌いといつて、牛乳ほど嫌いなものはない。何でも四ツ五ツ頃、大病を患つて、ムリヤリに牛乳を飲ませられたことが原因らしいのである。

その嫌いは、この年になつてもまだ直らない。家族が牛乳を飲むのに使つたコップは、いくら洗つてあつても、口のそばへ持つてくると「——牛乳を飲んだね、このコップで」と、すぐ分つてしまうのである。バタ、チーズは何でもないのに、牛乳と聞け

ば胃が拒んでしまうのだ。

それと、も一つのニガ手は、英語である。英語は必修課目として、父があんなにまでして、ぼくの幼少頃から身につけさせようと計っていたものなのに、父の意図は、子のぼくにとっては、全く、ぼくの胃と牛乳の関係みたいなものになってしまった。日も暮れかかるガラんとした学校の教室にただ一人残されて、ナシヨナル・リーダーへ、ぽとんぽとん涙をこぼした童心の牢獄感が、いつかしら胃が牛乳をつきあげるのに似た特異質をぼくの中に育成していたのであった。その後、年を経てからは、語学の欠如に自分でも気がつきもし、また大いに後悔もして、ある期間は、文学書の耽読をやめて、その勉強に専念したこともあるが、語学

ばかりは、頭に入らないのみか、てんで体が拒んで根気もつづかないのだった。今でもなお牛乳と英語にたいするぼくの生理には変化がない。

## 春の豆汽車

まもなくぼくの家はまた、横浜市の西郊にあたる南太田へ移つたので、ぼくの遊ゆき行坂時代は二年か二年半ぐらいの期間でしかなく、自然、小学校も変つてゆき、山内先生や御新造先生ともお

別れたのであるが、遊行坂時代の記憶で、なお思い出にある幾つかを順序として書いておくことにする。

ぼくは幼少時にその頃の東京を二度見、その頃の汽車に二度乗った。いちどはまだ小学以前か一年生頃であつた。母に連れられて母の郷里の佐倉へ行つたのである。おそらく母にとつてもそれは結婚後ただ一度か二度の愉しい帰郷であつたかと思われる。

今では日帰り距離にすぎないが、当時は横浜から千葉県佐倉への旅行というと、ひどく億おつくう劫おつくうがツていたものらしい。もつとも汽車が桜木町駅を離れると、京浜間は、鉄道唱歌そのままな緑の田園風景が新橋駅までつづき、車窓の顔はみな長閑のどかな眠気と旅行

感にウトウト誘われたものである。

その時の旅行では、母と共に東京の親戚の家に一泊した。母の実姉が嫁いでいた先である。北白川宮の邸内に住居があった。

泊った翌朝、宮家の事務官と伯父のあとにくつついて、邸内のあちこちを見あるいた記憶がある。若宮様のお部屋と聞かされた所にニツケル色のレールが大きな円形を描いていて、それに精巧な玩具のアルコール機関車が乗っていたのを、誰かがその汽車を走らせてぼくに見せてくれた。

終戦後はよく、大人までが面白がつて、貨車、機関車、停車場、レールなどの部分品を買い集めては組み立てたあの舶来玩具なのだ。だが、その頃としては、宮家でもなければ無かったものだろう。



幼時の記憶で何かと行って、この豆汽車が走ったのを見た時くらいびっくりしたことはない。

母の義兄の斎藤恒太郎は、語学者としては、明治の三斎藤といわれた一人だそうで、学習院教授をしていた傍ら、宮家の教育掛りをも勤めていた関係上、北白川宮の邸内に居住していた。

その斎藤家へ嫁いだ母の姉は、豊子といった。豊子は三人の子を遺して二、三年前にもう亡くなっていたのであるが、ぼくの母は、その姉の愛情によほど忘れえないものを抱いていたらしい。

ぼくなど全然その伯母を見ていないのだが、面ざしや輪郭まで、まざまざと会った人のような錯覚を今でも<sup>まぶた</sup>瞼にもっている。それ

は母が老年にいたるまで、そして、貧苦のどん底にあつた頃でも、姉の豊子の写真だけは、お守りのように大事に持つていて、子供のぼくらへその姉の優しさや美しい情操を何かにつけて話して聞かせたせいであろう。そしてまた母は、義兄の斎藤恒太郎をも心から尊敬していた。姉亡き後も音信をつづけ、ただ一人の親身な人と頼つていたふうであつた。

ただ不幸なことには、ぼくの父と斎藤とは、肌が合わず、生涯、犬猿もただならぬといつていい仲であつた。そのため母が泣いた例をぼくらは何度も見聞きした。何が原因か、往々、理解に苦しんだものだが、ぼく自身が成長して、複雑な人間心理やら家族制度のもつ因習の醸<sup>かも</sup>すところなども多少分るようになってからは、

その不審もやや解けてきた。要するに、負けん気をつよい、そして親戚間にさえ対抗意識をもつ父が、逆境に依る偏狭のなせるわざだった。父と斎藤とは、その性格から生活環境すべてが、まったく相反<sup>はんぜい</sup> 嚙<sup>い</sup>するものを持つていたのだ。

だが日頃、母が慕う親身の人と覚えていたぼくは、後に、苦学の志望をもつて出京した時、その斎藤家の玄関を一ばん先に頼つて行ったものだった。それやこれやもあるので、この伯父のことはもつと知っておきたいと考えていたが、もう旧事を知っている人も周囲にいないので、文芸春秋誌上で母の生い立ちにちよつと触れたさい、姉の嫁ぎ先の人として、唯その氏名を引合いに出しておいたに過ぎなかった。

ところが、つい最近、文春の一読者として、思いがけない人からお手紙をもらった。それに依つて、さきに書いた近藤真琴の攻玉舎の事だとか、母と斎藤との関係なども、ぼくの忘れ残り程度でなく、かなり具体的に分つたのであつた。じつはお手紙をくれた方には無断なのであるが、さして御迷惑にもなるまいかと思つて、文面的一部分をそのまま次に引用さしていただいた。

—— (前文略)

文芸春秋の「忘れ残りの記」をおなつかしく拝読いたしました。実は私の母は近藤真琴の次女でございました、たまたま貴方様の記を読み聞かせましたところ、貴方様の御母堂と

は従姉妹同士のよしで、貴方様がその従姉妹の御子息にあたるのかと云つてまことに驚いておりました。

近藤の家でもみな故人となつて、孫達は大勢いますが、昔の事など知っているのは母一人になりました。母は数え年八十になります、今のうちおたずね下されば聞きとつて何なりとお知らせいたします。

念のため、私の母と御母堂との関係やら近藤家のことを略記いたしますと、次のようになります。

近藤真琴の妻真樹まき（前名幸子ゆきこ）が御母堂の母上の御姉妹です。佐倉藩の吉益という家から出ております。（中略）――

貴方様の御母堂は、私の母が芝新銭座の近藤塾（攻玉舎）の

娘でいた少女の頃、よく存じあげており、仲よく遊んだものだと申しております。その頃、御母堂には斎藤恒太郎氏（攻玉舎の英語教官）のお宅に姉上と御一しよに居られました。

ついで乍ら申しますと、私の母は後に鈴木金一（日本郵船機関長）という者に嫁し、母の長兄近藤基樹は海軍中将（男爵）で昭和四年に物故いたしました。また姉のしず婉子は海軍造船中将（男爵）山内万寿治に嫁して昭和十七年に亡くなり、次兄輔宗は外国商館に勤めておりましたが、これも昭和三年に亡くなっております。

私の主人河内信弥太は、現在、北海道銀行東京事務所長をしており、事務所は麻布本村町八三でございます。何ぞまた

お問合せのことでもございましたら主人まで御連絡くださいませ。  
(後略) ——

河内喜代子

前掲、河内夫人からのお手紙をうけてから、ぼくは母の少女像を一そう濃く描くことが出来、また、母が少女時代からすでに郷里を離れていた事情だの、斎藤家との浅からぬ由来などもよく分って来たのであるが、同時に、これまでの中で訂正しなければならぬ部分も生じて来た。

というのは、ぼくの両親の媒人は、横浜在住の吉益という吉益東洞派の漢方医とさきに書いたが、やはり佐倉の人で、ぼくの母

の母方の生家でもあったのだ。そうと分れば、近藤家と密接なのは当然だし、その吉益の口ききでぼくの母が横浜へ嫁いだわけもうなず領かれる。だが、肝腎なこの吉益その人については、それ以外には何もぼくには知る所がない。——どうもこうしてみると、ぼくの“忘れ残り”の量よりも世間の誰かが何処かで持っている“忘れ残り”の方がよほど多く、また話も具体的のようでもある。何とも忸怩じくじたらざるをえない。

ついでに、なおもう一つ書き添えたいことがある。前述の河内夫人のお手紙に見える河内信弥太氏が、後日わざわざ、私の宅をお訪ね下すった事である。それで私のえがいていた母方の縁べき



やら生家の模様も一そうはつきりしたし、かつまた、そのさい河内氏から聞いて意外に思ったこともある。一昨年頃、重要無形文化財に指定された人形作家の堀柳女さんの実家と、私の母方の生家とは、おなじ佐倉藩であるばかりでなく親戚関係でもあったという。私はそれ以前に、文春から出版された柳女さんの著書“人形に心あり”なども読んでいたが、ゆめにもそんな点は気づかずにいた。けれど河内氏からそう聞いて、さつそく、もいちどその書を繙ひもといてみると、なるほど柳女さんの実家の姓として柿内と書いてある。思い出すと、柿内という姓を私も幼少に母の口からよく聞いていた。これなどは“忘れ残り”を書いた為に教えられた一つである。まことに、どこに有縁うえんの人があつたら、この人生は

わからない。

つい横道へそれたが、とにかく東京（明治三十年前後の）という大都会にちよつとでも触れたのは、母と一しよに佐倉へ行つた途中の青山一泊が、ぼくには最初のものだった。

そして斎藤家を辞した翌朝である。忘れもしない、青山から本所の両国停車場までの長丁場を、ぼくと母とは人力車にゆられて行つた。何度も途中で俵が止まり、ぼくは母から呼び起された。すぐ居眠つてしまうのだった。季節は晩春だったような気がする。途中、人形町で俵を休め、土産物を買つたり、梅園のお汁粉を食べたりした。

——佐倉のおじいさんは、ぼくら孫たちが、身のうちに持ちあつていた温かな愛像だった。その頃まだ、<sup>すこぶ</sup>頗る健在で、郷里の町長をやめ、隠居身分でいたらしいが、昔ながらの高い生垣を繞<sup>めぐ</sup>らした屋敷の中に住んでいた。庭先からすぐ真下に印旛沼が一望に見えた。おじいさんは朝の膳にも酒を欠かした事がなく、銚子の浜から夜どおしで担いで来るといふ魚屋をつかまえては陽気な冗談をとばしていた。<sup>かつお</sup>鰹の刺身を皮ツキに作らせ、にんにくオロシの醤油で食べるのが好きであった。そして、酒のしずくが気になるのか、真つ白なアゴ鬚をのべつ手のひらで横に撫でる。どうかすると、ぼくを抱いてその白鬚をこすりつける。にんにくの臭気を嫌ってぼくはよくおじいさんの桃色の顔を邪けんに両手で押し

のけた。

この折の旅行の帰途で、忘れ難い出来事が、も一つある。以前の  
新橋駅（汐留）であった。母は大きな信玄袋や何かをぼくの足  
もとにおいて、「このお荷物を見てるんですよ。いいかい、お母  
さんはあつちで、切符を買って来るからね」と、駅内の大きな柱  
の下にぼくと荷物をのこし、やがて人混みに見えなくなった。

まもなく、母は切符を買ってもどって来た。だがどうしたのか、  
ぼくは知らない。ぼくの足元の大きな信玄袋は消えて失くなって  
いた。母は眼のいろ変えた。やがて巡査や駅員がやって来た。大  
勢の旅客が輪になってぼくらを取巻いた。ぼくは何か責任を感じ  
たものらしい。手放して泣き出した。よほど大声で泣いたにちが

いない。誰かにあやされながら、汽車に乗せられたが、汽車の中心まで、泣き止まなかつた。

その事は、ぼくが大きくなってからも度々母の一つ話に聞かされた。しかし、スリか何かに盗られた大きな信玄袋——合がっさい財袋ともいった——その中には、母の衣類化粧道具のほかは、印旛沼名物の鰻の白焼キしか這入っていないかつた。近所隣りへのお土産にと、その折詰ばかりが一ぱい入れてあつただけだから、スリも後ではそんな沢山な鰻の白焼キを始末に困つたらうよと、母はよく笑いばなしにした。

蒲焼には毎度お目にかかるが、近ごろ、鰻の白焼キは、お客の方でもあの特有な味を忘れているらしい。どうかして宮川とか熱

海の重箱などでこれに出会おうと、ぼくは人知れず、遠い以前の新橋駅をすぐ思い出すのである。

二度目に、東京を見たのは、小学三年生の時の春だった。

上野に「全国児童選書展覧会」というのが開催され、ぼくのお清書も入選して展示された事かもしれない。山内先生以下、数名の生徒や父兄附添いで、横浜からわざわざそれを見に行つた。

一行十名足らずで、校長先生の引率といつても、頗る行楽気分な家族づれだった。ぼくには母も誰も附いていなかったが、女生徒には父兄が一しよだった。その中に、加藤何子という同級の女生徒がいた。日頃からその子も嫌いでなかつたけれど、宮崎千代子という子の方が、もっと好きで、もっと綺麗に思われていた。

その二人とも同じ旅行の中にいた。だからよほどこの修学（？）旅行はぼくには愉しいものだったに相違ない。

けれど、その二少女を対象としての幼い恋とか感傷などは、何一つ後々には残っていない。上野から浅草へ廻つて、宇治ノ里の小座敷に行儀よく並ばせられて、お昼飯を食べたぐらいなものである。ところが、へんな記憶がつよく印象づけられていた。附添いの中にいた加藤さんのお母さんに、鉄道馬車の中で膝に抱かれた事なのである。

あの時代の浅草、両国、京橋、銀座——を、トコトコと馬糞だらけにして走っていた鉄道馬車なる文明の乗物を、今でも鮮らかに眼に描くことができるのは、加藤さんのお母さんのおかげかも

しれない。その婦人はもちろん三十を過ぎていたに違いないが、何か、少年の眼にも優れた美人型に見えたのである。単に美人であるばかりでなく、横浜風の盛装か、髪も指も帯留も宝石に燦めきらき、そつと動いても周りの者へ体温のある香料の匂いがぷんと揺れてくる藤の花みたいな印象をいまも覚えている。

人力車でゆく青山から両国駅までの間も、寝飽きるくらい長かったが、浅草から銀座、新橋間の鉄道馬車もずいぶん乗りであったように思う。きつと途中で乗客が混み合ってきた為であろう。加藤さんのお母さんが、だまつてぼくの体を膝に乗せた。ぼくは体をむずむずさせ、少し拒むような素振りをしたと思う。すると加藤さんのお母さんは、なお深々とぼくを抱きかかえ、ぼくの顔



へ頬をよせて窓外の京橋や銀座を説明してくれたたり、やがてぼくが凝じつとしてしまうと、その人も凝と鉄道馬車の揺れるがまま居眠つてでもいるように澄ましていた。

ぼくは自分の偽れない羞恥を人前に曝さらしている感じだった。しかしひそかに恐いほどな幸福感にもはちきれていたのだろう。いやそういう抽象的な語ではその折の少年心理を率直に云っているとはどうもいえない。もっと直接的な肉感自体の動揺の方がはるかに大きい。西鶴の世之介ほどでは勿論ないが、おぼろな空想の甘味を偷ぬすみながら、ひそかに自身の中の或る芽生えを驚異するのにちようど適度な体温と甘い匂いに酔ったのは確かである。

いま、指で年齢を繰ってみても、それがぼくの十歳の春であつ

たには相違ないことは、ぼくが特に早熟であつたのだろうか。それとも十歳といえどもう共通な男の子一般の性現象と見ていいのだろうか。——とすれば案外、自分が親になつて来た年代になると、われわれ親たちは子どもらの性について、ちつとも真剣に考えていないという気もしてくる。なぜなら、自分の幼時の体験や現象には、とかく眼をふさいで子を視る風があるからである。どうもこの方が共通な親たちの現象であるといえるかもしれない。

父はやたらに世話ずきな人だつた。もつとも、自己の順調などきには誰にせよ寛容のあるものだが、ぼくの父もよく人のすつたもんだを背負い込んで奔走して廻つたり、自宅に大勢の客をしもんちやくごとて悶着事の口をきいたりしていた。人に立てられるとか、人

の美言などが好きだった方なのであろう。そして自己の善意が裏切られた恰好になると又その不きげんの度もひどかった。母にまで飛ばツちりを浴びせて呶鳴るといった風である。

性しょうこり 懲こもなく、

いちどなどは、波止場のマドロスの中から国

籍も素姓も分らない弱々しい外国人を拾って来たりした。まだ若い異人なのだが何か病氣をもっているらしいのである。マドロスといつても、およそ汚いマドロスだった。風呂に入れたり下着や父の古洋服を着せてやるのに、家じゆうに虱しらみが散らかるといけな  
いといつて、母から女中まで悲鳴をあげたものである。父は、その若い異人をやがて会社にでも使うつもりでいたのか、医者にか  
けたり、日本語を習わせたり、その健康になるのを見て独り満足

していた。

ぼくらは自分らの家庭に一人の異国人が加わった事に異常な興味と物珍しさを覚えた。可愛がったというよりもオモチャにして歓んだわけかもしれない。マドロス氏の方は、人に馴れない小動物みたいに常におどおどした眼と、作り笑いばかり見せていた。

それでもこのマドロス氏は、半年ぐらいぼくらの家において、お風呂の水汲みをしたり不器用な手つきで庭を掃いたりしていた。ところが、ある朝、姿が見えなくなってしまった。父の部屋で、母が嘆いている声がしていた。

「……だから私が、云わない事じゃないんですのに」

この朝、会社へ出てゆくときの父の、何ともまずい淋しげな顔

つきといったらなかつた。

家族以外な食客も常に何人か居た。これは食客とはいえないが、母の実兄で、横浜灯台局の技師として赴任してきた山上清という、ぼくには伯父にあたる人も同居し、まもなくその弟の土木技師の三郎という叔父も来、その上、ぼくの小田原の義兄政広も横浜の左右田銀行へ勤めるようになって、共に住むというような大家内になつていた。

とても、家が狭いというので、遊行坂の道路に面したすぐ近く  
の借家をべつに借りうけ、食客や伯父たちはみなそちに雑居し、  
朝晩の食事はこつちから女中が運ぶという形をとつていた。

その連中も、父の姿はひどく怖れ憚はばかツていたが、父の帰宅のお

その夜などは、その洋灯の下に牛鍋や酒が展開され、何をやっているのかと思うような騒ぎ方が始まっていた。そして女中までがそつちへ行くとキャツキャツと笑いこけていて呼んでもなかなか帰って来ないといったような暮し振りを見せていた。

そのうちに、伯父の山上清が、ある晩、発作的に精神病的な兆きざしを見せ始めたのである。みんなの枕を並べている寢床に立って、突然、放尿したのであった。これは大騒ぎだった。だが入院させて落着くと、日ならずして平常状態に返った。そして勤務先の灯台局へも勤め出したが、役所先でも、変だ——と云われ出したらしい。まもなく辞職して、しばらくは遊行坂の家で静養していた。が、その後も発作を起すと時々乱暴し出すので、ついに附添人を

つけて一時郷里へ帰すことになった。佐倉へ帰ってからは、だんだん発作の回数も減ったらしく、後には健康を恢復して、麻布の竜土町に新家庭をもち、この伯父の方はまずサラリーマンなみの単調無事な生涯を終わったのであるが、しかし、どういふものか続いて次の三郎叔父が、おなじような精神病になってしまった。そして、これも一時は快方に向い、渋谷の松しょうとう濤園が住宅地となる頃まで、鍋島家の土木技師として雇用されていたが、その後、病気が再発して、ついに若死してしまった。

ほかの者には、誰にもそんな兆候は見ないのだが、まちがいなく、ぼくの母系からは、その伯父と叔父の二人までが、正真正銘の精神病にかかっている。もし精神病が遺伝的なものならば、係

累のどこからか、いつ忽然と、第三の実証を示す者が立ち現われ  
ないとも限らない。

どうかした時、ぼくはぼく自身の血液のなかにも、何かが潜ん  
でいやしないかというような恐怖の翳かげに、ふと取り憑かれること  
がある。——ま、いまの所はぼくにも周囲にも現われていないと  
思っているが、考えてみると、少青年期のある時期には、ぼくも  
多分にそれらしき発作のひらめきをやったものかも知れなかった。

家が、南太田の赤門前へ引つ越したのは、ぼくが九歳の秋頃で  
ある。南太田尋常高等小学校へ転校した。こんどの学校は、家か  
らも近く、駈け足でゆけば二分か三分だった。赤門前というのは



その辺の俗称で、正しくは、横浜市南太田清水町一番地と書いた。いとも閑静な、そして小さな町で、清水町は一番地から四番地までしかないのである。戸数も何軒と数えられるようなその真四角な住宅地の周りを、西北の戸部山や久保山から流れてくるきれいな小川が繞っていて、どの家の門にも、その家だけの小さな橋が架かっていた。

ぼくの家は、赤門とよぶ寺の山門通りに面した角地であった。だから家の横にも前にも、その清冽せいれつな水が繞っていた。この辺には、異人館も皆無だったし、混血児の友だちもないし、以前の山手環境やまのてとは、まったく空気がちがっていた。山本安英さんの生家もこの清水町だった。

家の前は広い三叉路で、北へいくと、鉄温泉とよぶ鉾泉宿があった。南には、すぐ南太田小学校の校舎が望まれ、普門院というお寺やら、はなぶさ英町、霞町などという静かな町並の生垣がつづき、もすこし行くと初音町に出る。そこまで出ると、かなり賑やかで、角に大きな乾かんぶつ物問屋があった。その息子が、その頃漸く擡頭し出した壮士芝居というものの役者になって、森三之助という花形役者だということ、誰からともなく聞かされていた。

それと、もひとりその頃の著名人として伊藤痴遊ちゆうの家が、ぼくの家から広い三叉路をへだてた向い側にあった。ぼくらが兵隊山とよんでいた山の崖をうしろにして見越しの松に船板塀といった構えの住居であった。事実、妾宅であったのかもわからない。

或る朝、学校カバンを肩にかけて、家を出てゆくと、近くの駕かことら虎（人力車宿）の若い衆やら近所の人たちが往来に出て、何やら事ありげに噂をしていた。その立ち話によると、その妾宅へ、明け方、誰かが寝込みを襲つたらしく、伊藤痴遊が寝衣姿のまま裸足で逃げたのを見た、その騒ぎを、蒸し返し、みんなでしているのであった。

痴遊は、その頃、雲井町の雲井座という小屋を持っていて、ぼくら子供心にも、壮士という名で通っていた。壮士とは何の意味であるか分らなかつたが、ただ恐い者だという観念があつた。――後年、痴遊の政治講談をどこかで聞いたことがあるが、近所にいた頃は、顔も見たことはなかつた。痴情騒ぎなど近所に聞えた

ので、やがてすぐ他へ移って行ったものかもしれない。そういう些細な事すらも、すぐ近所への不体裁とか面子メンツを憚られるほど、清潔というのか、社会秩序があつたというのか、とにかく静かで、ひっそり閑とした世間であつた。

## みどり屋雜貨店

元來、ぼくの父は大酒家だつた。ことに一頃の父の姿は酒狂の人みたいにはやくらくら子供たちの眼には灼やきつけられたまま残つてい

る。そうした父の大酒振りも、ここらで述べておいた方が話の順序にも役立つので、見得もあらもつつまらずそんな事も少々書いておこうと思う。

幾歳になつても、親を語るばあいの自分はやはり子供なので、親の追憶像を人なかへ示すだんになると、子としてつい親びいきみたいな心理が手つだつてくる。何も偽つてまでよく書こうなどとは決して思わないが、余りに非常識な点だの人間的な短所などは、わが親の像として、何だか彫<sup>きざ</sup>み出し難い気もちが先立つてくるのである。

だがこんな観念は、近来の十代二十代で早くも親を批判の的と

するに馴れている新時代の子たちには、およそ愚にして気の知れないものかもしれない。しかし、ぼくらの内にある古めかしい骨肉感も決して親の威圧で植えこまれた残痕ではなく、否定できない肉体上の、分身の責任感から来るものなのである。つまり父の酒狂像も人間的短所も、ぼくら数人の子へ、まちがいなく多少ずつ遺伝分配されていたにちがいがなく、父が現世でやった影踊りは、自分の影でもあるような羞恥を覚えるからだつた。

日本間なのだが、二階の父の寝室には、大きな西洋ダンスが置いてあった。あらゆる種類の舶来酒がその棚に並んでいる。

父は、寝しなに限らず、枕元にもそれらのビンを並べさせて眠

った。ぼくは真夜中によく眼をさました。そして、父の部屋でする微かな物音に耳をすましたものである。それは猫が舌ツツミでも打つような怪しさに聞えた。ふと、深夜に眼をさました父が、寢床の中で腹這いのままジンやブランデーなどを独りでカクテルしては飲んでいたのであった。二度でも三度でも、眼が醒めさえすれば飲む。それが父の習性だった。

一升酒というが、父のは底が知れないと、母はよくなげいていた。朝の出勤前から父の姿には酒の香がぶんぶんしていた。

自転車はまだ横浜でさえ珍しい物の一つだった。父はその自転車で通勤もし、よく乗り廻っていたらしいが、自転車の上でもポケットからウイスキーを出して飲み飲み走っていたという噂など

を母に告げる人もあつた。そのくせ泥酔自転車で往来の雛妓を刎ね飛ばして入院騒ぎを背負つたり、八百屋や豆腐屋の店へとびこんで賠償を取られたり、のべつ手や顔に擦過傷をこしらえていた。

棧橋に繋留中の外国船内で、外人の船長、事務長などを相手に一昼夜飲みつづけ、あげくにそれらの外人数名をつれて、大森のあけぼの、新橋の花月と飲みあるき、その間、飯らしい物は口にせず、幾日目かに横浜へ帰つて来た。そしてその船の出帆を見送るとすぐ棧橋で血を吐いて仆たおれた。というような愚にもつかない事を、父は自慢らしく、いや、性懲りもなく、酒を飲みながら家庭でもよく云うのだった。



吐血は、それ以前にも何回か見ていたらしい。思うに、もうその頃、潰瘍かいようが癌がんになりかけていたのだろう。かかりつけの小宮博士は「あなたが酒をやめないなら、私は医師として良心が果せないからもうお宅へは来ない」と、いった。

父は漸く男の四十代を踏みかけていた。遊行坂時代から清水町頃までは、会社も隆運にむかい、横浜埠頭ふとうを中心とする商社の内外人に顔もひろくなり、特に花柳界では商売上派手な真似もしていたので、いわば得意時代の有頂天うちようてんにあつたものだろうか。それに身長は五尺六、七寸の壮健な体躯であつたから、医者いしやの忠告に耳もかすことではない。

母などは曖おくびにも、父の前では愚痴もこぼせなかつたし、ふと顔

いろに出してさえ、忽ち食卓が引ツくり返された。父の酒の膳に見えたお菜の何かを、ぼくが喰べたそうに見ていたらしく、母の袖を引いたのだった。すると父はやにわに、膳の上の物を悉く中庭へ抛り投げて「酒がまずい」と云い「なぜ子供たちにもおなじ物をやっておかないのだ。喰べた気がしない」といつて怒った。乱酔しているばあいは、そんな些事をきっかけに、母をそこへおいて、一時間も二時間も飲みつつ日頃の叱言や母の親類のざんそまでを並べるのである。もし母が口ごたえでもすれば「出てゆけ」となり、時により腕力をふるい出す。まったく手のつけられない暴君になってしまう。

だから微酔のうちの上機嫌な父はいいが、怪しくなると、ぼく

ら子供を初め、家の内は颱風下の停電みたいなものになる。ぼくは十一、二歳だったからまだよかった。義兄の政広は優形やさがたの美青年である。「政広、ここへ来い」となると、父の荒い酒氣の前におかれて、義兄は油をしばらくられた。「大体、貴さまは柔弱でいかん」というのが毎度のお談義の主題であつたようである。何を怒られたのか、ある時は、「腹を切れ」とか何とか云われて、女お形やまみたいな義兄が蒼白になつた儘、泣いているのを見たこともあつた。

家には刀剣などもあつたらしい。母は、万一を懼おそれて、刀の隠し場所に、恟々きょうきょうとしていた。いちどなどは、十日も居所不明にしていた父が、やっと帰つて来たと思うと、父が困つていたお

琴という関内芸妓や茶屋の女将などと一しよに帰つて来、さらに母へ酒のしたくをいいつけた。日頃から父の取巻きらしいそれらの人々が散々馬鹿騒ぎをして帰つた後で、母が何か一言父へ恨みを云つたとかで、父が立腹し出したことがあつた。この時も父はどこからか刀を取出して、「斬つてしまふ」と、それを抜いて母を脅した。母は裸足で裏庭へとび降り、幼い妹たちを抱えて夜半まで塀の外にかがみ込んでいた。

そういう後では、父はさらに大酒を仰飲あおつて「男の子は男親につくのだ。おふくろの後など追うな。外へ出てゆくと家に入れな

いぞ」などと呶号し、ぼくらはおろおろ泣くだけだった。

やがて父も二階で酔い臥ふした様子なので、こっそり裏木戸から

母の姿を探しに出た。世間も寝静まつている頃なのに、母はぼくらを抱いてなお動こうともせず、まるで芝居の愁嘆場そのままだが、袖口に顔を埋めて、「……どうしてあんな恐ろしい人へ嫁いできたのだろう」と、くどくどと恨んで泣き、「……おまえたちさえ産んでいなければ」と、身もだえして泣いた。

ぼくら小さい子供らになだめられつつ、その中で、泣けるだけ泣いてしまう事だけが、せめて母が諦めに帰ってくる唯一の方法か、心の処理であつたようである。だからぼくは暴逆な父の姿と、母の泣き顔の像とは、今でも絵に描けそうなくらい強い印象を網膜のうちにもっている。特に母の泣き顔の記憶はつよい。ポトポトと小鼻のわきをつたう涙の雫<sup>しずく</sup>が、けいれんする唇の辺に来て、

母の呟く恨み言と一しよに唇のうちへ解けてゆくのを、良人の横暴を怒りながら、それを云えないで、子供らに云つて聞かせる母の、何ともいい難い青白い八の字眉など、部分的にも思い出すことが出来る。そしてこんな事は、当然、小さいぼくらの胸にも父への反抗になつていた。一も二もなく母親へ同情した。けれど母がよく悲嘆の余りに「おまえたちさえ産んでいなければ……」という口走りは、子のぼくらには、ひどく辛く聞えた。何だか、自分が産れたのが、母にすまないような、へんな味気なさを覚え、自分も母と一しよになつておいおい泣くほか、どうしようもない戸惑いにくるまれた。

父の酒狂ぶりと母の苦勞を書けば限りもない。けれどその他の事も大体似たりよつたりのものである。そして、結果においては父の酒癖がついに没落の因ともなり、晩年ずっと病床から起てない宿痾しゆくあを作りつつあったのだが、しかしまた、いついつも乱暴や無理難題を酒癖としている父でもなかった。茶屋へゆけば豪放な遊び方をして、おもしろい人だといわれていたらしいし、家庭で酔つても、どうかすると大機嫌で、大勢の子供や女中を相手に一晩中キャツキャツといわせて無事に横たわつてしまうこともある。

ぼくたちは、そんな上機嫌の父親を見すますと、父の膳を取巻いて、父へたかつてみせる。「後ろへ仆したら御褒美をやる」と

云う父の後ろから、ぼくたちが大勢して、頭を押ししたり、喉くびを締めたりして仆そうとする。父と子供らと取ツ組み合いになる。父の髭にジャリジャリこすられると、ひどくこっちは痛い。そして、父の脂あぶらツこい体臭——男親の匂いといえるようなものを、いやというほど酒の香りと一しよに嗅がせられる。父親の匂いもまた、女親の涙のように、子供のどこかへ忘れ難いものになって深く沁みこむ。

上機嫌な父を終日見たのは、父に連れられて杉田の梅林へ梅見に行つたときである。あちこちの腰掛け茶屋で一本飲み二本飲み、父はいつか泥ンこに酔ってしまった。乱痴気な酔漢を路上に見るのは珍しくない時代であつたが、父の酔態は、そんな酔ツぱらい



の多い梅見客の中でさえ人目をひいた程だった。ぼくはまだ小ッぼけな少年だし、人目にもきまりが悪く、この父親を連れて帰るのにまったく当惑した。父は磯子のトンネルを出た所で、浜辺の草むらに寝てしまい、ぼくは夕焼けの海を見ながらベソを搔いていた。そのうちに、通りがかりの俵屋が訊たずねてくれたので、所番地をいって、俵の上へかつき上げてもらい、ぼくも俵に乗って帰った。あとで考えると、この日の父の姿ほど、なつかしいものもなく、どこかにそうした放逸な風もあった人だったかと、ぼくがその当時、まだ父と一しよに酒が飲めない年頃だったのが惜しまれる。

めったには、子供など連れて出ない父だが、もう一ぺんこんな

事があつた。夏の夕方である。めずらしく上布じょうふか何かの和服すがたで、父が「英ひで。散歩に行こう」とぼくを連れ出した。伊勢佐木町の通りを、涼み姿の人影に交じつて少しあるいた。父は書店の前に立ち「何か買え」というので、ぼくは「少年世界」と、その頃、時事新報社から創刊された「少年」の二冊をえらんだ。

すると父は、鉄かねノ橋を渡つて、関内の或る待合の門まで来ると「家へ帰つていい」と、ぼくを放し、そして「お父さんは途中で会社の友だちに会つて、一しよにほかへ行つたと云えばいいんだよ。よけいな事を云わなくてもいいんだぞ」と念を押された。

けれどぼくは帰ると、有りの儘を正直に母へ話したものとみえる。そんな事はもう忘れていた頃、父は晩酌の膳に向いながら、

いきなりぼくへ「貴さまのような奴は大ッ嫌いだ」と、烈しい口調で云つた。「一たん男が云うなと云われた事は、口が裂けても云うもんじやない。それを、なんだ貴さまは。貴さまみたいなおしゃべりな奴は見るのもいやだ。あっちへ行けつ」と、ひどいけんまくで叱られた。理窟も何もあるのではなく、父は極端なエゴで極端な感情家だった。そして、自分の暴言を理由づけるためには、自分が幼時にうけたサムライ格言をもつて来て、母にも子供たちにもそれを鉄則として強<sup>し</sup>いた。だから外では花柳界にもて囃<sup>はや</sup>される寛度の風流を示しながら、家では反対に嚴父の威を保とうとするらしく努めていた。外の父と、内の父と、どっちが本質なのか、ぼくらには分るはずもなかった。

これだけは両親の談合上で仲よく始められた事にちがいないが、父や母の考えが、どこにあつてやり出した事なのか、ぼくには今もよく分つていない。というのは、何不自由もない父の全盛期であつたのに、家に大工が入つて、表門も玄関も改造しはじめ、ぼくの家はとつぜん“みどり屋”という紺暖簾こんのれんを掛けた雑貨店に変り出したのである。

近所ではみな眼を瞠みはつて驚いたらしい。何しろ前にもものべたように、赤門前一带は閑静な住宅地で、わけて清水町一番地の角地にあつたぼくの家は、家の横から門の前も、きれいな小溝が流れていて、幅一米余の小橋が架つているのである。

だから門を取払つて、玄関から建て出しを設け、そこを店舗と

してみたところで、お客はいちいち小橋を渡って来なければ商品を覗くことさえも出来ないのだった。

すぐ南隣りは、おおぐし大串という呉服問屋の大家の住居で、これも

同様な橋懸りに長い黒板塀をめぐらし、その先も、また赤門寄りの静かな通りも、すべて生垣や門構えばかりである。ただ近所に変わった家といえ、カゴ虎という俣宿と、英町の近くに、駄菓子屋、焼芋屋、小間物屋ぐらいがチラとあるだけの界限だった。人通りとて、ほとんど少ない。そんな所で一体、どんな客を目標に開店したのかと、近所が怪しみあったのもむりはない。

けれど父は大真面目でこれに資本をつぎ入れたものである。

“みどり屋”という屋号は、父の出生地である小田原の緑町をと

つて名づけたものだ」と母が云った。母はまたぼくに向つて、「お父さんは、どうしても英は<sup>ひで</sup>実業家にする。そのためには、今から<sup>あきな</sup>商いを覚えていなければいけないって、それでこれを始めたんですよ。だから、おまえがいちばん一生懸命にお店番したり、学校のひまには、そろばんや商品なども覚えるようにしなくてはいけませんよ」と云った。父もまた、おなじような意味の事を、ぼくへ云った。だがぼくには、何かちつとも得心がいかなかつた。唯、家の景色がガラリと変つた事やら、世間の風がじかに家庭へ入つて来る感じなどで、わけもなく物珍しい好奇心に<sup>そそ</sup>唆られていたのであつた。

赤門前の“みどり屋雜貨店”は、こんな風に父が始めたものだった。父は、その頃の金で三千円を投じたといっていた。いわゆる士族の商法だった。松影町で松屋といっていた内外雜貨問屋がある。仕入れは一切、松屋まかせであったという。

いよいよ開店の前日などは、松屋の番頭小僧が七、八名もやって来て、夜通しタスキがけで商品の陳列やら正札付けにかかり、松屋の支店みたいな恰好で働いていた。そこへ祝い物が届くやら、来客や手伝い達に酒を振舞うやらで、徹夜のお祭り騒ぎであった。そしてきて、福引附きの売出しを始めてみると、その三日間だけは、お客も物珍しそうに、店の前の小橋を渡って買いに入つて来、店番には、松屋の番頭が三日だけ坐ってくれたので、母もぼ

くらもただ奥の茶の間から店の景気を覗きあつて、

「そら、またお客さんが入つて来たよ」とか、「あれも売れた、これも売れた」などと面白がつていただけにすぎなかつた。

けれど福引がなくなると、がたんと客足は減り、たまに客が入つて来ても、母はお愛想を云うのさえ顔をあか紅らめてしまう風だし、ぼくらは奥へ逃げ込んで女中を呼びたてる始末なので、何とも妙な事であつた。けれど日がたつにつれ、いつか皆、店番にも馴れ、元より利益も何もあつたわけのものではなからうが、みどり屋の暖簾だけは、朝な朝な、わが家の軒に懸けられた。

以前からの習慣で、はす斜向いにあつた俵宿のカゴ虎の若い衆は、毎朝、ぼくの家がまだ戸を開けない前に、家の前の往来から小橋



の上をきれいに掃いて、打水までしておくのだった。で開店後も、店が開いたと見ると、暖簾はその若い衆が来て懸けてくれる。

ある朝、父の出勤間際、父はカゴ虎の俵に乗りかけながら、頻りに、軒の紺暖簾をながめていた。それは自分の字を染めたものである。暖簾の一片一片に、み、ど、り、屋、雑、貨、店、と一字ずつ区切つて大きく書いてある。その晩、帰つて来ると、父はさつそくぼくの義兄に墨を磨<sup>す</sup>らせ、太筆を持って何枚となくその七文字を書き直していた。そして急に、暖簾の染め更えを母に命じた。母はしきりに「勿体ない」といつて洩つたが、「どうも書体の坐りがわるい、朝晩、気になるから取更えろ」といつて父はきかなかつた。まったく落語の“士族の商法”通りであつた。自

然、カゴ虎でも、松屋でも、また出入りの人々でも、その人たちの世間的な眼から見たぼくらの家庭というものは、よほど浮々して、滑稽に見えていたことだろう。いまは得意の絶頂だが、あぶないものだといったような世間の蔭口もささやかれていたにちがいない。

ぼくが学校から帰って来ると、店には店番もないのに、奥の茶の間では、三味線の音やら賑やかな笑い声が出ていることがよくあった。

妹たちのために、一週間に何度か、踊りのお師匠さんが来る。それをすすめたのは、どうも義兄の政広らしい。義兄は小田原の

花柳界で育つたので、踊り、長唄、芸事なら何によれ上手であつたし、また好きであつた。もちろん父の承諾をえた上だろうが、母も父の放埒な行状や家事の行く末にクヨクヨするのを忘れて、せめてそんな事にでも気を紛らわせようと努めていたふうがある。踊りのお師匠さんはソレ者しゃ上がりらしいきれいなお婆さんだつた。紹介者はすぐ近所に住んでいた近藤夫人である。近藤夫人のいまの旦那は普門院の住職だということだが、以前は富豪な外人の洋妾であつたという。子どもまで産んだので、その外人が本国へ帰るさいに、生涯の養育費と生活を保証してゆき、お蔭でいとも安楽に暮しているという婦人であつた。

外人との間にできた子は、その頃もう十七、八になつてい、エ

リザベス女王型の美人であつた。ぼくたちは「オテイちゃん、オテイちゃん」と馴れツこく呼んでいた。オテイちゃんは洋装したことがなく、いつも袂たもとの長い和服を着ていた。背が高いので、帯附きもよく似合う。「あれで、あいの子でなければ」と、云う人もあつた。

オテイちゃんは陽気な性で、オテイちゃんがわが家へ来ると、母も日頃の苦労顔をどこかへやって笑いこけるし、家中がオテイちゃんにつりこまれて陽気になつた。

オテイちゃんには一人の妹がある。ふみちゃんといつた。ふみちゃんはぼくと同級生であり、気だても姉とは正反対に内気にみえる。そしてこの妹の方は、近藤夫人のいまの旦那の子であると

聞かされていた。そう聞くと、どこかお坊さんの子くさい所もあった。けれどぼくは、おない年でもあり、ふみちちゃんとよく遊んだし、また少年期の初恋みたいなものをほのかに抱いていた。

けれど、ふみちちゃんは、姉と一しよにぼくの家へ来ても、めつたにぼくへ口もきかないし、遊ぶといつても打解けてはくれない。唯一ぺん、月の晩、大勢で隠れンぼをしたとき、二人してよその小暗い塀の蔭に潜み、やがてほかの子がみな出て行っても、二人だけで寄り添ったまま、そこに屈かがみこんでいて、おたがいの息づかいを意識しながらわざといつまでも隠れていたことがある。

一葉の“たけくらべ”をみると、浅草界隈の事だったあの時代の世間が、横浜のぼくらの子供仲間にもそっくりその儘あつた気

がする。オテイちゃん姉妹のことを、今でもこう鮮らかに臉に描けるのは、やはりもうぼくの少年期にも、はつきりした異性への思慕が芽生え出していたからであろう。けれど、ふみちゃんに関するかぎり、思い出せる濃い記憶は、その月の晩一ペンの事ではない。ふみちゃんは、学校の卒業まぎわに入院し、やがて病院で死んでしまった。胸が悪かったのかもしれない。ふだんからそんな翳のみえる少女であつた。

陽気なオテイちゃんは、いつも陽気に見せている裏に、じつはぼくの義兄政広に恋していたように思われる。けれどオテイちゃんも恋をすると日本娘とちがわなかつた。はにかみやら周囲の眼

に怖れて、ほんとの想いとは逆に、まったくべつな形で振舞つていたものらしい。少なくともぼくの母を初め女中たちまでが、そんなふうにならぬオテイちゃんの胸を見すかしていたように思う。

ひと頃、やはり近藤夫人の姪めいで、竹子という娘なども、義兄を繞めぐつて、オテイちゃんとの恋争いの図を見せていた。竹子という女性は、いつもこつてりと、見るからに濃艶な粧つくりをしていた。

オテイちゃんの蔭口では、彼女は賑座の市川市孝という俳優が好きで、贈り物をしたり、楽屋見舞に行ったり、たいへんな熱の上げ方だなどという事だった。そんな噂もウソとは聞かれないような娘であり、近所でもいい評判はしていなかった。

それにしても、義兄の政広の姿が、ぼくには嫉ねたましくみえてい

た。また、義兄自身もその頃は、何となく浮わついていた。自分の美貌にうぬぼれていた風がないではない。ある一夜などは女装してオテイちゃんとしよにどこかへ遊びに出て行つた。まだ寒い二月頃だったので、その頃流行つていたお高祖こそずきん頭巾を被り、白おしろい粉をつけ、女の着物、女下駄で出てゆくのを、母も女中も笑い囃しながら見ていたが、やがて何時間もたつてから澄まして歸つて来た。オテイちゃんと並んで伊勢佐木町を歩いて、たれも女とのみ思つて怪しむ者がなかつたといつて、義兄は自慢そうに話すのだった。こんな風に女に好かれた兄だし、酔えば芸事の限りをやって見せるので、父が大酔して癩癬を発するとなると、忽ち日頃の氣にくわれないものが出て「大体、貴さまは柔弱でいかん」



となり「それでも男子か」と辱めたり、腹を切れなどという暴言にもなるのであった。

ところが、この兄も、そんなやさ男のくせに、じつはなかなか剛情な人だった。長年、実父を離れて育ってきた叛骨も内にもつていたのである。だからよくお談義をくうと「ぼくは独立します」と云っていたものだが、ついに父と大喧嘩してまもなく家を出てしまった。そして、元町辺のある相場師の二階に間借し、そこから左右田銀行に通っていたが、いつのまにかその娘のお八重と恋愛におち、お八重は義兄の子を宿していた。

## 「梅曆」読み初めし頃

まもなく、ぼくにはあによめ嫂というものができた。

義兄が結婚したのである。

いきさつは、後での事にするが、とにかく自分たち家族の中に、若いきれいな嫂が忽然と生活に加わったことは、やや何かが分りかけつつあった十一、二歳のぼくという弟にとっては、内々、小さくない動揺であった。生理的にも精神的にもである。朝夕、まばゆい気もちだった。それまではそう身近に知らなかつた粘液感を伴う匂いなどに知らず知らず敏感になっていた。のべつ理由の

ないはにかみに行き会いながら、そのくせ、嫂が義兄にそつとしてみせる一顰びん一笑を偷ぬすみ見たり、ぼくの御飯茶碗へ、兄のついでに、御飯を盛つてくれる白い指先へ、特異なよろこびをもつたりした。

すべては少年の“性”の変形であつたとおもう。本来の芽を嫂の美に促進された性細胞が、複合的にその發育を目ざましくしている事にすぎないのであろう。無自覚な冒ぼうとく流だが、美しい嫂は、唯、美しい異性としかぼくの眼には見る事ができなかつた。

そんな意味で、嫂のお八重という人の存在は、わずか半年そこそこでしかなかつたけれど、弟のぼくにも、成人への一段を、踏み上がらせていた人だつた。

ぼくの眼には、熟れた異性そのものに映っていた嫂も、じつはまだ数え年の十七にすぎなかつた。女学校も出たのかどうか。家事向きの事とか、躑しつけとかいったような、女の用意は、ちツとも身につけていた風ではない。朝起きると、湯殿部屋へ入つてしまつたきり、なかなか出て来ないのが常例だつた。やがて出て来ると、家じゆうの眼をみはらすような濃い化粧を見せ、着物も毎朝違つたのに着更えていた。

朝といえ、ぼくらの家でも、店を開けるやら父の出勤支度やら、ぼくら大勢のチビが一人一人学校へ出てゆくやらで、母も女中も一頻しきりは、てんでこ舞いをやっている。だが、嫂は幾月たつ

ても、花嫁として来た翌日のようだった。髪の毛一すじも気にしながら、この大家内の中では身の置き場がないような姿をしていた。義兄のそばでお給仕したり、やがて、銀行へ出勤する義兄を送るぐらいが、せいぜいの新妻ぶりであつた。

もつとも、ぼくらと一つに暮し初めてから幾月もたないうちに、嫂のお腹は目だつて大きくなつていた。彼女にすれば、初めての経験だし、起ち居も苦しいのであつたらう。母は、ぼくの義兄とは、文字どおり義理の仲なので、なおさら気をつかつていたに違ひなく、始終、嫁を宥<sup>いた</sup>わ<sup>か</sup>ば<sup>ば</sup>う容子がぼくらにさえ分つた。

また、氣むずかしいはずである父の方も、元々、結婚前の妊娠を認めて家庭に入れた事であるから、それについては勿論、ほか

の点でも一切、緘黙かんもくを守っている風だった。と行って、気に入っていなかったのはいうまでもない。——ぼくら小さい者の感覚では、嫂が家庭に交じってからのいざこざ事は何もなかったように思うが、問題はむしろその前にあったらしいのである。

つまり、感情の激発やら、折衝のいざこざなどは、結婚にいたるまでの事前に、もうさんざんやってしまっていたのだ。そして、以後の苦しそうな緘黙は、その紛争に負けた父がいやおうなく支払わせられていた敗北の賠償だったように思われる。

さきにも、ちよつと触れたが。

義兄が父と喧嘩して「ぼくは、ぼくで独立します」と威勢よく

下宿生活へ移って行つたのはいいが、まもなくその下宿先から飛んでもない尻が父の許もとへ持ちこまれた。

これが元町の山田という相場師だった。銀ギセルを横ぐわ咥えに、唐とうざん棧の羽織に角帯といった風采で、見るからに、ぼくの父などとは肌合いの違う人であった。体格もでっぷりとしてい、仲通りの相場師仲間でも怖がられた者だったそうである。

義兄の政広が、下宿中に、妊娠させたのは、この人の娘だった。「どうしてくれる？」という事になったのだらう。強硬な相手に出会うと相手を超えて強硬になるのが父のつねだった。父と山田とのぶつかりあいは鬪牛場を選び出された二頭の角ツキ合いみたいな結果しか出なかつたろう。——何でも薄々ぼくからも覚えてい

るが、見つけない、いろんな男が掛合いに来、また仲介人が入つたり、しまいにはお茶屋の女将らしい人々まで来て、父の居ない留守に母を説くなど、ごたごたし通していたような記憶がある。

こんな問題は、今なら殆ど問題になるまい。しかし明治の静かな世間では、物議ぶつぎの元になったのだった。一般の通念にある風儀道德とか、つよい家族連帯の責任などから、義兄の勤務先の左右田銀行や父の周囲にも憚はばかられたにちがいない。——結局、父が折れて「結婚させる」そして「家庭に呼びもどす」となったのである。人いちばい自我のつよい頑固な父も、子の為に、煮え湯を呑む思いで忍んだものだろうと察しられる。そして嫁入り支度、婚礼費用一切のほか、ついでに山田からはいろんな負担を持ちこま



れ、物質的にも相当痛いことであつたらしい。

挙式はどこでしたのか、式も披露宴も、自宅で行つたのか、その辺はよく覚えていないが、とにかく嫂の嫁入りは夏の暑い頃であつた。二階の四部屋ほどが全部客席にあてられ、階下には茶屋の女将や男衆までが来て配膳にかかりきつていた。ぼくら子供は、この盛観にはしゃいで、口取りのキントンや蒲鉾かまぼこの列に眼をみはり、母から「外へ行つて遊んでいらつしやい」と云われれば云われるほど、家の中にねぼつていた。そして、宵になると、小さい兄妹達がみなして代わりばんこに、梯子段を盗み足に登つて行つては、宴会の灯とお嫁さんを覗きに行つた。

ただこんな時には、いつも手伝いに来てくれて、陽気な調子で、

茶の間や台所じゆうを笑わせ抜くあの混血娘のおテイちゃんが、その日は姿も見せなかった、おテイちゃんだけでなくお母さんの近藤夫人も二階のお客の中にいなかった。もつとも、おテイちゃん足の足が自然遠くなったのは、その前からのことで、薄々、義兄と下宿先の娘のことも、耳にしていたにちがいない。ぼくにはまだ、おテイちゃんの気持ちになつてみるまでの能力はなかったが、後で思うと、おテイちゃんはその晩、独りでどこかで泣いていたのではあるまいか。ただし、それはぼくの想像である。ぼくが当夜の義兄ぐらいな年齢に達してからそう思われた事にすぎない。

披露宴からすぐ新婚旅行へ立つという極りのいい今の習慣は、あの頃にはまだ無かつたのではあるまいか。欧風米式、何でも新

奇を競って、東京人の洋服や着こなしを、田舎くさい官員さん好みと笑い、ナンキン町仕立ての洋服を粋いきとしていた横浜人の間にも、新婚旅行の風だけは、まだ見なかつたように思われる。

だから義兄の結婚も万事家庭で行われたのだろうが、偶然ぼくはその為に、当夜、花嫁花婿の初夜の有様を何とはなく見てしまつたのである。

いつもは二階に寝るのだが、その晩の部屋の都合から、ぼくは階下の中庭をへだてた向う側の一室に寝かされていた。夏なので十畳蚊帳いッぱいに、寝具は三ツ敷いてあつた。その端の一つにぼくは寝ていた。

どうして眼が醒めたのか、ぼくはふと、うつつを覚えていた。

もう夜更けていたに違いないが、まだお客の笑い声やら片づけ物の忙しげな音が遠くでしていた。そして見るともなく蚊帳の中を見まわすと、真ん中の寢床は宵のままだったが、それを措おいて、も一つさきの端の夜具に、誰か寝ていた。

ほの暗かったが、花嫁の白い顔の一端がすぐ分った。その白さがまるまるこツちへ見えさとないのは、義兄の顔に隠れているのだということもすぐ覚さとれた。二つの枕がそのように並んでいる光景がたしかに強いシヨックではあったと思われるが、それは今になって多分そうだったろうと推測されるまでであつて、その時の直感  
は大人のもつ意味の衝動といったようなものではない。

いま考えてみるのに、まじまじとそれに視覚を灼きつけられながらもその連想がすぐ生理的にぼくの体にあらわれたり、悩んだりしたような覚えはどうもなかったとしか思われない。それよりは、男と女とがそうして寝るといふ實際を初めて見た驚異の方がまッ先にぼくを痺しびれさせていたのだろう。そして無自覚に薄目を作なしていたことだの、はからずも見えない秘密を見たとおもう体のすみや胸の動悸は期せずして一つにしていたようである。それ以上、肉体上の空想には思い及んでいなかった。

もつとも、ぼくの印象自体が、じつは半寝ぼけであったかもわからない。けれどそれにしても胸がつぶれるような息のこらし方をしていたし、そうしているうちに、花嫁と義兄の影がそこはか

となく寝姿のかたちを更<sup>か</sup>えていた事だの、蚊帳の青い波がぼくの頭のあたりへまで静かに揺れ繕<sup>よ</sup>れてきた気配などまで、今でもかなりある部分は鮮明に記憶をよび出すことが出来るのである。そして総合的には決して醜い生き物の行為としてではなく、ひどく幻影化された美しいあるものの秘戯を睫毛<sup>まつげ</sup>越しに透<sup>すか</sup>して見たという程度にしかぼくの肉体には影響していなかった。ひとえにそれは花嫁も文金の高島田を大事に枕にのせていた初夜のためであつたらう。そして又、ぼくにとって生れて初めての驚異すべき目撃の一つが、そうした美しさに見えたということも、なおすばらしい幸福だったように今でも思われている。

——ま、それらは、ともかく、肉親の縁にも薄く、孤独と不幸

をすでに幼少の生い立ちから持っていたような義兄政広は、こんな風に、また結婚の一步を、複雑に踏み出していた。そしてその結婚が、幸福なものだったかどうか、すこぶ頗る疑問な点である。

なぜなら、そんな大騒ぎを周囲にさせて嫁いで来たのに、嫂のお八重は、それからわずか半年ほど後に、元町の実家へ帰ってしまった。それも義兄と相談ずくでもなく、義兄が銀行へ出ている留守に、買物に行くといつて出たまま戻って来なかったのである。もちろん、義兄が迎えに行ったり、父と山田との間にも、再々仲人を介してごたごたの繰返しが始まったが、話の落着きは、山田の代人が、嫁入り道具衣裳持ち物のしっかい悉皆を受け取りに来たのが最後であった。

「わかつたか、貴さまは、山田夫婦から、お坊っちゃん育ちのいい鴨と見られていたのだ。色男ぶって、いい気になるからこんな目にもあうのだ」

父が義兄にずけずけ云ったことばは余りに痛烈だったから、ぼくら小さい者の耳にも沁みた。二階から逃げるように降りて来た義兄は、女中部屋の片隅でいつまでも泣いていた。その二、三日は、瀬戸物の音までが何か物淋しい家の空気と、お腹の大きな嫂の美しい姿が消えた物足らなさに、小さいぼく達まで何となくひそまっていた。

それからもよく父は「何だ、惚れた女にすら見捨てられるような男が」と義兄を痛罵したりして、その都度、義兄の顔がさつと



青白んだり、母が自分の傷みいたでもあるかのように眉をひそめる場合などをまま見たが、しかし、それとて父子の間のことではななく、いつか義兄も元の独身に馴れ、ぼくらの瞳の嫂も、一時の影絵みために、生活の中から忘れ去っていた。

こうして義兄の結婚は一場の悪夢に似ていた。しかし二人の仲は、元々恋愛とまでいえる程な相思の愛ではなかったのだろう。案外、その後も義兄の容子に未練もみえないし、以後、お八重の方からも、子どもが産まれたでもなし、よそで義兄と会っているふうもないので、女ごころをめぐらしては、蔭でキヤキヤ苦勞していたぼくの母などは、何か独り相撲でも取っていたような思いであったのだろう。後ではかえって何かぼかんとしてしまった容

子だった。

「ほんとは、兄さんもまだ子供なのね。おまえと、おなじようなんだけれど、他人の手に育ってきたから、どこか大人びているのよ。お父さんのお談義でも、もっと子供っぽくしていればよいのに、大人みたいに受けているから」

母は、自分も常に暴君の良人にこらえかねては、つい深刻な場面を、ぼくらへまま見せたりするくせに、ふと、義兄と父の仲について、そんな眩きをぼくにした事があつた。

けれど、母が、異母子のぼくの義兄を、心から庇っていた優しさは、その後も変ることはなかったし、ぼくら小さい者が「兄さん、兄さん」と、寄りたかつて慕う様も、父の機嫌がどうである

うと、何の変化もありはしなかった。

殊にぼくはそろそろ学科以外の読書欲に燃え出し、少年雑誌へ投書することを覚えたり、学友間でコンニャク版の同人雑誌めいた物を出しあったりし初めたので、そういう話し相手には、家では義兄以外に語る人はいなかった。よく作文を見てもらったのも義兄だし、自分の想うこと何でも、とにかく、十七文字にまとめてごらんと、初めて俳句かの如きものをぼくに作らせたのも、この義兄であった。

義兄にすすめられて、俳句らしきものを作りかけた頃の、その俳句では、ひどく心外だった事がある。

小学校での綴り方は、その頃、記事文といたり、普通、作文といたりしていたが、いわゆる文章体で、たとえば「某日友人ト観梅二行クノ記」とか「天長節ノ感」とか題からして漢文調のものだった。

その作文の中に、ある折、俳句を入れて、先生に出しておいたのである。水谷先生であった。この半禿頭の温雅な先生は授業熱心で生徒によく慕われていた。ところが、先生が後日、ぼくの作文を手に、顔を朱にしてぼくを戒めた、ことばの要は「作文は、自分の心を率直に云い現わし、文は自分の頭脳で綴るべきものである。いやしくも他人の詩歌などを、自分が作ったもののような振りしてさし挟むべきではない」という叱言だった。

先生は誤解している。俳句は、自分が作ったものだ。ぼくはそれを云おうとしたが、優しい水谷先生が耳の辺まで朱<sup>あか</sup>くして云っている余りな真剣さに、つい抗弁ができなかった。ぼくは泣き虫の性だったとみえ、ただ涙をこぼして引っ込んでしまった。そして以後は、それにこりて、俳句などは決してひとに見せなかった。その南太田尋常高等小学校の裏門のすぐそばに、貸本屋の看板が懸っていた。ぼくら男生徒は、そこを裏門といっていたが、女生徒専用の通用門だったのである。ぼくは、学校が退<sup>ひ</sup>けると、表門から女生徒の門へぐるりと廻って行って、毎日、その貸本屋へ寄り始めた。

貸本屋の主人公は、学校の小使さんだった。だから顔も分つて

いたし、ぼくの家庭も知っていた。鞆を外すと、その薄暗い小部屋に倚りかかって日に一冊ずつ読んで帰った。それがおもしろくて止められなくなっていた。

なぜ家で読まないかといえ、義兄に見られても母に見つかっても、叱られるに極まっている本だったからである。自転車お玉、岩見武勇伝、稲妻小僧、田宮坊太郎、鬼神のお松、何でも棚にある物は無差別に読んで行った。いわゆる大阪版という講談本だ。厚ぼつたいが、読みではなく、一時間か一時間半で一冊は読めてしまう。半年もたつと、もう小使さんの家の棚には、ぼくの読む物はなくなってしまった。

ぼくのこんな悪書の濫読は、家では誰も知らず仕舞いだった。

これがどんな悪影響をぼくにもつたかは、いうまでもない。もし、両親か義兄でも知つたらきつとその害に戦慄したことだろう。それほどひどい物だったし、家庭人の児童にたいする読書の監視は、やかましかつた。それなのにぼくは、人知らぬまに読んでいた。

貸本屋を卒業すると、まもなく縁日の露店の古本屋で、涙香るいこうの翻訳物や押川春浪の冒険物などを漁り出し、それが昂じて、すぐ帝国文庫へ手をつけ出した。何しろその頃の旺盛な読書欲は、蚕かいこが桑を食うような早さであつた。本を買うのに、小遣いが間にあわないのである。帝国文庫に眼をつけ出したのは、何しろあの五、六百ページもある厚さが魅力だったのだ。いやそうとばかりはいえない。あの中の近松物、西鶴物など、その頃は殆ど初版だ

つたから、総てフセ字なしであった。フセ字なしの「春色しゆんしよくう」  
 梅曆めぐよみをぼくは十二、三歳で読み耽ふけっていたわけである。太平記、西遊記のような物でも、幾晩かで読み終つてしまふ。「寝ないか。まだ起きているのか」と父に叱られ叱られ、寢床の中で眼を赤くして読んだ。

梅曆は、ついに父に見つかつて、風呂の焚き口へ抛ほうり込まれ、眼の前でタキツケにされてしまった。涙がにじんだ。米八の白はぎ脛はぎだの仇吉の艶な姿を火の中に見ていたのである。

何しろ家庭も派手すぎていたし、ぼくの素質も素質だし、ここ数年の少年期が好ましい温床にあつたとはどうも思い難い。しか



し、父も母も、決して子の教育を放任していたわけではなかった。日課はもちろん、朝夕の礼儀、言語、服装、拳止、遊戯にわたるまで、厳格さは以前どおりである。教育方針の鉄則だったのだろう、人手もあるのに、父はわざと子供らに、風呂場の水汲みややらせたり、遠くの使いに歩かせたり、時々、唐突な無理を命じることも前とちつとも変りはない。

ゆぎようざか

遊行坂時代に初めた漢文の夜学通いも、清水町へ移ってから、横浜の端れから端れみたいに遠くになったので、一週一度土曜日だけになっていた。これも最初は、きちんと通学して、かたの如く、岡先生の素読をうけていたが、父の前で復習する例がいつか無くなってきたので、ぼくも怠ることを覚え、岡先生の家へ

通うとみせて、じつは土曜日の晩というと、伊勢佐木町をほつき歩き、喜楽座、賑座などの立見をしたり、どうかすると、その頃、甚ださかんだった源氏節芝居を、密かに覗いたりした。

源氏節のフシはいま思い出せないが、浪花節芝居に類した寄席の小芝居で、特徴は、出演者がみな女で近年のストリップショーの狙いとおなじだった。これは一時、興行物を風靡したが数年にして禁止された。演し物は、歌舞伎物を掲げていたが、元々、演技が主でないから、ぼくら少年が覗いてみても、後をひく魅力はなかった。——とかくこの頃から心をひかれ出したのは、ふつうの演劇であった。ぼくは盲目的に芝居好きになり初めた。

芝居見物という当時の通念では、一年の内でも、それはよほど

恵まれた或る日の幸福で、平常、小学生が芝居を見たいからといって、家庭の父兄が許すはずもなかったし、自分の口からも云えなかった。それなのに、ぼくは土曜の晩には、例の一幕見だが、伊勢佐木町の小屋を順ぐり見ていたし、日曜なども、こっそり行って、追い込み席の中に交じっていた。

そういう小遣銭は、どうしたかといえば、金などは児童の手にしてならない物というのが常識だった頃である。何か正しい理由がなければ母へねだる事もできなかった。ところが家庭の一隅に、みどり屋雑貨店がある。ぼくは、そのの売溜めから自由に銀貨を持ち出すことができた。——自由にとっても、もちろん、家人の眼を偷んですることなので、智恵と敏捷を必要としたのはいう

までもない。こんな行為からみても、ぼくという素質がじつに危なツかしい子であつたことは間違ひなかつた。正直、その頃の罪を意識しない悪智の例を幾つとなく考え出すと、今でも肌がそそけだつてくるような思いにたえない。

## 喧嘩

——そんなふうにするでに悪智恵も相当なぼくだつたが、しかしそのぼくは誰の目からも「おとなしそうな」と見られていた。

「いつも、きちんとしていらつしやる」と賞められたり、殊にぼくは体の小さいことと笑靨えくぼの深いのが顔の特徴であつたらしくて、家庭の女客などからも、あいさつに出ると「ま、お可愛らしいお坊っちゃんですこと」などとよく云われて、自分の悪い面だの内面の芽生えは周囲の大人たちからは、いっこう看破されていなかつたようである。

家庭の客と、その家の少年との関係を、いまとなつて考えてみるに、きれいな女客の印象は、男の客よりもはるかに複雑な記憶をつよく残している。逆に、客が男性で一方が少女のばあいにしても事はおなじなのではあるまいか。いったい日本の家庭では、

極めて封建的などいわれたばかりの少年時代でさえ、日頃のしつ  
けはやたらに厳しいくせに、外からの客と親共とは案外なことを  
子供の前で迂濶うかつに喋っていたように思われる。

ところが、子供はまま客と親共の会話のあいだから大人も思い  
及ばぬ程なものをしばしば嗅ぎとってしまうのだ。「子供だから  
分るまい」という共通な多寡たかのくくり方は、たいがい大人たちの  
滑稽な浅見か親馬鹿のひとりぎめと云ってよい。元より大人同士  
の秘語を子供が正しく理解するわけでは決してないが、しかし成  
長期の児童という貪欲な肉塊のなかには、蠅取草の消化力みたい  
な摩訶まか不思議な作用が潜んでいるものようである。大人同士の  
ちよつとした会話の端を耳に捉えて、いつか理解以上の理解を醸

成しながらそれを密かに自分へ栄養づけていくところは蠅取草の生態とちつとも変わるところがない。

たとえば、ぼくにはこんな一、二例の経験がある。——といっても、ぼくは自分の少年期をどだいにしての事なので、一般の家庭やほかの子供には共通しないことかもしれない。けれど、「子供だから」という通念と、大人の油断は、どこの家にもありがちのようであるから、余りお上品なはなしではないけれど、愚を承知しつつ書きとめておく。

客は、どこかのお茶屋の女将にちがいない。お中元やらお歳暮に來たのやら、季節もはつきりは覚えてはいない。それなのに、ぼくはその女客がお茶屋の人だと分っていた。父が遊びざかりの

時代で、幾日も家に帰らないでいた父が、酒くさい姿を、おんな妓たちに囲まれながら、しばしば家へ送られて来たりした。その中で見た婦人だったからであろう。

土産物など横において、その女将がぼくの母へ何か喋りぬいていた。もちろん父の留守にである。すると女将のことばのうちにお琴という名が度々出た。お琴というのは、父がよそこに囲っていた婦人である。女将はさんざんその女のざんそを母へ告げていたようであったが、ふと妙に声をおとして「——それにまた奥さま、あのひとときたら、関内（花柳界）に出ていた頃から、とてもお床がよかったんですって。何しろもう泣くんだっていうじゃござんせんか」と云って、みだらな声を笑いこぼした。母はたしかま



だ乳呑みの末の一女を乳ぶさに抱いていたように思う。そして何とも返辞に困ったような迷惑顔をあからめて、自分の乳くびへ深くさし俯向うつむいてしまったのであった。ぼくは何でそこにいたのか、とにかく、そばに坐っていたのである。もちろん客も母もぼくの居る居ないなどは問題としていなかったにちがいない。

もう一度は、ある日曜日だった。父の居間に午後から喋っている長つ尻な婦人客があった。富樫さんと覚えている。富樫さんの主人は、いわゆる浜の商館番頭なる者であった。海外の珍しい物など手土産にしてはよく夫婦して見えるわが家のお馴じみ客であったが、この日は若い夫人だけで、食卓にはお酒も出ていた。それを共にしながら、夫人はさかんに「お宅は羨ましいわ。私も子

どもが欲しくて欲しくて、いろんな事をしてみたんですけれど」というような意味をぼくの父へ訴え出した。母も交じって居、父が何か冗談めいたことをいうと、母が「ばかな事ばかり仰ツしやうて」と、一しよに笑い興じていた。が、そのうちに、少々、浮わずつたような調子で「いいえ、ほんとなの。ほんとに、うちではだめなんですの。いつも、私の方がこれからと思つているのに、たくの方ではもうすんでしまつているんですもの」と云うのが聞えた。そして酒の上の父が、何かまた大胆な閨房の秘語を飛ばしたとみえて、つづいて母が「ま。およしなさい。いくら御冗談でも、よその奥さんに」と、すこし不機嫌に云つたのが、何の意味か、ぼくにはおぼろに分つていた。

ぼくは客間に居たのではない。遠くのぼくの机にまでそれが聞えていたのである。前のお茶屋の女将のばあいといい、このときの片語も思い出せる程なのは、そのさい少年の脳裡によほど、つよく響いたからであろう。何しても無影響ではありえなかつた。

もちろんそれは理解というような事とは違う。さきにも云つたように、理解以前のものにすぎない。

けれど、その面の児童の危険期ともいえる問題は、どうも理解以前にあるものようである。ぼくを例にしていえば、ぼくはもうその頃、誰にも内緒で「梅暦」や近松もの西鶴ものなどは読んでいたし、特に「竹田出雲浄瑠璃集」のようなまる本でも自由に手に出来た時代であるから、それが、文学上の何であるかなどは

夢中でただ耽読していたものだった。だから茶屋の女将や、富樫夫人の云った会話の端も、それが大人のどんな意味の隠語であるかぐらいは、薄々ながら直感してしまうのであった。——それなのに、大人たちが、えてして、子供の前で、不用意な過ちを冒しているのは、まったく、子供の内面成長をおろそかに見、かつて自分の幼い肉塊が、あの貪欲な摂取欲をもつ蠅取草のような生態のものであったことを、忘れるともなくいつか忘れているからにほかならない。——と、ぼくは思うのだが、しかし、そう考えるのはひとりぼくのみが例外に早熟だったせいであろうか。統計に依ったわけでもないから、一般的な確言はしにくい気もするのである。あるいは、子供の中に伸びつつあつてしかも外に見せない

子供の性のすがたは、それぞれ、もつと底深い個人差を意外なほど持っているものなのかどうなのか。

一見、他人からぼくが「良い子」に見えた第一の原因は、いつも身なりをきちんとしていたことであろう。父はひどく身なりのやかましい人だった。母にたいしては「おひきずり」という言葉を以て、たえず身だしなみを、うるさく云った。母は沢山な子持ちになつてからも、早朝に起きて台所へいくと、引窓の明りの下で、すぐに掌てのひらに水白粉を溶いて手早く顔になすっていた。そして水櫛で髪をなでつけ、それからお勝手にかかるのが長い間の、――年老とつた後までの習慣だった。

だから、ぼくら子供らは、母の寝起き姿のままの汚い素顔や、

だらしない恰好は、殆ど見ない程だった。今でも母の顔を思いにえがくと、どんな貧乏時代の母でも、母は薄化粧したきれいな人として胸に浮かんでくるのである。こんなのは、たいへんなお洒落しやれともいえるわけだが、父にいわせれば、それが女のたしなみだったようである。といって、鏡台の前に長々と坐つて、母が口紅をつけたり髪をいじくつている姿も余り見たことはない。それなどを当時のことばで「おひきずり」と云つたのであろうと思う。

ぼくら男の子は、紺ガスリに黒の兵児帯へこおびと極つていた。紺ガスリ以外ほかの着物は着せられたことはない。学校通いには必ず小倉の袴をはき、袴のはき方は父からじかに教わつた。どうかして、その袴の紐をぶらぶら垂らして歩いているのを見られると、すぐ

母からも叱られた。当時、横浜には不良の愚連隊が横行して、おそろしく長い羽織の紐をつけ、その先つぽをチョッキリ結びにして頸へ引つ懸けて歩くのが流行ったが、そんな真似などすればなお叱られた。ともかく服装は、いつもきちんとしていないといけなかった。その習性で、ぼくはつい近年まで、和服の帯でも洋服のバンドでも、腹のくびれるほど固く締めないと気がすまなかったが、この頃は逆にゆるやかでないと気もちが悪いようになった。幼少の習慣もひどいものだが、だんだん変ってくる自分の老ろうらん懶や横着さにも気づかれる。

良い子のぼくは、外でも喧嘩はしなかった。しかし父の留守を

窺<sup>うかが</sup>つて、家の内では何をやってた事やら分らない。みどり屋の売溜めから折々銀貨をクスネていたのは長いことであつたが、一度も叱られた覚えがないから、父も母もぼくの行為をつい知らず仕舞いでいたのであろうか。

いやたつた一ぺん、店の隅でそれをやっていた所を、女中の貞というのに見つけられたことがある。貞は根岸の漁師の娘であつた。ぼくのすぐ下の弟は病氣して、しばらく漁師の家へ里子に預けられていた。夏など、ぼくもよく海水浴に行つたりした。そんな縁故から来ている娘だったので、どっちにも馴れ馴れしさがあつたにちがいない。貞は、ぼくがあのだ式な錢箱という物を横にして棧<sup>さん</sup>の隙間から銀貨を棒か何かで掻き出そうとしているキワど



い所を見つけて「あらっ……」と、大きな眼をみはり「英さんたら、そんな悪い事をして。お母さんに云いつけますよ」と云つた。「なにっ」ぼくはかえつて貞へ食ツてかかった。「いいつけるなら、いいつけてみる」そう云つて、ひどいけんまくで、貞をなぐりそうにした。貞は何か、捨てことばを投げて、奥へ逃げこんでしまった。

そんな事が根にあつたせいだろうか、もとより子供心の腕白にすぎないわざだが、ぼくはこの貞をよくいじめた。女中いじめは母が最も注意していた所だが、一度などは、母も留守だったのであろうか、何か気にくわない事から怒り出して、ぼくは貞を追ッかけてゆき、廊下の隅へ追いつめて、持っていた本で貞の頭や横

顔を夢中で撲った。貞は、壁を背にしてぺたんと下へ坐ってしま  
い、両手で顔を掩おほつていつまでも凝じっとうごかなかつた。けれど、  
ぼくは貞が又、いつものソラ泣きしているものと思つて、もう一  
ぺん力まかせに貞の髪の毛がこわれるほど本で打った。すると貞  
は途端に、きつと顔をふり上げて、ぼくの顔を睨みつけた。齒か  
ら血が滲にじんでいた。いつものソラ泣きではなかつた。と思つただ  
けでも、ぼくは何か自分の手がしびれたような気がしていたのに、  
貞はいかにも口惜くやしげな眼をじつとすえて「覚えてらっしゃい。  
今に今に、……坊っちゃんだつていつまで、お家うちに居られやしま  
せんからね。そして、よそへ出て行けば、誰かにきつとこんな目  
にあわされるんだから」と、泣きじやくり、泣きじやくり、又ば

くを睨み直して何度も云った。

このときほど、ぼくは自分の悪さを身に沁みて感じたことはない。恐いような気もちにさえ襲われた。貞は、ちぢれ髪で額のまんな中に、地藏黒子ぼくろがあつた。それから幾年か後には、ぼくは貞が云った通りになつた。行商箱を背負つて、よその門口から門口を断られて歩いたり、ひとの切れ草履を拾つて足にはきながら食を探す路傍の小犬になつていた。——何かつらい思いにくるまれて、ぼろぼろと、ひとりでに顔が下へ向いてしまう時など、貞の顔が、往來の地面に見えてきた。そして、貞はもうお嫁に行つただろうかなどと思つたりして、もしどこかで、貞に会つたら、どうしよう、本氣になつて歩くにも心を労つかつたり、心のなかで、謝つた

りしたものだつた。

前に、外では喧嘩をしたことがないと書いたが、外でも一度、やつたことがある。

名は記憶にないが、相手はぼくらより一学級上で、英町はなぶさの焼芋屋の息子だつた。二度も落第していたので、小ツブなぼくなどよりはるかに大きかつた。これがぼくらむらすずめ群むらすずめ雀むらすずめの同級生には、鷺みたいな脅威であつた。たびたび皆で齒ぎしりしていたが、どうにも強くて彼の影を見ると逃げ廻るだけだつた。ところがある日、どういふいきさつがあつたのか、ぼくが帰る途中、彼の方から前に立って、ぼくの行く途に立塞がつた。

ほかの連れは、彼を見るやいなやみな逃げてしまい、ぼくだけ一人逃げ損なつてしまった。もう逃げられないという気が、ぼくを盲目にしていた。ぼくは二三度、肩かどこかを小突かれたように思う。学校カバンを肩に掛けていたが、片手に草履袋という物を提げていた。校内で履く革草履で頑丈に鋏びょうが打ち並べてあり、いわば上の無い靴みたいな物である。やにわに、ぼくは跳び上がって、その草履袋で相手の顔をいやというほど撲つたのだ。チビのぼくに相手は油断していたのだろう、わつと、恐ろしい声を発して、顔をおさえた。彼は近眼鏡をかけていたので、眼鏡のツルが片耳にぶら下がり、そして、顔を掩つた両手の肱ひじにも血がながれていた。

ぼくは青くなつて逃げ帰り、家の中に小さくなつて竦すくんでいた。あんのじよう、やがて顔見知りの芋屋のおばさんが息子を引つぱつて来て、母へ何か怒鳴り出した。大きな凶ウ体をしながら、息子の方はわんわん泣いている。まだ顔の血もよく拭き取つていない上に、元から近眼なので、ほんとに眼がつぶれたように見えた。芋屋のおばさんは「片輪たけになつたらどうしてくれる」というようなことを母へしきりに猛たけつていた。何でも、この騒ぎに、すぐ斜向いのカゴ虎の若い衆がやつて来て、おばさんをなだめ、お手のもの的人力車に二人を乗せ、母もついて、眼科へ連れて行つたらしい。話の結末は、どうついたか覚えていないが、とにかく、喧嘩はコリゴリしたのは忘れえない。

初めてやった腕力の争いが、これだったので、ぼくはそれから以後、喧嘩はした事がないのである。生来、短小な体だし、どんな相手にした所で敵かなわないことを自分で知っているからでもある。もつとも、ずっと後の壮年期になって、もう一つ例外な履歴の一つを持つてはいる。それは東京毎夕新聞の家庭部にいたときだった。急ぎの社用であり夕刻だった。春日町かすがの停留場で乗り替えようとしたところが、待てど待てどスズなりで乗りきれない。ついに辛抱しきれなくて、さいごの電車にぶら下がった。すると、声をからしていた車掌がもう電車が走り出しているのに、ぼくを覗いて降りろ降りろと頻しきりにいう。電車は疾走しているのだし、ほかの連中もぶら下がっていることなので、車掌の制止する職掌上

の気もちも分るが、聞えない顔して横着をきめていた。すると車掌は、ぼくが掴まっていた右手へ向つて、自分の手を伸ばして来、そして、ぼくの指の一本一本を丹念にモギ離した。堪たまろうはずはなく、ぼくはちようど富坂の登りへかかった辺で電車線路へころがり落ちた。

非はぼくにあつて、先方にあるわけではない。けれど自分の醜態に自分でかつとなつたものだろう。大勢の乗客の眼に嘲わらわれた気もしたのである。起き上がるなりぼくは電車の影を目がけて追つ駈けていた。富坂のあの登りである。電車ものろいがぼくも息をきらした事だった。じつに冷や汗ものである。いま考えても、そのとき追いつけなくてよかつたとつくづく思う。もし追いつい



ていたら心にもない狂態をやっていたかもしれない心理だった。これ以外には、自分から手出しの喧嘩をする気になつたことはない。ただし、兄弟同士はまたべつだ。弟や妹には、正直、手を上げたこともある。けれどこれは喧嘩でなく、愛情の変形というものだった。そんなつきつめたばあい以外、兄弟喧嘩らしい兄弟喧嘩も、大人になつてから以後は、ぼくらはやつたことがない。

嗜好とか性癖などは、大人になつてからよりも、案外、年少の日からもう持ち初めているものではないかと思う。

少年の日、ひそかに好きだつた同窓の少女や近所の子や、また行きずりに見つつも好きなどと思う少女たちを回顧してみると、ふ

しぎにみなその型が一つである。それは皆、ほつそりしていて、色が浅黒く、髪の手毛がちぢれている。

性情としては、ぼくは男らしい方ではなく、父からも友達からもよく「泣き虫」といわれていた。自分では理由なく泣いているつもりはないが、すぐ臉を赤くするくせがあつたのだらう。もつとも、古典などを読んでいても、書物をぐツしよりにするほど独りで泣いた覚えは数えきれないほどだつた。芝居を見ても、頭が痛くなるほど泣くのであつた。少年的感傷が人いちばい強かつたものと思われる。それと又、ぼくは人知れない空想癪を持っていたようである。空想の中に自分をおいて、空想の中に自分を思うまま遊ばせてみるのが好きであつた。だからぼくは少年の日から、

少年がいやがる留守番というのは、好きであつた。広い家のなかで一人か二人で留守番していると、ほしいままに空想し、その空想の中で飽かず遊んでいられるからであつた。

どんな好きな少女にでも、自分から近づこうとしたことは一度もない。臆病であつた。行き会えば、わざと素知らない顔をした。異常な胸さわぎと、行き交<sup>か</sup>いの風の匂いを持って帰るだけだつた。そしてその少女を空想の中に持ちこんで、自分の思う儘の、また描くままの境地において、共に愉しむことを頭のなかでしていた。長い夜途や、遠いお使いの途々には、いつも空想を道づれにして歩いた。

江戸文学の耽読や、家庭の眼を偷<sup>ぬす</sup>んでは足しげくのぞいた伊勢

佐木町の芝居小屋が、ぼくのそれをいやがうえに助成していたことはほぼ疑いない。その頃、伊勢佐木町の小屋は、羽衣座、賑座、喜楽座、雲井座などであった。壮士芝居というものも盛んであった。けれどぼくはやはり歌舞伎が好きであつた。羽衣座と賑座とが、常時どっちも旧派の俳優いおりの庵看板をかかっていた。羽衣座の舞台に年中出ていた中村玉之丞という俳優、おなじ一座の団童などという俳優が好きで、この一座の演だし物は殆ど観つくしていたといえるかも知れない。

幸い、その頃、母方の佐倉のお祖父さんが十日半月おきに来てはのべつ滞在していたので、ぼくはおじいさんにかこつけては、日曜日など、お重箱をさげてはよく観劇に出かけたのである。と

ころが、おじいさんは羽衣座より賑座の方が好きで、そのためほくもいつか賑座びいき鼻びいき尻びいきになつてしまつた。

賑座という小屋は、その頃、ハンケチ芝居とよばれていた。横浜だけの流行語だが、ハンケチ女という称もよく使われていた。

生糸きいとや羽はぶたえ二重の輸出につれて、その頃、居留地の商館から外地向けの絹ハンケチおびただが夥しく売っていたのである。その絹ハンケチの縁ふちかがりや刺繡風の加工をする小工場や下受けが、全市の裏町にどれほどあつたかわからない。彼女らはつまりその従業者なのである。一種の織娘おりこみたいなものだ。だが彼女らは余得として得た絹ハンケチをあだかも誇りのように襟元へ三角形に垂らして首

に巻いて歩くという一種の風俗を生んでいた。その紅や紫や青や桃色などの色とりどりを襟元にひらめかせつつ、町の夕風の中を群れて歩き、男の愚連隊などと、もつれ歩いたりする風景も珍しくなかったので、ハンケチ女というと、不良少女群のような響きをもっていたのである。

けれど彼女らは、浜の主体経済の中にいて、稼ぎを競っていた者たちだから、金づかいも荒かった。賑座には、紅黄白紫のハンケチがいつも平土間ひらとまを埋めてい、轟員役者に奇声のこもった声援を送っていたものである。中には、なにがしという俳優は、ハンケチ女の専売であるなどと蔭口も平気で客にいわれていた。そういう雰囲気の小屋なので、ぼくら子供心にも、何となく、ここへ

足が向け難かったのであるが、佐倉のおじいさんには、又なく愉しい風景らしく、杯を手にも、わけもなく眼をほそめて観劇さんまい三昧に一日を過すのだった。

いや一日ではない。その頃の横浜芝居は、一昼夜といつてよかつた。朝は午前八時か遅くても九時には開幕する。晩のハネは午後十一時頃になる。その間ぶつ通しだから、三番叟ばそうから観る客は、朝、昼、晩と三度の食事を芝居の中で食べる人もあつた。演し物は一番目といい二番目物といい、すべて通し狂言である。天下茶屋でも、妹背山いもせやまでも、日蓮記でも、菅原伝授手習鑑でも、すべて序から大尾たいびまで、つまり竹田出雲や近松浄瑠璃集にある通りを院まるほん本どおりそっくり上演するのであつた。見があつたことは

いうまでもないが、演劇の骨格とか、浄瑠璃や小説の構成というものを知るうえで、ぼくにとつては、あれが知らず知らず、後の何かの基盤に役だっていたように思われる。

その賑座で大きな人気があり、あくどいがまた一種独自の芸風のであつた市川紅車、荒次郎、市孝、英升などという達者な俳優たちの描いて観せてくれた数々の幻影は、今でもぼくの脳裡にはあざやかである。そしてそれから数十年の後、それらの老優たちの名が、たしか昭和十七、八年頃かと思うが、本所の寿座ことぶきに演かつていたようであつた。何かでそれを知つて、なつかしく思つた事であつた。——で、ぜひ一度観に行こうと思つていたが、そのうちにあの戦下の焦土となつてしまつた。



## 或る日の酒父像

あんにやもんにや、などという言葉は下町でも今は余り使われていないのではあるまいか。ぼくら子供時分にはややもすると

「——この子は、ほんとにまだ、あんにやもんにやで」とか、

「どうして、そういつまで、あんにやもんにやなの」などとのべつ云われたものだった。

十四、五歳ともなれば、現代の子は、いわゆる十代の季節をは

つきり持ち、異例だろうが三面記事にも時々登場して、単独の自殺もする。心中もやる。そんな子でなくても、両親へは批判の眼をもつ。大人達へのたいがいな嗅覚は備えてしまう。決して、あんにやもんにや”なんていえる眸の群れではない。

けれど、ぼくら明治の子には、それはいかにもふさわしい言葉であつたらしい。ぼくらは間違いなくその分らず屋以上の、あんにやもんにや達であつた。——自分のばあいで云えば、現に家庭の内面では、ぼくの十三から十四の間に、没落へ入る傾斜を急にしていたはずだし、いよいよ大酒になるばかりだった父の酒狂ぶりにも、母の悩みにも、義兄の一身上や何かにつけてのごたごたにも、「これは、ただ事でない」ぐらいな感じは子供心にも分つ

て来そうなものだったのに、ぼくは一こう気づいてもいなかった。やがて、家の没落が、父自身の口からあきらかにされ、同時に、学校は中退しろ、他家へ奉公に出ろ、と突然云い渡されたのだが、その日その時まで、全然、何も知ってはいなかった。自分らの<sup>き</sup>々と暮っていた家庭がそんな脆い<sup>もろ</sup>ものとは、夢にも思えなかったのである——だから、その間の記憶はみな後日になって独り思い当ってきたり、母の過ぎた愚痴やら周囲の変化から自然あとで察しられたことでしかない。甚だ曖昧な云い方だが、事実何とも、あんにやもん<sup>き</sup>にやの年代だったのだから仕方がない。——それがぼくの幾ツぐらいかといえ、それもはつきりいえないが、何しろぼくが十四歳になる前の一年半か一年そこそこの間に、らちや

くちやなく、一家破滅となつたのは確かであつた。同時に、今となつて思えばそれがぼくの尊い、あんにやもん<sup>しゆうそ</sup>にや時代の終しゆうそ熄くでもあつたのである。

何か、家の中が近ごろ変だと子供心にも感じ出した事のうちに、いちばん変に思つたのは、真夜中に二階の道具類を、見知らぬ他人が何人も来て、まるで芝居で見た石川五右衛門の手下達のように、梯子段から裏口へ担ぎ出して行く光景だつた。

当然、その物音には、ぼくら子供も、密ひそかに眼をさました。そして深夜の奇異な大人たちの行動や灯影のうごきに、固かた唾たをのみ、凝と、蒲団の中から薄目をあいて見ていたものだつた。

——が、見ているだけで、それが家庭の何の兆候かすら、ぼくには判断できなかつた。おなじ事は、幾たびかあつた。そして、深夜の訪客のある晩にかぎつて、ぼくらの寢床は階下の部屋に置き更えられ、母も父も「早くおやすみ」と、ぼくらを片づけるように寢床へ追いたてた。

その頃から家運も父の会社の方も、没落への地スベリを急調にしていたのであろう。会社不況の原因は何といつても日露戦争の勃発であつた。その宣戦布告は、ぼくが十三歳の明治三十七年二月十日のことであつた。もちろん、海上不安やら経済混乱などの現象は、それ以前からで、居留地一帯の商館にも閉鎖するものがふえた。わけて外国船相手の横浜棧橋会社は、かんじんな棧橋に

繫留船の急減をきたし、ひどい苦境に落ちてきたのである。

その上に、父と社長名義人の高瀬理三郎氏との間に、感情的な訴訟沙汰をひきおこし、地方裁判所では父の云い分が通つたが、控訴院では敗訴になり、さらに大審院にまで持つてゆくという意地と金づくみたいな長期の係争を内輪で続けていたのだった。

元々、父と高瀬氏とは、共に横浜の開港的な企業の中でむすびあい、年輩も地位も、高瀬氏の方がはるかに父より先輩ではあつたが、いわば匆頸ふんけいの仲といつてよい間柄であつた。

それが一朝にして、ばかな訴訟をやり出した遠因は、もちろん会社の不況にあつたろうが、高瀬氏に与くみする人々と、父をけしかける一部と、当人以外の応援や弁護人側の対立にもなつて、退く

に退けないかたちを拵こしらえてしまったものらしい。もつとも、父の放漫なやり口や花柳界における遊び方は、いくら外人相手の商策上の必要もあつたといえ、ひとの目に余るものがあつたにちがいない。それにまた父の腹には「創業からきようまで、この会社をこれまでにしたのは自分だ」という覇気もあり、大部分の出資をもつ高瀬氏をつい無きかの如く振舞つてきたのでもあるまいか。

とにかく高瀬氏の不満と不信をうくることになって、経理面の疑義や数字の指摘となり、それが両者の衝突となつたのだつた。しかし、その程度の揉め事なら、何も会社をつぶしてまで、両者が法廷で争うほどの事もなかつたらうに、当初、冷静な高瀬氏と、覇気をつよいぼくの父とが、その問題で口論となつたさい、突然、

父がテーブル越しに拳固で高瀬氏を撲りつけたという一事件があつたのである。

高瀬氏は横浜一流の紳商であり、海運業界でも人格者といわれていた。その高瀬氏が怒つたのだ。そして「吉川を横浜におかない」と云い、「徹底的に屠<sup>ほぶ</sup>る」とも云つたそうである。横浜貿易新報や、毎朝新聞などにも出て、父の野蛮な一拳は、しばらく人の話題になつたものらしい。

もし、父を知る者はその子だ——ということをゆるして貰えるならば、ぼくの父はいかにもそんな事をやりかねない人であつた。理性もないではないが、何かに激すと、理性より先に発するもの



に、理性が間にあわなくなるのである。

それでも、後から理性を取戻して、詫わびるとか、人に円満な解決を頼むとか、弥縫びほうの方法を持ちうる人もあるが、父のは、やってしまうと、自身では内心悔いていても、さらにその非理性を正当化しようとして突ツ張り抜く二重の頑固さがあつた。——高瀬氏のばあいなどもそれで、新聞記事を見て驚いた母は、さつそく翌朝、カゴ虎の俵をとばして、高瀬氏の仲通りの本邸にゆき、父に代つてさんざん詫わびて帰つたのであつたが、数日後、それが父に分ると、父は「貴さまからして、おれを高瀬に謝らせる気か。出しや張りをするな」と、母をも撲りそうにしたということである。

ところが、父のこんな性情は、当時のまだ開港場<sup>かたぎ</sup>氣質を多分にもつていた海岸通りや仲通りの業界仲間では反対に「おもしろい人物だ」とか「豪快な人だ」とか、変に父を持ち上げる人々も少なくなかつたらしく、父の鉄拳事件にしても、また訴訟にまで発展しても、そういう人々はさかんに父の尻押しもしたのであつた。といつて純粹に父を思つてくれる理解者や同情者だつたわけではなく、高瀬氏に対する海運業者の反感やら、棧橋会社の乗っ取りを策すといつた類の人々もあつたのだが、そういう機微な人ごころなどを洞察できる父ではなかつた。まともに訴訟へ取っ組んで、さしてありもしない私財を長い間つきこんで、身も心も疲らしていたのであつた。

家の一隅を暖簾にしていた“みどり屋雑貨店”も、その頃は、いつのまにか、店仕舞いしてしまっていた。どんなふうに関店したのか、よく思い出せないが、開店のさい大売出しの手伝いに来た同じ問屋の松屋から、番頭小僧が大勢で残品引取りの荷車を曳いてきたことは覚えている。けれど、それから、カン詰類だけの香水だの、いろんな雑貨の売れ残りが、家庭の隅々に、ころがって、家へ来る人へやったり、ぼくらが外へ持ち出したり、まるで邪魔物みたいにされていた。

また義兄は、以後もずっと左右田銀行へ通勤をつづけていたが、時々、小田原の養家先へ帰ることが多かった。ある時は何か沈痛

な調子で父から、「政広、頼むよ」と云われて出て行ったこともある。父の頼みは、金策であつたのだ。しかし、養家先の資産や山林は、義兄の意のままにはならないので、この方の金策はついにさいごまでどうにもならず仕舞いであつた。——そればかりでなく、窮地に立つた義兄はやがて出奔して、以後三十年余も、姿をかくしてしまつたのであるが、その義兄の出奔は、もすこし後の事であつた。

とにかく、ぼくらの家庭は、道具の売り喰いという定じょうせき石どおりな所まで来ていたのである。それが二た月に一度か三月目ぐらしいの深夜の物音となるのだった。

道具屋もどこかよほど遠方から呼んで来たものにちがいない。

見栄坊な父は、近所の人目は元より家族らにも、母以外には、知られたくなかったのだろう。で、昼間はいけない、まよなか真夜半にという考えだったものとみえる。

道具の売り方も、父のは一風変っていた。まず二階の一部屋から売り初めたのであるが、「——この一部屋でいくら？」と値をつけさせたものだという。つまり一部屋ずつ売りに出したのである。それが、極秘にだから、道具屋の主人、内儀さん、若い衆などが、大八車に提灯をつけて、世間の寝しずまった頃、裏口からおとずれると、女中も起きさず、母と父が迎えに出、やがて二階から西洋ダンスやら絨緞やら額やらテーブルなどを担ぎ下ろしてく

ると、下に佇たたずんでいる父が「静かに、静かに」と、世間へ気がねそうに頼んでいた。そういう世間であり、人への体裁を必要とした当時の世風であつたことを、一応考慮に容れて貰わないことには、父の「静かに、静かに」と道具屋を拜むように云っている心理は、今日では、何とも、通用しない話であろう。

このときの道具屋には、余談がある。

それからずつと後になつて、ぼくの家も、見るかげもない、どん底へ落ちてから、どう知つたのか、その道具屋の主人が、ある日、手土産を持って「おかげさまで、あの折は、たいへん儲けさしていただいて、それから店も順調に行っておりますので」と、お礼に来たそうである。

それほど、道具屋に感銘されたわけだから、当時でも世間の經濟觀念が、みな父みたいだったわけでは決してない。セチ辛がらかつた事や、家庭消費の面の地味だったことは、到底、今日この頃のような、ふんだんなものではなかった。

たとえば、ぼくらのそんな家庭でも、頭数六、七人もの子供の朝食の膳に、よく生卵を割ったものだが、大きな丼どんぶりに、きまつて卵は三個しか女中が割らない。それへ醤油はたくさん目に注いで搔廻し、七つの御飯茶碗へ等分にかけて分ける。だから「そつちへ黄味ばかり入った」とか「こつちが少ない」とか、よく食膳のいざこざになった。どうかして、卵を一人でまるごと一ツ御飯へか

けて食べてみたいとは、ぼくらの念願だったものである。

繊維類にしても、絹とか羽二重とかいえば、高貴な感じさえしたものだ。ちりめん、めいせんといえば、よそ行きを意味する。どこの家でも、女は夜なべに、子供の足袋の穴や洗い張り物を、眼をいたくして針の先でかがっていた。燃料やランプの油はいうまでもないし、ちよつと建てこんでいる住宅地の横へ入れれば、その勝手口や縁先などの日向に、お飯櫃ひつや釜底の御飯つぶを流し元で掬すくった物が、ていねいに目ザルに並べられ、白い干飯ほしいとして干し上げて保存してゆく習慣のあることが軒毎によく見られた。それが大きな紙袋に蓄たまると、賽さいの目に切った寒餅や黒豆など加えて、母が砂糖煎りにしてくれたのを、ぼくらはあられと呼んで、



冬の菓子によるこび合つたことだった。

内輪ではそういう旧藩士の暮しのしきたりみたいな風習を、ちんまり崩さずにもっている古風の面もありながら、世間へは貧乏をひどく恥としていた。政治、社会制度、といった方へ貧困のもとを糺す風潮はなかつたといつていい。「貧乏はその者の心から」と、ひと口にすぐ片づけられてしまう。貧乏人は即、人間的劣等かのような差別視がつよかつた。だから、落ちぶれる——をひどく恐れた。落ち目をつくろい、見得を張ることにもなる。

ぼくの両親などは、典型的なその方の見得張りであつたのか、  
剛ごうふうく愼らしい父も、道具屋にはそんな大真面目で小心を見せてい

たし、母もまた母であつた。たいしたお嬢さん育ちでもなし、世間知らずといつても、深窓の人でもなくせに、家が零落し初めてからも、今日では、理解のつかないような事をやっていた。

いよいよ家計も切りつめなければ、そして、踊のお師匠さんも断り、女中もみな帰して、これからは勝手元も自分一人でやってゆく、と遅まきながら母も考えてきたらしい。それは母にしては大へんな奮発だつた。ところが、母はまもなく近所の人から、物珍しげな笑ひ者にされていた。というのは、母が外へ出る姿を見ると、長年の習慣から、斜向いのカゴ虎の若い衆が、黙つていても、すぐ足許へ、人力車の梶棒をもつて来て下ろすのだつた。それが母には、どうしても断れないで、じつは初音町付近まで、ネ

ギや片肉の買出しに行くのでも、ついそれに乗ってしまふのである。だから、女中を廃したくせに、八百屋や乾物屋の買物にも、人力車に乗ってゆくと行って、かいわい界隈の人目が蔭で笑っていたのもむりはない。

また、そのカゴ虎の溜りでは、母のこんな事もよく噂ばなしになつた。ある朝のこと、家のすぐ前のきれいな溝川へ、母が髪のかんざしを落したのである。その頃流行つた珊瑚さんごの五分珠だまに金きんあ脚しとかいう物だったろう。小橋の上から覗いてみると、それは久保山から流れてくる早い水勢で、ちよつと深い。かんざしは、底の方にキラキラ透いて見えている。すると毎朝掃きついで、ぼくの家の前まで掃いてくれるカゴ虎の若い者が、竹箒を抛つて、

駄けて来た。そしてすぐ腰まで入って、造作ぞうさもなくかんざしを拾いあげてくれた。ところが母は「ありがとうよ」と、お礼をいながら、「それは、あんたへお駄賃に上げる」と、かんざしは、その者に与えてしまったというのである。——まだ家財の売り食いまではやっていない日の事だったので、そんな妙な気前のある母だったので、落ち目は人いちばい辛かったです。はいか。

けれど仕舞いには、見得も持っていられなくなり、カゴ虎の俵で、質屋通いもし初めた。その質屋へ、ぼくは一ど母に伴れられて行ったことがある。座敷へ通され、茶菓が出て、もてなされたので、ぼくは質屋というような通有的な感じはちつとも覚えな

でいた。

すると、質屋の土蔵から幾個かのつづらが母の前に持ち出された。つづらにはよく朱漆で家の定紋が描かれてあったものである。丸に鷹の羽の紋だったから、子供心にも「おや、これは家のつづらだ」と怪しんで見ていた。質屋の主人番頭と、もひとりの商人らしい男が、長い時間をかけて、五個か六個かのつづらの中の衣服を全部開けて、綿密にしらべ出した。ぼくの眼にも覚えのある女の子たちの友禅物や母のよそゆきやら父の紋付袴やらが、何しろ座敷いっぱいになった。そして、ほとんど日も暮れ方になって、「——奥さま、これはどうも、御相談どおりにゆきません」と、古着屋らしい商人の方が、母に何か説きつけていた。そのときの

母のかなしげな顔と、悔いの色は、わけもなくぼくの胸までしめつけていた。

母はその帰り途に「だまされた……」と暗い顔に、涙さえ泛<sup>う</sup>かべていた。そして、ぼくへ「お父さんには黙っておいで、叱られるからね」と何度も云った。その日の事は、よく理解できなかつたが、あとで母から聞かされた事に依ると、母が金繰<sup>かねぐ</sup>りに困っているのを知って、例の知人の富樫夫人が、ごく親しいという古着屋を紹介してよこし、その古着屋が「月々、質の利息を払っていらつしやるよりも、いつそお手放しになれば、まとまったお金になりますから」と、すすめる儘、その言葉に乗って、質物の総下見をしたのだった。けれど値踏みの結果は、とても質値以上には

引取れないと云われ、あげくに質利子は、払わねばならないとあつて、みすみす幾つづらの入質物を、全部ただ流しに取られてしまつたということであつた。

没落までの、こんな経過を書いていけば、それは、やুক্তいもない事ばかりだし、限りきもないので、もうやめる。そして、これだけはぼく自身、忘れえないといつていい、わが家のさいごの日を書いてしまいたい。さいごの日というと、何だかすこし大げさだが、つまりぼくが、あんにやもんには時代の愉しい五、六年を過ぎた赤門前の清水町の家と、それから高等四年までを学んだ南太田小学校を去つて、もう二度と、そこでの日も、ぼくの少年期

も、終りを告げる日となったときの記憶である。

十四歳のときの、二月頃だった。

春には、小学校から中学へ入れるつもりだった。学校の成績は、中くらいで、平凡な一生徒だったが、中学に入れる自信ぐらいはもちろんもっていた。ちょうど久保山の神奈川県立中学の新しい校舎が新築されていて、その輝く大校舎を望むごとに「卒業したら、あそこへ通学するのだ」と、胸をふくらませていたものだった。

ところが、二月の或るお昼休み前の時間。——その頃、小学校では、家の近い生徒は弁当を持たずにゆき、お昼休み時間に各家庭へ喰べに帰ることもゆるされていたのである。



ぼくもよく昼休みには家に帰った。その日も、お茶漬か何か掻つこんでいた。すると、いつも、表から帰るはずの父が、裏木戸から戻つて来た。

見ると、父は、どろんこといいほど泥酔していた。フロックコートを着ていた。その洋服も靴も帽子も、地面で寝て来たかと思われるほど汚れている。何か、ぎよつと人に映るような顔色と眼であつた。どすんと、大きな物音をさせて、勝手元の何かにつまずいて、ぶつ<sup>たお</sup>仆れたのを、母が扶<sup>たす</sup>け起して、家の中へひきずり上げるように抱えこんだ。

ぼくにも、ただならない父の容子が分つたのであろう、あわて膳のそばを離れ、学校履きの草履袋を手にもつや否や、表から

コソコソ出て行つてしまおうとした。すると、その背中から「英ひでつ」と、父の呼ぶ声がした。小さくなつて、父の前へ戻つた。父は坐り直していた。父の顔や手にスリ傷があつた。母にはもう何もかも分つていたのだらうか、そばで泣いていた。母の泣く姿も、今ではすでに母の仕癖しぐせのように、右の袖口を、左の指先につつみ、掩つているのである。

幾日も、酒へ酒をあびていたような匂いが父のからだから発散する。「——おまえはな」と、父は云つた。息切れが聞えるのである。「……英。おまえはな、長男だ。お父さんは、訴訟に負けたよ。もう、おまえばかりでなく、こんな大きな家にはいられない。おまえは長男だから一番先に働きにゆけ。いいか」と、何度

にも、息をやすめては云った。

ぼくは「はい」と、答えた。と答えるしかないし、まだよく父のいう意味が分らなかつたのでもある。だから、父のことばが終ると、また草履袋を持って、すぐ学校へ行こうとした。

すると父は、立ちかけるぼくを見て「まだ分らないのかつ」と、こんどは、いつも悪酒になると出る大声でどなった。そして「もう、学校へ行かなくともいい。学校を退いて、おまえから先に働きに出るんだ。わかるだろう、お父さんの云っていることは」と、云い放して、梯子段を這うように、二階へ上がってしまった。

それから、たつた三日目か四日目に、ぼくはよそへ奉公に出ることになった。奉公先はおテイちゃんのお母さんの近藤夫人が紹

介してくれた家で、近藤さんの親戚にあたる住吉町の川村印房という印章店であった。「御主人は、とても優しい人だし、おかみさんは私の従姉妹いとこにあたる人だから、ちつとも、つらい事なんかありやしないからね」と、その日、ぼくを連れに来た近藤夫人は、なぐさめてくれたが、親しい家というだけになお、ぼくはよけい嫌でならなかった。もつと誰も知らない家へ行つて、誰の眼にもふれない所で働くなら働きたかった。

いやそれよりも、もつと嫌だったのは、丁稚でっちさんの着る縞の着物に角帯を締めさせられた事だった。幼少から着なれていた紺ガスリとの訣別ほど悲しかった覚えはない。近藤のおばさんと母のあいだに挟まって、嫌々紺ガスリを脱がせられたのを、近藤夫人

がけられら笑つて「よく似合うわよ、英さん」なんて言つたとき、ぼくは、ぼくの父がやるような癩癩を何かに爆発させたくなつた。そして、角帯を締めて貰うやいなや、便所の隅へいつて、おいおいと声をあげて泣いた。こめかみが痛くなるまで泣きじやくツてしまつた。そして、いつかぼくが、女中の貞を、その薄暗い壁の隅ツこへ押しつけて、本でびしゃびしゃと撲つたことが慟どうこく哭の中で思い出されていた。

## 小さい筆禍

川村印章店は馬車道から横浜公園へ向つて柳並木になつていた住吉町通りの角から東側へ二軒目のちんまりした一店舗だつた。中村梧竹の篆字てんじで「川村印房」とした彫看板が表二階の屋根半分を隠していた。その小さい商品棚に、紫水晶、象牙、めのう、水牛などの印材朱肉入れの類が並んでいるのに気づかなければ、ちよつと見、何屋だか分らない構えだつた。わざわざお客の足を入り難くしているのかと疑われるような重い硝子ガラスがいつも内と往來をびたりと立てへだてていた。

店内の小狭い土間は凸字形になつていて支那風の磚かわらで埋めてあつた。客用の腰掛が三つ四つ不愛嬌に備えてある。畳敷きの上

りかまち框は、その凸字形の土間から両側へ区分されていて、店主は這入って右寄りの方の畳の間に紫檀したんの小机をすえ、好みの文房具やら印譜などを並べて、ちよつとした煎茶家せんちやかか文人の書齋めかしたそこへ坐つて、時々、頬杖ついているにすぎなかつた。そして左側の畳敷きが徒弟机の並んでいる仕事場でもあり、また時々、這入り難い硝子障子をあけて這入ってくるお客の御用うけたまわを承るほんとの店先でもあつた。

新しい角帯前垂れを着せられて、ベソを搔き搔き近藤小母さんに連れられて行つた初奉公のぼくは、勿論、店の表つきを見て這入つたわけではない。その家のしきいを初めて踏んだのは露地の

裏口からであつた。隣りの土蔵裏にさえぎられている陰気な勝手口からおずおずと近藤小母さんのあとに尾ついて内へ上がったのである。何か冷やツこい他人の家と足の裏に感じたとき、又してもぼくはここで一と泣きしたくなつた。

下町の商家の奥というものは一体に何処の茶の間でも鈍い光線と妙な冷氣をもつて暮しているが、その嵌はめ込み箆笥ちがだの交ちがい棚だの長火鉢といったような調度類は薄暗い中にもチリ一つとめない神経質なまでの几帳面さの中に置時計の針のチクタクまでがいやに厳いかめしい静けさを守っているものだった。店境いの障子一重あけて店へ出れば、どんなお客に対しても、つねに平身低頭して愛想を作っていないなければならない隠忍の習性が、ひとたび茶の間



へ返ると主人の位置に直つて今度は「あるじ」として奉公人へ臨む身になるので自然こうした居間好みや自己の嚴肅化にもなつてくるのではあるまいか。

けれど近藤小母さんは、ここのおかみさんとは姉妹同様な仲と云つていた通りに、いきなりおかみさんの見える長火鉢を挟んでこちら側の厚ぼつたい座蒲団の上に、その肥こえた体を不行儀に坐り崩すと、忽ち何かおかしげな笑い話をしはじめていた。それは全くぼくとは無関係な話題であつたし、初めて耳にするおかみさんの声柄や調子にしても、ぼくには何かはしたなく聞えて、自分の育つた家庭で聞き馴れた日頃のものとはまるで勝手の違う雰囲気に思われた。もつともそれは後で知つた事だが、近藤夫人も才

テイちゃんを生むまでは洋妾であつたのだし、従姉妹であるここのおかみさんも又、以前はらしやめんかそれに似た水商売の婦人だつたものらしい。従つて、前身も似たり寄つたりの女同士が二人きりで気をゆるした話をしあうと、自然に以前の若いときからの調子が弾はずんで出るものらしかつた。

ぼくには何ら関係のない年増としま同士の冗談ばなしをさんざん長火鉢でやっていた近藤小母さんは、やがての事、やつとぼくに就て何か語り出していた。時々、おかみさんと声をひそめてから、中廊下の蔭にしよんぼりたたず佇んでいたぼくの方を茶の間の内から振向いて「英さん、ここへ来て、御あいさつなさい。今日からよろし

くお願い申しますツて」と、その二重頤ふたえあごでさし招き、ぼくが側へ行つて畏かしこまつたお辞儀をすると「こちらが、おかみさんよ」と、無造作に言つた。

おかみさんは四十前後に思われた。近藤夫人とはあべこべに瘡せ過ぎている。薄化粧をしていてさえ黄痘病おうだんのような艶のない皮膚をしていた。銀杏いちよう返しというのか、ひつつめた日本髪に結つていたので、生え際の薄い毛がみな眼ヅリを吊り上げる為にあるものみたいに見えるのである。それに齒まで黄色くて汚らしい。よほど煙草好きなのであろう、長煙管ながぎせるを手から離さず持つていた。そしてぼくが初めて主家の主婦から云われたことばは、

「ま、ずいぶん小ツちやいわね。十四なの。これで十四」

ということだった。

ここへ来る時、家から人力車に積んで来た大きな荷物が、ほかの奉公人たちの手でそこへ運ばれた。おかみさんは「あら、あら。たいへんなお荷物ね」と、ちよつと呆れ顔して近藤夫人へ何か又、ぶつぶつ口叱言くちごごとをもらしていた。近藤夫人は親代りにしても卑下し過ぎるほど従順に、云われる儘まま大きな風呂敷づつみを解き初め、一応おかみさんの前に持参品の点検を乞うといった風だった。

——中にはぼくの蒲団やら着更えやら、また日頃の愛読書だの学校用具まで入っていた。母が、初めてわが子を奉公に手放す気案じの思い過ぎなまでの物がそれには一ぱい詰まっていたのである。

ところが、おかみさんの眉はみるみる不機嫌になって「なアに

これ？ 冗談じゃないわよ、おまえさん」と近藤夫人へ向つて、  
「まるで、へタなお嫁入り荷物じゃない。奉公人が、友禅の夜具蒲団をかついで来るなんて、持たせてよこす親の気も知れないけれど、おまえさんの考えだって、間違つてるわよ。うちでは、小僧を世話して貰いましょうとは云つたけれど、何も、よそのお坊つちやんを預かるなんて云つたわけじゃないものね」と、けんもほろろに、煙草のヤニだらけな前歯を遠慮なく見せたあげく、  
「いいわよ、蒲団なんかは、前にいた正どんの夜具があるから、これは持つて帰つて頂戴。そして、この子の親御さんによく云つてよ。宅では、徒弟<sup>とてい</sup>としてお預かりするんですからつてね。徒弟だつて、六、七年は仕込まなければ一人前に成りやしないの

よ。それまでは丁稚奉公のつもりでいて貰わなくちやあ」

おかみさんに云いまくられると、近藤夫人は一も二もなく黙つてしまう。何か頭の上がない仲でもあるのか、何でも怒られツ放しで唯にやにやなのである。けれどもその二人の仲のよいのは無類であつた。女中が台所から出てゆくと、まもなくお寿司が来たり、風月のぜんざいが出たりした。そして晩の灯りあかがつくと、近藤夫人はやおら又、ぼくに不似合いな物をより分けて一と荷物とし、それを人力車へ運んで、「じゃあいいかい、英ちゃん、辛抱しなくツちや駄目よ」と、俵の蹴込みから何度も云い、ぼくの影を露地の角へ残して帰ってしまった。

あくる日からぼくは店に出て、店番兼仕事机の位置を店の隅っこに与えられた。

その朝初めて、奥の主人夫婦の食卓の前で、旦那様へ目見得をした。おかみさんとは、どう見ても似つかわしくない人だった。少し頭の地が見える頭髪をきれいに分け、商人でもなし職人肌でもない、瀟洒しょうしゃな市井の君子人肌くんしじんといったような旦那であった。声までが低めで温厚な女性音をふくんでいる。それに反しておかみさんが喋々と昨日の仔細を告げるのを、主人はほとんど横耳に「……そう。あ。そう。居てごらん」と、箸を片手に、汁椀の上から上わ目で、ちよつと、ぼくの方を見て云ったきりであった。

店の徒弟机は三つ並んでいた。それに硯、朱筆、印台、刻刀などの印刻道具一式が揃えてある。もうじき年期明けとかいう倉どんが上座にいた。まん中の机にいた正どんは病気で実家に帰っているとか。その空きを一つ措いて「きようから、おまえはここに居るのよ」と、おかみさんは指さしてぼくをそこへ据え、「倉吉、いじめちやいけないよ、こんど来た小僧で、英どんというのだよ、おまえ兄弟子なんだから、よく面倒をみておやり」「へい」と、倉どんは印材挟みを左に、右の手に刻刀を持って、印材の面をパリパリと彫っていた細やかな手先をちよつとやめて、「よろしく」と、猫背の恰好をした儘、小肥りな体をぼくの方へ折り曲げて見せた。



店にはめつたに客はなかつた。仲通りの仲買店とか、関内芸者の花柳地が近いので、お茶屋の帳場印だの、往来の客がふと実印や認め印などを稀まれに註文しに入つて来るぐらいなものだった。それでどうして関内の目抜き通りに商戸を張つていられるのかといえば、べつに二、三の外交員がいて、税関、裁判所、市役所、商館などの大所をたえず註文取りに廻つていた。そしてたとえば郵便局の消印みたいな大量納品になると、これは同業間の入札になるらしく、且那自身がそれには出向いて行くといった風の経営なのである。もちろんそんな大量仕事は、店先で彫りきれぬ物ではないから、その下請けをする印刻師もどこかに持つていたのであろう。とにかく店は看板だけのもので、常にそんな程度の閑散で

あつたから、倉どんとぼくの二人は、主人夫婦が見えさえしなければ、どんな話も出来、また何を読み何を書いていようと叱られるおそ懼れはなかつた。

自分が生い育つて来た従来の家庭とは、全く水が變つていたという適応の戸惑いが総てだったというほかはない。初めての奉公先としては、近藤小母さんも保証した通り、至極のん気で居よい家には違いなかつた。けれど、ぼくにはどうしても馴じめない猫みたいに、この家が冷たくてならなかつた。どこがと聞かれると答えも出ないが、硝子戸越しに往来を眺めていると、夕方など涙が出てきてしようがなかつた。

他人の中を初めて嗅いだせいであろうか、倉どんと並んでいると、倉どんの体や座蒲団から腋臭わきがをもっているような体臭が鼻をついてくるし、奥へ入ると日当りの悪い茶の間特有な冷たい匂いが身をひき締め、勝手元へ立つとそこにも一そうつよい他人の家の匂いがする。わけて毎朝厭だったのは、二階の主人夫婦の寝間の掃除だった。掃除は何でもないが、朱塗りの木枕と男枕の並んでいる夜具を畳んで押入れに押し込むあいだ、何ともいえない少年の潔癖と反骨がうずいて、蒲団の起す生温い風やチリに顔をそむけた。

台所には女中もいるのに、それをぼくの朝仕事に課したのは、ぼくがまだ何も分らない年少のチビと思ってさせた事だったにち

がない。何がといって、主人夫婦の二つの枕を手を持って片づけるほど厭だった思いはない。板の間で冷や飯を食べ、雑巾バケツの側で叱られ、又、おかみさんの足腰を揉ませられる事よりも、それは奴隸的な屈辱感に汚される心地であつた。人間の最下級の仕事であるように子供心にも思われた。

これが済むとお極りのランプ掃除であつた。横浜市もまだ全市電灯になつていなかつたとみえ、街灯も殆んどまだ青白い瓦斯灯ガスだつた。よほど大きな問屋とか病院とかでないとその瓦斯灯もまだ各家庭にまでは普及されていなかつたように思う。

ランプ掃除は、ぼくら少年は家庭でもよくやらせられたもので、これはさして辛いとも思わなかつた。しかし、食後にもう一日

課があつた。それは茶の間と次の間に据えてある桐箆笥やら用箆笥に艶布巾つやぶきんをかけることだつた。現代の家庭ではそんな丹念な暇つぶしをしている家は見かけないが、その頃の主婦はよくやつたものらしい。うこんの布きれを畳んで持ち、毎朝、桐の家具を精かぎり撫で廻すという仕事であつた。これがなかなかおかみさんの気に入るようには出来ないし、少年の根気には耐えられない、つまらなさでもあつた。

来てから幾日目かに、ぼくは初めて戸外へ使いに出された。生まれて初めて土を踏んだような心地がした。同時に、前垂れ角帯の自分の小僧姿がまだ自分のものと思えず、人中では極りが悪く

て仕方がなかった。通学へ急ぐ同年輩の中学生や女学生の姿を往來中に見ると、故なく体じゆうから瞼まで熱くなつた。羨望と卑下とに小さい身なりを一そう小さくして街路樹の蔭々と拾つて歩いた。家にいた頃はべつに身に沁みて考えられもしなかつた学問への意欲が急に飢渴を知つた胃のごとく疼うずいて來、その学問の出來る境遇から落伍したと感ずることが、口惜しくもあり恥かしくもあつて、何とも複雑な少年期の感傷にくるまれて來るのであつた。

その朝のお使いは、港橋河岸の乾物屋からクサヤの干魚ひものを買つて來ることだつた。何枚かのクサヤをくるんだ紙包みを片手に持ちつつそんな思いにふかふか歩いていたせいだろう、おかみさん

は紙包みを開けてみるなり「あら、これだけ？」と、ぼくの顔とクサヤの数を見くらべた。途中でこぼしたか、犬にでも啜くわえて逃げられたのか、何故かその干魚の数が足りなかった。「しようがない小僧サンだね、お使い一つろくに出来やしない」と、おかみさんは台所から茶の間へ引つ込むまで後ろ姿でぽんぽん云った。

こう書いてくると、いやな記憶ばかりを持ち、やたらにセンチな少年だったようでもあるが、厭な事だけが朝夕だったわけでもない。何といつても、親の膝を離れた当座は、寢床へ這入ってから独りベソを搔きつつ泣き入りする夜も何度かあったが、しかし根本はやはり子供で、至極単純だったのである。ちよつと気が反それるとすぐ親恋しきなどは忘れていた。そして、おやつ時に茶の

間へ呼ばれて、倉どんの分と自分の分との今川焼や塩せんべいなどを、おかみさんからうやうやしく戴いて退がって来るのも、ちよつとした愉しみだったし、台所でボソボソ食べる箱膳の御飯やおつけも、いつか美味おいしくなっていた。

また何よりは旦那なる人が、一こう無口でぼくらにも優しい事だった。初めのうちは、「旦那さま」とか「おかみさま」とかいふ敬称が口に出ないで困ったが、それも馴れたし、わけてこの男主人の方には、毎朝の二つ枕を片づけるあの折の感情はべつにして、だんだん尊敬に近い気もちが持てるようになっていた。

主人の川村氏は、俳号を呉竹といつて、俳友も多いらしく、ぶらりと店の紫檀机を訪れにくる人は「呉竹さんいますか」とか、



「これ、呉竹さんに渡しといて下さい」とか云つて、よく判者点のついた社中の句巻を配つて来たり、どうかすると数名の俳人仲間がぶつかつて、俳談に耽<sup>ふけ</sup>りあう夜もあつたりした。

店の戸をおろすまでは、夜業はぼくら徒弟の通常だった。ぼくは主人から与えられた隸<sup>れい</sup>書<sup>しよ</sup>千字文の手本を横において習字したり、ツゲ材の稽古判を印挟みに挟んで、刻刀を持つ初歩の稽古彫りなどをそろそろやり初めていたが、それもよそに俳人たちの雑談に聞き耳立てているのが又なく愉しみの一つであつた。

その頃の横浜俳壇にも、当然、ホトトギス派や根岸派などの俳流もあつたであろうが、多くは旧派といわれる其<sup>き</sup>角<sup>かく</sup>堂<sup>どう</sup>系の点者俳句が流行のようであつた。雪中庵雀志とか、金港舎なにがしな

どという宗匠の名がよくその仲間の口にのぼっていた。川村呉竹氏は元より俳句で飯は食ってはいないが、それらの正風俳句と称する社中では相当な古顔でもあり、文台披露（そうし）といったような宗匠披露（ようひろめ）もやった人らしかった。それと商売柄、筆蹟も良く、篆刻も上手というので、俳友たちのことばつきからも一店主以上のべつな尊敬をうけていたことはぼくらにも察しられた。

名は覚えていないが二、三度主人の使いで行ったことのある俳人の一人で扇町に雑貨貿易の店舗を持っていた人がある。おおよそ風采のどこにも俳句気などは見えない美髯（びぜん）の横浜型紳士であったが、或る日の小雨のそぼ降っている晩、夕方から主人呉竹氏の紫

檀机のそばに坐りこんで、雑談に時を過していたことがあった。

そのうち時々、主人とその人の眼が、ぼくの姿へそそがれて来るのを、ぼくは体で感じとっていた。印刻の夜業ランプには、硝子玉のレンズを掛けて、その明りの焦点に印面をおき、先の鋭い印刀で、パリッパリッと、微細な印字を彫ってゆくのである。その稽古判にぼくは眼を赤くし、倉どんのように背を丸くしていたのであるが、ふと主人が「おい」と、呼ぶので顔を上げると、俳友の客が、チツクで固めた美髯にちらと微笑を見せて「おい。君あ、作文が巧いんだってね。今夜、雨が降ってるから、雨という題で一文そこで書いて見給え」という唐突ないいつけだった。

どうして、ぼくの作文などを、その人はもちろん主人も知って

いるのだろうか。ぼくは唯まつ赤になつて俯向いた。すると主人も頻りに「題は何でもよい、何か、思つた文章を書いてごらん、すぐそこで書いてお見せ」と云うのである。

書かなければいけない主命のように思つて、ぼくは鉛筆を取出して何か書き出した。文の内容などはすっかり忘れているが、硝子戸越しに、その晩の雨の往來を行き交う人力車の灯や蛇の目傘の人通りなどを見つめたりして、やつと写生文体にして書いた事だけは思い出される——で、それを畏る畏る客と主人の前へ持つて出て引き退がつた。それから二人の大人が、ぼくの作文を机にのせて、頬杖つきながら首を寄せ合っているのも長い時間であつた。その間じゆう、ぼくは胸が動悸していた。主人も客も、ぼく

へは、うんともすんとも云わなかつた。そしてその晩はべつに何の事もなく客が帰ると戸をおろ卸していつものように薄い蒲団にくるまつて寝ただけだった。

ところが、翌朝、ぼくは主人の前に呼ばれた。主人の見事な筆蹟で書いた、ぼくの父宛ての封書が前に置かれてある。それをちよつと指の先で突き出して「これを持って、うちへ帰んなさい。わけは中に書いてある。そしてね、荷物は後から誰でも取りにおいで」と云うことであつた。

川村印章店の台所口からぼくは往来へ出て行つた。堪らない情けなさで胸がつまっていた。暇を出されたという事はやはり大き

な衝動だった。そのくせ「家へ帰れる——」といううれしさが、  
こんこんとこの幾日か渴いていた心の何かを満たしてもいた。

けれど、母の手紙で、家はもう元の清水町赤門前を引払ってしま  
まい、西戸部蓮池何番地という所へ移っている事だけを知ってい  
て、以来まだ一度もその後のわが家は見えていないのであった。

いつか店の使いで、戸部銀行へ納品に行ったとき、ふとわが家  
の引越し先を探しにうろついた事もあつたが、家を出るさい父  
から「奉公に出たら、どこまでも忠実に勤めなければいけない。  
使い先から家へ寄つたりしても決して家へ上げてはならないぞ」  
と、母も云われ、ぼくも云われていた事なので、父の顔恐さに、  
思い止まって、途中から空しくむな帰ってしまったのである。

だからまず第一に、暇を出されて帰ったら、父がどんなに怒るかという事のみが何より心配だった。密かなうれしさの半面に、また小さい胸を傷めながら戸部の引越し先を探し歩いた。

字蓮池あぎという所は、伊勢山から紅葉坂の反対側の方を西へたらだら降りて行つて、中途から狭い横道をまた右へ降りきつた一劃の窪地であつた。藪やら古い池の残痕やらを繞つて安ッぽい借家がぼつぽつ建て混み初めて来たといった風な場末であつた。その一軒の格子先に、紛まじうなきわが家の標札を見つけたとき、ぼくはこれがわが家かと疑つた。そしておずおずと足を踏み入れるばかりな狭い土間の中へ入つてまず奥を覗いた。

家はたった三間ほどであつた。以前の家庭にあつたような家具

や飾りは何一つ見当らない。父の姿も見えなかつた。奥の六畳にまだおむつの要る妹が蒲団にころがつてい、狭い裏庭の外に物干竿へ洗い物を懸けている母の後ろ姿があつた。「おつ母さん」と、ぼくはまだ他人の家のようになりもせず土間から首を伸ばして呼んだ。母の顔がその日向からこつちを振向いた。人ちがいするほどその髪の毛も頬のあたりも窶やつれて見えた。「あら……」と云つたまましばらく母は笑いもせずぼくの方を凝視していたが、その手から音をたてて物干竿が地へ落ちた。母はそれを拾い上げようとせせず、縁へ這い上がり、座敷を小走りに駈けて、ぼくの顔のそばへ来た。そして「どうしたの、英ちゃん」とは云つたが、すぐ何かを察したようだった。ぼくは主人からの手紙を母の前へ



おくと、何も云えなくなつて唯泣き出した。母はそうした感情に揺られた容子もなく「おあがり」と、ぼくの手を取つて内へ入れ「何を泣くのさ」と、少し面倒くさそうにぼくを叱つた。ぼくはまだきようきよう恟々たるものを胸に残しているので、「お父さんは？」と家の中を見廻し「……お父さんは何処へ行つたの」と、何度も訊ねた。

母のことばに依ると、父の敗訴の始末やら多額な賠償金の算段をするために、先頃、郷里の小田原へ行つたので、ここ当分は留守だということであつた。

その時は、母のことば通りな父の不在を信じて、僕は内心ほつ

としたものだが、しかしそれから一と月も経つと、ぼくにもいろいろ疑わしい節が感づかれて来た。母としては、そのさい、ずいぶん切ない思いだったに違いない。母の言は、子供へも打明け難いたための、真赤な嘘だったのである。——ぼくが奉公先へ出たあれから後、父は大審院の敗訴で私書偽造横領罪とかいう判決の言い渡しをうけ、まもなく根岸監獄の未決監に収容されていたのであった。

もつともそれから服役までにも、訴訟相手の高瀬氏が願ひ下げしてくるか、会社へかけた損害の賠償義務が果せなどしたら、あるいは体刑まで受けなくても済んだのかも知れないが、平素、借財はあつても預金などは皆無な父だったし、家財道具まで、一、

二年の間に売喰いしていた始末なので、それも出来ず、高瀬氏の「吉川を横浜から屠る」と公言していた憤りをも、ついに又、解くことが出来なかつたものとみえる。

それについても、ぼく自身、思い出されてならないのは、ぼくの義兄政広と、桜木町の駅で別れた日の事だった。その日、ぼくは義兄を見送るために尾ついてゆき、汽車の出るまでホームに佇んでいた。汽車の窓に見せていた義兄の顔はいつになく沈んでいた。——あとで母から聞かされた事情によると、義兄は小田原の養家先である綾部家の山林を売払って、父が生涯の急場を何とか救おうというつもりで帰郷したものらしい。あるいは、あの頑固な父も今は意気地を曲げて「頼む」と頭を下げてわが子へ頼んだもの

かも知れない。いずれにせよ義兄は事の至難を知りつつ小田原へ立つたのだった。憔悴した元氣のない顔をして「英ちゃん、これから苦勞するぞ」と、汽車の窓からぼくへ云い、そして思い出したように、左右田銀行から受取ったばかりの月給袋を洋服の内かくしから出して、「これを、お母さんへ渡しておくれ」と、ぼくの手へ預けた。

それが、義兄政広とぼくとの短い兄弟縁の最後であつた。小田原での金策は、養家先の親類に嗅ぎつけられて、当然、非難と排撃をうけた事に終つてしまい、その為の不面目を父へ詫びての事であつたか、それとも前々から、父親にいだいていた不満がその機に爆発したもののか、まもなく一片のハガキを父親宛てによこし

た義兄は、「少々志す事がありますので、不孝の罪重々ながら、日本を去り、外国へ行きます。おそらく終生再びお目にかかる事もないと存じます故、小生の一身は、世にないものとおあきらめ下さるように」というような意味を告げた儘、それきり横浜へも帰らず、また勤め先の左右田銀行にも出勤せず、どこかへ姿をかくしてしまったのであった。

一時、この義兄の失踪騒ぎでは、父はいうまでもなく、母も知人も、警察から私立探偵まで頼んで百方行方を探し廻ったのであった。けれども郷里の小田原には全然消息を絶ち、東京へ出た形跡もなく、ついに杳<sup>よう</sup>として三十幾年か、分らず仕舞いになってしまったのであった。——それが、ずっと後年、ぼくの文筆名を誌

上などで見て知ったものだろうか、或る日突然、当時芝公園にいたぼくの家をふらりと訪ねて来たことがあつた。——後日、そういう話もあるのであるが、もうその時は、とうの昔に父も死に、母も死んだ後だつた。殊に、その辺の事は、まだここで語る順序ではないし、かんたんにも語りきれない。——で今はぼくの唯一人の義兄も、父の入獄以前に失踪して行方不明になつたという事だけを、ここでは云つておくにとどめる。

ところで、話は後へもどるが、どうしてぼくは川村印章店から——あんな温厚な主人から添書など持たせられて——突然、暇を出されたのか。その事情は、父宛ての手紙の内にも書いてはなか

つたが、後に、母が近藤夫人に会ってから聞いたことで、やっと先の真意が分った。

あの雨の晩、雨という題で一文書いてみせると、客と主人から云われた前々日の事、ぼくは飛んでもない大失敗をしていたのである。

——というのは、こうだった。昼間、奥の座敷に、おかみさんがいつも掛りつけの髪結いが来ていた。そして、おかみさんの髪を梳すいていたのである。

鏡台を前にすえ、髪結いに髪を上げさせているおかみさんの半身が、ちょうど、ぼくの仕事机から店仕切りの中ガラスを透してよく見えた。

ぼくは恐らくおかみさんの顔に日頃から興味めいた何かを抱いていたのだろう。あの薄い生え際の毛へ、髪結いが、スキ櫛という歯の密な竹櫛を加えて、それを一と撫で一と撫で、いやというほど力をこめて梳くたび毎に、おかみさんの黄いろツぽい顔が紅くなつて、眼じりも小鼻も吊り上がつてしまひ、まるで飴が<sup>あめ</sup>伸びるように顎から眉毛までを細長くして、反ツくり返りそうになつているのが、見ていると、何ともおかしくてならなかつた。それを又、一体どういう心理であつたものか、ぼくは仕事机の上に雑記帳を拡げて、と見、こう見、セツセと、おかみさんの顔をスケツチし初めていたのである。元よりこつち側から見える中障子のガラス越しなら、当然、おかみさんの方からも横目で見えていた



にちがいない。けれどそんな思慮もなく写生した雑記帳は、机のひき出しに入れた儘、すっかり忘れていたのである。

ぼくを使いか何かに出した後で、おかみさんはさっそくぼくの机のひき出しをあらためた。そして、主人の呉竹氏にそれを示し「こんな恐ろしい子ツてありやしない。こんな小僧はさっそく追ん出して下さい」と色を変えて迫ったものだそうである。それでも主人の呉竹氏は「まあ、まあ」という風で取上げなかつたそうだが、その翌晩ちようど遊びに来た俳友の一人に、ふとその事を相談したところ、その人も又「そういう小生意気なまねをする小僧はやはり考えものだな」という説で、一つどんな才なのか試してやろうという所から、ぼくへ向つて、突然、あんな難題を命じ

たものだという。

それも生半可なまはんか、ハイなどと答えて、即座に書かなければまだ

よかつたろうに、正直一途に小さな智恵をしぼって書いてみせた為、それが又、よけいに悪い結果になった。「こんな子は末恐ろしいよ、君」と、その人も呉竹氏へ云つたそうである。思えばその頃、わが家の没落初頭に、父は高瀬理三郎氏の禿頭に加えた一拳が禍いとなつて、自身の生涯をどん底に落し入れたのみか、妻子まで離散と悲泣の運命へ追いやる序幕をここにつくり、ぼくはぼくで又、おかみさんのあまりに細長い顔について興味を感じてそれをスケッチした為に、思わぬ筆禍に会つてしまい、それから次々に食う為の職をさがし歩く路傍の小犬になつてしまったのであ

った。

## 赤煉瓦

他人の飯というものを、ちよツぴり食べて帰つたに過ぎないばかりは、父の不在をいい事にして、毎日、古本屋覗きをして歩いたり、また好きな本と首つ引きで徹夜し、狭い家に隠されている母の苦労も知らずぶらぶらしていた。

それでも母は何ひとつ叱言も言わず「おまえもほんとに變つて

来たわ。やはり世間に出て、よその御飯を食べたのが、いい薬だったのね」と云ったりした。

以前とちがって、猫の額みたいな借家だし、もう女中の手もなく、母一人で一切合財、立ち働いているので、ぼくも自然、台所の水汲みもやれば掃除もする、お使いにも洩らずに飛んで行くという風だったから、母にはわが子が良く変ったと見えたのであろう。けれど、じっさいのぼくは、箸の上げ下ろしにも恐いやかましやの父親が居ないという家庭がただ珍しかっただけである。厳父の居ない慈母だけの家に、母と暮している愉しさが、自分を軽快にしていたのだった。

父の姿を家に見なかった幾月かの間、母は何<sup>どう</sup>して生計をたてて

いたのだろうか。この頃からぼくは母の代りに屢々《しばしば》、質屋のかどを潜った。母が新妻時代にでも使ったらしい鼈べっこう甲の櫛笄くしがいやら簪かんざしなどを入れた小篋こばこと、ぼくの顔とを、質屋の主人にじろじろ見くらべられて、顔を真っ赤にしたばかりでなく、足がふるえた事などが今も忘れえない。質屋の利用観念も、人の見る眼も、今とはまったくちがっていた。

また度々、母の手紙を持つては、知人の家へ、貸金を返して貰いに行つた事などもある。母は以前から父にも内緒で、親しい人とか出入りの大工、商人にまで、よく融通を頼まれては、用立てやつたらしく、それをこのさい、幾らでも、お返しを願えれば——と先方へ頼むわけだが、めつたに返してくれた例ためしはない。

そればかりでなく、まだ自分に味わった事のない冷ややかな他人の素振りにぶつかるので、いくら母の頼みでも、このお使いには、時々ぼくも渋ってみせた。

それでもどうかすると、思いがけなく状袋に入れた何円かの紙幣と、その上、先方からお菓子まで貰って帰ることもあった。そんなときの嬉しさは無上であった。ほつとする母の顔には「これで幾日かはお米も買える」という安心がありあり見えた。お米はその頃、一升十六、七銭であったと思う。南京米だと三、四銭は安かった。ヒキ割り麦、押し麦などは、もすこし安い。だから母は、零落してからは、白米と麦を七分三分に交ぜていた。

何しろ母は育ちざかりを大勢抱え、一夜に戸部の場末に落ちて、貧乏生活の初歩から経験し出していた折なので、まず白米に麦を交ぜるぐらいな智慧が、耐乏決心の関の山な覚悟だったろうかと思われる。

その頃の事といえ、わが家の戸籍などを人前に出すのもどうかと思うが、母に苦勞させた喰べ盛りの口数を示すために、一応ここで幼い弟妹たちの名を並べてみるなら、まず長男のぼく十四を頭に、次男素助七つ、長女きの十二、次女カエ九つ、三女浜四つ、四女千代一つ、という揃いも揃ってヒヨコばかりが六人もいたのである。ほかになお菊、国、スエの女子三人は乳児のうちに亡くなつてい、三男の晋はまだ生れていなかった。だから全部あわせ

ると、母は十人も産んだわけである。そのくせ、当時の母はまだ三十九でしかなかつた。色が白いので貧しい近所界隈の中では、よけいきれいな母に見えた。

だがその母も、長年欠かさない習慣だつた起き抜けの薄化粧もいつかしなくなつていた。当歳の乳呑み児を背に、朝は三人の子を小学校へ出すまで坐るひまもなく、その後は洗濯物や他家の仕立て物の内職を、乳を吞ませ吞ませ、夜遅くまで精出していた。その一つランプの下で、ぼくは暢のんき気に江戸文学や翻訳小説に読み耽つていた。深夜の灯一ツに、そうしてぼくが側に居るといふ事は、母にも何かの慰めではあつたのだらう。よく父からは「英。まだ寝ないのか」と叱られたものだが、そのおそ懼れもなかつたし



「何を、くだらぬ物を読んでるか。その本をちよつと見せろ」と、干渉される心配も母にはなく、母には辛い内職の針仕事であつたろうが、ぼくには自由なしんみりと愉しい毎晩の灯火であつた。

さかんに投書もしはじめた。投書は十二歳頃、時事新報社創刊の「少年」に短文が当選して銀メダルを貰つたのがやみつきで、金港堂の「少年界」「少女界」「ハガキ文学」「女子文芸」「中学文壇」「中学世界」「秀才文壇」と、手をのぼし、しまいには「文庫」だの「明星」にまで、詩や歌などを送っていた。だが、めつたに掲載された事はない。わけて「万朝報」に週一回発表される短編小説には、熱を上げて何回も出したが、たった一度、選

外佳作に入ったにすぎない。それでも秀才文壇、中学世界、ハガキ文学などでは幾回か和歌、新体詩、短文の賞を獲ては、ひとり得意になっていた。——そのうちに、投稿者の住所から同校生や近所にも、投書家仲間がいるのを知り、やがてコンニャク版の廻覧雑誌を作ったり、小費いを出しあつて幼稚な謄写版器械を買つて、同人雑誌めいたものを刷つて撒いたりしていたが、退学以後は、そうした友達とも、別れた儘になつてしまつた。会は斯文会しぶんと名づけ、雑誌は「野ばら」というのだつた。仲間には甲賀太郎、今村均、木村某などというのがいた。それにぼくは大町桂月論などというのを書いたことがある。思えばじつに冷や汗ものである。そして誰も彼も雅号というものをもつていた。雅号でないと文学

気分がわからないのだ。ぼくは霞峰と名づけていた。投書にも霞峰をつかつて、やたらに出しまくったものである。女子文芸や女学世界には女名前を出していた。

その頃の横浜で文壇めいた雰囲気をもっていた人々は、磯萍水、高沢初風、小島烏水といった人たちで、「藻しほ草」という文芸雑誌が唯一の月刊物であつたと思う。それと横浜貿易新報とか横浜毎朝新聞の文芸欄を中心に幾つかの詩社や歌会があつた。俳壇では、虚子と同門の人だろうか、松浦為王という人がよく選者をしてたり、小集の通知をくれたりした。貿易新報の新年号特別募集というのに応じて、ぼくの句が一等に推され、四打入ダースの麦酒箱ビールを貰ったときは途方にくれた。又、松浦為王氏の寿町の自宅で小集

のあつたとき、行つてみたこともある。しかし、席上の人のみな紳士淑女のごとき大人ばかりだったので、会の端には坐つたものの、ぼくは唯、まのわるさにもじもじばかりして、人ともものもろくに云えないで歸つて来た。それに懲りて会へ出たのは前後そのとき一遍だけだった。

貿易新報というのは、開港地の商報新聞にしては、道楽氣のあるおもしろい紙面を見せていた。小川芋銭うせんがコマ絵と称する写生図を毎日載せ、小説欄には、硯友社けんゆうしゃの作家の作品や前田曙山がよく登場して、因果華族という題名の小説などが受けていたようである。ぼくらはそろそろトルストイだのモウパッサンだの、やれ江戸文学では秋成か西鶴だなどと小生意氣をいい出していたの

で、曙山や黙禪や幽芳などではあきたらなくなり、よく分らないくせに四迷、独歩を経て、また泉鏡花に傾倒していた。誰もいちはどは罹るといふ鏡花病にぼくもそろそろ初期程度の徴候をもち出していった。

文学者になりたいとか、将来、その方面にどうかという考えなどを、ぼくは当時も以後も、いちども持ったことはない。とまれ唯好きであつたに過ぎない。だから読書の選択なども手当り次第で、押川春浪の冒険小説の類でも、その一冊に興味をもつと、春浪物全部を漁りつくして読破しなければ気がすまないという風だつた。

こんな風に、いくらでも毎日退屈しない小境地をもっていたので、ぼくは奉公先から返されて来て後、その夏中ぐらいは、何か独り天下みたいない気になっていたような気がする。ところが或る日、母の留守に投げ込まれた郵便物のうち、鼠色封筒に検閲判が押してある母宛ての手紙があった。裏には印刷で横浜根岸監獄署とあり、まちががなく父からの郵書だった。

それより前に、ぼくは薄々もう覚っていた。母が早朝から何か小風呂敷に心をこめた物を抱え、嬰兒の千代を負って出て行くと、半日の余もかかって帰ることが多かった。ぼくから訊かない限り一切父に關しては、あれ以後、母が口に出した例しもない。だから「おっ母さんはぼくに何か隠している」とは知っていたが、し

かし、監獄署からの郵便物を見るまでは、まだはつきり父の所在について何う<sup>ど</sup>こうの考えも格別もつていなかった。そのくせ、父が入獄しているのだと明確に分つても、急に真つ暗な悲しみにくるまれたという覚えは少しも残つていない。なぜだろう？　かをいま考えてみると、父にたいする畏敬というか信頼というか、とにかく監獄にやられようが路傍で失業して居ようが、子にとつては、あくまで父そのものであつて、それ以外何者でもない気もちが子の根底になつているのである。

これは、ぼくだけでなく、明治の子には、共通なとも云えるのではあるまいか。もちろん教育もそう仕向けていたし、社会のしくみもそうだった。その点では家族主義の成功が国家の上に実を

むすんでいた最盛期だったかも知らない。何しろ、どんな低い職業であろうと貧乏人の子であろうと、自分の父は世間の中でも一番いい人、正しい人として、信賴していたものである。少なくとも、ぼくの気もちはそうだった。だから父が根岸の監獄にいと分つても、父と罪惡とを、あわせて考えることはできなかつた。かえつて、日頃恐い父が、なつかしくなり、子供心にも、父の孤獨な姿が想像され、少しばかり涙が出た。

夏の終り頃であつた。母は子供たち三人を学校へ出してしまふと、忙しげに自分で髪を梳き、束髪にきゅつと結んで、何か難しい書物だの鼻紙などを例の如く小風呂敷につつみ、千代を負ぶつ



て「英ちゃん、またお留守番していてね」と、洋傘を手にしかけた。

その日まで、ぼくは父の事は母へは何も触れずにいたが、無性に父が恋しくなつて「ぼくも一しよに行く」と云い出した。そして、下駄をはいて外へ出てしまった。母はおそらく当惑したことであろうが、何のかのと云いながらも、戸閉まりをし直して、黙つてぼくを連れて行つた。まだ電車もなく人力車にも、もう乗れる身ではない。母は当歳の赤ンぼを負い、四ツの浜ちゃんの手をひき、炎天の長い道程を根岸まで根よく歩いた。今でこそ何でもない近さだが、当時は川沿いや田舎道をさんざん辿たどつて、あの高い赤煉瓦の塀が見えて来るまでには、足も棒になるほどだった。

監獄前に橋があり、河を前に代書屋や差入れ屋が軒を並べていた。その一軒に入つて、母は背の赤児に乳をのませ、何か用をすますと「おまえは、ここで待つていらつしやい。子供は入れない所だからね」と、ぼくをおいて橋を渡り、鉄と赤煉瓦の大きな門の内へ隠れてしまった。ぼくは河べりに並んでいるオボコ釣りの人の間を見て歩いたり、悪戯事を見つけて、結構、飽きもせず遊んでいた。

だいぶ経つてから、母が戻つて来た。そして又、元の道を、親子四人、日照りの下を黙々と歩いた。「ぼく、お腹が減ツちやつた」と、<sup>こら</sup>泳えきれなくなつて訴えた。たしか末吉町辺であつたと思う。小さい蕎麦屋へ入つた。そしてかけを一杯ずつ食べた。喰

べ終ると、母はハンケチで顔の汗を拭きながら、ぽつんと云った。「英ちゃん、あんたも、しつかりしておくね、これから、うちもたいへんなのよ」母が云う「たいへん」という意味が、この日には何かぼくにも身に沁みて少し<sup>うなず</sup>頷かれた。ぼくの見まもる眼が引き出したように母の瞼に涙がいつぱいになった。母はあわててもいちど顔を拭き、帯の間から糸編みの銭入れを出して銅貨を数え、蕎麦屋の盆の端へおいた。

あの頃の主婦は、洒落た紙入れなどという物は日常に使っていない。貨幣の通用度はあらかた銀貨銅貨ですんでいたからである。五厘<sup>りん</sup>（半銭）という小銅貨もまだあった。だから編物製の<sup>きんちや</sup>巾着<sup>く</sup>などが重宝だったものとみえる。ぼくはその日頃から、朝夕

に母が台所の濡れ手のまま帯の間から出し入れする編物の銭入れに、前とは違つた気もちで眼を凝らすようになった。母が巾着の底からまさぐる銭の間に、白い銀貨の多く見えるときはほつとしたし、一銭二銭の銅貨しか見えないと、すぐ明日のお米だとか、家賃の事などが心配になつた。そして、投書の郵便代だの雑誌や本を買つてくれなどという母へのねだり事も、以前のように甘えて云えなくなつていた。

母に云われたわけではない。ぼんやりと唯、こうしては居られない気が小さいぼくにもしてきたのである。「お父さん、いつ帰るの」或るとき、ぼくが恐々こわごわ訊くと「もうじきお帰りになるけれど」と、母は口を濁した。その時も、父についてはそれ以上触

れたがらない顔いろだった。ぼくは新聞を手にとると、自然、職業案内欄へ毎朝顔を沈めるようになっていた。そして見つけ出したのが、横浜南仲通りの南仲舎印刷所の「少年工ヲ求ム」という広告だった。さっそく行って、翌日から通うように極めて帰った。朝七時就業、午後五時までで、日給十四銭、残業は一時間毎に二銭を支給するという事だった。ちようどお米一升の値に近い日給のわけである。その晩、母にわけを話すと、母はじつとぼくを見ていたが、とつぜん、鼻腔も唇もふるわせて、咽むせび泣いた。それから、ぼくを抱きしめて又泣いた。多産であつたし今年生れの子をもっていたので、母のふところはいつも垂れ乳でぐツしよりだった。で、ぼくも何だか赤ンぼの郷愁みたいな快感に濡れて、母

と一しよに泣いてしまった事が今でも他愛ないものに思い出されて来るのである。まったく人生とは遠くを振返ると、たいがい皆、他愛ないことにすぎないようだ。

南仲舎へはせつせと通った。初めは工場の解版部で、活字ケースを運んだり油ブラシで女工員たちと共に追い使われていたが、そのうちに罫線部けいせんの小僧に廻された。

南仲通りには、生糸取引所とか、米穀仲買商などが軒を並べていて、活版所はその喧騒の中にあつた。だからここで印刷されるのは、相場の気配新聞や商事関係が殆どといってよい。罫線部というのは、よその印刷所にはないかもしれない。罫線部の帳簿に見られるあの薄い藍と赤線を刷るのである。刷るといふより

あれは罫線機械にかけて引くといった方が適切かもわからない。それと製本の膠<sup>にかわ</sup>仕事、単行本物の“折り”などがここの作業だった。

本工場の倉庫の二階がその罫線部で、暗い梯子段を上がると膠を煮るあの臭いが顔をつつむ。仕事場は畳敷きで、藍と赤のインキの汚染はわかるが畳の色は無いのである。年増の女工員が三人、次郎さんと呼ばれる角刈りの美しい男ぶつた若い熟練工と四十からみの主任と、男もぼくを入れて三人。それだけの部であった。

朝は七時就業だが、ぼくだけは六時半に来なければならぬと云われた。皆の来るまでに、下の小使部屋から火ダネを貰って、膠鍋の火鉢やら湯沸かしの下に火を入れ、お茶の支度もしておけ

との事であつた。そんな勤めは不平でも何でもなかつた。けれど午後になると毎日ここの部員がアミダ籤くじというのをやり、ぼくがお茶受けを買いにゆく。豆餅とか、せんべいとか、生菓子とか。それを喰べ喰べ五人の大人達が、毎日飽きもせぬ猥談わいだんに笑いこける。その猥談もぼくには決して厭ではない。むしろ異様な好奇心で聞いていた。がしかし、この休み時間が苦痛だつた。ぼくは錢がないから、アミダ籤の仲間には入らない。だからといって、皆が愉しんでいる間、外へ出ているのも変だし、横を向いているのもなお変だつた。つい隅の方で、相場日報とか生糸通信なんて、てんで心の通わせようもない印刷物などを読む振りをしている。すると誰かが「おい。こつちへ来なよ」と気がついたように、ぼ



くへその日の菓子か、せんべいなどを投げてくれるのである。お  
いと呼ばれて、皆の眼の中で、それを貰って喰べるのが、ぼくに  
とっては辛かった。自分のひがみだが、自分の姿が犬コロに見え  
た。

帰るのも、皆よりは毎日三十分ほど遅く帰った。掃除をし、火  
の用心を見、戸締まりして帰るのが役だった。ところが、女工員  
三名のうち二人までは、主任の細君と、文選にいる工員の妻らし  
かったが、もうひとりのお勢ちゃんという三十ちかい独り身の年  
増は、白痴美といったようなぼってり顔で、仕事中でも厚化粧の  
小鼻や髪の毛ばかり気にしているといった風な人だったが、この  
お勢ちゃんとか郎さんが、時々、用もないのに後に残っては、

ぼくに下へ行つていろとか、二十分たつたら帰つて来いとか、いわれなく、ぼくを追つ払うのであつた。

ぼくの帰りがけの勤めを、すませてからにしてくれればいいとは毎度思つたが、お勢ちやんと次郎さんの方にも、社の門を出る時間の憚りはばかがあつたのだらう。ぼくは云われる儘になつていた。

けれど時によると、罫線場へ戻つてみても、まだ二人が何かヒソヒソしていることがよくあつた。そんな時は自分達の手で、罫線器械のすえてある所の窓の雨戸は閉めきつてあつた。インキだらけな古畳と膠臭い暗がりの隅で逢曳あひびきの男女のする事が行われていた。たとえばくのあしおと躑あしおと音に気づいても二人は慌てて起きることはなかつた。人体の作りあつてゐる異様な形の物影は一そう深淵の

物みたいに動かなかつた。ぼくはその間、たいがい階段口の窓から外へ首を出しているのであつた。相場町の鳴りの止んだ夕屋根やら伊勢山の空を眺めて、母を思い泛かべていた。台所の水音やら夕方の蚊唸りなどが耳にある。その背後を、やがて角刈の次郎さんとお勢ちゃん、ふざけながら通つて、階段を下りてゆく。一瞬、お勢ちゃんの髪油の匂いと、もつとそれに何か加わつた感じのものが、ぼくの体にまで染まりつくほど残される。

名は忘れたが、小使部屋に、人の好いあばた顔の爺さんがいた。独り小使部屋に寝泊りして、なに屈托なく働いているふうだつた。毎夕煤<sup>すす</sup>けた電灯が点<sup>つ</sup>く頃まで、ぼく一人が居残つて残り火

の十能だとか薬罐やかんなどを返しにゆくと「これあね、今日××商店の開業十周年に貰ったんだよ、喰べておいでよ」と、お赤飯に切りスルメや卵子焼の入った折をくれたりした。この小使の爺さんから貰う物には、ぼくは何も卑屈を感じなかつた。半分残して、うちにいる弟に持って行つてやりたいというと、爺さんも「それがいい、それがいい」と、云つてくれた。何かにつけ親切にしてくれた。

そのせいで、ぼくはこの小使爺さんの噂には、自然聞き耳立てた。それに依ると、爺さんは南仲舎では最古参の勤続者らしかった。越後の人で南仲舎主人の同郷人でもあつたらしい。で、数年前に、勤続何十年かの表彰とまとまつた金を貰い、晴れて郷里へ

帰ることになった。土産物まで買っていたそうである。ところが急に帰郷は止めると云い出して、以前とちつとも変わらず小使部屋に泊って黙々と働き出した。当座、理由が分らなかつたが、近所の相場師仲間の口からやがて評判になった。三十年か四十年か知れないが、その功勞で褒賞された大金と、それまでコツコツ稼ぎ溜めた貯金全部をおろして相場に賭け、一夜に元も子も失くしてしまったのだそうである。——そういう馬鹿だといって工員たちは噂が出るとよく笑うのだった。ぼくも子供心に、そういう人なのかと改めて爺さんを見直した。けれど爺さんの小皺にはちつともそんな大損をしたという影もなし、人に愚痴をこぼしたのを聞いたこともない。今以て、ぼくには唯、温かな爺さんとして、そ

のあばた顔までが、かなり鮮明に眼に残されているのである。それにしても名を忘れたのは申しわけない。南仲舎にはぼくも僅かしかいかなかったので、いわば行きずりの人の温かさに過ぎない事ではあつたけれど。

日給の支払い日は、月々十四日と晦日みそかの二回であつた。一日の欠勤もしないでも、居残り料が加わつても、一日十四銭では貰う袋の中の額は、いと些細なものである。

けれど初めて得た金、自分で働いた金、それを手にしたときは、日頃の何ものもなく快い昂奮だつた。以前の川村印章店では、一銭の小費いも、徒弟初期には無い約束だつたから、自分で働いて

得た金は南仲舎が初めてなのだ。それをポケットにして帰る日の夕方には、やたらに何か買って帰りたかった。弟や妹たちに与えてみたい物が果物屋にも菓子屋にも屋台の焼大福屋にもやたらに目について仕方がなかった。それと、自分で稼いだ金の値打を味わってみたくもある。けれど母に見せないうちは、一銭減らすのも何だか惜しまれた。だから、やがて家に帰って、今夜は牛肉のコマ切れを買おうとか、白い御飯にしようのという時は、率先して自分が使いに走り出した。そして、母にいつつけられない予算外のお菜まで買ったりした。煮豆屋や安てんぷら屋の前に佇んで、よそのおかみさん達の中でまごまごするのも恥かしくはなく愉しかった。

南仲舎へは、ぼくは幾月ぐらい勤めたろうか。それが今、はつきり思い出せない。けれどまだそこへ通っていたうちなのは確かである。そして秋ぐちの気候も涼しくなってきた或る宵だった。何気なく帰って来ると、上がり口の土間に見馴れない履物が脱いである。どことなく家の内の空気がちがう。ぼくは、どきつとした。数日前に母から囁かれていた事がある。「お父さんが、じきお帰りになるのよ」といったその時の母には幾月にも見なかつたうれ欣しそうな、ほつとしたような容子があつた。ぼくは奥の薄暗いランプの明りと静かな気配から、父の体臭を感じると、もうその土間を上がる下駄の脱ぎ方からして無意識にちがっていた。

「……英ちゃんかえ？」と、母の声がある。「ただ今」と、台所



へ弁当箱を置きに行った。秋ぐちといつても、まだ寒いほどではないのに、今夜に限って、世間憚るように、間の障子が閉めてあった。

内から障子を開けて、母が顔を出した。出合いがしらに「お父さんが、お帰りになったのよ、英ちゃん」と、うるみ声にやや弾みをおびた調子で囁いた。中へ入って「お帰んなさい」と云つたとたんに、ぼくも肱を曲げて顔を隠してしまった。こめかみはずきずきして、耳鳴りを熱くしていたせいか、そのときの父のことばは一言も覚えていない。が、何も云わなかつたようにも思う。ただはつきりしているのは、父が紬つむぎの黒つばい着物に角帯をしめ、ろ紹の羽織の畳んだのを枕元において、虚脱した人のような淋しい

影から、ぼくへ微笑を見せたことだった。疲れていたのか、もう夜具を敷かせ、敷き蒲団の上にいたのだが、ぼくが帰るまではと、坐っていたにちがいない。父は真四角に父らしい坐り方をしてぼくを眼で迎えた風だった。

それにしても、父の風貌はひどく変っていた。頭の毛も以前とちがう坊主刈りになってしまい、口髭も失くなっている。何よりも皮膚の色がわるく、頬がソゲ落ちていた。母はぼくの泣きじやくりを撫でて「さ、もういいの……。もうお父さんもお帰りになったし、みんなで仲よくさえ暮せばって、今もお父さんと話しあっていたところなのよ。ね、英ちゃんもその気になってよ」と、繰り返して云い「夜業だったの、お腹が減ったでしょ」と、父の

そばへ行つて、寝衣になるのを手伝い、父が横になると、台所へ立つて行つた。

ぼくは、自分の顔が乾くと、やや落着いて、父の寝顔を見ることができた。父は暗い方へ横向きに寝た。枕元から額ごしに見ると、父の顔の痩せが、ランプの下になお濃い陰影をもつて見えた。何か、息ぐるしいまで、自分で自分を拘束しているぼく自身の気もちを放つために、ぼくも母のあとを追つてすぐ台所へ行つてしまった。そして、母がそわそわ膳支度をしているのに、それを待ちきれないでそこらのお菜を見つけ次第ツマんで喰べた。

## 父帰る

父は変り果てた姿で、そして留守のまに、もっと変り果てていた妻子の小さな借家住居へ、その晩、半年ぶりで帰って来たものの、当座、こうどこことなく以前の父とは、ひどく人が違つてしまつたように思われてならなかつた。

おそらく刑務所での囚人生活が、長年、大酒と遊蕩に馴れていた父には、人いちばい、こたえたものであつたらう。体もすつかりこわしていたらしく、また当然、精神的には大きな打撃だつたにも違いない。——何しても、当分は、寢床の中に横たわつたき

りであつた。急に渴いた口腹へ欲しい物を与えてもよくないとかで、朝夕の食事も粥かゆをつづけ、まるで大病人みたいに、そつと、母の手の丹精だけに、いたわられている人であつた。

しかし、社会から制裁をうけた敗北者の父でも、無職で半病人のような父であっても、父が家に在るといふことは、ぼくら子供の眼には、大きな力であり、光であつた。その日からぼくらの小さい家は、櫓楫ろかじのない波間の小舟ではない気がした。

ぼくは依然、南仲舎の工場へ通いつづけ、夜帰ると父の枕元へ、かしこ畏まつて「ただ今」の礼儀をした。よく眠っているのでなければ、父も必ず起き直つて「お帰り」と、云つてくれた。また、どうかすると「毎日、くたびれるだらうなあ」と、いたわつてくれたり

した。こんな父を、子供のぼくは初めて知った。

からだの弱まったせいだろうか。父のこの頃は、いやに物優しく変つて来ている。その代り以前のような豪放な冗談口も聞かれなかった。昏々こんこんと眠っているか、読書三昧かであつた。枕元の書物には、易経と心理学に関する物が多かつたように思う。どういう動機から父が易学えきがくなどに俄にわかに興味を持ち出したのかはよく分らない。

母と父との間にも、前には見られなかつた新たな交情が生れていた。枯れかかつた夫婦の木が、逆境という季節ちがいの風に会つて、かえつて、返り花を見せたようなものだった。父の帰宅後は何かと雑費もふえ、母の貧乏家計の切り盛りは一そう火の車だ

つたのに、母はその苦しさを一切父には感づかせまいと努めぬいた。そして貧しいレース編みの巾着から無け無しの小銭を割さいても、父の養生の為には、鶏肉を求めて来たり、刺身も白身の魚をさがして、いわゆる病人料理の丹精を朝夕の膳にこめて供えた。父もそれくらいな事は、察し取れていたのであろう。或る折、膳を前にして、心からのように「ありがとう」と、母に小声で云いながら箸を取る姿をぼくは見た事がある。没落し初めてから以後十数年もの間、父が母へむかつて、有難うと云ったのは、この時と、父が死ぬ二日前の一言と、そう二度ぐらいなものしか、ぼくは知っていない。

口には出さないでも、父は、とにかく母にたいしては「すまない、すまない」と、その頃は、心で詫びている人のように見えた。特に帰宅当座の父は、子のぼくらにまで、何か気がねしている風で、いじらしくさえ思われた。

文士劇でよく演<sup>や</sup>る菊池寛氏の「父帰る」の舞台を見ると、ぼくはあの劇中の父親を、自分の父の姿に擬して、当時のわが家をつも思い出すのである。ぼくの父は何も、あれほどまで、わが家の灯を恐れ憚りはしなかったし、また、あんなに自己の弱さを肉親へ露呈する気のいい性格でもなかったが、しかしどこかあの芝居に見られる男親心理と、その自責感と、自己反省に悶々とする姿は、ぼくの父とも、多分に共通するものが観える。



もつとも、近頃の刑務所入りなどは、一こう当人も平氣だし、政治家ですら自ら吹聴するくらいなものだが、明治の世間における監獄という語感とは全然ちがう白眼視ときびしさをもっていた。幾月にすぎない禁錮にせよ、獄衣を着たという事は、悪徒の社会はべつとして、通常では社会的致命となった。それも世人のひんしゆく輦蹙するなどという程度の制裁ではない。実際の戸籍面にも印されて一生汚れがついたものだった。これを、子供心にもぼくは知っていたのであろうか。以後、職を求めに行ったばあい、先方から戸籍謄本を差出せといわれると、ぼくは、父のたつた一度の汚歴だが、まずその事が恥じられて我からひる怯んでしまうのだ。せつかく採用通知をうけながら、その為、行かず仕舞いに

してしまつた事も一、二度あつた。

けれどその後、何かの必要でほんとに戸籍謄本を取つて母から見せてもらつた時つぶさに見たが、父の欄にもどこにも、べつだん何も書いてはなかつた。だから徒いたらな杞憂すに過ぎなかつたわけであるが、しかし父自身も出所当座は、沢山な子の将来にかけて、そんな心配も快おう々おうと胸に抱いたことであつたらうと思われる。

いやそれにも増して、当面の父が何より懊悩したのは「世間に顔が出せない」と自ら心を閉じてしまう廉恥ではなかつたらうか。一面には明治士族のコチコチな頑固な道義観念から脱けきれない、半面にはまた、開港地の紳商間に一度顔を売つたりした派手派手しい生活の見得なども残して、世間の思わく以上に、自

身、世間から遠のいてゆく風がだんだん父の日常に見え出していた。

父は病床を払うと、或る日とつぜん、易の看板を掛けるのだから、建具屋かどこかで手頃な板を買って来いと、母へ云い出した。

母にもまだ気のせまい世間の見得があつたのか、あるいは、自分自身が明日の暮しも分らないどん底にいるくせに、人の身の上を観て上げるなんて空怖ろしい事だとも考えたのか、そうまでなさらなくても、数日は父の云い出しを何のかのと止めている風だった。

ところが或る夕、ぼくが活版所から帰ってみると、家の門口に

その看板がかかっていた。どうにも変な気がしてならなかった。父はと見ると、もう一週間ほど前に床を払った一室に机をかまえて、算木さんぎ筮ぜい竹ちくをおき、易書などをわきに積んで、その晩も頻りに漢書を読み耽っていた。隣りの部屋で、母にお給仕してもらいながら晩飯を食べつつそつと「易のお客さんあるの」と、ぼくが小声で母に訊くと、母は笑ってただ顔を横に振って見せた。

父はやつと健康をとりもどしたらしい容子に見えたが、同時にこの頃からまた、ふと酒を飲み初めるようになった。家に帰った当座の父は「煙草だけはどうも廃やめられないが、酒だけは、これがいい機会だから、こんりんざい、もう廃める」と断言して、母を感激させ、母はうれし涙をながさぬばかり、その事をぼくらに

まで何度も告げてよろこんでいたが、それが結局、つかの間だつたわけである。「おい、もう二合ばかり買いにやれ」とか「おい、もう一本つけろ」とかいう、ありきたりな大酒癖の常套語が、毎晩の貧しいランプの灯が、気のひけるほど石油を吸うのと同じように、夜毎、母の財布に血を絞る思いをさせた。それでも「はい」と云う返辞しか知らないような母は、勝手の小暗い隅にたたずんで、明日の米代としてゐる小銭を悲しげに数えた。そして小銭と酒瓶とを持たせられて、ぼくは毎度、夜更けてからも使に行つた。晩秋の薄ら寒い風の中を、酒は手に抱いて帰りながら、焼芋屋のあたたかそうな煙は空しく横目に見て、そして家に帰れば、母は手内職の夜なべをしてゐるし、ぼくも小さい弟妹た

ちも空き腹でいるのに、父ばかりが飽くなき独酌をつづけてい、しかも何か鬱々と不機嫌を内に溜めている姿を見ると、子供心にも、父の矛盾と非情に、堪らない不平を掻き立てられた。こうして父へのあきらかな反抗心を知ったのは、父が再び酒を飲み初めて、母の苦しみを加速度にして行った頃からのことであつた。

売る物も質物も全く喰べ尽していた有様なので、当然、父が酒を飲み出してからは、母は冬へ向つて着る物までも剥はいでしまつた。家賃、酒屋、米屋はいうまでもなく、近所の店屋には何軒も小さい借金が溜つてしまい、嘘のようだが、工場へ行くぼくの弁当箱に母が御飯を入れてくれる事の出来ない朝もあつたりした。

そんなとき、もちろん母も朝飯は喰べていない。それでも働きに出るぼくには二銭銅貨一枚を詫びるように握らせて出してくれ。ぼくは途中で焼芋を買い、半分は途々喰べ、半分は昼飯時の為に残しておいた。ほかの仲間の手まえ、何も喰べずにうろついているのは、空腹を我慢している事よりもその時間が辛かった。

日が暮れて、家路につき、案じていた家の内に、ランプの灯がついていると、ふしぎな気がした。朝出るときは、母の帯の間に数枚の銅貨しか見えなかったのに、どうして今夜の石油が買えたのか、小さい弟妹たちが、何を喰べて生きていられたらうかと思われるからであった。——が、そんな晩にでも、父の面には酒気おもてが見えた。ぼくは不逞な気もちを内につつまみながら「ただ今」と

いう形だけを父の前にした。父から何か話しかけられても、ぼくは素直でなくなっていた。稀 《たまたま》、それが父の気もちにさわったらしく「何だ、その大<sup>おおづら</sup>面は。わずかばかりの給料を取って、働くのを鼻にかけるのか。人間、働くのは当りまえだ。働くのが嫌なら、やめちまえっ」と、恐ろしいけんまくで、呶鳴られたことなどある。

窮乏に追いつめられた母は、冬の初め頃、ついに長女の、きのこという十二歳を、よそへ奉公に出すことにきめた。きのの奉公先は横浜公園近くの西洋料理店で、奥の子守さんという事であった。同時に桂<sup>けいあん</sup>庵にすすめられ、次女の力エも、まだ九歳でしかなかったが、伊勢佐木町通りの吉野屋というお汁粉屋の小女に出して



しまった。あとは乳のみ児と、四つの浜子と、小学校へ入ったばかりの素助だけなので、もうこれ以上は喰べる口の減らしようも無かった。

二人の子の奉公先から、母はそのさい、給金の前借でもしたのであろうか。何とか幼児の冬支度などしてはいた。けれど家賃の停滞までは皆済ましきれず、家は追いつて喰い、同じ西戸部の手狭な家へ移った。

そこは戸部坂の細民街を西へ遠く入った丘陵の新開地で、近所もまばらだし人通りも少なかった。だから易断の看板などに寄り附く客は無かったが、それでも父は、おれも働いてはいるのだという云いわけのように、机を構えて坐っていた。そして何かで、

母の財布に少しのゆとりでもあると、朝からでも酒を欲しがった。それも出所当時は、久しい断酒で、すぐ酔いの廻る風であつたが、だんだん以前のような底抜けの酒量を發揮し出し、終日、飯茶碗は手にもせず、酒に初まつて酒中に寝仆れる日もままであつた。

こうなると、酒狂も以前の父に返つて来た。些細なことばの端も、父の酒気と虫の居所に触れると忽ちそれが、母を終日泣かしめるたねになつた。家が広がったり、客の出入りや雇人もいた頃は、まだ父の酒狂にも、制約があつたが、狭い借家では、母の逃げ交わす所もないし、父自身、俵を飛ばして茶屋遊びに出してしまう事もないので、悲劇が起きると、相互の感情が自然に疲れ切つてしまうまで、まくあ幕間い無しの悲劇になつた。

酒狂の父は、どうかすると、真夜半ごろ、とつぜん蒲団の上  
起直つて、深い腕ぐみしていたり、天井へ向つて独り言を吐く。  
そんなことがよくあつた。そして貧苦と添乳そえちに疲れきつて、くた  
くたに寝入っている母を「おい、おい」と、無理に呼び起し  
「おれだつてな、この儘では終りはせんぞ。いいか、意地でも  
う一旗上げてみせるつもりだ。貴さまあ、昼間おれにむかつて、  
何とか、口ごたえしたが、そうこのおれを馬鹿にするなよ、この  
俺を」と、云い出したりするのである。

父のそうしたひがみと、憎てい口は、自身の酒量が増してゆく  
比例に連れて、つのつて行つた。往々、子のぼくにさえ「馬鹿に  
するな」と怒つたり、「稼ぎを鼻にかける奴だ」と、忌み嫌う容

子を見せた。ぼくには実際のところ、そういうふて腐れを父には露骨に見せたことが無いとはいえない。けれど母はそんな気持ちの人ではない所か、貧しくなればなるほど、この良人も子供も捨てて自分だけの生きる途などは考えもしない人であった。父がそんな嫌味を云って母を泣きもだえさせたり、無茶な暴言の限りを浴びせて、酒気ふんぶん芬々としているのを見ると、ぼくは自分も狂気しそうになり、幾たびか父を撲りかけたくなつた。酒の上の心理状態などは子供のぼくに理解はできなかつた。酒狂の父そのままを、父の人間と考えつめ、母と共に部屋の隅ツこで慟哭した。いくたびか、ぼくはぼくだけで、よそへ出て生きる途を探しますと叫んで、台所から裏まで、飛び出したこともあるが、母に追いつ

がられて「英ちゃん、おまえが居なくなったら、このお母さんは、どうしたらいいの」と云われると、ぼくは一步も動けなくなつてしまつた。それでも父へは、ややもすると、母に代つて、つい突ツかかりたくなつた。そしては母に泣かれて又、台所で足を拭き、家の中へ戻つて、心にもなく父の前に謝つた。そんな例は、前後何べんあつたであらうか。今、思い出そうとしても思い出せないほど度々だつた。

何でもそれは年暮に迫つていた頃だつた。南仲舎から帰つて来ると、まだランプの明りもともっていない。しゅんと、凍いてついたように家の内がひっそりしていた。小島の小母さんの声がひそ

ひそ聞え、四つの浜子がシクシク泣いている。「どうしたの、どうしたの、おっ母さん」上がるやいなや、あわてて訊くと、

「お父さんが血を吐いたのよ。そして今、お医者さんが帰ったばかりだけれど、そう御心配は無いでしようと言ふ事だから……」  
と、母はあとの口を濁した。血と聞いて、ぼくは、どきつとした。日頃何かにつけて父へタテついていた心の咎とがめが、驚きと一しよに頭をつき抜けた。すぐ父の死を連想していたのかもしれない。

けれど母が小島の小母さんに話しているのを聞いていると、父の吐血は初めてではなく、これが三度めか四度めのようにであった。そのうち二回までは父の遊蕩時代で、大森の「あけぼの」とか箱根の塔の沢などで寝込んだらしく、母はそばにも居なかつたとの

事である。後日、医者から母が戒告されて知ったのであったという。

今思えば、父は外人相手の商売上、盛んに各地の花柳界などを泳ぎ廻っている間に、すでに胃潰瘍の症状をもっていたもののようである。しかし、こんどの吐血を境として、父はふツつり酒を廃めた。というよりも飲む氣力を失い、その日から再び病床についてしまったのだ。

猫のような父にまた変った。けれど、ひがみと、母への暴君ぶりだけは、依然、やんだ風は見えない。ひがみの根本は、じつは母にあるのでなく、どうも世間へ対しての、父の白眼にあったらしく思われる。小心なほど、父は出所以来、世間をおそれ、かつ

妙に世間をすねていた。あれからというもの、自分から以前の知人を訪ねたことは唯の一ぺんもないばかりでなく、旧知の者が立ち寄ってくれても、会うことはひどく嫌って、母にすぐ間の障子を閉めさせた。「ずっと病気で臥ふせっておりますから」と母に云わせ、上がり口で帰してしまふという風であつた。

そのくせ「もういちど、俺は俺の事業をやってみせる」とか、「もう一旗あげなければ死にきれない」とかと、というような野心はよく口癖に洩らすのであつた。ことばの裏には父が勝手に悩みの対象と見ている世間があり、特に訴訟相手の高瀬理三郎氏には、終世の怨恨を抱いていたらしく思われる。ぼくら肉親にはありあり分る。



けれど母の方は、こうまで、貧乏の底に落ちても、それを高瀬氏のせいであるなどと怨みがましい事を洩らした例しは一度もない。かえって、父が余りに高瀬氏の人格を悪しざまに恨み罵つたのしりすると、「でも、あなたのように、腕力であんな真似をなされば、高瀬さんでなくても、誰だって腹を立てますよ。高瀬さんには御恩こそうけた事があつても、恨む筋などは無いじゃありませんか」と、弁護めいた口吻こうぶんを吐いた事もある。

かつとしたのであろう。父は起ち上がるやいなや、母を打ちのめした。足蹴にもした。子供らの眼には永遠に拭き去れない不幸な血相を父は額の青筋にも全身にも描いて見せ、あげくには自分も打ち疲れてセイセイ云いながら仆れてしまった。子供らは、息

の音も止まったような母の手を両方から引つ張つて台所へ逃げてゆき、泣く泣く冷めたい水を柄杓ひしやくに汲んで血によごれている母の唇へ持つて行つた。

要するに、父は世間へ向けられない鬱憤を、母へ向けているよ  
うなものだつた。という解釈などは、まだつかないぼくであつた  
から、なぜ父は母をこんなにいじめるのか、母はなぜこんな父の  
そばに居たがるのか、そこが唯、わけも分らず悲しかつた。肉親  
という不思議なきずなは、こんな地獄図を描きながらも、或る日  
はまたふと、薄い夜具を冬の夜に引つ張りあいながら、肌と肌を  
からんで、木枯らしの叫びを遠くに、ここの一軒のみが、無上の  
住み家であるような安けさを暖め合いもするのであつた。そして

ぼくは、どうにも、この母のそばを離れる気にはなれなかった。もし家に父だけしか居ないのであつたら、たとえ父が後でどんなになろうと、いつでも遠くへ飛び去る小鳥になれたことだろう。その不逞さを、母へは抱けないばかりか、母と一しよなら何でも出来た。母のよろこぶ一笑を買うために、どんな事もやる気になり、それには小さい生きがいみたいなものをすら密かに感じて独り慰めることもできた。

岩亀横町から花咲橋を渡つて、高島町の方へ出た河岸かしぶちに、大きな立て看板が何屋か分らない店頭に立ててあつた。『小間物ぎようしよう行 商人ヲ募ル。商品貸与。毎日純利一円以上、働キ次第』と

というような意味のわき文句が書いてあった。

ぼくは毎朝、南仲舎への行き帰りに、それを見ていた。そして、ついに或る折、恐々店へ入って「ぼくに出来るでしょうか」と、訊いてみた。番頭か主人か、思いのほか、親切だった。商品から行商道具一式を貸してあげるので、十五円の保証金が規則だが、君なら特別に十円で貸してあげる。売上げと商品を見くらべて、毎日夕方に精算する。いままで、どこに通っていたかと訊ねるので、有りの儘、南仲舎で日給十四銭をうけていると答えると、そんな程度なら、ぜひこっちの行商をおやりなさい、どんな不馴れでも午前中の売上げで、より以上の利益はきつと得られる。雨の日も厭いとわなければ、雨天の日などは、かえって商いのあるものだ

と、さかんに奨められた。ぼくは神の救いに会ったような気になり、さつそく母へ話して、何とか保証金をこしらえてくれと頼んだ。

母は当惑顔だった。そんな金がいま工面のつくどころではない。いろいろ、思案のあげく、小島さんの小母さんへ母と共に融通を頼みに行ってみるようになった。

その小島さんは、近くの官舎に住んでいた。税務監督局の課長さんであった。夫婦二人きりの家庭で、母とは針仕事の内職から知り合ったものらしい。常々、女の愚痴ばなしやら境遇などを語りあっていたものだろう。ひどく母に同情していた。ぼくの家へも暇があるとよく喋りに来、父の病床を覗いては、冗談を云って、

人嫌いな父を笑わせたりして帰るのであった。他県から転任して来たばかりのせいか、人馴つこい奥さんだった。いや官吏の奥さんめいた気取りがちツともなく、からつとした陽気な婦人なのである。色が黒く、痩せ型で、三十がらみであったと思うが、決して美人の方ではない。故郷の静岡県吉原の田舎ことばまる出しで、その訛なまりと唇元に愛嬌があり、ぼくらが腫はれ物あつかいにしている父も、この小母さんにかかると、どんなに毒づかれても、腹を立てないのが、ふしぎであった。別人のようになって、父も冗談を云い出したりして、いつも腹を抱えて笑わせる小母さんだった。

御主人の小島市太郎氏は、小母さんとは全然対たいしよ蹠しよ的な純官員さんであった。だから小母さんは、母とぼくからの頼みを聞くと

「そんな事は、主人に相談してみても、世間知らずで、話し相手にはならないから、わたし一存で貸して上げるわ」と、翌日さつそく、郵便局から貯金を下げて貸してくれた。忘れ難い恩であった。そう強く感じたせいか、その日、小母さんが「さ、英ちゃん、しつかりやるんだよ、ベソなんか搔いているんじゃないの」と叱るように云つて、ぼくら親子の前に十円紙幣を出してくれた時の、そのフシの高い手の指、その指の一つに嵌<sup>は</sup>めていた肉彫りの金指環の菊模様までが、今でもぼくの眼の底に残っている。

母と一しよに、さつそく高島町へ出かけ、明日からの約束をして帰り、保証金の受取書は、小島の小母さんの手へ預けに行つた。小母さんはその事のみならず、ぼくの身仕度まで心配し、家を一

しよに出て、岩亀横町の露店を見て歩いた。そして編上げの古靴と学生服の古とを、ぼくの門出のために買ってくれた。

云い忘れたが年を越していたのである。正月の七草すぎか、月の半ば頃だったように思う。早朝にぼくはもう高島町へ来て、売子問屋の店に腰かけていた。余りに早くに來過ぎたせいか、奥ではまだ朝飯中のようにであった。

体験を持たない仕事へ<sup>ふ</sup>践み出す恐さと、さまざまな空想とで、その間じゆう胸がどきどきしていた。やがて奥から五、六人の元気のいい人達が出て来たと思うと、ぼくの姿などには眼もくれず、各 足掬えを急いで、小間物の行商箱を背に負い、さっさと一人



ずつ出て行つた。ここに寄宿して行商している売子も多いことを初めて知つた。

その間には外からも来て、前日預けて歸つた行商箱を背負いこみ、そして前の人々のように出て行く売子たちもあつた。その誰もが皆、屈強な大人であつた。ぼくのような年少者はひとりもない。それがやや不安になつた。

結局、ぼくはあと廻しになり、一番さいごまで待たされたわけである。やっと、店の主人が、ぼくの担いで出る荷をそこへ並べて見せた。

行商箱は、太い真田紐さなだひもを両肩に掛けて、ちようど笈おいずるみたいな恰好に出来ている。上段の幾重かは、印籠いんろうぶたの段箱に作

られ、その下は幾重にも、薄い抽斗ひきだしとなつてゐる。問屋の主人は、その抽斗の一かわ一かわに、商品をつめこみ、その品目と原価を書いた行商手帖とを、ぼくに手渡した。そして夕刻、売つただけの品物を精算して、利益金を渡し、あとを補充してまた明日担いで出るといふ仕組みである。

商品の主な物は、石鹼類、髪油、チツク、安香水、生地の櫛、塗り櫛、白粉、口紅、化粧水、鬢びんツケ、中挿し、鬚形まげ、入れ毛と、数知れぬほど種類があり、その上に少女向きの花はな簪かんざしから、ザンザラ、根がけ、ちんころ、の類まで備え、抽斗全部を開けて並べれば、小間物屋の縮小がすぐ覗けるという配合と種別が上手に仕組んである。「ともかく歩いてごらん。断わられても、すぐ引

っ込んでしまうようじや商売にはならないよ。商売は、押しと愛嬌だと思いなさい。小間物は女相手だから、女の気もちをつかまえる事だが、それやあまだ、君には難しいだろうからね。孤児院の子が、よく売るだろう、あれだと思つて、負けずにやるこつたね。なあに、そう重い物じやあない。そつちを向いてごらん、背負わせて上げるから」と、主人は手初めに、背負い方を教えてくれた。重い物ではないと云つたが、立つてみると、ずっしり肩が痛い。同時に、何か泣きたいような辛さが胸にこみ上げていた。ぼくは、どう答えて往来へ出たろうか。道を行く人の全部がみな自分を見る見物人のように思えた。どこへ行くあてもない。自分の脚でないものが自分を支えて歩かせているような気もちだった。

いわば夢中であつたのだろう。そのくせ軒並みの家や人の多い所は無意識に早足で通つてしまい、場末の淋しい方へとばかり自然に足が向いてしまうのだった。

## 白い行商手帖

ぎようしよう  
行 商 流行期ともいえる時代が、かつては世間にあつたようである。

今のような百貨店配達や小売店網がまだゆきわたらなかつた過

渡期には、背負い呉服やら、唐物とうぶつ、薬種、雑貨荒物、文房具、煮豆の類まで、多くは行商人たちの足が各戸の需要にこたえていた。だから、ぼくのやった小間物行商なども、今考えると頗る間すこぶの抜けた商売に思われるが、当時では、おかしくもなく、また結構、大の男の職業にもなっていたにちがいない。

けれど、ぼくにはさっぱり商売にならなかつた。いくら勇を鼓こしてもだめだつた。見ず知らずの家の垣を、のこのこ内へ這入つて行くことも、締まっっている静かな格子戸を明けて「……小間物屋ですが、何か、要いりませんか」とは、とても、口に出ないのであつた。それが何とか出来るまでには、半月もかかつていたろう。突ツけんどんに「要らないよ」と断わられるたび、顔を赤くした

ままた四、五軒は飛ばして、眼もくらくら歩いてしまった。また時<sup>と</sup>きたま<sup>きたま</sup>稀、「どんな物を持つてるの」とその主婦に訊かれても、唯どぎまぎばかりして、さつそく荷を並べて勧める如<sup>じよさい</sup>才も出ないでいるまに、「じゃあ、今度にするわ」と断わられてしまうなどと、とても一カ月や二カ月では、遅しいあの行商人だましいには成りきれなかった。

行商をやってみて、何よりもいけないと自分でも分った点は、どうしてもケチなはにかみが除<sup>と</sup>れない事であつた。少年には少年だけの知るつよい見得がある。その幼稚な虚栄と感傷は、周囲の世間が清潔で秩序立っている中ではなおさら処女のようなうだった。

つねに自分のみすばらしさを世間の表面と見くらべている。いや  
ぼくが特別、小心だったのかもしれない。

だから行商して歩くにも、市街に接した住宅地はよけて歩いた。  
以前の学校友達だの、父母の知人に出会うのが恐かったからであ  
る。いま思うとその頃は横浜も場末だった平沼、保土ヶ谷、神奈  
川附近などの遠くへまでわざわざ行つた。そしてまばらな家の門  
や垣を覗いては恐々と声をかけてみる程度しか出来なかつた。

これではいつまでも、売上げ成績が良くならないのも当然だつ  
た。どうかして二、三円の売上げ日などは奇蹟のようなものであ  
る。夕方、売子溜りの問屋へ帰ると、行商手帖と品物とを精算し  
て二割の利益をくれるわけだ。だから三円売れば六十銭になる。

前にいた南仲通りの日給の十四銭にくらべれば先ずたいへんな増収だ。けれど、こんな日は月に一度あるか無いかだった。霜解け道を一日じゆう歩き暮らして、三、四十銭しか売れない日の方がはるかに多かつた。

それと問屋の話では「女相手の行商だから、雨の日などは、かえって売れる」と聞かされていたが、これもあてにならない事が分つた。売子用の貸合羽かしがっぱを日に何銭かで借り、風雨の日も精励したが、膝まで没しそうな新開地のぬかるみを暗くなるまで歩いても、売上げの額はみなおなじだった。のみならず夕方の精算で品汚れを検出され、ただ働きの憂き目を見たりする日もあつた。どうにも、こうにも、労多くして利少なく、ベソを搔き搔き帰る



夜ばかりが幾月もつづいた。わが家のランプの灯を見るのは毎晩七時すぎになった。くたくたに疲れはて、一、二冊の書物を寢床にもちこんで読むのが唯一の愉しみだったが、それもランプの石油が憐れな啼き声を告げて消えてしまふとそれきりだった。ぼくの十五歳の冬の記憶は、飢えと、はにかみしか残っていない。正月の記憶もなく、とかくして半年ほどは夢中で過ぎていたのだろう。

唯ここで忽然と思い出してみる必要にせまられた事は、日露戦争の記憶である。ぼくの十五の年は、明治三十九年だから、その前年九月には、休戦調印が結ばれ、十月には日露講和条約となっていたわけである。そして、同月には、横浜港外で凱旋観艦式が

行われたとあるから、全市は国旗や凱旋門に飾られ、夜空は提灯行列で真っ赤に染まり、市民の熱狂ぶりは大変な騒ぎだったものだろうと思われる。

ところが、世間のそんな歡呼と戦捷せんしょう風景も、ぼくにはとんと確とした記憶にない。あの長蛇ちようだの提灯行列が流れてゆく熱烈な群衆の顔や打振る紙旗の波などは、幻影のように思い浮かぶが、その中に立ち交じったり、それを見物に行ったりした特殊な実感はないのである。

それ以前の奉天会戦とか、旅順陥落とかもぼくは川村印章店に奉公中の身であった。当時の号外屋が、祭礼の若衆姿みたいな向う鉢巻で、腰のまわりに沢山な鈴を下げ、まるで半狂乱になって

戦捷を呶鳴りつつ駈ける姿を、ぼくは店の障子戸越しに、見た程度であつた。花火の爆音が一日中聞えていても、港が灯と万歳に沸き返っている晩でも、じつと徒弟机に屈かがまつて、家の事やら母の顔などしか頭になかつたものだろう。

ただ開戦当初には、町内町内の楽隊と一しよに、戦死者の葬送について行つたり、出征者の見送りに交じつた覚えなどが幾らかある。そのほかは当時の軍国調にも個々の悲喜にも判はつきりした影響は殆ど何も感じていない。いやそう云つては、同年代の人々とぼくの経歴感が余りにも食い違うかもわからない。ぼくの場合には境遇に依るものだ。ぼくの通つた、明治三十七、八年という歴史上でも重大な年は、ぼくに取つてのみ特異な境遇ではあつた。

だから世間の日の丸も花火も楽隊も、この少年の頭には、沁み入る余地がなかったものと思われる。——家の没落、義兄の失踪、父の入獄、職さがし、妹たちの離散、父の吐血、母の明け暮れない貧乏苦勞、など、そんな周囲ばかりを、ここ二年、ぼくは眼にして来たのである。少年期の幼い国家観念しかなかったせいでもあろうが、日本の浮沈よりも、毎日毎日のわが家の浮沈と、貧乏との戦争の方が、ぼくの心を占めていたのも是非なかった。「どうしたら食べてゆけるか」を母と一しよに闘っている気持ちだったから、日本の憂いと共に憂い、日本の歡びと共に歡ぶなんて、大きな呼吸を持つひまもなかったのである。そうとでも思惟しいてみるほか、その面の記憶の稀薄をぼくに糊塗するすべがない。

資本を貸してくれた小島の小母さんには間が悪いが、ぼくは行商を廃めたくなつた。厭に成りだすと歩くのがなお辛かつた。行く先々では、優しい主婦もいたり、励ましてくれる人もあつたりするが、冷めたい声で追ッ払われるのが当然な世間であつた。それも大人達にあしらわれるのは、まだ我慢もできたが、同年輩ぐらいな子供にからかわれたり、行きずりの中学生の群れに何か嘲われた気がすると、その場で行商の荷を川へでも捨ててしまいたくなつた。

けれど父はあの儘、病床についたきりだし、母の苦労はちつとも減つていなかつた。のみならず、或る晩、家へ帰つてみると、

三ツぐらいな見たこともないよその女の児が、ぴいぴい泣きながら母に抱かれてサジでお雑炊ぞうすいか何かを食べさせられていた。

この児はまだ坐れないらしく、手頸も足もひどく痩せ細っている。まるで肋骨ろつこつの上に細い首が乗ッかっているような畸形きけいだった。泣き顔には小皺が寄つて、小さなお婆さんの顔みたいである。「……どこの子？ お母さん」ぼくが訊いても、母も病床の父も、共に唯、暗然としているだけだ。

その晩、あとで母から聞いた話によると、これは出奔した義兄政広の子であつた。まだ家が以前の清水町にいた頃、恋愛結婚をした義兄と愛人のお八重というひとが、ぼくらと一つにいたことがある。その後、半年そこそこでお八重は実家へ帰つてしまひ、

義兄も出奔してしまった事は、先に書いた通りである。

だからこの問題は、当然、とうに解消されていたはずだった。ところが、お八重が実家へ帰ってから産んだ義兄との仲の子は、月足らずでもあったのか、或いはひかんといい虚弱体質か、三ツになっても、坐れない、歩けない、発音も満足でないという畸形児だった。

お八重の親は、名うてな相場師で、義兄との結婚前にも、さんざん、ぼくの父を物質的にも精神的にもいためた程な男である。こんな畸形児を、可愛がって養っておくはずはない。それに娘の再縁にも邪魔になる。そこで当然、「この子は、相違なく、貴殿の子息の実子であるから、引取って貰いたい」と、再三書面

や仲介人を向けて、談じ込んで来ていたらしい。

けれど、わが子の口数まで減らしている窮乏のどん底へ持つて来て、どうして、そんな虚弱な子を引取れよう。何しろ父は病人で懸合いにも立てないので、母一人でただ謝りつづけていた。ところがその日、山田の使いと称する者が、人力車に乗って訪れ、上がり口へ子供を捨てるようにして、さっさと帰ってしまったというのである。

母はまったく途方に暮れた。自分の乳呑み児もある上に、こなひよわい畸形の子を又抱えては、明日からの手内職の仕事も台所仕事もろくに出来はしないであろう。それも、実子の孫とでもいうのなら、これ又、諦めもつこうが、母にとっては、義理の子



の、しかも、ちよつと居ただけの嫁さんとの仲に出来た置き去り子に過ぎないのである。

その晩も、夜どおし、ぴいぴい泣くのをあやしたり、しもの始末などで騒いだが、以後の養育は、並たいていな世話ではなかつた。ここに詳述出来ないほど、尾籠びろうな手数がかかり、食餌の苦労やら、日に何度もの着換えの洗濯やら、言語に絶する厄介さと、飢餓の絵その儘なわが屋根の下だった。

言語に絶するなどは、ちと誇張めいた云い方のようだが、何しろその子は、狸のように腹ばかり大きく出ていて、いくら食べさせてもすぐ食べたがり、朝から晩まで、お婆さんのような泣き皺

を作つて、食物ばかり欲しがるのだった。こういう特異児の持ちまえて、肛門筋が無知覚にひとしく、その世話だけにも、母は追われ通しの姿であつた。

しかし、貧乏と、これだけの事だったら、まだまだ母は働き効いもあつたらう。が、義兄の置き去り子が来てから、更に悲惨を加えたのは、病人の父が、時々、我慢がならないように起き上がつて、その子を折檻せつかんする時の、何ともいえない悲鳴と家じゅうの暗さだった。

畸形の子は、手離しでは置けないので、藁わらで編んだお飯櫃ひつ入れの中に入れて、食事も口へ入れてやるのであつた。機嫌のいい日は滅多になく、のべつ、おひつの中でシुकシुक食物を泣きせ

がんでいる。父にはそのシクシクが昼夜なき呵責に聞えるのではあるまいか。

父にすれば、この数奇な孫は、自分の過去を責める獄卒か因果の変形みたいに思われた事でもあろう。——実父の自分を裏切った上、こんな置き土産まで残して行つた、ぼくの義兄政広の出奔という事が、どんなに病床の父を、やりばない怒りに悶えさせたことか。その気持ちは、母やぼくにも、分らないではなかつた。

父自身も又、そんな憐れな宿命の子を、叱つたり打つたりなどした後は、さめざめと、自分が嫌厭される容子だった。慚愧ざんきにたえない姿をして、枕に額を押しあてた儘、息ぎれのやむまで、俯伏していた。そして、吐血後の胃潰瘍の症状は、この前後から、

また目立って悪くなつた。ただの病色だけでなく、父の顔には、極度な神経衰弱だろうか、狂相に似たものがあつた。

ぼくは、その頃のわが家と、毎日の事を、今、思い出そうと努めているが、誇張でなく、また肉親だからでもなく、ぼくは心から、ぼくの母を偉かつたと思わずにいられない。母は、その畸形な子へも、ぼくらにする愛情と少しも変らない慈愛の姿で、哺育の肌やら丹精の手を尽していた。時には、ぼく達がひがまれる程、可愛がつた。父が癩癩を起すと、いつも身を以つてその子を庇<sup>かば</sup>うのは母であつた。

正直、ぼくらにしてさえ、義兄の無責任を、その子へ問うように、つい厄介者としてたり、憎しみを向けたりした。けれどぼくの

母には、まったくそれが見えなかった。近所の人はみな、母のほんとの子だと信じていた。その子は、やがて数年後に病死したが、まだまだ貧乏の最中だったので、葬式もしてやれなかった。

たしか母が果物屋から求めて来た空箱をひつぎ柩としたように覚えている。母は「女の子だからね……」と、その子の体じゅうをお湯で浄めてやったり、顔へも白粉や紅をつけてやった。そして果物箱の棺へ納めてやりながら「……あなたは、よほど運の悪い子ね、こんど生れてくる時は、いいお父さんとお母さんの仲に生まれて来るんですよ」と、云い聞かすような独り言を洩らしていた。

この子の葬式に行ったのは、ぼく一人であった。棺を風呂敷につつんで人力車の蹴込みに乗せ、施主会葬者、ぼく一人きりで菩

提寺の蓮光寺へ持って行つた。ずいぶん気まりが悪い気がしたので薄ッすら今でも記憶している。しかし蓮光寺では、むかしからの好誼を重んじてくれたものか、父の手紙一つだけで、べつだんお経料として上げなかつたのに、住職や侍僧が数名つらなつて、ながと読<sup>どきよう</sup>経してくれた。

さきに家出したぼくの義兄も、義兄自身が五十前後で亡くなるまで、この事は、ついに知らず仕舞いであつた。——やがて三十年も経つてから、たつた一ぺん、ぼくを訪ねて来た折も、忘れ果てていたのだろうか、「——あの時の、お八重は？」とは、訊きもせず、話にも出ず別れてしまった。

少し話がわきへ反れたかたちである。その後、ぼくは小間物行商を廃めたが、廃めるには、次のような事が動機と云えなくもない。

ほんとは、とうに厭だつたのだが、思いがけない義兄の子がふえたりした為、一日も遊んではいられず、毎日の行商も、泣き泣き続けていたのである。

だから成績は依然上がらない。或る晩、売子宿の店主からこう訊かれた。「いったい、君はどの方面を歩くんだい」「平沼から、保土ヶ谷や青木町なんかですが」「ばかだなあ。あんな新開地は、畑や山道が半分以上じゃないか。君の家は、前にいい暮しをしていたっていう事だが、少し、知ってる家を廻つてごらん」「……」

……」 「親父さんが懇意とか、お母さんの親しい家だつてあるだろう。そういう所から順ぐり歩いて、も少し、ちゃんとした住宅地を歩くこつたよ。犬に吠えられたり、女中に断わられたりしても、すぐ引つ込んでしまふんじや、いつまで、行商で飯は食えないぜ」 励ますつもりか、売子宿の店主は、ぼくを馬鹿扱いにして云つた。

知人の家を廻つて、買つて貰うなどという事なら、何も入れ智恵されるまではない。けれど「それだけはおよし……」と母からも云われていたし、ぼくにも小さな見得がある。意地という程、はつきりした気持ちではないが、廉恥があつた。——しかし、売子宿の店主から、そう云われると、何か安易な気もちもして、依



頼心をそそられ、行かないのは自分の馬鹿なせいかもしれないと思つた。又、沢山な売上げを得て、店主の前に、誇つてみたいよ  
うな気も手伝つた。

それから数日後、ぼくは方向を更えて、山手方面を歩いた。そして、歩くにまかせて、父の以前の知人をたずね、間の悪さを忍んで「この頃、小間物の行商をしてるんですが」と、顔を真つ赤にして云つてみた。ハー・アールレンス商会に勤めている三浦さんの家で、競馬石鹼一箱を買つてくれた。富樫夫人の家は留守だった。その日だったか、翌日だったか、おなじ山手の牛島坂に新邸を建てた古川某と標札の見える宏壮な門をくぐっていた。

この古川氏は、父が棧橋会社経営の初期には、波止場人夫の小

屋を持つて、振りの人夫売込みなどを業としていた人らしい。父は人を信じると一本ヤリな質たちなので、この人の人間にも惚れこんで、会社の専属に取立て、社の請負った棧橋の積込み、沖仕事、石炭の売込みといったような下請けの一切を、古川氏に委せていた。それが因もとで古川氏は成功を積み、牛島坂の高台に、横浜中を一望にできるような高樓と庭園を作つて、今では波止場仕事からも一切手を引き、余生を楽しんでいる風だつた。

ぼくの行商箱を拡げるには、そこは余りに似つかわしくない豪壮な玄関だつた。初め女中らしい人が、怪訝けげんな顔をして奥へひっこんで行つたが、やがて古川氏の奥さんが出て来て「あら、まあ、

吉川さんの息子さんなの……」と、びっくりしたように、頭からぼくを眺めた。ぼくはどう云つたろうか、どうせ満足な口はきけなかつたにちがいない。見ず知らずの家で冷やかされるのとまた違つて、耳が鳴り、口が渴き、この間の辛抱は何ともいえない。

体のずんぐり短い奥さんは、黙つて奥へ行つてしまった。どうするのか、ぼくにも分らず、むなしい、貧しい商品箱を並べた儘で、ぼかんといつまでも立っていた。

すると今度は、奥さんだけでなく、当の古川氏が、丹前の上に縮緬ちりめんの兵児帯をだらりと締めて、ふところ手で一しよに出て来た。お嬢さんたちだろうか、ぼくと同年齢ぐらいな振袖の女の子と、もつと年配できれいな人も、そろそろ来て、「どこの子？」

と囁いたり「まあ、ずいぶんいろんな物があるわね」と、商品の箱を覗いて、何かクスクス笑いあった。

古川氏は、足もとの商品などは見てもくれず「いつから初めたのかね」と、ぼくの姿ばかり見ていた。以前は、盆とか暮とかには、夫婦して眼を驚かすような贈り物を持って来、酒が強くて、父とも終日談笑していた事もある。殊に、何の祝いの時であったか「英ちゃんに、別誂えの洋服を頼んでおいたから」と、ぼくを俥に乗せ、南京町の支那人の裁縫師の店までわざわざ仮縫いに連れて行かれたことなどもある。そういう人だけに、ぼくはよけい間が悪かった。きれいな女性の眸も身を刺されるようで、唯、赤面していた。

古川氏は以前から灰色に近い皮膚をして、眼のふちも唇も薄黒かった。その上ぶよぶよと肥大した体つきであった。その大きな影に、ぼくは圧伏を感じていた。何か、後悔が頻りにわいていたが、古川氏は、小犬をつかまえて、からかっているような口調で「売れるかね」と訊いたり、又「一日、幾らになるんだい？」と云ったりして、一こう買物には手を出してくれないのだった。

のみならず、何かのことから、父の噂を持ち出して「君のお父っさんの病気は、自業自得だよ」と云い「いつたい、君の親父さんてえ人は、思い上がっていたな。自分はまあ、さんざツぱら、やりたい事をやったんだから、いいようなものの、子供にまでこんな真似までさせちやあ、寝ざめがよくあるまい」と、ぼくへも

お説教みたいな事を云い初めた。

ぼくへのお説教だけなら、なお素直に聞いていられたかもしれないが、古川氏は、腹をゆすぶって、ぼくの父を嘲い、父のざんそを、さんざんぼくへ云うのであつた。そばにいた奥さんさえ、ぼくの涙を見、聞きかねる顔して「もう、およしなさいッてば」と古川氏の袖を引くほど、ぼくの父を、悪しざまに云つた。

夢中でぼくは、商品箱を畳んでいた。みんなの眼のまえで、それをどう肩にかついだらうか。まったく今は覚えがない。でも古川氏の奥さんが、あわてて半紙にくるんだ物を、ぼくの手へ握らせたことは覚えている。きつと、なにがしかの金であつたらう。けれどそれも無意識に、どこかその辺へ打つ抛ちやつて来た。

——後も見ずに、まったく後も見ずというのは、あんな時の事かと思う。ぼくは門の外の石段を駈け下り、まだそれでも足りないように道をいそいでいた。やっと涙の乾いた顔を上げた時は、どこか知らない裏通りに灯がついていた。

## わが盗兇像

その日限りで、ぼくは行商人を廃めた。知人でもあり富豪でもある人の門に、耐え難いものを持ったのであった。同時に、見ず

知らずの他人の垣に立つて憐れみを乞うような真似もふるふる嫌になつてしまつたのであつた。

あきらかに、それは古川氏の邸宅へ行商に行つた日が境で、また廃めた動機でもあつた。けれどそのことは父母には話さなかつた。だから両親は急にぼくの容子が違つて来たのを理解出来なかつたことだろう。こんなばあい、嚴格すぎる男親の下にある少年は、心のものを率直に現わしえないで、それを妙なじぶくり顔や別な恰好に出して、幾日も無口になつたりするのであつた。病床の父は、単に懶惰らんだな子の不良性と見てか、時折、苛いら々いらしている容子だつた。



廃めてから一週間程たって、行商売子の問屋から「預かっておいた保証金を返すから取りに来い」という通知が来た。行ってみると、十円入れた保証金なのに、六円幾らしか返してくれない。行商箱の損料とか、雨具や店舗使用料だのと、いろんな名目で差引勘定がされている。ひどく不当に思われたが、大人でさえこの手に泣き寝入りを見せられていたのだらう。是非なく、渡されただけを持って帰り、母と一しよに、さっそく小島の小母さんへそれを返済に行った。

勇気な小母さんは、母が詫びて「不足分はいつかお返しいたしますから」というのを打消して「いいよ、いいよ。世間はお互い持ちじゃないの。それよりも、英さんはこれからどうする気」と、

ぼくへ訊ねた。

ぼくはこの小母さんにいつか甘えきつた気持ちになつていたらしい。とても出来ない相談に極まつているのに「ぼくは中学へ入りたいんです。どんな苦勞してもいいから」と、真剣に訴えてしまった。母は聞くのも辛そうに顔をそむけたきりだった。しかし小島の小母さんは、まともに、ぼくの顔を凝<sup>じっ</sup>と見つめて「ほんに、そうだろうね、ああ、よく分つてるわよ。だがね英さん、あんたが働かないで誰が今、おつ母さんの力になつて上げるのさ。だから夜学でもいいじゃないの。昼間は働いて、夜学に通えるように小母さんも考えといて上げるからね」と、頻りになだめてくれた。ぼくは他人へのひがみを抱きながら、この人のような前では、はな涙

も涙も一しよくたにして、だらしなく顔をこすった。

小母さんはその後、ぼくの職業やら勉学の道を夫君の小島市太郎氏に相談して内々心配していてくれたらしい。けれど税務監督局の一官吏に過ぎない小島さんなので早速な思案もなかつたろうし、ぼくの母もこれ以上の世話になるのはと、慎しみがちに、わざと不沙汰していた。というよりも母は、ぼくの稼ぎも無くなつてからは、一そうその日その日の凌しのぎに追われていたことだろう。依然、父は病床の儘だし、その暴君ぶりは募つても衰えはしない。前述の義兄の児の世話も大変だった。一体、母はどうして毎日の家計をやったか。芋いも粥がゆで一食を過すごしたり、ランプの石油も買えない晩もあつたりして、子供心にも、極貧さは身に徹していた。

わけて又、父は煙草好きなので、煙草が切れると、不機嫌を超えて狂人の相になり「煙草がないっ。煙草ぐらい、何とかならぬのか」と、病床で喚いたりした。そんな時の母のおろおろ姿は見ていられなかつた。母は唯一枚の着ている衾まで質草に入れ、以前、みどり屋の暖簾としていた物を腰に巻いて外へも出られずにいた事もあつた。この当時、母がふと洩らした呟きで今でも忘れ難い一語がある。それは「——朝、戸を開けなければならぬ」と思うと、私は毎朝、夜が明けるのが怖いよ」と云つたことだつた。

父は自分がいつまで病床から起てない焦躁を、やたらに子のほ

くへ向けて爆発させた。ぼくには職を探す能力が足らなかつた。暇があると書物にばかりかじりついていた。その姿が怠け者と見え、腑がいなく思えるのであろう、何かで激語になると「この、穀ごくつぶしめ」とぼくを呶鳴りつけたりした。

ぼくはあてもなく家を飛出しては、夜おそく帰った。書物を持ち出しては古本屋へ売り、それを小費いとして遊ぶことを覚えた。羽衣座、賑座、喜楽座と大入場の中に潜もぐって終日を過しながら、家には職探しに歩いたような顔をして帰った。木戸銭も無い時は横浜公園のベンチで塩豆か何か齧かじっていた。おなじ年頃の不良少年がいくらかも居た。浮浪者もうようよいる。そこでは何か安息感に似たものにくるまれた。彼らはすぐ話しかけて来、時には協同

の行動をすすめてくる。ぼくは臆病なので彼らのような大胆にはなれず、危険を感じると尻込みしたが、小さい悪事にはくつついて歩いた。そして些細な分け前にありつくくと、公園の木蔭で貪り食った。多くは、南京町の裏だの、元町のお薬師さまの縁日だの、砂糖馬車の入る倉庫などから搔さつ攫さらつて来る物だった。

しかし、公園の悪の巢は周期的に警官の一掃に会う。すると、その日から仲間は一ツ子一人見えなくなる。公園に行けない日は、ぼくは伊勢佐木町をうろつき廻った。売る本も無くなっていた。汁粉屋の小女に奉公している妹の力エを店の外へ呼びだして「お母さんが困ってるから」と偽ったりした。そしてまだ九ツに過ぎない幼い妹が、お客からツリ銭の端を貰う毎に可憐らしくも貯め

ている小銭を巻きあげて、買喰いと芝居の立見に費ってしまった。その頃読んだハムスンの「飢え」の中に、主人公がいささかな腐肉の附いた牛骨を道で拾い、それを齧ったあげく路傍でヘドを吐くところがある。あの主人公とおなじ飢渴がぼくの眼をぎらぎらさせていた事だったろう。何しろ家にいるのが辛いばかりに、毎日家を出て唯ウロついていたのである。或る晩はベンチに寝て、ついに家に帰らなかつた。「穀つぶし」と呶鳴った父の顔をえがくと、いつまでもこの儘でいたいし、母の姿を思い出すと無性に母のそばへ帰りたくなつた。

そのうちに公園で知つた不良仲間に連れられて、第二波止場の

埋立て地へ、やっと仕事に通うようになった。

今でいう土建屋の仮事務所みたいな物が埋立て地のまん中にある。朝、首を揃えて集まると、その日その日、いろんな雑役ざつえきを親方から命じられる。杭打ちと称するヨイトマケの女たちも手てつこうきやはん

甲 脚絆で大勢集まった。幾十組ものヨイトマケの唄声で今の第二棧橋辺の広大な埋立て地の毎朝が明けていたといつてよい。ぼくらは市内への使い走りだとか、弁当配りだとか、暇があると丸太担ぎもやらせられるといった風に追い廻されていた。夕方になると日給で三十銭ずつその日にくれた。

ここへぼくは二た月三月通った。春から夏頃までだった。

ヨイトマケの女たちは、ぼく達の事務所ボーイの敏公などが近



くを通ると、さかんに猥みだらな唄を唄い囃した。そしてぼくらが顔を赤くして走るのを見てよろこんだ。たとえば、筆下ろしはまだだろうとか、可愛がって上げるから晩においで、というような盆踊りめいた原始調を、あのヨイトマケの節に合わせて、音頭取りの女が即興詩人のように唄うのだった。女だてらといおうか、ずいぶん大胆な猥歌を唄うのだ。ぼくは顔を赤らめて逃げる風をしなから、じつは自分が女に意識されている歓びを感じていた。胸を弾ませた女たちの中には編笠かぶりや姉さん冠りの若いきれいな女もかなり交じっていたからである。

事務所に寝泊りしている敏公という少年は、元町警察署から表彰されて、新聞にも出たり親方も感心している親孝行少年という

ので評判者であった。当人もそれを自慢してぼくに逐一の身の上やら表彰式で撮って貰ったという写真を見せたりしたことがある。その時ではなかったが、或る時この敏公が、ふところから大事そうに取出して「見せてやろうか」と、一枚の春画をぼくへ示したことがある。ぼくはそれまで、表彰された敏公というので、自分のような不良ではないと考え、内心、彼に畏敬を持っていたが、それを見せられたので安心したり又、親近感を持つようになった。だが、ぼくの方は臨時雇なので、間もなく「もう仕事もないから、明日からは来なくてもいいよ」と、あっさり解雇された。仕事に離れる事よりも、ヨイトマケの唄と別れる事の方が正直何となく淋しかった。

かねがね心がけてくれた小島さん夫婦から「税務監督局の給仕さんに欠員の口があるが」と、母まで知らせてくれたのは八月か九月に入つてであつたと思う。

が、その前に、ぼくとして書いてしまわなければならない事が残っている。

監督局の給仕になる前の一、二カ月を、ぼくは再び職探しにぶらぶらしていたものだろう。季節もお盆前後の事と覚えているから、その期間としてほぼ間違いはない。

或る夕方、母は蚊うなりのする台所に腰を下ろして、ぼんやり溜め息をついていた。途方に暮れた顔つきだった。母がそんな眸

でいるのは何を意味するのかぼくにはすぐ分つた。晩に食べる物が無いに極まつている。無いとなると上ゲ板の下の漬物樽に一個の茄子なす、一切れの菜漬さえ無くなってしまふのだ。ぼくは母を慰めるつもりで何かあても無い事を云つて出たのかもしれないし、唯、黙つて足を早め出したのかも分らない。とにかく、それから間もない後、ぼくは遠くもない郊外の真つ暗な傾斜地に立つていた。眼の下に大きな池があつた。池のふちまでが馬鈴薯ばれいしょの段々畑でつづいている。星の光がすべて、神の眼か世間の人の眼のように見えた。罪を意識しながら犯行に出るまでには、恐ろしいたかひが自分の中で動悸していた。

それだけに、過去の中でも、このときの事は、非常に強くあざ

やかである。池の向う側にある疎林そりんの丘には、県立第一中の校舎が夜目にも見えた。自分が希望していついに入れなかった学校である。その遠い白い壁が妙に気になった。その窓から以前の学友たちがこつちを見ているような恐怖なのだった。しかし、一瞬後のぼくは、馬鈴薯の葉に身を埋め、ほこほこする黒土を両手の爪で無我夢中で掘り起していた。続々と薯いものころげ出てくる穴へ、さらに手を突ツこんで深く掻き捜した。畑の黒土は下へゆくほど、人肌みたいな温かさを持っていた。薯はすぐ一と風呂敷に余った。ぼくはそれを抱えると脱兎のごとく夜露の縁を切つて逃げ出した。誰かに謝りながら走つてい、走つても走つても恐怖に追いまくられて、真つすぐ家の方向へは走れなかった。

その晩、飢餓の一家は、塩ユデの馬鈴薯をふうふういつて喰べあつた。元よりぼくの薯泥棒を父は知ろうはずがない。だが、母にもその行為を叱られたような覚えがないのをみると、母も背に腹は更えられぬ思いで子の盗みを許容していたものだろうか。とすれば、ぼくの一家はその頃じつに危うい淵にあつたというほかはない。ぼくはその夏、おなじ事を二、三度やった。

否みようもなく、ぼくには盗癖があつたようだ。小学生当時にも、母の小銭をかすめたり、店の錢箱へ手を突つこんだ経験がある。いやそのほかにも一度、野毛坂の古本屋で、盗みを犯したことがある。よくやる店頭の立ち読みをしているうちに、無性に欲しくなつて来たのである。ふと見廻すと、店の主人は奥で朝飯を

食べている様子だった。ふらふらと、ぼくは一冊の本を持って盲目的に駆けていた。すると古本屋の主人の恐い顔がすぐ後ろに迫った気がした。左側は伊勢山の高い石垣だった。ぼくは恐怖と後悔から手の書物を石垣の下の小溝に抛り捨てた。夢中で逃げた。そして、それから数日後の夜、そつと野毛坂を通ってみたら、捨てた本が、まだ小溝の流れに洗われていた。けれど以後、幾月もの間、ぼくは昼間の野毛坂が通れなかった。

環境にも依ろうが、少年時代には、少年共通の盗癖みたいなものが、誰にも多少ずつはあるのではあるまいか。

公園の不良と共にぼくもやったが、あの縁日荒しだの、砂糖馬

車の抜き取りなどの類は、一見、ひどく不逞な悪行のようだが、物質の目的よりは、面白半分の方が勝っているといつてよい。彼らの冒したがるスリルと集団性が醸<sup>かも</sup>し合う小悪魔的な跳躍なのだ。野放しにしておけば、いくらでも本格な悪へ成長してゆくだろうが、それに交わらない通常の児童におなじ素質が無いのではない。菊池寛氏の『啓吉物語』であつたか、果物屋の林檎を盗む中学生たちの遊戯的盜癖が、書かれてあつたが、彼らの盜癖は遊戯と同居し、協同して外部へ働きに出たりする。その潜在はかなり理性をそなえた大人となつても「自分にはないもの」と馬鹿にしているわけにはゆかない。

と云つても、自分の過去の科<sup>とが</sup>を正当づけるつもりでは決してな



い。いやな記憶は一生に互わたつてつきまとう。こう書いていながらも自分でさえ覗くに恐いような心の割れ目が記憶の底に刻まれている。殊にぼくのぼあいは馬鈴薯畑といい古本屋の一例といい、単なる児童心理とは云いくるまれないものがある。あきらかに意識しての行為だった。それだけに長く自責されるだろう。いつか読売紙上の「折々の記」でも書き、又ここでも書かずにいけないでつい書いた。よくよく拭い去れない古傷のようである。

だが、母でさえ、ぼくの行為を知りつつそのときは、ぼくを叱らなかつたという事は、もつと恐ろしい事だった。——小島さん夫婦が税務監督局の給仕の口を世話してくれたのは、じつにそんな危機だったから、神の助けみたいなものである。さっそく試験

をうけ、いかめしい辞令書を貰った。月俸七円也であった。

横浜税務監督局は、岩亀横丁へ曲がる戸部の大通りにあった。煙草専売局支所と一つ構内にあつて、赤煉瓦の洋館の方が監督局であり、半工場的なバラック建てが、専売局の支所だった。

白い作業服を着た女工たちの半身が、工場の窓に並んでいた。ぼくらの常に通う正門道から片側の芝生に望まれるのである。どの女性も看護婦みたいな清潔さに見え、ぼくら給仕は、彼女らの視線の中を使いや用事で通り過ぎるのを光栄にしていた。そのうちですぐ彼女らの顔のうちでも、或る特定な顔と眸を交じえたり笑顔を交わすようになり、間もなく又、彼女が工場から退けて、自分の着物や帯に返り、お弁当箱を抱えて帰る姿まで見届けてい

た。白い作業服の彼女は崇高にまで見えたが、薄汚れたメリンスの袂やらお太鼓結びの帯になった身なりは、やはりただの貧乏人の娘にすぎず、何となく興ざめたものだった。

ぼくは本間君という先輩の給仕と二人で階下の広い属官室の一隅にボロ椅子を与えられていた。本間君は専売局の女工という女工の半分くらいまでの名を知っていた。その中の一人と日曜日に本<sup>ほんもく</sup>牧の海岸へ遊びに行った話もした。ぼくは羨ましげに聞きほじった。ここに長くいる間には自分にもそんな幸運が巡って来そうな気がした。「そのうち、君の好きな子に紹介してやるよ」と彼は云った。ぼくは息づまるほど本気な顔をして頷いた。

属官室の正面にある懸時計は、<sup>ものう</sup>懶いチクタクを一日中繰返して

いる。折々刻み煙草の煙管きせるを叩く音や、ペン、算盤そろばん、咳払いなどが沈澱した空気をよけい重くしていた。どれもこれも猫背がちな姿には、和服に袴もあり、薄汚れた背広に固いカラーの人もいた。ハイカラという流行語が生きていた時代である。その中から「給仕つ」と、一種の調子をおびた声がかかる。命じられた書類などを持ってほかの室へ行く。水曜日には東京の本省から事務官の出張があり、事務官の室へも行った。

事務官は若い瀟洒な金ブチ眼鏡の官吏さんであり、広い一室と立派な卓に構えていた。この人の卓へ、初めて書類やお茶を運んでゆく前に、ぼくは温厚な老守衛長から、お作法の予習をうけた。くたに九谷焼の湯呑茶碗を茶托に乗せたのを目八分に捧げ、ドアの開け

方、足の運び方、退歩の礼など、ずいぶんやかましい躰しづけであった。だから第一回するときには、手がふるえた。よほど偉い人と思われたのであった。

五時には退ける。朝も今までの何業よりも遅くていい。間にも、本など読めた。それに白衣の女神たちとも眸を交わせるし、ぼくは今までにない明るい足どりで通勤をつづけていた。けれど小島の小母さんは、すぐぼくに夜学をすすめ、あちこちの夜間中学校から規則書を取り寄せてくれたりした。

ところが、何があったのか、秋頃から小母さんはぼつたりぼくの家に見えなくなつた。母は何も語らない。けれど何かがあつたに違ひなかつた。どうかした拍子には父の感情的な口吻が洩れる

のだった。「女らしくない女は俺は嫌いだ」と云い「少しばかり世話になつたからつて、そうそう立ち入られて堪るものじゃない。英<sup>ひで</sup>の方針だの勉強だのと、そんな事は、親として百も承知だ。それをあの調子で俺をやりこめるまで、ツベコベ云やがる」と、父は憤慨した。さては、ぼくの事から小母さんと父とが口喧嘩にでもなつたのか。それならば夜学など諦めてもいい。そう思つた事であつたが、なお母にたずねてみると、そればかりではなかつたらしい。父は小母さんの侠気に乗じて金の無心か何か持ち出したものらしい。それでも小母さんは好意をもつて例の気性から「何とかしましょう」と引きうけて歸つたが、夫君の小島氏が承知せず、絶交せよとまで、不快にそれを取つた。母はそれをぼく

へ話しながら「……無理もないのよ、小母さんの立場は。……お父さんを悪く云うんじゃないけれど、まったくお父さんという人は」と、小島さん夫婦の方に同情していた。そして「そんな事を、あの人たちに云えた義理ではないのに」とも嘆いた。

まもなく小島さん夫妻は、どこか近県税務署へ栄転してしまつた。引越し先の通知も来なかつた。母は「何一つ恩返しもできないで」と、くよくよ独り詫びていた。しかし父は噉おくびにもそんな事は云わない人である。腹では悔やんだり詫びていても、口では、「何だ、何がお世話になつたものか。七円ばかりの給料しか貰えない所へなど世話しやがつて」。そんな悪たれをいう病人なのだ。ぼくは、その一語を耳に挟むと、その日に「廃めます」と、父へ

云った。「廃めて、勤め口があるのか」と、父が気色を更えた。ぼくは反抗する為の反抗語をさがして父の色をなお突いた。「ええ、有つても無くても、廃めたらいいんでしょう。どうせ七円ばかりの給料なんか、家の足しにもならないんでしょうから」。すると父は「貴さま、いつそんな口をきくようになった」と、頭から一喝した。負けずに、ぼくも口ごたえした。激すと、父は忽ち顔を朱にして烈しい咳に咽んだ。持病の胃潰瘍のほか、この頃から、父には執拗な喘<sup>ぜんそく</sup>息が併発していた。咳き込むと、数時間は母に背を撫でさせて苦しむのである。だから母は、ぼくが父へ反抗を示すと、台所にいても何処にいても、すぐ駈けこんで来てぼくの方を叱った。ぼくは母に叱られるのは何ともなく、母に負け



るのも口惜しくはなかった。けれど「謝れつ」と言い猛る父には、嘘にも手をつかえて謝れなかった。

それも結局は、母の為に自分をまげて、「すみません……」と、手をつかえるほか無かったのだが、どつと涙があふれ出てとまらなかつた。ぼくは何度も、自分の母の兄弟から二人の発狂者が出ていることを思い出して、ふと慄然となる事があつた。事実、父と争つて、疾風のごとく外へ飛び出し、一晚中、母を瘦せる思いにおいた事も一、二度ならずあつた。それとぼくにはいつかしたら少年らしい明るさが失われ、ややもすると独り物蔭へ行つて泣き抜くような性情が強くなつていた。そして、それも父の癩ぞこなに触ることが多かつた。父はぼくを不良な生れ損ぞこないみたいによく面罵し

た。事実、ぼくは成長するに従って、父に少しでもよい面を見せようとはしなかった。故意に、父を憂えさせるような素振りや仕向け方ばかり見せた。

暮の近い十二月であつた。母は思い余つての事だつたらう。厚ぼつたい手紙を書いて「英ちゃん、東京まで一人でお使いに行ける？」と、ぼくへ云つた。

渋谷の松濤園が開放され、その頃その土木工事監督に、母の実弟山上三郎が勤めていた。「三郎叔父さんの所へ」と、母は父に内緒で云うのであつた。汽車賃だけを握つて、ぼくは東京へ行き、松濤園の工事作業事務所を訪ねた。

三郎叔父は以前、長いこと、ぼくの家に食客をしていたことがある。だから顔はよく知っていた。「暢のんき氣屋さん——」という綽あ名だながあり、始終ニコニコしている人柄のよい小肥りな青年技師だった。だが一度、精神病の発作を起して、長く入院していたことがあり、その後恢復して、鍋島家との縁故からそこに勤めていたのである。

手紙を読むと「しようがないな、姉さんもいつまでも、これじやあ」と呟いて、一円紙幣を一枚封筒に入れてくれた。そして工場場へ行ってしまったので、ぼくもすぐ帰るほかなかった。けれど汽車賃は、行きの片道分だけしか持って出なかつたので、汽車に乗るとすれば、封筒を破つて、一円紙幣をくずさなければなら

なかつた。その一円紙幣を、くずす気になれなかつた。その儘、母へ見せてやりたいと思ひ、とうとう、渋谷から横浜まで、道を訊き訊き、歩いて歸つた。足を棒のようにし、腹もぺこぺこになつて、やっと家へ辿り着いたのは、何でも夜半過ぎか夜明けだつた。

しかしこの一円紙幣も、もちろんすぐ焼け石に水だつた。奉公先の力エや、きのなども、年暮には僅かな給金を貯めたのを持って、母の顔を見にちよつと歸つて来た。長女のきのは、これこそ暢気屋さんで、わが家の貧乏などは、眼に映らない質たちだつた。芝居見物に連れて行かれた話やら、奉公先の主人の豪華な生活などを、笑いまじりにキャツキャツと話して、さつさと勇んで歸つて

ゆく。カエの方は、まるで性質も反対だった。来ると母に「お母さん、納豆売りしてもいいから家に居たい」と、いつも云った。父は、きのの方が好きであった。

ぼくは今度こそ、家を出たいと思っていた。

諸所の口入れ所を歩き廻った末、日の出町の周旋屋で、よい口があると言われた。先はおなじ日の出町一丁目の続木商店であった。もう大晦日おおみそかも近い日であった。ぼくは周旋屋を通して、いくらかの給金の前借を頼んだ。目見得をすると、それも先方できき入れてくれた。ぼくは、前借で得たなにがしの金と、周旋屋の婆さんがくれた菜漬をブラ下げて、大晦日の晩、家に帰った。そして続木商店へは五日から住み込みで勤める約束をしてきたこと

を母に告げた。そして金を見たらよろこんでくれるだろうと一途に思っていたところ「……住込みかえ？」と云つて、母は世にも淋しげな顔をした。白い涙のすじを頬に見せた。母はその年暮頃には、もうぼくにも分る大きなお腹をしていたのである。ぼくが家に居なくなるのは堪え難い心細さであつたのだらう。父へたいしては、多少、復讐気味な反抗心さえ抱いていたぼくも、母の案外な反射を見て忽ち後悔していた。けれど、母もぼくが前借までして来た気もちを、よろこんでくれなかつたわけではない。むしろ悲しい欣うれし泣きだつたのかもしれない。ぼくは弟を連れて、戸部の大通りにある年の市へ出かけ、露店ののし餅やら輪飾りなどを買い歩いた。

## 小俳人

続木商店は食料、洋酒、雑貨を商あきなっていた。日の出町通りでも屈指な店舗だった。が、小売はどうでもいい風で、ほんとの営業活動は横須賀支店の方にあつた。看板には「内外雑貨海軍御用達」とある。つまり横浜本店はその仕入部と、主人夫婦の住居をかねたものだった。

ぼくはこの丁でっち稚に住込むと、その日に名前を改められた。主

人から「英吉としなさい」と云い渡されたのである。以後、主人夫婦は英吉と呼び、ほかの店員や奥の者は、英どんとぼくを呼んだ。

主人の続木氏はやや背は足りないが色白で小肥りな紳商然たる人で、やたらに金歯や金グサリや金ブチ眼鏡など光らせている嫌味を除けば、四十がらみの好男子で、いつも上等な葉巻を<sup>くわ</sup>え、大丸鬚をきれいに結い上げた若いきれいな御しんさん（御新造さんの略、おかみさんのこと）を携えて、本店と横須賀支店とを一週間おきに往復していた。

間もなく店員たちの蔭口で知ったが、御しんさんはもと真金町遊廓の神風楼でお職を張っていた全盛の花魁<sup>おいらん</sup>だったとの事であ



る。が、そんな前身は、みじん感じられず、今でいう八頭身型の美人であった上、教養もあるらしく、常に容姿はくずさず、旦那の続木氏と並ぶと御しんさんの方が立派ですらあった。ぼくら丁稚番頭たちは、よくこの美男美女の若い主人夫妻が人力車をつらねて出入りするのを店で送り迎えするのだったが、御しんさんの姿には往来の人も足をとめる程だった。しかし店の通い番頭から奥の者まで、どつちかというと旦那よりはその若くて美しい御しんさんの方にみなビリビリしていた。「御しんさんに嫌われたらこの店には勤まらない」という風がどこかにある。まだ新米の小僧にすぎない身にも、自然世間的な神経がそんな風にぼくを大人おとなびさせ、ぼくも御しんさんから「英吉」とよばれるとき、特に気

を働かせたようだった。

他人の家の御飯はこれで二度目の経験である。だから初めて川村印章店へやられた時みたいな幼さはなかった。年老った通い番頭、住込みの若い店員、先輩の小僧中僧などに追いつかされても、けっこう元気でよく働く英どんではあつたようだ。——けれど唯、また家を離れてみると、あんな悲惨なわが家なのに、相変らず家のことのみが忘れられない。ぼくの性分なのか、余りに母の肌がよすぎたせいなのか、ぼくが出た後、どうして暮しているかと、そればかりは念頭を離れなかつた。

すると、住込んでからまだ一カ月と経たない或る夕方のこと、

九つになる弟の素助の影が、一人で前の舗道を行ったり来たりしている。店にいたぼくは、すぐ胸騒ぎを覚え、あわてて外へ出た。そして「何しに来たの？ 家に何かあったの？」と訊ねたところ、弟はベソを掻き掻き、お使いに来たわけを訴えた。それは何でも「きのうから家じゆう御飯も何も喰べていない……」というような意味だった。途方に暮れるとはこんな時のことか。ぼくは胸がつぶれてしまい、どうしていいか分からなくなった。唯、咄嗟とつさには、ちようど持合せていた五銭白銅が一枚あった。それはこの頃毎晩のように九時か十時という、主人の御老母の部屋へよばれて、按摩あんまをするのがぼくの日課となっていた。ぼくはさんざん父の足腰を揉まされた経験があるので「英吉がいちばん上手や」と御隠

居にほめられていた。そして数日前に、御褒美に貰った五銭なのである。それを弟に持たせて帰したが、いくら物の安い頃でも白銅一個で一家の飢えがしのげるとは、ぼくにも考えられていない。やがて夕飯になったが、飯も喉に入らなかつた。自分だけがこんな飯や汁も口に出来るという事自体が悲しかった。で、通い番頭の平井さんが帰りかけるのをつかまえて「母が急病なので今夜だけお暇をください」と頼んでみた。平井老人は「さ、旦那もお留守だし」と難しい顔をしたが、結局、御隠居さまに一応伺つてから「じゃあ、十一時までには帰るんだぜ。十一時までだよ」と許してくれた。

その口吻に甘えて、ぼくは又「お給金で返済しますから」と、

店の陳列にある牛缶を二個前借した。それを持って、その晩、西戸部のわが家へ駈けるように行った。

ところで、後々まで、このときのぼくの失敗を、生前の母ともよく思い出しては笑い話にした事だったが、ぼくは弟の知らせで、一家が餓死寸前の急場のように感じたので、家へ行く途中で、蕎<sup>そ</sup>麦屋<sup>ばや</sup>で蕎麦のカケを幾杯か注文していた。とにかくすぐ食べられる物を算段するため少年の頭脳でありツたけの智慧をしぼったつもりだった。

じつさい、それは病床の父から幾人もの小さい弟妹たちの餓死<sup>たお</sup>をくいとめた物ではあった。行ってみると母すら力を失って仆<sup>たお</sup>れていた。きのうから一食もせず、雨戸も開けず一日を唯飢えの中

に、墓場のように寝ていたというのである。

今のような民生委員制度も何もないあの時代では、おそらく一家が餓死しても、餓死した後でなければ、近所隣りも気がつかなかったであろう。又、そうなるまで、なす術すべも工夫も知らないほどの両親ではあった。だから、ぼくの後からすぐ蕎麦屋の出前持ちの景気のいい声と共に、そこへ運ばれて来た蕎麦のカケは起死回生の物だった。まったく、どんな歓喜と慄ふるえつくようなよるこびでそれを啜すすり合ったことか。それを今、思い出そうと努めても思い出せない。昨日の事に過ぎないあの終戦後の餓鬼道にちかい味覚や雑多な体験も、ぼくらはもう忘れかけている。と同様に、その折の記憶は前世紀層化してしまっているようだ。唯、忘れ難

いというだけのものを残して生きつづけて来た。忘却は救いだが、思えばぼくを横着な者にもしている。

牛缶一個を切り、その汁にまで湯を注いで皆で飲み合い、ぼくは一先ず安心して店へ帰った。それはいいが、慌てた余りに、ぼくがあても無しに蕎麦をあつらえて行つた為、母はそれから幾日間、何杯かのカケ蕎麦の代が払えず、毎日出前持ちに門口に立てられて催促され、あんなに困つたことはない、後々もよく笑いばなしにした。しかしそれ程、ぼくはその晩を、一家の危急と慌てたのだつた。

それから一カ月半ほど経つて、ぼくは横須賀支店へ廻された。

当分、横浜へも帰れないので、主人から半日のお暇が出、その事を家へ知らせに寄った。この日もぼくには感銘が深い。前の場合よりは、もっと印象的な記憶がある。というのは、思いがけなく、ぼくの弟が一人ふえていたからだった。母は産褥さんじよくに横たわっていて、産れてから間のない赤んぼをそばに寝かせていた。これが三男の晋だった。

ぼくは産褥の枕辺に坐って、出来立ての人間の子をしげしげ覗いた。いかにも小さく、しなびて見え、そして真つ赤な皮膚にトウモロコシの生ぶ毛みたいな毛が頭の辺に少し生えていた。

母は、ぼくの支店行きを聞いても、ぼくを励まそうとするのか、それとも何かべつに生計の目あてがついていたのか、そう落胆は



しなかつた。父もこの日は機嫌がよかつた。ぼくは明るく横須賀へ立つた。

横須賀支店は、若松町の辺で、坂下から数歩の表通りだった。店のまん前には、浅黄暖簾に「てんぷら、若松亭」と染め抜いた料亭があつた。舞台上で見る信濃屋お半みたいな、結ゆいわた綿かに鹿の子帯の娘が、よく海軍士官やお客と暖簾の蔭でふざけていた。

支店の店先へも、のべつ海軍の下士官や主計が来て註文したり話しこんでゆく。時には店先でビールなど開け、剽ひようきん軽な和平などんとという若い店員が盛んに馬鹿ばなしをして笑わせた。横浜本店よりここは陽気で活気があり、夜は戸を下ろして皆、遊びに出かけるので、ぼくにも自由な時間があつた。

思うに、この頃は、やっとぼくの頬にも、少年らしい頬の色と快活さが蘇よみがえっていたのではあるまいか。何といつても、遠くへ離れると、そう家の事もよくよしないし忘れがちになれた。それと、支店詰は一人のおもしろい爺やと女中と若い店員ばかりな上に、出入りの客はすべて海軍の連中なので、少年のメランコリーなど抱くひまもなかった。ぼくはよく注文取りのオヒゲという綽名のある番頭の伊東さんや和平どんに尾いて、碇泊中の軍艦をあるいた。海軍波止場からランチに乗って各軍艦の酒保へ行き、酒保で御馳走になったり、みな馬鹿ばなしを側で聞いているだけだった。「この頃、神風楼のお職さんは、支店に来ないのか」と、おとくいの酒保の下士官が云つたりすると、和平どんは、主人夫

婦の古いロマンスやら、まるで覗いて見たような閨中の睦むつまじさまでを、冗談交じりに喋しゃべったりした。だからオヒゲの伊東さんよりは、和平どんの方がどこの酒保へ行つても持てた。

或る日、ぼくに驚くべき吉事が起つた。というのは、かなり大きな木箱一ぱいの書物が、運送屋からぼく宛てに届いたのだった。開けてみると、何百冊あつたらうか、全部が俳句の古雑誌だった。野毛通りの金港堂古書店が差出人となっている。

それと一しよに、家から母の手紙が来た。手紙にはこうあつた。「——以前、お父さんが世話して上げた事のある奥田さんという人がお父さんの逆境を知って、この頃、たいへん親切にして下さ

る。そしてこちらでは忘れていたほど古い貸金を返済してくれたので、家の家計も一ぺんに楽になるし、そのせいかお父さんもこの頃は床から起きて、お元気になっていらつしやる。だから、あんたももうこれからは、家の事も心配しないでください」とあり、それから別便で送った本は、お父さんがめずらしく散歩に出、御自分で金港堂から送らせたものです、ともしてあつた。

ぼくは、うれしくて、その晩は寝られない程だつた。そしてさつそく寢床に俳句雑誌を持ちこんで寝た。ホトトギス、うづえ卯杖、秋声、日本俳壇など、その頃の俳句雑誌のあらましはあつたような気がする。父はぼくが早くからこんな物になずんでいて、また欲しがっていたのを知っていたのだ。どうかした拍子でぼくを憎し

げに「穀つぶし」と呶鳴ったりする事も、病氣と貧苦のせいだったのだ、父も遠く離ればやはりぼくを愛いとしく思い出してはいてくれるのか。そんな感激もあわせて胸につつまながら、当時のホトトギスを、夜更けるまで読みつつ寝たことは、ぼくの夢を少年の夢そのまま毎晩、のどかにしてくれた。

和平どんは、いつも人気者だが、悪ふぎけの度を越す人でもあった。或る晩、店を閉めた後、店員たちが大いに酔った。主人夫妻は不在であった。ぼくは和平どんに呼ばれて奥へ行つた。すると、大勢の中でいきなり蒲団にくるまれた。おなじ蒲団の中へ又、支店の女中のお弓さんを一しよにくるんだ。「手を貸せ、手を貸

せ」とほかの者を呼び、和平どんは帯か何かでぼくとお弓さんを蒲団巻きにした。

もちろん、ぼくとお弓さんも、極力抵抗はしたが及ばなかったのである。上をギリギリ巻き締められているのでお弓さんの両手はぼくを抱えていた。ぼくは手のやり場がなく、顔は火照ほッてしまい、ただ眼をつぶっていた。

和平どんは、酒宴の同僚たちへ、この余興を提供しながら、ぼくらを肴さかなに、自分も飲んでいるのだろう。何かきやツきやツと笑いながらお弓さんをからかい抜いた。お弓さんが日頃、英どんにたいして余り好意を持ち過ぎているというやきもちらしかった。もつと露骨な猥せつな言であった。伊東さんが、やつと蒲団蒸し

の紐を解いてくれたとき、お弓さんは泣いていた。ぼくは店の隅の暗い所へ逃げこんだ。

又、晩春の頃だった。爺やが風邪で寝ていた為、浦賀造船所へ納めている同地の雑貨店へ、卸し売りの白酒を、荷車に一荷積んで、和平どんが前を曳き、ぼくが後押しして行つたことがある。

浦賀街道の山道までかかると、和平どんは一ぷくしようと云い出し、車を止めて休んだのはいいが、そのうちに「おまえ、店へ帰つても、喋るんじゃないぞ。いいか、途中で壊れたと云つとくんだから」と云つて、四打入りの箱をコジ開け、中の白酒を二本ほどラツパ飲みにしてしまった。そして残りをぼくにくれた。

ぼくは眼がくらくらし出した。いや、それどころではなく、和

平どんはすっかり酩酊してしまい、それからの峠の下りを何べんも転びかけた。また崖へ車をぶついたりして、あと白酒のビンを何本も破り、白酒を道々撒いて歩いた。どうなる事かと、ぼくは尾いて行くばかりであり、あんなに困った事もないが、面白かった事もない。

支店勤めで、辛かった仕事は、サイダーやビールの納入に行くときである。軍艦によつて水兵や下士の気質も違い、手を貸してくれる場合もあるが、そうでない時は、あの舷側の下から高いタラップを番頭やぼくが担ぎ上げて行かなければならない。ぼくは軍艦印サイダーの四打入りをよく肩に乗せられた。そして片手でタラップのロップにつかまりながら一歩一歩艦上まで登って行く



のだった。——忘れもしない軍艦新高にいたかのタラップの途中から、それを担いだ儘、ふとよろけて、海へまつ逆さまに落ちたことがある。前後は皆目覚えていない。気がついたときは、自分の周りにはゲラゲラ笑う大勢の声がしていた。救助されて酒保に担ぎ込まれていたのである。

新高へ行くと、いつも、からかわれた。可愛がつてくれたのであろう。ぼくはどの軍艦や駆逐艦へ行くよりも、新高の酒保へ行くのが愉快だった。酒保には甘い物も豊富なので、よくいろんな物を貰った。

ある時一人で何かの使いに行ったことがある。新高は間もなく

出航の準備をしていた。用がすんでからぼくは人気のない中甲板など歩いているうち、この儘、船底か石炭庫へでも隠れてしまつたら外国へ行けるが、というような空想を抱いていた。そして、ふらふらと空想を実行へ移すような誘惑にかかっていた。が、あぶなく、ぼくは見つけられて、上甲板へつまみ出された。もうタラップも揚げかけていた所だった。そのときは、ひどく怒られた。秋、ぼくに、も一つ愉快的事があつた。それは人知れず投稿した俳句が、横須賀新聞といったか、土地の新聞の記念募集の一位になった。わずかだが賞金があつた。店の人たちは、誰も気づかなかつた。

ところが、それからもちよいちよい投吟しているうち、或る時、

選者のなにがしという俳人と新聞社の人を訪ねて来た。新聞社の名刺なので、ほかの店員がそれをちようど奥へ来ていた主人夫妻に取次いだ。結局、ぼくを訪ねて来たのだと分つて、ぼくは顔を真つ赤にして狼狽した。その晩、御しんさんに呼ばれて「うちは商店ですよ」と切きり口こうじょう上じょうで云われた。それから主人夫妻が支店に居るうちは、俳句雑誌を寢床に持ちこむこともやめ、新聞へ投稿するのもやめた。何かこりこりしたような気もちが残っている。ほかの店員からもそれは余りよく思われなかつた事だったのかもしれない。

その冬か翌年の一月頃か、冬というだけで月も日も忘れてしま

っているが、その横須賀でぼくは小島の小母さんにぱったり会った。

雪のあと、みぞれでも降っているような、とにかく寒いそして道の悪い日だった。ぼくは海軍波止場まで、空樽を積んだ車を曳いて行つた。おそらく酒保で使う漬物樽か何かであつたのだろう。とにかく、軽いことは軽いが、山のような空樽を車で曳いた。

小島の小母さんを見かけたのは、あの一番繁華な大通りであつた。ぼくから呼んだのではない。買物か何かしていた小母さんが、ぼくの姿を見たのだろう。いきさつはよく覚えませんが、その往来中で、小島の小母さんに「まあ、英さんじゃないの」と梶棒にすがられた事だけが、あざやかに脳裡にある。まわりに少し人だか

りがしたような気まり悪さを覚えているから、ややしばらく立ち話をしたのではなかったろうか。そしてぼくも小母さんも泣いたにちがいない。小母さんが早口に住所を教えてくださいましたが、ぼくはおそらく人目に間が悪かったり、さまざまな感情に取りみだされていたのだろう。なかば夢中で別れてしまい、その後も、小母さんの赴任先の住所を知ろうとはしなかった。

又、ひとり小母さんばかりでなく、ぼくはほかの知人も横須賀では一切思い出そうとはしなかった。母の親戚には、芝新銭座の近藤塾の関係から、近藤男爵や山中造船中将など、横須賀海軍工廠には、かなり知人や遠縁の者もいたはずだが、母の手紙がそれらの人に触れていたことはない。従前から、実弟山上三郎へ、

たった一ぺん、無心の手紙を持って使いにやられたほかは、そうした身寄り頼りを一切たのみとしない母であつた。だからいつかしら、ぼくもそんな旧縁の人が世にあることなどはまったく忘れ、ただ自分らの破れ小舟一そうを、とにかく必死に漕いでいる気もちだつた。

しかし思わぬ人の恩情に助けられることはあるもので、先に母の手紙にみえた奥田という人が、以後も失意の父を励まし、父へ再起に足る資金を出してくれたものとみえる。その頃、母の便りに依ると、お父さんはこの頃、毎日、お勤めに出ているとしてあつた。けれどそれは真面目な勤めでなく、後で聞いた所に依ると、

生糸相場に手を染め出し、毎日仲通りへ通っていたものだった。父は、あせッていたにちがいない。そのため、せつかくの再起の資金をもまた失い、そして以前よりもひどい貧苦へふたたび一家を投げこんでしまったのだった。

## 横浜異景

どうも、ぼくのこの四半自叙伝は、貧乏ばなしに尽きてい、読者も又かと思われるだろうし、書いてるぼくも実は気がヒケ出し

ているのである。そこで、これは果し<sup>はて</sup>がない、少しはしよツてという気になって、前号の終りに以後一年半ほどの事を、ひとまとめに、こう書いてしまった。——父がふと再起の資金を得、一たん家庭も建て直るかにみえたが、又忽ち、生糸相場や何かで元も子も失くし、再び以前にまさるどん底へ落ちてしまった、と。

ところが、その間の一年余を一足とびに少年期から青年期へ跨<sup>また</sup>いでみても、ぼくの“忘れ残り”は依然、家庭の貧苦だの、労働だの苦学だの、ちつとも明るい面はなく、それに肝腎な十六、七から八へかかる年齢期を省略するのも、全体からみて何かこの辺だけをぼかすみたいでおもしろくないから、やはり順を追って変哲もない浮き沈みの経路をここでもつい書かざるを得なくなっ



た。ぼくのかかる徒然めいた少年時代の記も、思わず長くなつて恐縮しているが、ま、あと二、三章を以て結ぶつもりであるから、併せて諒りようじよ恕を希つておく。

直接、両親から続木商店の主人へ、手紙でもあつた結果であるうか。まもなく、ぼくは暇をもらつて、横須賀から横浜の家へ歸つた。家はその間、関内の尾上町二丁目に引越していた。大通りに面した三間半間口の店舗で、屋根看板に「日進堂」と大きく、わきに「全国諸新聞広告取扱」としてあつた。

父はこの店を、前経営者の奥田某氏から顧客付き負債付きの居抜きで譲りうけたらしい。奥田さんなる実業家の夫妻を、ぼくは太田の赤門前時代から見知つてはいたが、父との関係については

殆ど何も知る所がない。唯、横浜における小成功者ではあったようだ。その人が郷里へ引退するにあたり、父の悲境を知つて、当時相当額の貸金を返してくれた上、日進堂の事業を父へ任せて行つたというのが実情らしかった。そんな風に母から聞いたと覚えてゐる。

いずれにせよ、ぼくの両親にとっては、再生の救いだつた。尾上町へ移つて以来は、父も長年の病床を出て元気づき、ちりぢりに外へ働きに出されていた妹たちも母の膝下に帰り、ぼくも又、奉公先から呼び返されて、こんどはわが家の一店員として帳場格子の中に坐らせられた。小さい家の歴史でいえば、ま、小康時代といったようなそれからの一年余であつたのである。

その日進堂の位置は、今日の横浜でもそう変つていず、桜木町  
駅から大江橋を渡つて左側の、いま朝日新聞社支局となつてい  
る辺りである。

今日とその頃とのちがいは、ぼくの少年の頃の尾上町二丁目界  
隈は、関内芸妓の狭斜の町と織り交ぎつており、日進堂の並びに  
も「金春」だの「千代本」だのという御神灯ごしんとの格子先が幾軒  
もみえた。わが家のすぐ裏は鳥料理の「金田」の庭だし、また大  
江橋の南詰には、当時すでに代は變つていたろうが有名な富貴楼  
の名残りもあつた。だから昼は爪弾つまびきの音が流れ、夕めくと、店  
の前を芸妓の木履ぼっくりの鈴が通り、金春の姐さんなどが、湯上がり

の上ゲ鬢<sup>びん</sup>を涼やかに見せて行くなど、濃厚な脂粉の気も漂うのだが、それが堅々しい商店やそこらの家庭とも道路の裏表で交錯しながら、新古、何の不調和もなく町の色を組み立てていたのであった。

日進堂は東京の弘報堂の下請けで、新聞広告取次が本業だが、店の一部に化粧品陳列棚を据え、美容水本舗の看板をかけていた。その頃、美顔水とかキレイ水とかいう物が流行的に売れ出していたので、その類似品を製販していたのでもあろうか。棚は卸し売りの見本にあるのだが、近所の芸妓たちはよくそれを分けてくれと行って来る。ほかに客が居ないと店員たちは、からかい半分、妓たちと好きな話<sup>ふけ</sup>に耽<sup>ふけ</sup>つて、美容水をお線香代の代りに夕

ダやったりしていた。ぼくは帳場格子の中で、いつも好きな書物にかじりついているか、その頃から妙に日本画のまねや水彩画などをぬたくっていたが、店に近所の妓たちが這入ってくると、じつは五官をその方にあつめ、うわべは素知らぬ風を装っているのであった。

店の斜向いに、日曜日以外は、いつも鉄扉の閉まっている教会堂と、脇沢金次郎翁の邸宅があつた。翁は横浜成功者の平沼専蔵とか茂木、原などと並ぶ実業家だとか。どうかすると、その白頭翁が店先へ来て腰掛け込む。そして毎度、ぼくが帳場格子の中で絵ばかり描いているのを覗き、ある時こんなことを云つた。「あ

んた、何に成るつもりかね」ぼくは大真面目で「絵かきになりた  
い」と答えた。すると翁は「絵かきに成りたいなら成る道へ早う  
進まんじやいかんね。お父さんに云つて東京の偉い先生につくか、  
美術学校へでも入れてもらいなさい。あんたくらいな年は大事な  
年頃だからな」と。これは、ぼくの頭にこびりついた。東京へ出  
たいという夢を掻き立て、画家だ画家だと将来を念じた。

だが父の顔を見てはそんなことを云い出せもしなかつた。父は  
病後のせいでもなく、以前から歩くのが嫌いで、用先から用先  
へ、当時の医者みたいに人力車を乗廻してあるき、店にいること  
は全く稀まれであつた。もつとも店は馴れた店員に任せておけば済む  
のかもしれないが、父の胸にはこれを機会に以前の棧橋事業か買

易方面へ返り咲きして、旧知を見返してやろうという気負いや山気が燃えていたのではあるまいか。

母は父のすることに徒らな反対いたずをする人でもないのに、貧乏以来は父も多少の気がねを持つ風であった。だから折角の日進堂を店員まかせにして、べつな方面へ金を注いだり、生糸相場に手を出している事など、父の行動は一切、母には知らされていなかった。ただ時折「……ほんとに得手勝手なお父さんね。病気をしてもお金を持っても」と、ぼくら子供と一しよにする食事時に、ふとこぼすぐらいが関の山の愚痴だった。

父がまた以前のつきあい仲間へ顔を出し初めて、その見得も伴ったり、一方では、生糸相場でも損に損を追っていたことだっ

たろう。一時持った金は一年とたたないままに失くしていたと、母は後に語っていた。そして後には従来からあつた店付きの負債と新しい借金だけが残り、その断りが毎日の店頭業務みたいに続いた。

けれど、ぼくにとっては、それらの債鬼の客も、一こう恐くも何ともなかった。何も知らない儘「今日は誰も留守です」とか「何日に来て下さい」とか云われた通りを云っていればよいのである。四人居た店員も、水野君一人になってしまい、その水野君も債鬼の恐れを感じると、外交歩そときに出て晩まで帰って来ない。そして月末には、電灯が切られる。水道も止められる、といったような状態にまで来たが、ぼくの毎日にはいささかの禍福もなく



変化もなかった。およそ尾上町の一年半ほど、ぼく自身にとって自身の好きな事がやれていた時期は前後にない。薄暗い帳場格子の中は、借金取にたいして録音されたような断りを云うほか、まったくぼくの小書齋となっていた。

そこで、ぼくは初めて小説を書いたことがある。高島米峰氏主宰の「学生文壇」が創刊され、その二号に投じた小説が当選した。題はいま考えると、ひどく古風なもので、「浮寝鳥」というのであった。三、四十枚の物であったと思う。だが投稿規定に二十四字詰原稿紙何枚とあるのを見、その原稿紙を探してあるいたが、当時まだ横浜中にも原稿紙なる物を売っている店はなかった。やむなく二十四字詰二十行に自分で罫けいを引いてそれに墨筆で書いた

のを覚えている。

その頃、もう一つ非常な興味にふれた事がある。店の広告用原画の版木を、頼みつけの版木屋へ取りに行くついでに、新聞小説の挿絵が、どんな工程で出来るものかを、その木版師の仕事場で見たことだった。

ぼくのよく覗いた真砂町の彫繁という家では、横浜貿易新報や毎朝新聞の仕事もしており、小川芋銭のコマ絵だの、連載小説の挿絵などを、いつも数名の木版師が手分けで彫っていた。当時、広告図案には、銅版がよく使われていたが、挿絵にはまだ凸版が用いられていなかったものとみえる。原画は薄い雁皮紙がんぴしにかざられていて、桜の版木に直接ノリ貼りされた画稿の上から、小さい

鑿のみのさきが、一線一線絵を彫り起してゆくのだった。毎日のことだし、たいへんな苦勞に見えた。——そしてすぐ翌日か翌々日には、それが小説と共に次々の紙面に掲載されて来るのを見、ぼくは印刷文化の構成やその中の小説欄というものに、何か、ものを知ったような気がしたものだつた。

はつきり何年何月から何月までという記憶が、ぼくの今にはない。が、自分の十七歳はまるまるそこで送つたようだ。そして誰の少年期にもあるように、尾上町時代のぼくには、尾上町附近の好きな少女の印象が幾ツかある。当時の横浜銀座ともいえる鉄かねの橋のすぐそばに関川齒科医院というのがあり、その令嬢が夢

二の少女みたいに見えた。又、馬車道から大江橋通りへ曲がった商店街の一軒に、老舗の履物屋があつて、その娘も好きであつた。恋などとよぶほどこつちも大胆ではなく、ただ町の柳の揺れまでが、やたらに少年の感傷を染め、未熟な詩心の眸を妖しく悩ませていただけにすぎない。

しろうと素人の沙翁劇の会、源氏の輪講、句会、短詩の会、いろんな

会へも、この頃はよく覗きに行つた。鉄砲問屋の西村潤蔵君の北仲通りの家では、毎月読売新聞の句会があり、東京から選者の窪田而笑子がよく見えた。宮島ゆかり女史というせいとうしゃ青鞆社の同人みたいな新しい女ぶつた令嬢も交じていたり、何しろぼくの知らない別の世界の横浜では、一面において、そういう富める人や若

いグループでの、強烈な物質外の生き甲斐も、渴望されていたように思われる。

そして、短かったが、ぼくにとつても、尾上町時代の一年余は、横浜文化のそういう特異な面もちよつと嗅ぎえたし、書物にも親しめ、絵遊びも出来、感謝していい期間だった。

けれど店も維持しきれず、すべてを負債の抵当に渡して、再び元の貧民窟へ舞いもどる間際には、相当、暗澹あんたんたるものが又、母の朝夕の姿には窺うかがわれた。ちようどその頃、母の父、ぼくにとつては祖父の、例の佐倉のおじいさんが、麻布竜土町の長男山上清の家で、臨終に迫っているという電報が来たが、店も家庭も、そんなさいであった為か、父のゆるしが出ず「……お母さんは、

親の臨終にも行けない罰当りなんだよ」と、終日奥で泣いていた母を見た日がある。——今なら桜木町駅から東京へは通勤する人さえ多いが、その頃では、そんなにも東京が億おたくう劫な遠方であったのだろうか。それとも、父の得手勝手に母をやらなかったものだろうか。今なお、その終日の母の嘆きが耳底にのこっているのだ、ぼくには何ともその事は不可解で仕方がない。

もつとも、尾上町を立退く間際には、水道料の滞納で、水道までよく止められたりしていた。そのくせ横浜気質かたぎというか、依然金の出納すいとなどは、荒つぽかったようでもある。ある時など、急遽、水道税を納める為、母から百円紙幣一枚を渡され、局へ駆けつけたことなどある。当時の百円は大金なので、わざわざ人力車

に乗せられて行つたのだが、水道局の窓口に立って、いぎ金を納めようと思うと、母から預けられてふところに持っていた状袋がない。俵屋も一しよになつて、ちまなこ血眼で探してくれたがついに見つからなかつた。風の強い日であつたのを覚えている。この時ほど、母に「困つた困つた」と嘆じられて、ぼくも共々色を失つたことはない。百円といえば浮沈にかかわる金であつたかもしれないのだ。母が父からどんなに怒られたかは覚えていないが、何しろもうその前後は、せつかく尾上町へ出た機会も一瞬の望みに終り、再び暗い淵にむかつて、母のあたまも乱れていたのかもしれなかつた。

古い西戸部という地名は、ぼくの頭には飢餓の辻みたいな印象を今ものこしている。尾上町から越した先は、また西戸部だった。家賃も物価も安く周りまわりも同格者ばかりなので、貧乏がしよいのである。

母が「お父さんは、病気をしてもお金を持っても、ほんとに得手勝手な人だ」と云ったが、戸部へ引っこむと、父は又、急に病人臭くなった。のみならず、まもなく何度目かの潰瘍吐血をした。いま思うと、父はじつに感情家なのである。事に破れても、自分の中で穏健な処理がつかず、心身を労しきるのであった。母はまた、あるかぎりの工面を尽して、父の医療費にかけ、その間、住居も二度まで転々した。一度は父が「家相が悪い、ここにいと



おれは死ぬ」と云い出した為だし、次のばあいは、越してからわ  
ずか二た月の家賃が、もう払えなくなっていたので、家主に追い  
立てを食ったのだった。

いまと違うあの頃の、家主の追い立てほど苛烈なものはない。  
特に、貧民相手の家主は鞭むちに馴れているせいもあるうが、およそ  
獣でない人間であつたら、野宿するまでも、その疇ねぐらを出てゆかず  
にはいられない辱めであつた。ぼくは母と二人で、次の借家を、  
雨の日、探し廻つたことがある。何も、手分けして探せば、それ  
だけ範囲も広く探せるものだが、傘が一本しかないのである。母  
は生れて二年足らずの晋を背中に負っていた。母は破れ洋傘のし  
ずくで背の子を濡らすまいとするし、ぼくの肩も入れようとする

ので、自分は濡れ雑巾のようになっていた。

ぼくは洋傘の柄を持ち添えながら、その日ほど、自分の母が世間の中で不運な人に見えたことはなかった。家の立退きを迫られている気もちは家がない事とちツとも変りはない。そんなせいもあつたろうし、一日じゆう歩き暮れていたことなのだ、母の半生の歴史みたいなものが、小さい頭にぐるぐる廻りしていた。そしてもう何らのぼく自身の欲望は失われていた。ただこの母をどうかして一ペンでも幸福にしてみたい気もちが無性に起った。好きな読書も画家志望も捨てていいとさえ思った。いやそんな考えも持たなかつたろう。もつと本能的な動物でも感じるであろうような単純さで、「いまに、お母さんだつて、世間の人なみに、こん

な苦勞のないお母さんにするよ、ぼくはきつとしてみせるよ」と  
心で呟つぶやいた。けれど、そういう思いも、ここにこう文字で書いて  
みると、何だか嘘が交じるようである。素朴といつてもまだ当ら  
ない、原始的な肉親的感情といったら、やや正しいのかもしれない。  
い。

雨の日、探しあてて、やっとどうやら借りえた家は、崖やぶ斑まだ  
らな中段に細長く建て並んでいる掘井戸のそばの一軒だった。

長屋の名を「看視長屋」というのは、住んでから後で知った。  
戸部監獄があつたむかし、看視が住んでいた所から起つた名だそ  
うである。およそ形容詞は要るまいと思う。

三、四軒先の隣りに、留さんという労働者がいた。引つ越し蕎麦のお礼からすぐ懇意になり、ぼくは留さん夫婦の俠気で、留さんの仕事場へ働きに連れて行ってもらうことになった。

早朝、誘いに来てくれた留さんは、わらじきやはん脚絆しるしばんてに、印絆しるしばんてを纏んを着、真田紐さなだひもでしばった大きな弁当箱を肩に掛け、いなせなとび鳶とびみたいなの恰好かっこうしていた。ぼくの身仕度にも、ああしろころしと世話をやき、自分で買って来た新しい草鞋わらじをぼくの足へ穿はかせてくれた。「毎朝だからな、毎朝穿かせちや、やれねえぜ。覚えときな、英さん」と、いちど結んだ緒おをまた解いて、穿き方を教えてくれた。

仕事場は保土ヶ谷だった。現在の工業地域が、まだ茫ぼうぼう々々たる

野水や見渡す限りな田や草原であった時代である。が、すでに巨大な化学工場や何に成るのか知れない煉瓦の高層な煙突工事が、所々に見られた。

土工たちのコンクリート仕事にぼくの一日は預けられた。そこでの仕事は、大きい担い桶を天秤棒てんびんでかつぎ、小川の水を作業場へ運ぶことだった。一日何十荷の往復になるだろうか、夕方になつたら、ぼくの肩は、そつと触つても痛いほど腫はれていた。

毎夕、三十五銭貰つて帰つた。

その一ときの欣うれしきは云いようもないが、日がたつに従い、足の裏はセメントに蝕むしばまれ、どうにも跛行を引かずにはいられなくなつた。もつとも常に足拵ごしらえがよければそんな患いもないのだが、

草鞋を毎日新しく買うのも惜しく、又、買うにも買えない日の方が多いのである。朝、家を出るときから足拵えも心ぼそい支度で出て、途々、拾った草鞋の片方を片足に穿き代えたりした。

そんな足元では、逞しい仲間から嘲わらわれるのも当然だし、又仕事仲間としては、腹立たしくもなるのであろう、コン棒という物で二、三度なぐりつけられた事もある。

でも、留さん夫婦の親切のてまえ、ぼくは雨の日以外は休みもせず通い続けた。それは何か以前書いたから（文春・二十九年新年号「煙突と机とぼくの青春など」）簡単にしておくが、毎夜、家に帰ってから父母に黙ってそつと按摩をして歩いたのもこの期間の事だった。駄菓子屋で売っている三角袋の麦コガシには玩具

の笛が附いている。あれを二本、木綿糸でしぼったのを、ふところに持って、人の知らない遠くへ行つて流したのである。これは或る事情でまもなくやめたが、母だけは知っていた。なぜならその稼ぎの十銭か十五銭は、母に渡していたからである。

それを済まなく思つたのであろう、母もまた毎朝、大福やあんころ餅を仕入れた箱を背負つて、ぼくと共に家を出かけ、工事場で一日売りひさいで、夕方は一しよに歸つた。仕入れ先は、高島町の河岸近くで、そのため朝は星のあるうちに家を出るので、殆ど寝る時間は少なかった。けれど、そんな事をして、母と共にする眠たさや暗い道の朝夕は、何か愉しかった思い出として今も残っているし、その時にしても、少しも辛いとは正直思つていな

かった。

だが、母の餅売りも、結局は無駄骨折りに終わってしまった。なぜなら顔馴じみになると、貸しがつもり、貸したがさいご、それは容易に払ってくれないからであつた。元より資本があつてしたわけではなく、それも血の出るような無理工面で始めたのだから、忽ち元も子もなくなり、泣き寝入りのほかにはなかつた。

## 木靴の仲間



ぼくが横浜船渠へ通い出したのは、保土ヶ谷の仕事も終りかけ、  
留さんもほかへ移つてからである。看視長屋からすぐ上の高台に、  
宏壮な一軒があつた。内藤子爵の親戚とかで、おやしきと近所では  
呼んでゐる。

母がそのお針仕事をさせて貰うようになったのが縁で、内藤  
氏の口添えで横浜船渠へ入れてもらえる事になつたのである。内  
藤氏は、船渠会社の重役であつた。

父はたいへん歎んだ。ぼくもいい口があつたと思つた。だが、  
内藤さんのお世話という事が、過大にぼくら貧者の心理にぎようこ僥倖うを  
思わせ過ぎていた。内藤氏の手紙を持って、初めて会社へ  
行つてみると、むずかしい試験もなく、ただ年齢を訊かれただけ

にすぎなかった。年齢は前以って、内藤さんから「十八歳と、ほんとの事を云つてはいけない。規則として二十歳以上だから、二十歳と云いなさい」と注意されていたので、その通りに答えた。

するとその日から、即日職場へ就かせられた。「船具部」という所である。機械部、電気部、製缶部などの各職部門では、最下級の雑役部といってよく、体さえ強健ならば素人でもすぐ役に立つ部門らしい。しいて技術的な仕事といえ、船内船腹の塗工ぐらいなもので、そのほか、入渠船舶の出し入れ、船内船底の錆落さびし、製缶工などの足場懸け、ドック掃除、沖仕事、およそあらゆる入渠船舶の雑役は、みな船具部へかかってくる。

その船具部には、百人以上の仲間がいた。一部から六部まで分

れており、一組十七、八名ずつ配されて一チームになつてゐる。能率を競わせる仕組みであろう、一組一組には組長、小頭こがしらがいて、職工長室の指令をうけ取つて来ると、「今日は、何号ドックの入渠船のペンキ塗り」とか「午ひるから誰と誰はランチに乗つて沖の外国船へ入渠用意に行け」とか伝令する。労務時間は、朝七時から五時半までで、ぼくの日給は、四十五銭であつた。夜業一時間二割増し、深夜業や徹夜はもつといい率に割増しがつく、入りたての一頃は、誰からもすぐ「幾ツだい？」とよく怪しまれた。人いちばい小さいぼくだつたせいもあるうが、誰も二十歳とは受けとつてはくれない。船具部中を見廻しても、ぼくみたいな小さいのは、ぼくだけだつた。

ドン（午砲）という言葉があつた。「ドンだよ」といえば正午を意味し、「ドンにしようぜ」と云えば、昼飯にしようぜということになる。

横浜の空にはその頃、もひとつ朝午夕の三度ブーが鳴つた。サイレンとは云わなかつた。「船渠ドック会社のブーが聞える」といえば、朝は七時、夕は五時半と極まつていて、全市の時計代りになつていた。

菜ツ葉服やツメ襟やマドロス然たる数千の職工たちが朝々会社の正門へ流れこむ足なみは壯観でさえあつた。七時のブーは就業令なので六時半前後が人海の汐ざかりである。五分でも遅れると、

守衛口で遅刻を取られ、支払い日の日勤票には、ちゃんと半時間の割でも日給から差引かれてある。

ドツクの盛況か不況かは、横浜中の景気不景気にまですぐ反映した。会社の正門前に、ふつうの通勤工以外の自由労働者の大群が、毎朝まっ黒に見えるようなときは、一号二号三号ドツクとも全部の竜骨台キールに入渠船が坐っていて、沖にも入渠待ちの内外船が混んでいる証拠だった。所謂、〃ハマ景気〃の活況時と見て間違いない。

その臨時雇用の黒い群れは、ハマではかんかん虫とよばれていた。上は腰の曲がったお婆あさんから幼は十四、五歳の少年少女

までをふくめてい、かんかん虫には余り屈強な壮者はいなかったようである。何しろそれら異様な細民群の稼働かどうが、波止場や棧橋や沖の船にまで雲の如くウヨウヨ充ちていた頃が、貿易港横浜としてはその最盛期であつたといえよう。

かんかん虫という呼称は、ぼくには少しもユモラスには聞えない。反対に、エキゾチックではあるが何か灰色の哀感とそして弱々しい明治世代の訴える“うたごえ”も持たなかつた細民たちの無数の顔が、華やかな港の灯を背景として、うか泛んでくる。

彼らの仕事は、船のサビ落としと云われているが、ダブル掃除や貯炭庫の闇や船底の水槽洗いや、およそ船鼠の出入りするよう

な個所へは、どこへでも仕事に追い込まれた。塗りたてのペンキにまみれたり、鼻の穴から肺の中まで粉炭で黒くしたり、セメント箒とセメント缶を持って、船員でも知らないような最船底部の穴から穴へと這いこむのであった。

だから仕事も終つて、黄昏れたそがの陸へ上がつて来る個々の彼らは、まつ黒と云つても判じ物と云つても当らない程、どれもこれも奇妙奇怪な顔して目鼻が分るだけである。だが工場裏の排水管の湯煙りにむらがつて、その顔や手足を洗っている群れの中には、汚い頬被りが取られる下から、剥むき卵みたいな可憐な少女の顔も見えたり、初うい々しげな人妻らしい、ほつれ髪の顔もあつたりするのであった。もちろん大多数はそのまま百鬼夜行の行列になりそ

うな雑多な男共だが、それにしてもこの仲間には波止場ゴロだの  
凄い乱暴者は皆無と行ってよかつた。なぜならかんかん虫クラス  
の日当は標準以下の安いものだからである。

が、この零細な老幼男女の雲集も、稼ぎとなると馬鹿にできな  
い。夕方の露店や場末の灯をうるおすことは大変なものだつた。  
家に待つであろう者の為に、経木で包んだ安魚を持ったり、菜漬  
をブラ下げたり、米屋へ立ち寄っていたりする人影を見ると、ぼ  
くには他人の生活とも見えなかつた。おなじ険しさをよじ登る同  
行者に思われた。

それにまた、当時ぼくの通勤し初めた横浜船渠の船具部という  
職場が、ほとんど彼らと隔差のない姿や範囲のものだつた。違つ



ているのは、彼らに期待できない危険極まる随所の足場仕事とか  
か烈しい重労働だけである。要するに会社常雇のA級かんかん虫  
が船具部であるといつてもよい。

一万噸トン級が入る第一号ドックを前にして、職工長やパイロット  
がいる事務所があり、それに隣してトタン屋根の船具部があつた。  
朝夕、百何十人が工服に着更えたり弁当に帰ったり、冬なら大き  
なペン缶たきぎに薪を突ツ込み、お手の物の油脂をぶツかけて、炎々濛も  
々うもの中で各班の馬鹿話やら喚きが詰め合っている職場小屋であ  
る。まあ炭礦の飯場小屋といったような光景だろうか。

山の労務者と一見違う所は、その服装と特有な氣質であろう。

入渠船のペンキ塗工はすべて彼らの手に成るので、工服は一人残らず斑まだらで色さまざまなペンキの粒子を染め重ね、それがゴワゴワに硬かばツて、乾かん漆しつみたいになっている。——偶 《たまたま》  
その仲間へ入ったばかりの、ぼくの菜ツ葉服などは、余りにきれいなので肩身がせまく、人知れずわざとペン刷は毛けで黒ペンや赤ペン白ペンなどを服地へこすりつけて、一目で新しん米まいとわかる身なりから同化しようとしたものだった。それに例外なく木靴きくつというものを穿きいていた。木靴については後で語ろう。

全員は六班に分れていた。ぼくは第六部に組み入れられた。六部の組長は猪子三郎氏といい、この人の名は忘れられない。後で思えば俠気のある物分りがいいこの組長の下なればこそ勤まった

ようなものである。

だが、ほかの連中も、外国船や下級船員に接したり、ハマ特有な気質に洗練されていて、どれも愉快的仲間だった。そして親切であつた。ほんとは十八歳でしかないのに年を偽つてこの逞しい仲間に入つたぼくだったが、それと明らかに知つていても、ケチな意地悪などされて泣いた例は一度もない。特に六部の仲間は、自分たちが必然労力のワリを食うわけだが、皆してぼくを庇<sup>かば</sup>つてくれる風であつた。

パイロットの乗りこんだランチが沖から入渠船を曳いてくる。ぼくらは待ちうけてロップを取り、ドックに入れる。そして閉じ

られた渠中の海水が電力で排水され尽し、巨大な船底が竜骨台キールに坐るまで約三、四時間はたツぷりかかる。

神経質なほど注意深いパイロットの間断ない呼子笛と指揮の下に、その間の全操作と、船体定着の作業は、すべて船具部が総がかりでやる。その烈しさといったらない。まるで戦場の血相と騒ぎだ。この間にまごついてなどいると、仮借なく、がなりつけられる、張り付される。

船の巨体が漸次、沈下してゆく機微な瞬間に、ドックの石段側と船腹へかけて、車のついたロップを用い、船体の不動を保つ為のツチとよぶ巨材を何十本となく丸木橋のように横へ支え渡すのだった。そして船底が竜骨台に坐るせつな、全員で石段側のツチ

の根本に分れて立ち、二人ずつ向い合つて、大きなハンマーで一せいにけやきいた櫓板の締め木を打込む。それは舷頭からパイロットが吹く呼子笛の一声一声の下に、全員のハンマーが鳴るので、一種何ともいえない音響をもち、ドツク中を震撼する。

終るとすぐ、一枚の締め木を持ち、片手には重いハンマーをさげた工員が、石段側からツチの上を猿走りに渡つてゆき、船腹とツチとの間に、その締め木を打込んで帰つて来る。ツチはおよそ電柱よりも一廻り太い巨材だが、角に面をとつてあるのもあり、中には殆ど丸材をハスツた程度の物もある。その上を、われら船具部の連中は、木靴で平地を行くように渡るのである。ドツクに水のあるうちはまだいいが、排水がすむと、下は何十呎フイートか知れな

い眼がまわるような深い石だたみだ。ぼくは初め、彼らの命知らずな作業を見て、見ているだけで足がふるえた。人間業に見えなかつた。けれどやがてぼくも同じことをしなければならず、いやおうなくやらせられた。

恐い仕事、危険極まりない作業はツチ渡りだけではない。ダンブルの中の暗闇仕事、製缶工の手伝いや何かでマストや煙筒へよじ登るばあい、一本のロップに縫すがつて船のトモからスクリュウへ降りたり、ぶらんぶらんする足場板に乗って競技的に船腹塗りのレッド・ペンキにまみれる時など、ぼくの体軀にはすべて過重な労働である余り無我夢中でやってはいたが、ふと生命の戦慄に足

もすくんでしまうことは一再でない。毎日が命がけだった。

だからふと、朝、家を出るときなど、「——夕方にはこの家へ帰って来ることが出来るか、どうか」と、よく思ったりして出た。わけて冬中は、まだ暗いうちに戸部の横丁から霜を踏んで出るの  
で、そんな感傷がよけい胸をついた。

組長の猪子さんの家は、どこか近所だったとみえ、よく途中で会った。この人に声をかけられると、ぼくは勇気づけられた。伝で  
んぼう

法な口調で、通勤にはツメ襟の堅い身なりをしていたがいなせ  
な肌合いの人だった。酒とぼくちが好きで、給料日から二、三日  
は必ず欠勤し、細君が見つけに歩いて、泥酔している猪子さんを  
往来端で見つけ、炭屋の車に乗せて自分で曳いて帰った、という

ような話を、職場小屋の昼休みで聞くのは珍しくなかった。

「どうだい。勤まりそうかい。ペソを搔いちやいけねえぜ。まあいいやな、六部に居りやあ」

途々そう云ってくれたりした猪子さんであった。だが、職工長や技師にはよく突ツかかるといっているので、六部の組長中では、猪子さんがいちばん会社側のウケが悪いのだそうであった。

六組の班と班とは、自然その仕事を実績上に競きそわすような仕組みに出来ていた。で、ぼくといえ、いくら組長が庇かばってくれても、それに甘えている事もできなかつた。

だが、何にしても、ぼくは力がないし体軀も小さく、たとえば



ツチの巨材を鎖チエンにかけて、前後四人で担ぐにしても、相手が腰を切っても、ぼくには腰が切れない、又、よろけ勝ちになるなど、歯をくいしばっても一人前には出来ない事が多かった。だから使  
い走りでも個人の用足しでも、何でもして、償いをつけていた。

雨の日は、船内仕事か、外部にしても、ドツクの底の真つ暗な船底のサビ落しなど、比較的らかな作業が多かった。

そんな日、ハッチからダンブルへ入って、足場板に腰かけ、蠟ろう  
燭うそくの光で、かんかんハンマーで内部の鉄板を叩いている仕事はのんきであった。監督が来る時だけやっていればいい仕事のよう  
にみんな怠けあっていた。ぼくはいつもポケットにしている袖しゆう  
珍ちんぼん本の芭蕉句集を出して盗み読みした。また、作句したり自

由な空想に愉しみ耽<sup>ふ</sup>けることができる。

船艙も石炭庫だと、無数の小ハンマーの響きで、暗い上にも更に粉炭の闇が濛々と厚くなった。空気がチリチリ燃え、手元の蠟燭の焰に、のべつ微塵<sup>みじん</sup>のような火花が咲く。それと音響とで、一種不思議な幻覚の世界が感じられるのだ。かさかさな鼻腔の奥を鳴らしてカツと痰<sup>たん</sup>をすれば、石炭を溶かしたようなものが口から出るし、うっかり蠟燭の火で煙草をつけようとすると、（ぼくは十五、六から喫煙癖にそまっていた）顔じゆうにたかっている粉炭へチリツと燃えつきそうになる。

それでもなお、ダンブル仕事は、よかった。自由な空想が愉しめるからである。ドツクの一年何カ月が勤まったのは、ぼくに空

想癡があつた救いといつていい。その闇黒が苛烈なほど、自分を置く空想の世界は甘く、夕方の退<sup>ひ</sup>けのブーが聞えてくるのも、いつの間にかのような気がした。

夜業は任意な日もあるし、強制的な時もある。

冬の夜など、乾いた事のないドツクの底での居残り作業は、零下何度なのか、陸では知らない寒さだった。

しかし技師や監督も見廻りに来なくなる夜半過ぎになると、彼らは適宜に暖を取りに上がって行ったり、蠟燭の灯を寄せて、ばくちの盆ゴザを拵<sup>こしら</sup>え始める。二個のサイコロを誰かは必ず内ポケットに用意していた。船底とかぎらず、沖仕事に出ても、途中の

サイパン船上ですら、上役の眼さえなければ開帳する。

ぼくはよくその仲間から立番を命じられた。後では五錢玉ぐらいを誰かがくれる。けれど度々のうちには覗いてみたくなり、すぐ彼らの熱中する理由と丁半のルールも分った。恐々こわこわ何枚かの銅貨を手にしてそつと仲間のコマと一しよに張ることも覚え、いつかぼくも機会があると人なみに顔の中へ顔を突つ込んでいた。するとある折、綽名あだなをバテレンとも神父サンとも呼ぶ髯ひげづら一面の老工員が、ぼくを上眼うわめごしでジロと見、「よしな。おめえは」と、ぼくを睨んだ。それから夜明け方、小屋へ引揚げてゆく途中で又、シヨゲているぼくの肩をその人が叩いた。

「あんなこと、覚えたって、しようがあるめえ。おれみたいに成

「ツちやうぜ」

小屋へ戻ると、彼はぼくに一そくの木靴をくれた。それまでぼくはみんなの穿いている木靴を羨ましいとは思ったが、革靴のように売つてもいず、手に入れる工夫も知らず、始終、水びたしの足に、ただの破れ靴か草鞋しか穿いていなかったのである。

小屋の仲間、雨の日とか、夜業の夜には、暇を盗んでよく手製の木靴を作っていた。

どこからか杉材を見つけて来て、足型ともん数に合せ、なたのこ鉋や鋸や小刀で、まず靴の底から作り初める。サンダルの底部と思えば間違いはない。

皮革の部分はズックで作る。これはロップ小屋などから持ち出してくる。そしてブリキ板を細い帯状に切り、木の底部の縁ふちとズックの被包面との継ぎ目を縫糸の代りに鋸びょうでトントン打ち止めるのである。紐通しの穴金具は、これは靴屋で買っておく。——それでももう穿けるのだが、なお防水の為に、ズックの面をお手の物の油脂で塗りたくる。案外丈夫で、何よりも足がとても暖かい。だから船具部ではこれを穿いていない者はない。足だけ見ても、あいつは船具部だなど、ひと目で分った。近頃はどうか知らないが、木靴にペンキの乾漆服という妙な恰好の工員はドックにだけしか見られる風俗ではないかとおもう。

帽子もペンキが積もってがま蟄の肌みたいになつたのを皆かぶって

いる。船腹塗装を終日する日などは、足場の上はいつも風が強いので、ペンキ刷毛の先からテレビンの飛沫が吹きかかつて、睫毛まつげもくつついてしまったりする。夕方は顔見合せて、相互の姿をお笑い物にして笑うのだった。

「この顔、女房子に見せたくねえナ」と、誰かが云えば、「彼女あいつに見せたら何というだろう。おれは税関の倉庫係りという触れ込みになつてるんだが」と、ボロに浸したテレビン油で顔をこすつている男もあつた。

いずれ遊廓の女か何かであろう。よく通っている先の女のおのろけを始終自分から云い出しては、からかわれると、それで満悦

している森公という小男の工員がいた。勘定日（月二回の日当支払日）というと、それから数日間は極まって休む。取っただけを女の許もとで費い果すと、また出て来て次の勘定日までは欠勤なしに働きつづける。森公はまた頗すこぶる達者で病氣一つした例ためしはなく、十年一日の如く、その生活定じようせき石も崩したことがないという。

だから皆から小馬鹿にされていた。けれど六部では一番の古顔だそうで、通勤にはいつもチツクで入念に髪を分け、悪くとも背広は着ていた。どうかすると細いステッキを伊達だてに搔い込み、独りニヤニヤ反そり身で帰りを急いで行くことがある。「行くのか」と仲間からからかわれると、ぼくより背の低い体を反らして「もち！」と得意になつていう。「あいつはもう四十六、七だぜ、一



生ドツクの古顔で、一生真金町（遊廓）へセツセと運んで行くんだなあ」と、仲間の誰かが云っていた。

彼の如き独身者は稀れで、女房持ちの方が多かった。十年二十年の勤続者も少くない。毎日がこんな危険な仕事なのに、よく長の年月、怪我也死にもしないものだと思われた。会社の弔慰金などは雀の涙ほどしか出ない。泣き寝入りというよりは労働階級全般が今日のような自覚も組織も持たなかった時代である。あとの女房子はどうなるつもりで皆いるのだろう。この船具部もふくめて全工場での死者怪我人の数を統計にとれば、年間たいへんな数に昇るにちがいない。

どうかすると一日に二件も三件も医務員の白服と担架の列を見

る日がある。さすがそんな時だけは、ドック内も一瞬シユンとなつて「今日は悪日あくびだぜ、気をつけろ」などと云いあうが、一時間もたつと忘れてしまう。もつとも些いささかの恐怖でも念頭にあつたら、船具部の仕事などは半日もやつてはいられない。

そういう地獄の一丁目と普通世間との門を、二十年以上も朝夕のブーを耳にしながら通つていると、森公のような人生観に到達するのは自然かもしれなかった。人は森公を嘲うが、案外、森公の諦観は、ほかの女房子持ちの多くの仲間を憐れと観ていたのかもわからない。

多くの話題は、職場小屋に全員が集まる昼休みの三十分に沸く

のだが、ここでも食い物に次ぐのは猥談であつた。森公は甘ツたるいおのろけを眼を細くして云うロマンチストに過ぎなかつたが、ほかの連中の猥談というのは、そんな程度のもものではなかつた。ぼくは幸か不幸か年少から書物を通じて大人たちの秘戯の世界をもう想像の上では充分知悉ちしつしていたつもりであつたが、この人達の猥談に依つてさらに啓蒙を深められたことだつた。彼らのする猥談は、小こ咄ばなし的なニュアンスも何の洗練もあるわけではない。事実の報告ならその事実性を、露骨なら露骨に徹した猥行為の打ち明けばなしである程、話題を囲む連中の傾聴と喝采に値した。

ここに到つて、ぼくなどは心ひそかに、まだ自分の未知な未経験な大人の別生活があることを今更のように思つて、唾つばを吞みつ

つ聞き耳たてたものだったが、しかしその影響が後頭部に幾日もこびりついていような影響は覚えなかった。いや就業のブーに追われて小屋を出るやいなや吹ツ飛んでいたのである。また、かつてはぼくも自慰を覚えて、反省と自己の破れの繰返しに憂鬱がちな日もあつたが、ドツクの重労働を課せられてからは、全く意識せずにその悪習も忘れていた。家に帰って空腹を充たすと、疲労しきつた肉体は、ぜいたくな夢想をえがく瞬間もなく、眠りへ直行してしまふのだった。

だから——と云つて、ぼくの例では適切でないかもしれぬが——猥談の常連みたいな他の大人達も、じつさいはそれ程な猥漢でもないし行為はしていないのではなかつたらうか。毎日の職場が

一步あやま過ればドツクの底に落ちて脳骨もみじんとなるような死か生かの奈落を覗いている仕事なので、彼らといえ前夜の不摂生や体のコンディションには非常に細心なのであった。仲間の者の事故を聞き知っても、その者が日頃そうした注意に無頓着な方だとすぐ「ゆうべのせいだろう」と冷笑したりするのである。命知らずに見えながら肌には「お守り」なども人知れず持っている彼らであった。

浜ちやん

ドツクの勤めだけは辛かった。毎朝の足が重くて、一朝とて元気に家を出られなかった。けれど依然貧乏やつれの母を見ると、そしてその母がお弁当をつめ、子のぼくにいそいそ心をつかつて、送り出してくれたりすると、やめたいやめたいと思いつつも、口には、云い出せなかった。

いつか、半年以上も勤めた。ぼくは十九になった。その年の五月である。四女にあたる妹の浜子が死んだ。浜子の死ほど一家の者に深い痛恨を刻みこんだものはない。

浜子はわずか九歳だったが、数カ月前、房州の田舎町の飲食店

へ奉公に出されたのだった。当時の貧乏人の家庭では、単なる口減らしという目的だけでよく子供を外へ出す手段をとつたらしいが、そんな幼い者を、どうして房州へなどやったのか。母は、後では悔みに悔んで泣く泣くぼくに打明けたが、どうしても十五円程の必要に迫られ、先はよい主人という口入れ屋の話に乗って、前借の為に手放したものである。

浜子は人形のように色の白い端麗な子であった。貧窮の中で物心のついたせいにか賢い子で母思いだった。遊びたい盛りなのに小さい心を母と一つに貧苦して来た。だから母の側を離れるさえ嫌だったろうに、遠くへと云われても、「……うん」と云つたのだらうと思う。

行つた先の主人の話では、着いた日から御飯もろくに食はず、泣いてばかりいたらしい。そのうちに床についてしまった。医者に診みせたが、たいした事もないと云う、けれど次第に痩せ細るばかりなので——と、親元へ歸してよこしたのであつた。

家の中へ寝かせたとき、もう意識はなく昏こんこん々としていたのである。医者は脳膜炎と診立てた。氷嚢をあて、半月程もその儘であり、母は枕元で詫びてばかりいる。母も狂気しはしないかとぼくは惧おそれた。ぼくもドツクから歸ると浜子の枕元に坐りきつた。まるで天てん女にょみたいなの愛くるしい顔しているのだ。自分の肉親をこういうのも変だが、浜子の顔ほど汚れない美しさを、ぼくは生きている人の中では見たことがない。意識がなくても今は母のそ



ばへ帰っていることを安んじているのだろうか、清々すがすがと昏睡しつづけている。真夜半頃になると、ぼくもそうだったが母も自然なようにその顔へ手をあわせてただ拜んだ。時々微かに囁言うわごとを洩らすのである。囁言はかならずおつ母さんと呼ぶらしかった。そのたびに母は浜子を抱いて慟哭どうこくした。そして、すやすやとそのまま亡くなってしまったのである。

浜子の死については、今でも思い出すと悔恨と傷いたましさに、ぼくは胸がふさがってくる。五月十三日という命日まで忘れえない。どうその頃の人の矛盾や救いのない貧乏の沼を察しても、今からでは理解できないものがある。口減らしなら口減らしの他の策も、

切羽詰せつぽつまつた必要ならその必要の算段にはほかの考え方もあつたらうにと、ぼくは浜子の死後、腹立たしさに、母にさえ何か喚いた覚えがある。が余りそれを云うと、母は当時身投げでもしかかねなような容子であつた。こんどはそれを惧れたこともぼくの記憶に消し難い。

運命は悪戯いたずらもの者というが、こんな弱者の家庭へも同じに見舞つた。皮肉にも浜子の死後まもなく、ちよつと家運が開けた。どういふ金が入つたのか、家は鉄かねノ橋側の吉田町二丁目へ引移つた。このさいの経過は、日々ただ眼をつぶつて、辛いドツク勤めをつづけていたぼくには、よく分つていない。

吉田町の家は、繁華街のすぐ横で相当な構えの家であつた。だ

からぼくは今度こそ父に申し出て、ドツク勤めはやめたいと、ひそかに折を窺うかがっていた。そして東京へ出て、苦学したいのが、真意であつた。

ところが、その希望をつよく両親へ云い出しえないでいる前に、ぼくは船腹のペン塗り仕事の最中、仲間の者の過失からドツクの底へ、足場もろとも落されて、野毛山の十全病院へかつきこまれる身となつていた。

## 十九の朝

その日ぼくは、ドックの底から担架でかつぎ上げられて、野毛山の十全病院へと運ばれてゆく間に、いつか意識を失っていた。何分か何十分かは、完全な仮死に落ち入っていたわけである。

病室の白いベッドに気づいてからも、どんな手当をうけたのか、ぼくを繞めぐっている人々が、いかなる会話を交わしていたのやら、当座も今も、全く何の記憶がない。ただ全身のいたみを歯の根と指に握りしめて、どこにも温ぬくみのない硬ばった四肢を慄かせて居ただけだった。

頭のしんには、いつまでも、ドックへ墜落したせつなの、グワ

ンという衝撃が、そのまま詰まっている感じで、幾日も止まった時計のように頭脳の働きをしなかった。だから得難い経験を通じていたのに、仮死から蘇生そせいの前後は、やはり夢中であつた。後の生涯の足したになるような何も掴んでいなかった。のみならず、その日が何日であつたやら日まで忘れてしまつている。唯、十一月の末だつたことだけは確かである。

もし自分に日記をつける習慣があつたら、きっとその事は多分な感慨で後に書きとめておいたろうが、ぼくには以前からそういう記録癖がちつとも無かつた。今でもそうだが、そろツペな一面がどこかにあつた。というよりも、そんな貴重な試煉に会つても、それを契機に青年なら青年なりの生命観に触れてみるとか、生涯

のエポックとして考えると、か、というまでの自己直視もまだ持っていないなかつたものだろう。年は十九にもなつていただけれど、一こうなおまだ「あんにやもんじや時代」の殻を脱け切れないうち、この奇禍に遭つて、茫然と、葉びたしのわが身を、白いベッドの中に見出していたというのが偽らないぼくの気もちやら姿であつた。

もちろん三等室である。だが、六畳間ほどな一隅のベッドは、ぼくだけの物だつた。いつ眼をさましても白い看護婦の姿が見え、瀬戸の火鉢には湯がチンチン沸いていた。一種のしじまが、重傷患者の気もちを、やがて、すっかり落着かせてくれた。

朝々の廻診が来るたび、左右から看護婦たちの白い冷たい指先が、ぼくの胸をはだけ、胴中から腰全部にわたる繃帯を解いて行った。いちばんひどく打った個所は尾骶骨びていこつの辺で、肩や右腕の怪我は、さしたる事もないらしかった。副院長は、ぼくを眼鏡の下に見て云った。

「うまく墜おちたな、こんな程度ですんだのは奇蹟だ。命びろいしたんだよ、君は」

ぼくは羞恥はじらいで顔をまっ赤にしていた。医師へではなく、ぼくの腰やら胸の肌をいたわりつつ仕舞ってくれる看護婦たちの白い手に対してである。こんなさいの、瀕死ひんしにちかい意識すら、昆虫の触角ふみたいに顫ふるえるのだった。そして、自分の肌の汚さが案じ

られた。頭髮の根には鉄サビの粉を沈めていないか、どこかには赤ペンキの汚染を残しているだろうなどと、ひそかにコンプレックスに身が縮む。そのくせ、彼女たちの些細ないたわりや優しい眼ざしにもすぐ心が鳴って、何か、ここの憩いこいが、愉しくさえ思われた。そして漸ようやく、この患者は、廊下を行き交う人の声にも、廻診と一しよに朝夕入って来る白粉や髪カミの香のほのかな物にも、鋭敏になりつつあった。

どうして墜ちたのか、奇蹟的に助かったか、前後の事や、せつなの記憶も、やがて徐々に、よみがえって来た。

船具部の仲間トシは、その日全員で、一号ドックに入渠中の一万噸



ちかい欧州航路信濃丸の外装塗工にあたっていた。

船腹上部の黒ペン塗りが終り、吃水線部のオートライまで吊り足場を下げて、船首から艫ともへわたる数十組の足場足場の工員は、熟練した動作で、レット・ペン缶を片手に、迅速な仕事を争っていたのである。

午後の三時半か四時頃であつたらうか。巨大な船腹は塗りたての赤い液と西日にキラついていた。だが、ドツクの底は、もうほの暗く、所々に薄氷が光つて見える。当然、夜業になるらしかった。

足場は、尺板二枚を並べただけの物にすぎない。両端を枕木で締め、ロップ車が附いている。そのロップは、船の上甲板に結い

附けてある、も一つの車を通つて、ドツクの宙から陸へと長く渡してあるのだった。陸の杭くは、文字どおりの命の綱の根本なので、頑丈にできている。高さ三尺ほどで頭の丸い、鉄製の太い杭だ。ドツクではそれをミットとよんでいた。

ミットの頭には、鉄の筭こうがいが横に出ている。足場綱をゆるめて、船腹の足場を下げるさいに、過つて、ロツプはずが外れない為にあつた。ところが、その日は、手不足であつたのか、陸のミット番に、船具部以外の人まで狩り出されていた。

さつきから、ぼくの足場と、ぼくの仕事の進しんちよく捗よくを、陸から見ていた倉庫係の平井という老人が、ぼくのペン刷毛が、さいごの僅少な面を塗り終るか終らぬうちに、

「下げるぞう。つかまつてろ」

と、うしろで唸鳴るのが聞えた。

ぼくは慌てて、足場板の中ほどから、端へ駈け寄った。風にさえ、すぐブランブラン揺れる足場だし、歩くと、上下にも撓しなうので、自然、その上での動作は曲芸師の身ごなしが身につく程なものであった。——平井老人は、ぼくが端へ寄つてロツプに掴まつたと見たか、陸の上で、もう足場綱の端を、徐々にゆるめ出していた。いや、その一瞬に、足場板もろとも、まッ逆さまにぼくはドツクの底へ墜おとされていたのである。高さは約四十呎ぐらいだったフイートかと思われる。もし、体を振り落されていたら、宙をもんどり打つて、当然、頭蓋骨を粉な粉なにしたであろうが、幸いに、ぼく

は足場板の端と一しよにどんと腰を打ツて、一度、弾み上がり、そして転がるさいに、肩や脚そのほかを傷めるだけなんですのだつた。といつても、とたんに、気を失つてしまったのはいうまでもない。

たちまち駈け寄つて来た人たちの声が耳元ではあるが遠くに聞えた。ぼくの体は人々の手や肩で、ドツクの胸突きのような石段を担ぎ上げられているらしい。ふと、その間にわれに返つた。そして自分の体を見た。胸も手も、ほとんど全身が血に見えた。

血と感じたとき、ぼくは又、失神状態に落ちてしまった。それきり何も後は知らなかつた。後で考えると、血と見たのは、手に

持っていたペン缶のレッド・ペンキを満身に浴びていたものだった。ちようど、夕陽の頃だったから、開いた瞳孔に、その赫光かつこうも手伝つて、頭からの鮮血と思われたものにちがいない。

また、過失の理由も、後で聞くと、こうであつた。寒いので、

平井老人は、手袋をしていた。船具部の仲間なら、そんな事はないが、係りは倉庫番であつたし、年も老とつていたので、足場綱が、杭の肌<sup>き</sup>に火の匂いを出しつつ、キ、キ、キと軋きしみ出すと、もう食い止める力もなく、思わず手を放してしまつたらしい。——尤もつとも、そう成つてから、なお踏ん張ろうとすれば、足場の下降する勢いで、逆に自分の体が、ドツクの巨口へ引き込まれてしまうかも知れないから、しまつたと思つても、ロツプを放さざるを得なかつ

たわけである。

ぼくの奇禍が、この人の過失と聞かされて、後では妙な気がした事だった。まだ会社へ入りたての頃である。ロップ倉庫の前で、その平井老人が、ぼくを見るなり「おや、アスアかと思つたぜ、よく似てるなあ」と大ゲサに眼を丸くして云つた。その後も「おめえ、アスアに似てるぜ」と、ぼくを見るたび云うのである。氣になつて、アスアって誰？ と仲間に訊いてみたら、以前、三部にいたが、製缶工の手伝い仕事で、艫足場から墜ちて即死した混血児だとの事であつた。

それから變に、平井老人の青ぐろい皮膚や出ツ歯が、ぼくには、不吉な象徴に見えて仕方がなかつた。先でもぼくを嫌ツていた事

だったろう。とにかく、どっちも虫が好かない風だった。でも、こうなったので、或る日ドツクの帰りに、いちど病院へ見舞には見えてくれた。しかし何を云って帰ったか、何も耳に残らなかつた。

患部の痛みはべつとして、ぼくは毎日のベッドに退屈も知らなかつた。

朝晩のドツク会社のブーは、ここの窓へも聞えて来る。ブーが鳴つても、あの鉄の門へ急がなくてもいい。木靴を穿いて危ない軽業師のような労役に就かないでもいい。そう思うだけでも、偶然な幸福に見舞われている気がした。事実、こんな安息は、何年

にもなかつた事だ。何もしないで、温かな食事を看護婦の手で給仕され、本も読めるし、自由な空想も描いていられる。嘘みたいな、昨日と今日の違いだ。災難だった、気の毒だったと、人の云つてくれるものが、自分にとっては、逆にこんなにも密かな愉しみだったのである。

そこへ運び込まれた日、誰より先に、色を失って、駈けつけていたのは、母だったにちがいない、その母の姿さえ、二、三日ははつきり意識にうけとれもしなかった。痛い痛いとはばかり訴えていたらしい。だが、漸く容体の快方が見えてから、母は或る折、今度の事では、あのかたくなな父さえ、どんなに吃驚びっくりしたかと



いう事を、ぼくの枕元へ身をすり寄せて話した。

「——あの日、会社のお使いが来て、おまえが、ドックへ墜ちましたっていう、知らせじゃないの、お母さんも、台所にいて、そのまま腰が抜けそうになつたけれど……お父さんも、あの日ばかりは、何ともいえない顔をして、腹のそこから云つてたことよ」

「お父さん、なんて云つてた？」

「ああ、男の子ひとり、なくしてしまつたか……つて」

「ぼくが即死したと思つたんだね」

「そうよ、それやあ、お母さんだつて、どきツとしたわ。病院へ来てみるまではね。でもまだ、あの日一晩中は、お母さんが枕元に付きツ切りで居たのを、おまえは全く知らなかつたでしょう」

「知らない」

ぼくは首を振った。そして、又すぐ、

「……すこし、知ってた」

と云い直した。

当時の事も、てんで記憶には少ないのに、母の印象や、母と二人きりで居たときの場合は、こんな些末な会話の端さえ、ふしぎに今も鮮やかなのである。ぼくにとつての母は、たしかに恋人以上な何かを持っていたのだろう。特に又、この病室での印象が濃く残っているのは、その折母がぼくに向つて、父の前では見せてくれない愛情のふところを大きくはだけて、ぼくの顔を添え乳してくれたむかしのように、抱きしめてくれたからであつた。

そして、そうしながら、母はぼくの耳元へ囁いた。この折の母の息の香や肌の温みは、十九の子にも永遠に忘れられないものだった。ぼくの生涯に大きな転機と勇気をそれは与えてくれた。

「英ちゃん」と、母はぼくの顔を抱くようにして囁いた。「――ね、英ちゃん。体が癒って、この病院を出たら、どうしたいと思っっているの。十九だものね、あんたも」

ぼくは甘えた心地で眼をつむっていた。尾骶骨の辺がまだズキンズキン痛かった。退院後の事など何も頭になかった。体の恢復は、ベッドの安息所から出て、再びドツクの冬風や家庭の貧苦に当ることを意味するのだ。ここを出てから先の事を考えるのは、

空恐ろしい気もちもあった。

「ねえ、……またドックへ勤めるのは、あんたも嫌なんでしょう、辛いんでしょう。お母さんは、こんな事のない前から、毎朝のよう、おまえのお弁当を詰めるたびに思っていたの。あんな危険な勤めは、どうかして止めさせたいし、おまえも、年頃だしと思つて」

「だって今、ぼくがやめたら、困るだろ、お母さんも」

「それは困るけれどさ。こんどこそ、病院を出たら、思いきつて、お父さんにお云いなさい」

「なんて？」

「いつも、胸に思つてることをさ。……あんたの望みをね」

「東京へ出して勉強させて下さいって云うの」

「ええ。お母さんも、それとなく、お父さんに、おすすめておくからね。お父さんも、こんどの事では、ひどく感じていらつしやるから、きつと、ゆるしてくれませすよ」

「けれど、ぼくが居なくなったら、お母さんだって、心細くない」

「もう、家の事は心配しないで……。お母さんの事も。……それより、おまえは、もう、おまえだけの方針を取って、苦学するなり、東京で働き口をみつけるなりしておくれ」

母は、そう云って、急に、あらたまつた口ぶりで、

「有難うよ。……英ちゃん、長い間、よく働いてくれたわね、もうおまえは、おまえの道を進まなければ」

それから十分か十五分後に、看護婦が昼の食事か何か持って入って来るまでは、ぼくは母の胸から顔を離さずにいた。看護婦の山田さんに、母はいつも何か心づけの物を持って来ては、息子のみとりを、心から頼んで帰るのだった。吉田町の家へ移ってから、家計の内面は依然火の車だったろうし、父の性情も急に変ったわけではないから、病院へ来ても、その後は、母も顔を見るだけ、いつもせかせか帰りを急いだ。けれど、それっ切り何も云わなかったが、母の気もちと、ぼくの心は、ここを出ないうちに、かたく極まっていた。

退院したのは、十二月の末だった。

さすが、ぼくの健康で家に帰った姿を見ると、父も「よかった」

と何度も云つて、しんから欣しそうだった。

その機嫌を外はずさないうちにと、その日か翌日のうちに、ぼくは改まつて、父の前へ、日頃の希望をのべてみた。ドツクで死んだと思つて、ぼくに暇を下さい、東京へ出て、苦学します。そして、職業に就いたら、一家を迎えて、東京で生活するような方針を立てますからと、必死な決意が、自然、大人びた口吻ともなつて云つた。

案外、父はかんたんに、「うむ、やってみるさ」と云つた。決して、いい顔つきでもなく、呻うめきみたいな返辞だったが、「苦学か。まあ、苦学もいちどは、やってみるといい」打つちやるように、ゆるしてくれた。

苦学とか立志とかいう文字が、青年の脳裡に強い意欲と夢をもたしめていた時代である。父は、ぼくも流行青年病の一人と見ていたものだろう。その点、娘時代を近藤真琴の塾で育てられた母とは、違いがあつた。芝新錢座の近藤塾に勉強していた沢山な若い人々の夢を、母は娘時代に知っていた。だから、子のぼくが、十九ともなり、十九の年も、終りかけている今を、父以上、本気になつて案じていてくれたかと思われる。

こればかりは忘れはしない、年暮の三十日であつた。ぼくは生れて始めて、家という巣箱を出た。父と母へ、改まつて、暇乞いとまごいをした。母はその朝、ぼくの門出の為に、赤の御飯を炊いてくれた。小さい弟妹たちも交せて、干魚の尾頭おかしらつ付きで、みんな



朝飯を食べ、それから母に送られて、桜木町の駅から汽車に乗った。

いまから考えると、ちと滑稽である。けれど、その頃は、桜木町駅を離れる汽車の窓から、ホームに立ち残っている母や小さい者たちへ、涙を溜めた目で、離別のハンケチをいつまで振ついても、決して、それが衆目にも、おかしい事ではなかつたのである。それほど、横浜東京間の距離は、まだ遠かつた。

汽車が、高島町辺にかかると、車窓の右側に、船渠会社の構内が、すぐ、まる見えに望まれる。一号ドックにも、二号ドックにも、入渠船のマストが見えた。今日もその足場で生命いのちがけの作業をしている木靴の仲間の顔が、あれこれ、ぼくの眼うに泛うかんで

いた。長い間、世話になった組長の猪子さんに、黙って去って行くのが、悪かったと、急に思い出されたりしていた。

それと、もひとつ、心にすまない事が残っていた。船具部仲間が無尽である。十円取りか、十五円取りか忘れたが、何でも必要があつて、ぼくは途中でせり落していた。で当然、あとの掛け金の義務がある。ついにその債務を、ぼくは恩人の猪子さんに背負わせたままで横浜をあとにしてしまった。今でも、これは返してないものである。今日まで、ただすまないと、何十年も思つて来た。

どうしたのか、ぼくは新橋駅まで行かず、品川駅で下車してしまつた。八ツ山下の賑わいを見、もうここが東京かと、慌てて降

りてしまったものとみえる。

紺ガスリに、黒木綿の兵児帯。ただ駒下駄だけが、新しかった。母が買ってくれたのである。それと、出がけに、母がぼくへくれたガマ口に、一円七十銭入っていた。いのちから二番目の物と大事に持っていたのだろう、この銀貨銅貨取り交ぜての額は、はつきり覚えている。

## 上京記

その頃の、苦学という事、東京へ出るといふ夢は、当時のぼくから青年にとつては、最高の希望を、最低の手段で掴もうとする唯一の道であつた。

封建中国のむかしにも、洛陽らくようへ上つて進士しんしの試験を受けるのを青春第一の関門とした若人たちが——笈キツヲ負ウテ郷関ヲ出ヅ——と悲歌したが、そんな気もちに似たものが、明治末期のぼくらにも、やはりあつたのである。

それはよく出世主義の世態と間違われるが、当時の風潮は、あながち金持ちや高官を目ざす拝金昇官思想だけに依るものとは考へられない。もちろん、資本主義の隆昌と時の国運が醸成したも

のにはちがいないが、純粋な志学青年も、芸術家の生涯を夢む若人も、みな慘<sup>さん</sup>憊<sup>たい</sup>たる思いを越えて、東京へあこがれ出たものだった。その事は、後年一家をなしても、決して、富裕にもなれないし、食うや食わずの大家すら存在した当時の文学者や画家にさえ一生を賭<sup>と</sup>して成ろうと志す未来夢の持ち主が、本郷、神田辺を中心に、うようよ居たのを見てもわかる。

むろん、押しなべて彼らは一様な貧書生であつた。しかし書生の名には誇りがあつた。彼ら自体に一つの節操と制裁をも持つていた。軽薄を嫌つて、持ち前の野性、その蛮カラ振りを都人士の中に振舞うのを快とした。現代のアルバイト学生とたいへん違うところは、明治の若さには、総じて楽天的なものが溢れていたこ

とである。彼らの未来夢の信念が演じる稚氣ちぎや滑稽にたいして、社会人は寛大だったし、また一般に、書生さんなるものを愛する気もちが、庶民全体の中にあつた。現今のように、学生と大人とが対立し、蔑視べっしし合うことはなかつた。大人の狡才こうさいを倣ならつて、抜け道や横丁を巧みにくぐろうとする智恵を持たない若さだつた。人生の門戸の正面から堂々と、唯、努力と勉強に依つてのみ通るものと極めてゐる時代の例であつたから、一般人の愛や同情に媚へつらび諂へつらうでもなかつたのである。当時の川柳家阪井久良岐くらかきの句、

いまに見ろ見ろよと歩く永田町

というのは、よく当年の彼らの気もちを代弁していたものと言つていいだろう。

ぼくの出京希望も、間違いなく、そんな時代風潮のせいだった。品川駅前に乗った電車の窓から、漫然とただ街を見ていたが、長い区間、飽くのも覚えなかつたのは、出京第一日の不安やら触目の事々に新鮮な驚きを抱いていたせいであろう。もちろん、東京の地理は何も知らず、電車に乗ったものの、どこで降りるあてさえなかつたのである。

終点へ来てしまった。本所の緑町であつた。

日が暮れたら、木賃宿きちんやどでも捜すつもりだったが、ふと町角の

貼り紙に「職業を求める方はお出で下さい」とあるのを見つけ、

探して行くと、相あいおい生町二丁目の裏通りに、その家があつた。見

た所ただのしもたやでガラス障子が閉まっている。表の小さい看板に、日本基督教会青年部職業紹介所とあつた。多分間違いはあるまいと、おずおず訪れてみたのである。そして、はからずも出京の第一夜は、いや、それがもう年暮の三十日だったので、正月の四日過ぎまで、ぼくは、ここの若いクリスチャンのインテリ夫婦が家庭的に営んでいた紹介所の二階に置いてもらったのであつた。

この前後の事は、以前オール読物の誌上で、随筆としていちど書いたことがある。で、簡略にするが、職業紹介所という文字を、世間に見たのは、ぼくにとって、その時が初めてだった。——と



いう事を友人に話したら、その友人は、いや明治四十三、四年頃なら、日本でも職業紹介の制が民間に創始された極く初期か、或いは、基督教会青年部のその若いインテリ夫婦が最初の試みをやった人かもしれない、おもしろい因縁だから、ひとつ調べておこう、と云ってくれたが、まだ以後の返辞は聞いていない。

とにかく、ぼくは運がよかった。路傍をまごつく事もなく、又一円七十銭しかない乏しいのうちゅう囊中もそう減らさずに、正月を越せたのだった。食事は外のめし屋へ喰べに出かけ、一回五銭か六銭で足りた。横浜では、小さい時から、教会にも折々は行ったことがあるので、若いクリスチャン夫妻とも、多少宗教的な話もできた。それに自分にはまだ、朝々霜を踏んでドツクへ通った勤労

癖が身に沁みていたから、云われないでも、門口を掃いたり雑巾がけを手伝うぐらいな仕事は、義務として、何の卑下も億劫おっくうでもなくサツサツとやった。

鼻下に優しい髭のある知識層らしいその主人は「君ネ、勉強しながら働く口となると、実際はなかなか少ないんだよ。けれど、君なら保証して世話して上げられそうだから、きつと探して上げますよ」と、毎日、ぼくの職探しの為だけのように、どこかへ出かけて行った。そしてたしか正月五日だったかと思う、丸ノ内の或るパン屋へぼくを連れて行ってくれた。

いま考えると、そのパン屋は、数寄屋橋から日比谷交叉点へ出

るあの大通りであつた。けれど当時は、日比谷寄りの方が、サン  
ドイッチの一片の如き三角な街になつていた。そして街の尖つた  
先が、数寄屋橋方面へ向いており、大きなパン屋の店がその角  
地を占めていた。

あいにく店主が不在で、長時間待つたが、会えずに帰つた。す  
ると翌日、もう一軒べつな口があるが、そこへ行つてみるかとの  
話が出た。そこで急に気を変えて、こんどは紹介状だけを貰つて、  
一人で行つた。本所菊川町の小さい螺旋釘らせんくぎ工場であつた。

五十がらみの素朴な工場主であつた。物を云うにも、咄とつとつ々と、  
どもる癖のある人の好きそうな人で、自分も工員とおなじ油ジミ  
た作業服で、一日工場で立ち働いていた。食事付き日給二十八銭、

宿舎費はべつ。日曜は休む。仕事は午後五時半までとの事。何か自分の条件に合う気がしたので、すぐ使つて貰うと決め、その晩から工場の二階に八、九人の職工たちと一しよに寝た。

ここの工場主もクリスチャンであつた。つまり紹介先はみな日本基督教会のメンバーだつたものだろう。工場での仕事は、至極単純なものだつた。一台のラセン削り器械を受け持つて、終日、しんちゆうくず真鍮屑を足もとに溜め、手とペダルを動かしていればいいよ  
うな仕事にすぎない。けれどこれが、毎日の夕方になつてみると、全身労働にも劣らない疲労になる。晩の宿舎では、誰も彼もくたくたになつていて、およそ書物を手にする者などは一人もいない。自堕落と不潔と無希望な沼に見えた。

母からはよく便りをくれた。ぼくも出京以来、毎日のように手紙を書いた。安心するようにはかり書いたので、母は、ぼくがもう志望どおり苦学の方途をえて、勉強の緒についていると思つたのか、小包便が届くと、母の夜業に縫われたらしいシャツやら学生股引にくるまれて、必ず何冊かの本が出て来た。欲しいと思つていた竹越三叉さんさの二千五百年史などわけてうれしかった。それと、或る時、〃あやめ〃の二十匁が一しよに出て来たときだった。家にいるうちから、父には内緒で、煙草の盗み喫みをやっていたばかりの煙草好きを母は知っていたのである。その折の小包は、女物のつづれた腰紐でくくつてあつた。覚えのある母の腰紐なのであ

る。捨て難くて、自分の寝衣に締めて寝た。機械油だらけな仕事服のズボンの下にも締めていた。すると仲間が見つけて、「……あれ見や、あんな赤い紐を、肌身離さず締めてやがる。いろ女も、本望だろうな」と笑い合つた。けれどぼくには、その擲揄やゆが、ちつとも不当には思えなかつた。離れてみると、母は、ぼくには恋人であつた。いや恋人にも増して、箱弁当の飯を油手で食べている間も、思い出されてばかりいた。

ふた月三月いるうち、「ここでは勉強も」という焦躁に駆かられた。出した。依頼心というでもなく、ふと暗中摸索する気もちが、ぼくを闇夜へ追い出していたのである。或る晩、工場が退けてから、ぼくは青山の伯父の家をさがして歩いていった。

伯父の斎藤恒太郎は、ぼくが幼少の頃、いちど母に連れられて行つた覚えのある北白川宮の邸内から、その後、青山南町へ移つていた。と分つていただけで番地も何も知らないのだ。

それに、片道五銭の電車賃が無くて、ぼくは本所菊川町から青山南町まで歩いたものだ。交番だけでも幾力所訊き歩いたか分らない。唯、伯父の現職は、学習院英文科の教授というだけは聞いていたので、それを頼りに探したのだった。そして漸く、探し当てはしたけれど、もう夜も十二時近い頃だったかと覚えている。

伯父はひどく吃驚びっくりしたらしい。

「え。おいくさんの息子だつて。あの英さんという子か」

という声が、玄関にまちかい奥の一室でしていた。しかし、

「お上がり」とも云われない儘、ぼくは古風な式台造りの片隅に腰かけて小さくなっていた。長い間待たせられた。その間に文金の高島田に結った令嬢風のひとがお茶とお菓子を供してかくれた。ぼくには、従妹いとこにあたる園子と呼ぶ女性とは分っていたけれど、何のことばも交わせなかつた。

ほどなく伯父はむずかしい顔して玄関に姿を見せた。鳥羽藩の士族出で、攻玉舎の英語教官から宮様の進講係となつて、現在、従五位じゆの学習院教授という明治の英文学者である。神経質な細面に金ぶちの眼鏡をかけていた。その眼鏡ごしの視線に、ぼくはもう後悔にせぐられていた。到底、自分の望みなどを訴えても、理解されるはずのない別世間にいる親戚先などへ、わざわざ恥かし



い思いをしに来るんではなかったにと、未熟な分別も湧いて、居たたまれなくなり出していた。

けれど伯父の方は、時ならぬ深夜だし、何事かと驚いたにちがいない。「家出して来たのか」と、まず訊ねた。「いいえ、母も承知の上で、苦学しに出たのです」と、有りの儘をぼくは答えた。そして、駄目だとは思いつながら、

「どこか、塾の学僕か、学校の小使みたいな口はないでしょうか。書生に置いて下さる所があれば、なおいいんですが」

と、志望をのべた。

けれど伯父は全然受けつけはしなかった。無断で出京したに違いないと見、流行の苦学もうじや亡者を諭戒するような語で、あたまか

らぼくを叱った。「まして、おまえの家では、おまえが居なくなつたら、困るじゃないかね。お父さんは働けん人だというし、おいくさんだつて、まだ小さいのを沢山抱えている所だし」と云つたりした。そして「汽車賃だけは上げるから、帰んなさい。帰つて、家の手助けをせにや不可<sup>いか</sup>ん。おまえは、おいくさんの長男ではないか」と云うのみで、何も耳には入れてくれないし、又ぼくも、ここまで来る途々考え抜いていた事的一端すらも、口に出すことが出来ずにしまった。

訪れた悔いをその儘抱いて、ぼくは夜半の一時頃、斎藤家の門をすすご辞した。金も無いが、もう電車も通っていない。青山

の果てから本所の果てまで、又ぶらんぶらん歩いて帰った。

生来の空想癖にすぐ遊ぶせいか、ぼくはこういう場合も、道の遠さとか、人の辛さとか、そんな事は余り心にこたえない。この晩の長い帰り道も、何を考え考え歩いたろうか。腹も減っていたに違いないが、さっぱり悲痛な気持ちはなかったようだ。親戚の冷たさとか、世間の無理解に不平をなすりつけてみるとか、そういう卑屈感いたは、少しも心を傷いたませていなかった。至極のん気に、夜靄のさまよいを愉しみつつ、夜明け近くまでに、ぶらんぶらん菊川町の工場へ帰りついた。そしてひと寝入りして、翌日は又、黙々と、ラセン釘削りの器械を廻していた。

あとで反省してみると、昨夜の事は、母へも悪い事をしたと思

った。ぼくの家が、転々と、どん底からどん底へ落ちて行つた多年の間も、引つ越し先を尋ねては、先方から訪うてくれるような人はひとり齋藤の伯父だけだった。しかも、その人に嫁いだ、ぼくの母の姉は、もう故人となつて、後添えのちぞの夫人が家庭にいるのである。そんな事も思わず、母に黙つて、齋藤家を頼つて行つたのは、無分別というものに極つている。ぼくは母への手紙に「：もう行きません、何があつても頼りにはしません、齋藤家へ謝つておいて下さい」と、書いた。

しかし、齋藤家の方でも、後には、ぼくの出京が、母も諒解上のことであつたのを知つて、ひどく気の毒がつたそうである。という話を、後年、従妹から聞かされた。その従妹の園子は、まも

なく横浜の岡野銀行頭取の石渡又七へ嫁いで、つい昨年まで、鎌倉に住んでいた。この「忘れ残りの記」の初めの方に書いた、ぼくの母に関する娘時代の事は、従妹の記憶に依る所が多かったのである。けれど、その従妹も、ついこの春亡くなった。

菊川町界隈の沢山な小工場の中に、S手提金庫製作があつた。四月頃、ぼくはラセン釘工場の主人とも諒解の上で、S工場へ籍を変えた。勤務時間、賃金、勉強する条件なども、S工場の方がよかつた。手提金庫という物が盛んに市場へ出はじめた頃で、工場も新しく、活気があり、会社は儲かっているらしかつた。

製缶部、洗滌部、塗工部、包装部などと小さく分れていて、ぼ

くは事務員の名で入ったのだが、雑役が半分だった。製品が溜ると、品別伝票と数量簿を持って、荷馬車や荷車に付き添い、薬やげん研堀ぼりの本店倉庫へ収めに行く。倉庫や本店でよく見かける紳士然たる痩せぎすの、いつも渋好みの洋服を着ている四十恰好の人が、あるときぼくへ、

「君は、工場に泊っているのか」  
と、訊ねた。

この人が社長さんと聞いていたので、ぼくは「はい、そうであります」と云ったような口調で固くなって答えた。その時は、何か簡単なことだけしか問われなかったが、ふた月三月たった頃、こんどは工場で、「一度、夜でも、ぼくの家へ遊びに来い」と私

宅の書いてある名刺を渡された。

両国河岸の百本杭の辺も、まだ閑静な家やら木々も残っていた頃である。指定された晩、ぼくは百本杭の社長邸へ恐々行ってみた。晩飯を御馳走してくれた。そしてS氏から「君は、苦学しているという事だが、工場勤めでは、勉強も出来まい。それに本所辺の夜間学校などへ通ってみたところで、将来の足しにはならん。工業方面へ出たいなら、蔵前ぐらいは、やっておかなくっちゃ駄目だ。蔵前高工を目ざしたらどうだね」というような口ぶりだった。

家庭の都合で、中学も出ていません、と答えると、「だから、

ほんとに君が勉強したいのなら、勤務も変えて上げる。蔵前とは限るまい。どんな方法でも考えられよう。保証人にもなつてやる。ひとつ、熟考しておき給え」と云い、それから自分の事業は、発展の途上にある。将来は南洋にも支那にも支店を拡げるつもりだ、というような事もぼくへは話した。何で私宅にまで、ぼくを呼んで、そういう好意をもらしてくれたのか分らないが、とにかくその晩ぼくは感奮して帰った。思いがけない幸福に囁かれて寝つかれない程だった。

けれど次の朝にはもう諦めていた。S氏の好意は断るしかない。出京以来まだ半年だが、その間に、何十通となく見た母の手紙には、唯一人の稼ぎ手のぼくを失って、以後の苦しさは、つつみよ



うもないものが窺うかがわれる。どうかすると、四日も五日も母の手紙の来ない日がある。そんな時は、郵便切手も買えない為にちがいないと思ひ、ぼくは自分の手紙に添えて、時々郵便切手を十枚も二十枚も入れておいた。また二円でも三円でもゆとりがあれば小こ為替がわにして送った。それでも安心とは思えなかつた。吉田町の旧住所は、高島町何番地とかの、ぼくの知らない所に変つていた。

塗工部の通勤工に、Yさんというのがいた。浅草鳥越町から通つていた本職の塗師職人である。多少ぼくの事を聞きかじつてか、昼休みの或る時、ぼくを人無き所へ手招きして、「とても、いい仕事があるんだがネ」と、囁いた。「……どう、一年辛抱しない

？ 眼をつむつて一年辛抱すれば、いい金になる。仕事は、横浜へ出す輸出物だし、君も横浜の人だしさ」と、熱心にぼくを説いた。会津訛なまりはあるが、下町肌で小ぎツぱりした気ツぷの人だし、日頃も親切屋さんと言われている程なので、一も二もなくぼくは耳傾けて、そのすすめに動かされた。

苦学するなどという夢は、半年にして破れていた。それ以前に、ぼくは本所林町の夜間工芸学校へ志願し、すぐ許可されたので、夜はそこへ通学していた。小工場の物置を改造したような所に黒い机が四、五十並べられ、靴や板裏ばきの儘、本所界限の徒弟や子弟が集まって来る。工芸といつても、図工の養成が主で、初歩の図案、幾何きかなど、単純な課目に過ぎない。それに生徒のだらし

の無さ、ぼくは失望にくるまれて、転校などを思っていた。

そんな矢さきにYさんの耳よりなすすめだった。苦学というのは、身一つの学問へ多年をかけることで、金を得る道ではない。ぼくの義務は金をうる早道に就くことだった。母も後の苦しみは承知でぼくを東京へ出してくれたのだが、今は貧苦にひしがれかけているのだろう。ぼくはYさんの世話で、その後まもなく、浅草三筋町のT氏の許へ、一年ぼっきりの約束で、輸出金属象<sup>ぞうがん</sup>嵌<sup>がん</sup>の下絵描きの徒弟に住みこんだ。

T氏は若松の人で、その頃、同郷の会津蒔<sup>まきえ</sup>絵出身の者は、集团的に東京へ出て来て、もっぱら浅草下谷界隈の裏町に住んでいた。

T氏もその一人で、独身だった。開盛座という芝居小屋があり、その近くの露地を入った四軒長屋の一番奥で、四畳半に六畳の間きり。師弟二人の男世帯、工房はその六畳で、漆を扱う小机ほどな定盤じようばんと、蒔絵筆さえあれば足る至極ちんまりした仕事である。だから局外者の眼には、一見、従来の日本蒔絵でもなし、絵付けする物はすべて真鍮材の金属だし、これが何に成つてどういう用途に向くのやら分らなかつた。

輸出ダムシンと称されて、金属面へ漆で描いた様々な図案を、化学薬品に浸して腐蝕ふしょくさせ、その凹刻面に、鉄サビ漆を沈ませて研ぎ出した上、金、青金、銀などのメッキをかけて、さらに精巧な毛彫りをかける。京都には古くから駒井象嵌と称する独得な

鉄地象嵌の伝統があつたが、それを近代化し、輸出向きに、量産する手法を用いたのが、このダムシン金属製品だつた。

腕輪、ネクタイピン、たばこ 蓑入れ、ヘヤピン、耳飾り、ナプキン環、花瓶、文房具類、装身具、家具の類まで、種類はたくさんあつた。向く先の多くは、南洋市場らしく、当時は横浜商館の扱う品目のうちでも、かなり重位を占めたものらしく、東京には仲買人が来ており、毎日のように下職の家を廻つて、昼夜、督促にあるいているような盛況時だつた。

だが、何と小さな工房か。もちろん、下職や下絵描きの人々は、浅草下谷界限に、何十軒とあつたわけだが、おそらくT氏ほどなささやかな世帯はほかになかつたろう。T氏は会津人の辛抱づよ

い性格と、男ながらたまかな生計に達していて、ぼくが住み込むと、台所の水仕事から、味噌醤油、八百屋物の買出しなど、一切はぼくの任にまかせられた。けれど、味噌二銭、塩鮭の切り身、一銭五厘のを二切れ、といったような買物のさしずも、T氏自身が小銭を数えて命じ、経済上の才覚はなかなかゆるがせな人ではない。思いきや、ぼくは二十歳になって、初めて人の台所で、米をとぐことを覚え、夢みていた苦学の灯下に書を読む代りに、御飯のむし加減のむずかしさを学ばなければならなかった。

## 人生中学通信簿

どうかすると、今でも、ぼくは人から「——絵もお上手なんですよ」などと、からかい半分か知らないが、乞われたりするところがある。

とんでもない。ぼくが絵も描けるらしいなんて思われたその因<sup>もと</sup>を洗えば、赤面至極だ。前述したように、苦学目的で上京した当時、蒔絵師T氏の許で多少蒔絵を習ったり、図案を採<sup>と</sup>るため、琳派や土佐画の模写に眼をただらした事があるので、何かの折、いたずら描きでもぬたくると、今でもその下地<sup>したじ</sup>が意識なく出るのである。絵なんて云えるものではない。むしろ、そういう工芸目的

だった下地に妨げられて、後々まで、ぼくには純な絵は描けなくなつてしまつたようなものだ。

浅草三筋町界隈は、まだ旧東京の庶民暮らしが、そっくりその儘、横丁や長屋の隅々にまで残つていた。煮豆屋と荒物屋の横で、四軒長屋が二た側になつており、T氏の家は、ドブ板のいちばん奥で、なめくじ蛞蝓あとの這い痕をもつた戸袋やらガタピシいう暗い格子戸がそれだつた。

どこも六畳三畳二畳台所だけの棟割りだが、むねわそれでいて二坪三坪の小庭がみな付いており、目隠し板に八ツ手や楓をかえで覗かせ、夏ならば朝顔や胡瓜を絡からませたりして、けっこう庶民の雅懐を愉し



むには事足りていた。

それと、隣り三軒、前四軒の箸茶碗の物音から、喜怒哀樂の声まで、手にとる如く聞え合うので、それぞれの職業、家族、出入りまでが、一軒のものとして判断される。で、終日、蒔絵師用のじょうばんと称する机に似た物の前に坐つて、輸出物の下絵仕事に根気をつめていても、ぼくは倦むことを知らなかった。

横浜の下層と、東京の下町との、違いもわかった。その前に読んでいた一葉の作品やら明治から江戸期の文芸にも見えた風物やら人の生態などにも少しずつは触れている気がした。また、この頃から再び江戸文芸にあらためて昵みなみはじめた。それも、秋成や西鶴などの高踏的なものより、鯉りじょう丈の八笑人のような作品の人

物に、より多くの親しみを感じていた。

実際に、鯉丈や一九の好モデルになり得そうな人間がまだザラに居た三筋町界限やら旧東京の下町だった。もう首都としての爛らん漫まんから頽廢期に入っていた古いものに、かえって、ぽツと出のぼくは、新鮮と驚異を覚えていたものとみえる。俳句を忘れて、川柳を作りはじめたのも、そして当時、日本新聞の客員であった井上劍花坊けんかぼう氏に、とつぜん来訪されて面喰つたのも、その頃の事だった。それが縁で、休日に当る日には句会へも出た。柳樽寺発行の「新川柳」の同人にも加わったりした。川上三太郎氏の名も同人の中にもみえた。だが、三太郎氏は上海にいるとかで、その頃はまだ顔を見せていなかった。

何しろ師弟二人きりの男世帯だ。米を磨ぎ、又カミソを搔き廻し、七輪に味噌汁を掛けたりしながら、ぼくはT氏に師事して蒔絵、象嵌下絵などの、習得をうけた。幸い、絵は幼少から好きだったから、のみこみは早かった。T氏と同郷の会津蒔絵師の仲間がよく遊びに来ては、ぼくの使う面相筆めんそうふでのうごきや構図を覗いて「初めてじゃあんめえがのし。ろくに年期サ入れねえで、こげんな絵が描けるちゆう事があんますか」と云つたり「Tさんサ、こんなよく稼ぐ弟子をどツから目ツけて来なすつた」と、羨望したりした。また、同じ会津人の寺崎広業門下の芥川某という画学生なども、「君イ。絵が好きなら、なぜちゃんとした日本画家を

志さないんだ。広業先生に話してあげるから書生になれ」と、おだてたりした。だがぼくは、とうに画家志望などは捨てていた。苦学生たる事もあきらめている。唯紹介者のYさんの言を力に、一年間は辛抱して、両親や弟妹を東京へよびよせ、細々とでも食ってゆける緒につきたいと、それだけが、目標だった。

——前後するが、ここへ来る前の四月中旬、吉原の大火があった。

それから吉原復興の本ほん普請ぷしんが出来上るまでの数カ月間は、仮か店りみせというものであった。独り者のT氏は、従来、必ず月二回吉原で必要を処理することを、その貯蓄思想や暇を惜しむ点からも、

規定していたらしいが、飯店風景となつてからは、面白さも加わり、ぼくという留守番もできたせいか、俄然、回数がひんぱんになつていた。

だから週に幾晩かは、ぼく一人である。かかる夜は愉しかつた。母に手紙を書いたり、読みたい物を読み耽ふけつた。朝になると、朝帰りの仲間が必ずそろそろ立ち寄る。ゆうべのもてたはなし、ふられたはなし、ワリ勘のやり取りなど、人にもこの家は気楽だつたに違いない。職人なので長尻をする者はなく、T氏もそんな日のあとは馬力をかけて仕事に打込む。急ぎ仕事かたてこむと、徹夜続きもめずらしくない。仲間はT氏へ面と向つて「女郎買いのヌカ味噌汁」と云つたり「そんなに、眼さ赤くただれるまで、金

ばかし蓄め込みなすツて、どうする気かね」とからかったりするが、T氏の貯蓄心と吝りんしょく嗇は徹していた。女郎買いを除いた以外では、憑つかれた人のような面もあつた。たとえば、婚礼の折詰でも提げて帰ると、その鯛一尾を、幾日間も茶だんすから出し入れして、焼き直しては一人で喰べ、あとの骨でも、味噌汁に入れろと、ぼくへ命じる、といった風であつた。横浜ツ子の放漫な氣質に馴れていたぼくには、初めは何とも奇異な人にみえたが、後にはその徹底ぶりに感服した。問屋先でも、T氏の吝嗇は有名だつたが、しかし信用のできる堅かたじん人、期日を守る勤勉家としては、誰にもみとめられていた。

のべつ勤勉家とサシでいるので、ぼくも勤勉家でないわけにゆかない。ヘコ帯紺がすりで、沢庵漬や干魚を提げたり、共同水道へ、水汲みに行くなどは、初めはテレたが「Tさんとこのお弟子さん」と、長屋中は親切にしてくれた。そのうちに長屋端れの共同水道へ水汲みにゆくのも、ひそかな愉しみになっていた。折々、水道栓でぶつかる初々しい娘があつた。紙人形のように薄手で弱そうな子であつた。露地で逢つても俯し眼に過ぎるだけだつた。が、彼女の家の裏は、こつちの格子先だから、彼女の朝夕の声も、家族の暮らしぶりも、居ながらにしてよく分つた。

花簪や花櫛の摘み細工、と云つても、現代人には通じ難いが、下町娘の結綿ゆいわたや桃割ももわれなどの髪によく挿したその造花仕事を、

一家中でやっていた。両親も兄弟も、みな上方かみがた弁なので、彼女も東京生れではあるまい。「N子、N子」と呼ばれるのを、つつ抜けに聞いているから、ぼくは名まで知っていた。自分の思い過ぎか、ぼくがドブ板を踏んで外へ出ると、彼女も買物に出て来たりした。近くの縁日でもよく行き会った。啞あせん蝉作の流行歌——ああ夢の世や夢の世や、のメロデイがどこかでする青白いアセチレン瓦斯の明滅が、ひどく印象的にぼくへ彼女を焦やきつけた晩もある。開盛座の立見席で気づくとすぐ側の人中にN子の横顔が見えたりした。しかしどんな機会にも二人は口をききえなかつた。とつぜん、真正面に行き会ったときなど、こつちの胸がつまる程、彼女の眸にもうごく色を見ないでもなかつた。けれどその反れ



てしまうことは燕と燕のように、はや迅かった。ぼくの恋に似た経験といえ、みんなこんな不熟で終っている。臆病なせいではない、境遇のせいだった。彼女は、その年の末頃、忽然と、長屋から見えなくなつた。上方の花柳界から舞妓まいこに出たらしい。そして、まもなく上方で急死した。——という消息は、彼女の実兄から後に聞かされたのである。その人は、妹の死をぼつんとぼくへ告げながら、「——妹は、あんたの名を、何度も何度も、死ぬまえに云つたのだすえ。いま初めてお打ち明けますが」と、云つた。終生の悔いである。せめて上方へやられた事情や病氣の模様でも、もつと詳しく訊きおくべきであつた。ところが、それすら訊き返す勇気がなかつた。先もそれしか云つてくれない。あとは何か、

ぼくの俯し目を憎しげに睨めすえていたように受けとれた。

T氏の許に在る間に、母は二度ほど上京して来た。そしてT氏とも親しく会い、ぼくの次弟素助の身も頼んで帰った。又、それから後、どういふ工面をしたものか、母は一家をまとめて、東京へ移つて来た。

行つてみると、本所緑町のガード下に借家していた。見るからにひどい家だ。湿度もだが、光線の入る所がない。父の病氣の為にもわるかろう。さつそく、ほかを探すことを母にすすめた。

それはよいが、家に居るものと思つていた次女の力エが見えないので、母に訊ねると、長野県のS市へ行つてゐるという。土地

で一流の旅館料理を営んでいる人が、将来の事もかたく約してくれたので、カエにとつても、むしろ幸福であると、養女にやったというのである。

ぼくは、どきつとした。前に、幼い浜子を、遠くへ出して、諦めきれない死を見てもいるので、「大丈夫？」と念を押した。母は充分先方を信じているらしく、「こんどは、前のような人の世話じゃないから……」と、いかに先の養父母となる人が好人物か、土地での有力者であるかなどを、話して聞かせた。けれど誰の世話で、どんな形式でやったのか、その辺は語りもしない。多少、世路の複雑を舐め<sup>な</sup>歩いたぼくには、母の信じ方が、危ぶまれてならなかった。母は養女形式の戸籍移讓が、十五歳の少女に付帯さ

れたばあい、それがどんな権利や利用価値を生むかなども、てんで知ってはいないのである。また旅館料理というものの内容なども分っている母ではなかった。だが、その辺のうときは父も同様であった。もつとも父にはもうこの逆境から脱しようとする闘志も全く沮喪そそうしていた。口癖に「ばかにするな、おれだつて、今にもう一旗は」と云っていた、その口癖もなくなっていた。潰瘍だけでなく、心臓もわるい、喘息もと、体じゆう病気の巢みたいにいうこの頃だった。この良人と幼いのを沢山抱えて、母の闘いはもう十年になる。一家心中をしなかつたのは不思議である。その点、母はまったく強かった。だがその強さは冬柳の姿のようなものだった。ただ忍受であった。子や良人へするように運命にも抵

抗を知らなかった。

無知といえは可憐なる無知の人であり、愛の一型とみれば、ただ子の涙を以て洗うしかない「家」なるものの犠牲碑だった。

母は、まもなく本所の番場町辺に間借を見つけた。そして袋貼りやら仕立て物の手内職を探し、また、子供らの通学やら何やら、曲がりなりに、馴れない土地での暮しの緒につき始めた。

そんな中でさえ、母は用達しの帰りとか、寸暇があると、よく三筋町へやって来て、男世帯の汚い台所や押入れの中まで、よく見てくれた。洗濯物、ほころびの繕い、晩の御飯の仕掛けまでして帰るのだった。もちろん、T氏も母のおせっかいを好意で見

くれたし、ぼくや弟には、人の家であっても、母が立ち働く姿を見ているだけでもうれしかった。

だが、とかく病人の父は、母の留守をよろこばなかつた。三筋町でつい日が暮れて帰りなどすると、例の癩癬でよく吠鳴られていたらしい。母も、お父さんのそれにはもう馴れツ子になつたと云つてゐるが、後は必ず病状が悪いので、それにはらはらするのであつた。

冬の初め頃、母たちは又、その貧しい巢を引つ越した。吉原遊廓にすぐ近いおはぐる溝どぶのそばだつた。そこの一見、しもたやみたいな周旋屋の二階の六畳二間を借りたのだつた。

何で、こんな所へ引つ越したのだらう。昼の妓楼の裏に干し並

べてある赤い物や、おはぐろ溝の黒さを覗いて、ぼくは母の気もちが分らなかつた。弟妹の千代や晋ももう学校へ通い出しているのだ。夕方になれば遊客がそろそろ通るし、夜は茶屋のお囃子はやしやぞめきに毎晩爛ただれた空をしている。当座、母はそれと明らさまに云わなかつたが、いつか分つた。母は、昼間の幾時間かを、廓内の一妓楼へ、お針さんに通い出していたのである。そこでは、内職以上な賃銀になるし、また妓たちから、手紙の代筆だの小さい用事を頼まれたりして、余分な収入も得られたらしい。そのせいで、父の冬着も小ぎツぱりして来たし、二階住居ながら茶ダンスやら火鉢、茶卓の一つずつも殖えていた。けれどそれだけ母の骨身は削られていたのである。いや、後になって考えると、この折

の母のお針さん勤めが、ついに、それから十年後の、母の死因を  
なしていたように思えてならない。何しろ、妓楼のお針仕事など、  
考えただけでも、不衛生で危険なことに極まっている。しかも母に  
は、その危険さをも不気味さをも顧みてなどいられなかつたにち  
がいない。

どうやら、およそ二年後に、ぼくはT氏を離れて職を持つこと  
が出来た。

初め、塗師屋のYさんを介しての約束では、一年限りの契約だ  
つたが、礼勤めすべきだということで、半年延びた。が、その半年  
を送ると又、Yさんから苦情が出た。T氏も快くは暇をくれない。



その間、多少ごたごたも生じたが、仕事を出す先の〇商会の番頭や同業の口ききも手伝って、ともかく暇をとった。けれど弟と同時には、T氏の方も困るので、弟はなおT氏の許において、ぼく一人で、下谷西町に間借し、その日から仕事を探した。いちばん先に仕事を与えてくれたのは〇商会で、次いで日本橋のH商会でも、励ましてくれた。その頃、H商会主の弟で、大学の制服着の儘、よく下職廻りにも歩いてきた笠井政一氏は、いま品川区の区会議長をしている。

東京で初めて、自分の畳として持ちえたぼくの根じろは、下谷西町の髪結さんの二階であった。梯子段の上がり口が三畳、襖隣りが八畳である。だが、ぼくが借りたのは三畳の方だけで、八畳

の方には、落語家の夫婦者が住んでいた。

ぼくはその落語家を、先々代の左楽か、又は当時の志ん生であ

ったかなどと考え、よく思い出せないのである。ぼくが二十二、

三の頃、つまり大正二、三年頃の、その落語家は誰だったろうか、いちど読売のK氏を介して安藤鶴夫氏に調べてもらった事もあるがよく分らない。が、いずれにせよ、相当な師匠格だったような印象をうけている。ぼくは上がり口の三畳に机とじょうばんをすえて、終日仕事の蒔絵筆をもっているだけなので、よく頭の上を、てん屋物やら酒やらが通つてゆく。粹いきはだ肌なおかみさんで、弟子後輩もよくやって来、朝から陽気になることもある。「どう。お隣りの書生さんも、こちらへ来て、一杯おやんなすつちやア」な

んで、声をかけられたりするが、その人達の洗練された諧かいぎやく諺げんやアカ抜けた小唄など聞いては、首がすくむだけだった。

しかしぼくの三畳へも、以来とみに訪客は多かった。仕事仲間  
はべつとして、その頃もう上海から帰っていた川上三太郎氏はす  
ぐ眼と鼻の先の左竹にいたし、柳樽寺同人の誰彼だの、井上劍花  
坊氏だの、談論風発なら、お隣りにも負けなかった。そして、階し  
下の余り流行らない髪結さんの御亭主は、キナ粉をまぶした蜜団  
子たを売っていたので、こっちはそれを階下から取寄せて、番茶を  
貰うことにきめていた。

句作や江戸文学研究の上で教えをうけたことを除いても、井上

氏夫妻からは個人的にも、並ならないお世話を蒙こうむった。この事は多年いう折もなかつたのでぜひ書いておきたい。

上京前からの御縁だった。井上秋劍の名で、中学文壇その他の文芸誌に、詩や文章の選、また小説評論も書いておられた。日本新聞の上では、三宅雪嶺みやけ、福本日南などと並ぶ社会評論をも見せていたかと記憶する。論文のばあいは、劍花坊の号を用いず、必ず秋劍であった。お会いしたのは、上京後だが、その前に、ぼくが何かへ投じた漢詩のことで、返書をいただいたことがある。新体詩が興おこり、漢詩などはもう顧みる者も無かつたせいか、その事は、氏も覚えておられた。

とつぜん、三筋町の長屋へ訪ねて来られたのには、びっくりし

た。が、そういう見得のない人なのである。長州人の豪朗性そのもので、いつも書生袴、そして手提げ袋の紐を、片手の手頸に巻き、体じゆうで笑ひ、体じゆうで談じる。そして終日でも倦まない。後には、妙にぼくの親父と気が合つたものだった。どこか一脈通じるものがあつたらしい。

お住居は芝愛宕町あたごで、やがて高輪の東禅寺裏へ移つた。「遊びに来給え」といわれ、そのどっちへも伺つた。よく電車通りの洋食屋露月亭に伴われた。当時における硬派のジャーナリストでもある。じつに話はおもしろい。殊に史学家であり、文壇事情だけでなく、政界にも通じていた。ひとり長州だけでなく、薩州とか、熊本とか、なお日本の社会にはどの部門にも閥色の余影があつた。

劍花坊氏はそれらの閥臭にたいしては常に反逆的口吻を弄していた。堺枯川を大いにみとめていた。柳樽改革をとなえ、新川柳を興し、氏を川柳へ赴かせたものの一因はそこにもあつた事かもしれない。「長州人で多少、文化のわかるものは、ぼくと松林桂月くらいなものだ」と云つたりした。画壇の方にも交友は広がつた。その桂月氏とぼくとは、以後交友をつづけたのも、劍花坊氏のお宅からであつたが、そのほか氏の紹介で辱知をえた人々も少なくない。松居松葉、笹川臨風、おさないかおる小山内薫、水野葉舟、木下柰太もくたろ郎、よさの与謝野寛、倉田百三、ちよつと思ひ出しきれない程である。

忘れ難いのは、初めてお訪ねしたときの事だ。ぼくは鼻緒の切れかかつた汚い下駄をはいていた。奥さんの信子女史が、かつおぶ鰹

節<sup>し</sup>の釜飯をたいて御馳走してくれた。その味を忘れていない。

又、帰ろうと思つて下駄を穿きかけたら、ピシャンコな泥下駄が、きれいに拭かれて、切れかけていた鼻緒まで、ちゃんとスゲ代えられてあつた。

その井上信子女史は、今も御健在らしい。らしいと云つては、御無沙汰の罪、申しわけない。だが終戦後、高田保が「ぶらりひようたん」の一文の中に、信子女史の近作一句挙げて——これが何と、八十にちかい老女性の感覚であろうかと、賞<sup>ほ</sup>めていたことがある。その句は、たしか、

国境も知らず草の実こぼれ合い

というものであつた。それで御健在を知つたわけだった。

徴兵検査は浅草区役所でうけた。一家の戸籍もそのとき東京へ持って来た。検査日の当日、徴兵司令官というか、さいごの認定をうける所へ来たら、いかめしき人が、つらつらぼくの裸身と検査表とを見くらべて、

「今日の有為な青年が、そんな弱さで君どうするんか。体重とい身長といい、何たるヘツポコか。しっかり鍛えい」

と、大勢の中で、ぼくを見本において、一場のお説教を垂れた。体重十二貫、丙種であつた。

そこでは大いに赤面したが、しかし、この体を、弱虫とは自分では承知しなかつた。働くにも、遊ぶにも、何の不便不足はない



からである。

そろそろ、遊び始めた。自立してから、今まで知らなかった金が入り始めたせいもある。氷雪の下の青春が陽の目に這い出した恰好でもある。何しろ同年配の遊び友達は揃っていたし、夕方になれば夕風へ泳ぎ出すのが習性になり出した。

大勢の吟ぎんゆう友と、柴又の帝たいしやくてん釈しゃく天てんへ吟行した帰り途の昼遊びに、俗に吉原では伏見河岸とよばれる辺の安女郎に、ぼくの童貞も、五十銭程度の揚あげ代で惜しみなく洗礼をうけてしまった。

五十銭は当時にしても最下級の単位である。資金のない時は、三、四冊の書物を携えて、古本屋へ立ち寄れば、ゆうに一夜の書生天下は現出する。日本堤には、大厦たいか高楼が軒をならべ、サクラ

鍋の殿堂に、紺タビの女中さん達が、夜どおし、庶民大衆の盛夜の宴の為に声をからしていた。そこでは知識無知識なく、職別老若の差もなかった。大衆の活力を煮立て、人間の赤裸を謳歌し、どの顔も、生き生き燃えていた。——という光景やら時代官能は、高村光太郎の詩“米久”にも歌い高められている。

大学の教授と生徒とも、そこらではよく打つかった。ぼくらは屢々《しばしば》劍花坊氏、あの和尚おしょうの姿を、その中で発見した。和尚は金持ちを連れていることがある。吉原で最高級の稲本大文字、河内屋などの長廊下へ、ぼくらの汚い足痕が残るばあいは、おおむねそういう天恵な機会であつた。

花街では、和尚も屢々、浅黄ウラ扱いをうける。事実、あの人

の特徴は田舎者たることにあつた。敵あいかた娼かたの選択をヤリテ婆に問われたとき、言下にこう云つたことは有名だつた。「ほんとに惚れんでもよいから、惚れたマネをする女をよんでくれい」

遊蕩は階段の如きものか。金はなくても上りつめる。ぼくらは自分で引手茶屋遊びまで覚えた。ただぼくの取り得は、どんなに夜更けても、こつそり一人抜けて家に帰ることが常だつた。

桐佐の女将には母にあたる年寄りから「あんたはまア、お若いのに、おめずらしい」と、養子にでも欲しいような顔して云われた事がある。何の、お堅いのも何でもない。ぼくの母や病父や弟妹は、つい廓くるわの堀一重の外に、まだ二階借りしていたのだ。そ

れを考え出すと、花魁おいらんの寝顔と母の顔を見るのと、どっちがよいか、思い較べずにいられない。結局、夜半でも、つい一と足だから、そっちへ行つてしまっただけの事だった。

母は起き出して、茶を入れたり、戸外へ出て、甘い物を買つて来たりする。吉原界限に灯の絶える深夜はない。明け方近くまで話しこむ。そして母や弟妹たちの間にもぐり込んで寝る。父は遊んだ人なので、すでに、ぼくの持っていた遊蕩の匂いを知っていたであろう。

せつかく自立したのに、これでは、何の為かと、自嘲したくなつた。といつて、夕風がそよぐと、悪友が恋しくなる。手段とし

て、ぼくは西町の二階を引き払い、一時、母たちと一しよになる事にきめた。六畳二間の一方を仕事場とし、少し辛抱して、そのうちどこか、一軒建ちのよい所へ移ろうという方針である。

ぼくの収入がやや確定してきたので、母も廓なつかのお針さん通いを止め、父も体のよい日は、横丁の隠居ごかいしよみたいにな、近所の碁会ごかいしよ所へ出かけたりにして、この所まあまあ、家計は小康を得たようなものだった。

ぼくの上京以来、四たび目かの正月もそこで迎えた。だから自分の年齢で二十三の一月十五日だった。

妙にこの事に限って、日まで明白に覚えているのは、生涯の悔いを、ぼくはその日、父へのこしてしまったのである。年々一月

十五日になると、ぼくは自分を責めるが、それをここでも父へ詫びておこうと思う。

ぼくは漆筆を持って、一方の六畳で例の絵筆をもって仕事していた。冬なので、間の襖は閉めてあった。ところが、隣りの部屋で、何が、父の機嫌を損じたものか、初めの方は、聞き洩らしていたが、さかんに父が母へ怒りぬいているのである。

めずらしいことではない。しかし、この日は、ちよつと、どぎつかった。それに、一時間たつても二時間たつてもすまないのだ。母はとうに泣きじやくツている。また父の病を悪化させてはと、その為に、謝っているとしか思えない。父の云い分を隣室で聞いていると、子のぼくには、父には母への宥<sup>いた</sup>わりや愛情などは

ケチリンも無いように疑われた。そして反対に、ぼくが幼時から覚えてある限りな、父の暴君ぶりやら、母への無慈悲やら、親としての無責任さなどが、母の代弁者として、胸のうちに、煮え返っていた。でもまだ、ぼくは、齒の根をかんで、筆だけは、うごかしていた。しかし、骨肉の憎悪は、人間が原始に持っていた野性に通じるものがある。

やがて、一だん父の声が荒くなっていた。父自身も、久しく忘れていたであろう、かつての酒狂時代の、あの声に似たものがつづいて聞えた。ぼくは、ふらふらと立っていた。じつは何の考えもなく唯立ってしまったのである。トトトつと階段を降りて、下の台所から、水をいッぱいに湛えたバケツを提げて、元の二階へ

上がって来た。見ると、父はなおまだ母を前において熱<sup>い</sup>り立つている。ぼくは父の後ろへ廻った。そして、いきなり父の頭上から、バケツの水をぎつと打ツかけてしまった。寒中の冷水である。父も母もアツと云ったであろうが、ぼくの耳にも眼にも残ったものは何もない。空バケツを抛り出すやいなや、ぼくは階段を逃げ降り、凶悪犯人のように、下駄を突ツかけて、戸外へ飛び出してしまったのである。

ぼくは一日中、六区の雑踏をうろついていた。家には恐くて帰れない気がした。十二階の頂上へ上がって、腕組みしたり、ルナパークの観覧席で時間を空費したりした。そして夜の十二時過ぎ頃、そつと、家へ帰ってみた。父は寝ていた。母は起きて何か縫



物をしていたが、何も云つてくれない。けれど、ぼくの帰るのはやはり信じていたのであろう、いつもの通りぼくの寢床もしいてあつた。

翌朝になつても、父も母も、ぼくのした事には何も触れて来ない。ぼくは父の前へ出て、ひと言、謝つた。何か云い出すかと思いのほか、父はふと、間が悪そうな顔をした。いや、もつと複雑な、何とも云い現し難い顔を子のぼくへ見せた。そして「……おいく、茶でもお入れよ」と、云つた。橋場のおせんべいを茶ウケに、母もそこへ来て茶をのんだ。せんべいをボリボリ噛みつつ、ぼくは涙がとまらなくなつた。

その年、浅草の栄久町に一軒借りた。わずか四間だが、小庭もあり、まだ新堀も埋め立てられない頃の柳並木も近く、父も母も、やつとここでは、やや世間なみの暮らしに、ひと息つけたことと思ふ。

父はもう完全に、敗者の耐えに馴れ、隠居に甘んじ、小さい弟妹たちの揃った所で「お父さんは、こんな風だから、おまえ達は、兄さんを父と思え。英もひでそう思ってくれ」と云ったりした。

唯ここに、S市へやられたカエだけ<sup>だけ</sup>が欠けていた。その後、ぼくが知りえた所では、カエを養女にやる仲介をしたのは、母が打ち明けられないのも道理で、幾人かいた母の姉妹中の一人だったのである。姉妹じゆうで、その姉（——か、妹かもぼくは知らない）

一人だけが、浅草の六区に住み、小料理屋か何かしていたらしいが、後に自分の娘のお和歌さんという器量よしまで店に出して、八区の端れで銘酒屋を始めていた。

カエは、養女にというよりも常識上、売られたというべきだろう。母はその話になると、浜子の前例もあるので身を顛おのかせて泣いた。「私は何たる馬鹿だろう」と、悔ゆるばかりだった。ぼくは或る額の貯金を心がけて、それを持って遠いS市へ出かけて行った。そして親元のY館の主人に会った。カエの身を、戸籍ぐるみ返して欲しいと頼んだのである。幸いにも、Y館の主人は夫婦とも善良そのもののような地方人だった。「……あんさんや、カエは返しても、これを御縁に、親類づきあいして下ツさい」と、

云ったりした。で、以後も長年親類同様に往き来していたが、今はその家もつぶれ、その人達もみな世を去った。

六区で銘酒屋を出していた母の姉妹の一人も、すでに世に亡い人だろう。美人だったという娘のお和歌さんもどうしたか。そのお和歌さんには、伯父の齋藤恒太郎の長男の勤が、従兄妹でもあるのに、熱中して、通ったとかいう話も当時小耳にしている。文学士齋藤勤には、「中世におけるおんようがく陰陽学とぼくぜい卜筮の研究」の一著がある。それだけで、大学を出てまもなく夭折ようせつしてしまった。

すこし話とはぶが、父は大正七年の三月、浜町三丁目の新居で亡くなった。料亭「喜文」の裏門の真向いで、うなぎの寝床みた

いな細長い家の奥の間だった。

亡くなる一週間ほど前、父は母へむかって「英のやつ、あんなで、いいのかなあ。……あれでやって行けるかしら」と、ぼくの前途を、沁々しみじみ心配していたという。

潰瘍症状も、喘息も、慢性なので、かかりつけの医師も何ら警告はしていなかった。唯二、三日前から、呼吸困難をつけていたので、大森の海岸附近にでも、閑静な家を見つけて、療養したら、と母もいうし、医師も同意なので、友人と共に、心当りの転地先を見つけに行った。

そして、帰って来たら、もう昏睡状態におちており、明日まで、どうかと、医師も首をかしげていた。

——その朝にかぎって、こんな事があつた。

父は茶好きで、おまけに、毎朝暗いうちに眼をさます。同時に、湯加減よく、濃い煎茶せんちやの一ぷくが、すぐ出ないと、機嫌がわるい。

多年のその習慣で、今朝も母が未明に起きて、勝手口のガス七輪で、お湯をわかしていると、病床の方から「おい、おい」と人恋しそうに、何度も呼ぶ。「はい、ただ今」と答えながら、とにかく先に、茶を入れて、いつものように、母が枕元へ持つて行くと、父は起き直つて、「なあ、おい。今朝ばかりは、おまえの姿が、観音様のように見えたよ。観音様が台所にいるかと思つた……」と、手を合しかけたので「いやですよ」と、母は笑い

にまぎらしたが、そんなに云われたのは、夫婦となつて、今朝が初めてだったので、うれし涙がこぼれたと、母は云つた。

それから、少したつて、「今朝は、むすびにしてくれ」というので、膳にのせてゆくと、手さぐりで、床の上に畏かしこまつた。もう視覚もきかなかつたものとみえる。それでも、父は畏まつて、むすびを喰べた。病中いちども、あぐらや、寝そべつた儘で、食事した例はない。そういう人であつた。その晩の十一時三十五分に息をひきとつた。ぼくは、父の顔が、色をひくのを見てから、真つ暗な二階に上がつて、唯一人で突つ伏していた。そのうちに、知らせで寄つて来た知人の細君が、ぼくを揺り起しに来た。びくつと、我に返つたように、ぼくが顔を上げたら、その細君は悲鳴

に似た声を上げて、階段を駆け戻ってしまった。あとで聞いたら、ぼくの顔が、狂気したように見えたのだそうである。自分では知らなかったが、そんな慟哭どうこくに沈んでいたらしい。

母の死は、なお語るに忍びない。母はそれから三年後の、ぼくが三十歳の六月に死んだ。家は向島の植木場という所へ移っていた。幸田露伴翁の垣のすぐ近くだった。せめて、父の死後の三年間、それぞれ子供たちも成長した中で、余生らしき日を、たまには熱海や千葉海岸などへ、転地もさせたりして送らせた事が、ぼくらには、些かな慰めだったが、しかし母はやっぱり口ぐせに「……お父さんが居たらねエ」とか「お父さんて人は……」とか、常に、淋しみを洩らしていた。



致命的な病原は腸結核だと、医師が云った。ぼくはすぐ、母が廊へお針さん通いをした事があつたのを思い出した。病菌はその頃受けたのではないかという傷ましさが今も消えない。

さいごの息づかいらしいのが窺われたとき、ぼくたち兄妹は、ひとり余さず、母の周囲に顔をあつめて、涅槃ねはんの母に、からだじゅうの慟哭をしぼった。腸結核は、じつに苦しげなものである。ぼくは、どうかして、母が安らかな永眠につかれるように、という祈りみたいな気持ちから、ついつまらぬ智恵がうごいて「…お母さん、お母さんは、きっと天国に迎えられますよ。ほら、きれいな花が見えるでしょう。美しい鳥の音がするでしょう」と、耳元へ囁いた。

そしたら、母は、ぼくをにぶい眼で見つめながら「……よけいな事をお云いでない」と、乾いた唇で、微かに叱った。

母はふとんの下で、妹たちの手を握りしめていたのである。

「みんな、仲よくしてね」と、次に云った。それぎりだった。ぼくは三十で母と別れるまで、母に叱られた覚えは、二度か三度しかない。それなのに、母が、ぼくへ云ったことばの最後は、叱したたであつた。

——よけいな事をお云いでない。

それから、三十秒か四十秒の後に、母は子供らの前から、物しずかに去つて逝いつた。

母が生前に「……どうしたろうネ。おまえの兄さんは」と、折にふれ、忘れかねるが如く云い暮らしていた、義兄政広についても、後日の深刻な一挿話があるが、ここではやめよう。ぼくにとても、故人にとつても、お互い慙愧ざんきにたえない事でしかない。唯ぼくが十二歳当時に家出したきりだったその義兄も、三十何年振りかで、とつぜん、ぼくの芝公園八号地の当時の住居を、尋ね当てて来たことだった。ぼくもやつと、作家生活に入り出した初期の頃である。

だが、すでに両親共、この世にはいなかった。人生、おおかたは、まあそんなものであろうか。

駄稿、ここで終りとする。

ろくな記憶も、語るべき内容もないのに、四半自叙伝などと烏<sup>お</sup>漣<sup>こ</sup>なタイトルを掲げ、気恥かしいことだった。つい、云うまじき事まで云ってしまった気がしてならない。だが、さいごに一言すれば、ぼくの青少年期は、何ともひどい辛酸<sup>しんさん</sup>をなめて来たかのようにだし、読者もそう読まれたか知らないが、ぼく自身は、ちつともそんな気はしていないのである。社会も家も<sup>いな</sup>否<sup>いな</sup>みよ<sup>いな</sup>うの<sup>いな</sup>ない時代のワクの中のものだったせいであろう。いわばぼくも、封建の子の一型だったものに過ぎない。現代の太陽族とかいう澆刺たる青年男女には、おそらく事々一笑にも値しまい。けれど人生の真価とまで云わないでも、どっちが、生命の充実とそのよろこび

を持続しうるか、それはさいごの道まで歩いてみないと分るまい。ぼくとしては、これまで書いた十代から二十代まででも、充分愉しかった。いまの青年たちの日々と較べても、悔ゆる思いは湧いて来ない。といつて、自分の子や周囲の子弟に、ぼくの過程をひきあいに出して定規じょうぎに当てようなんていう時代知らずでもないつもりだ。

けれど、過去の親たちが歩いた泥ンこな道にも、振返れば、これからの子が、ぬかるみを歩く用意の足しになるぐらいなものであろう。ぼくの父は、予期してではあるまいが、偶然、子のぼくをして、ぬかるみを少し歩かせ過ぎてくれたようだ。といつても、父の死までのぼくの体験なども、やっと人生中学の門を卒業して

出た程度にすぎない。以上はぼくの人生中学の通信簿といったところだ。父は怖かったが、怖かった父とか先生というものは又、妙に、後ではなつかしく、そして、有難かったりするものである。

## あとがき

なぜか、私はよく訊かれる。「あなたは髪を染めていらつしやるので？」と人みなが問うのである。飛んでもない。私は日常髪を洗うことさえしない不精者だ。けれど考えてみると、私も間も

なく古稀こきといわれる年齢になるらしい。人が疑うのは当然だった。——にもかかわらず気持ちにおいては、この「四半自叙伝」中の私から、いまだに大して成長もしていない自分に思われて仕方がない。だから人がまま「お若いすなあ」と云うのに対して、このちぐはぐな気持ちをどう現わしようもなく、私はいつもこう答えて笑いはぐらすのであつた。「いや幼稚なんですよ。若いというよりは、つまり幼稚というものでしょうな」

正直、私は自分の中に今以て、老来なおさらもどかしい幼稚が失せないのに当惑している。この書が上梓されたすぐあとでは、谷崎潤一郎氏が「幼年時代」を書かれ、また長与善郎氏の「心の

遍歴」などもあった。それを見ると、ほぼおなじ時代をやや後から歩いていた自分ではあるのに、両者の高い晩節の嶺から振向かれた過去の整然とした記憶や心象の構造にひきくらべて、私の少年期や「人生中学」の記などは、何とも他愛のない泥濘の回顧に過ぎぬ感の目が多く、気恥かしいかぎりでしかない。で、折があったらもう少し補筆修正しておくべきであるとも思うのだが、どうもいつまでも幼稚が意識にある自分には、自己の過去像を本気で描き残しておこうなどという感興にはなれないのでついそのままになっているのである。

昭和三十六年正月

英治追記







## 青空文庫情報

底本：「忘れ残りの記」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年4月1日第1刷発行

2012（平成24）年6月1日第19刷発行

初出：「文藝春秋」

1955（昭和30）年1月号～1956（昭和31）年10月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「生まれ」と「生れ」、「変わる」と「変る」、「殆ど」と

「殆んど」、「角刈」と「角刈り」、「繰返し」と「繰り返し」

の混在は、底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、「吉川英治全集・48 忘れ残りの記」講談社、1968（昭和43）年8月20日第1刷発行の表記にそって、あらためました。

※底本巻末の註解は省略しました。

入力：川山隆

校正：トレンドイースト

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 忘れ残りの記

——四半自叙伝——

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>